



內閣統計局編纂

日本帝國第三十七統計年鑑

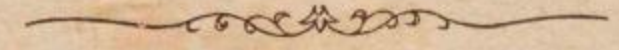
大正七年十二月刊行



正 誤

頁	表	欄	行	誤	正
1	略説	1	6	按續	接續
2	..	1	14		766耗
6	..	2	15	一分以上	760耗
39	..	1	24	到著總數	一割以上
77	..	1	37	略年變遷	發著總數
46	31	4	1		累年變遷
50	35	1	17	續	98,421
56	38	說明中		事項不詳	癩
121	81	1	17	野	事項不詳
237	145	表頭		從量一[キロワット]時(圓)	秦野
238	..	1	7	東都電燈	從量一[キロワット]時(錢)
246	154	9	6		京都電燈
255	163	2	7		4,255,374,717
280	194	10	15		8,976
282	196	10	12		1,684
292	206	1	4	大正三四年戰役行賞貯總	1,684
540	490	1	42	肪膜炎	173.61
573	525	1	13	戰爭海上再保險收入	大正三四年戰役行賞貯金
586	528	1	12	資本勘定	肋膜炎
..	13	收益勘定	戰時海上再保險收入
..	14	積立金勘定	帝國鐵道 { 資本勘定
..	15	事業公債金	收益勘定
..	16	帝國鐵道 { 朝鮮事業公債金	積立金勘定
666	597	14乃至18	40	1.67 0.14 5.17 0.29 2.83	事業公債金
..	..	14乃至18	41	6.09 0.10 25.78 0.05 14.05	朝鮮事業公債金
695	633	見出シ		外國產	12.08 1.02 37.37 2.08 20.43
710	651	說明中		同校ニシテ	7.07 0.12 29.93 0.06 16.31
718	660	..		明治四分ハ	外國產又ハ内地產
					開校ニシテ
					明治四十五年大正元年分ハ

內閣統計局編纂



日本帝國第三十七統計年鑑

大正七年十二月刊行

緒言

統計年鑑ハ行政各部ノ統計ヲ本局ニ蒐集シ之ヲ其ノ種類ニ依リテ數十科目ニ分類シ帝國全般ノ形勢ヲ大觀スルノ目的ヲ以テ編纂シタルモノニシテ明治十五年以降年々公刊シ今ヤ第三十七年鑑ヲ出スニ至レリ

行政各部ノ統計ヲ公刊シテ廣ク社會ニ頒布スルニ於テハ全般ニ亘レル統計年鑑ハ唯其ノ梗概ヲ收載スルニ止メテ可ナリト雖本邦官府統計ハ一般社會ニ頒布セラル、モノ甚尠ク國民ハ統計年鑑ニ依リテ始メテ行政各部ニ關スル統計ヲ知ルヲ得ルノミ、故ニ統計年鑑ノ編纂方法ハ自ラ歐米諸國ト異リ各廳統計中一般社會ノ知ルヲ要スル事項即チ其ノ社會統計ニ屬スル部分ハ努メテ之ヲ收載シ且既往ノ推移ヲ明示セムカ爲ニ成ルハク多ク累年ノ數ヲ列記シ以テ覽者ヲシテ遺憾ナカラシムコトヲ期シタリ而シテ第三十七年鑑ハ其ノ科目ヲ分ツコト總テ三十四ナリ

統計年鑑ノ收載事項ハ學術ノ進歩ニ伴ヒ世運ノ推移ニ鑑ミ常ニ之カ更正ニ努メ以テ實社會ノ活用ニ適セシメサルヘカラス故ニ本局ニ於テハ隨時各科目ノ更正ニ就テ審査攻究ヲ怠ラス、即チ第三十七年鑑ニ於テハ從來分載セル朝鮮臺灣樺太及關東州ノ諸項ヲ統一シテ一科ト爲シ各植民地ノ狀勢ヲ比較通覽スルニ便シ尙全編ニ亘リテ繁冗ヲ艾除シ事ヲ簡明ナラシムルニ努メタリ

歐米文明國ノ統計書ニハ其ノ内容ノ梗概ヲ記述シ卷頭ニ掲ケ以テ覽者ノ活用ニ便スルヲ常トス、然ルニ本邦ノ諸統計書ハ從來殆ト此ノ事ナク單ニ數字表ヲ掲クルニ止メタルヲ遺憾トシ第三十六統計年鑑ヨリ其ノ内容ニ就テ主任各統計官ヲシテ梗概ヲ記述セシメ之ヲ卷頭ニ掲ケタリ、但各科目中各廳ノ根本調査方法ニ就キ遺憾ナキ能ハサルモノアリ隨テ計數ノ正否疑ハシキモノナキヲ保セスト雖今ハ各廳ノ報告ニ信ヲ措キ記述セシメタリ、勿卒ノ起草ニシテ推敲ノ時ナク精粗統一ヲ闕クモノ多ク從テ不完全ノ譏ヲ免レサルヘシト雖庶幾クハ以テ活用ノ一助ト爲スニ足ラム乎

大正七年十二月

內閣統計局長 牛塚虎太郎 識

東京商業會議所
圖書之印



凡 例

本編ハ各官、公署ノ報告書類並是等ヨリ蒐集セル材料ニ就キ其ノ必要ナル事項ノ計數ヲ轉載
摘録シ又ハ若干集計ヲ施コシテ編纂セリ而シテ其ノ比例、平均等ニ至リテハ右報告等ヨリ轉載
セルモノ之アリト雖多クハ本局ニ於テ算出シタル所トス

本編ニ掲クル諸種ノ事項ハ之ヲ綜合シテ三十四科目ト爲セリ即チ次ニ示ス所ノ如シ

- | | | |
|---------------|-----------------|------------------------|
| 1. 土地 | 13. 電氣事業及瓦斯事業 | 25. 警察 |
| 2. 氣象 | 14. 交通 | 26. 裁判及登記 |
| 3. 人口 | 15. 通信及郵便爲替貯金事業 | 27. 監獄 |
| 4. 農業 | 16. 貨幣及度量衡 | 28. 陸軍 |
| 5. 家畜及家禽 | 17. 銀行及金融 | 29. 海軍 |
| 6. 山林及狩獵 | 18. 保險 | 30. 財政 |
| 7. 漁業及製鹽 | 19. 官廳使用現業員共濟組合 | 31. 爵位勳章及褒章 |
| 8. 鑛業 | 20. 救育及慈惠 | 32. 議員選舉 |
| 9. 工業及賃金 | 21. 災害 | 33. 官吏公吏及恩給 |
| 10. 外國貿易 | 22. 衛生 | 34. 朝鮮臺灣樺太及關東州附
北海道 |
| 11. 內國商業及會社 | 23. 教育 | |
| 12. 産業組合及同業組合 | 24. 社寺及教會 | |

本編各科ニ於ケル各項ノ事實ニシテ其ノ概要ニ屬スルモノハ遠ク既往ニ遡リテ累年ノ數ヲ列
舉シ其ノ最近年ニ係ルモノ即チ主トシテ大正六年又ハ同五年ニ係ルモノハ概ネ土地、時及各種
ノ事項ヲ細別掲載セリ

本編ニ於テ全國ト稱スルハ主トシテ北海道及三府四十三縣ニ屬スル事實ナリト雖往々朝鮮、
臺灣、樺太ノ各植民地全部若ハ其ノ一部ヲ包含スル場合之ナキニアラス要スルニ是等ハ孰モ次
表ニ於テ其ノ地方別ヲ掲クルヲ以テ其ノ異同ヲ識別シ得ヘシ

土地ノ區別ニ依ル事項ヲ掲クル場合ニ於テ其ノ土地排列ノ順位ハ隣接地方相互ノ現象ヲ對照
比較スルニ便ナラシメムカ爲東北ニ位スル地方ヨリ西南位ニ在ル地方ニ向テ順次排列シ而シテ
特ニ重要ナリト認メタル事實ハ數地方ヲ一團トセル區域(統計區畫)ノ要計ヲ掲出セリ但シ氣象
科裁判及登記科等其ノ他二三ノ科目中土地ノ排列右ノ例ニ依ラスシテ各科特有ノ排列ニ依ル
モノ亦之アリ

上記統計區畫各區ニ屬スル地方ハ次ニ示ス所ノ如シ

度量衡比較及合數

1. 北海道
2. 東北區—青森縣 岩手縣 秋田縣 山形縣 宮城縣 福島縣
3. 關東區—茨城縣 栃木縣 群馬縣 埼玉縣 千葉縣 東京府 神奈川縣
4. 北陸區—新潟縣 富山縣 石川縣 福井縣
5. 東山區—長野縣 岐阜縣 滋賀縣
6. 東海區—山梨縣 静岡縣 愛知縣 三重縣
7. 近畿區—京都府 兵庫縣 大阪府 奈良縣 和歌山縣
8. 中國區—鳥取縣 島根縣 岡山縣 廣島縣 山口縣
9. 四國區—德島縣 香川縣 愛媛縣 高知縣
10. 九州區—大分縣 福岡縣 佐賀縣 長崎縣 熊本縣 宮崎縣 鹿兒島縣
11. 沖繩縣

本編諸表標題及表中ニ某年又ハ某年度ト書スルハ一周曆年間及一周年度間ノ事實ニシテ某年某月某日ト書スルハ該日現在ノ調査ナリ

本編實數ノ單位ハ概テ「石」「圓」「斤」「貫」「反」「畝」「哩」「鎖」等ニ止メ以下ノ端數ハ之ヲ切捨テ又ハ四捨五入セリ高級數位ノ計數ハ往々千ヲ以テ單位トシ以下ヲ省キタルモノアリ又零ヲ以テ示スハ其ノ數量一位ニ達セサルモノナリ

本編中人口ニ對スル比列ノ算出ニ於テ人口調査ノ結果ニ依ル現住人口ハ調査ノ方法上ヨリ起レル誤謬ヲ包含スルヲ以テ之ヲ訂正セル乙種現住人口（乙種現住人口ノ由來及性質ハ略説人口科ノ部ニ詳ナリ）ヲ用ヒタリ但シ乙種現住人口調製以前（明治十七年以前）ノ各年及全國ノ事實ニ屬スルモノ及本籍人口ニ依ラサルヘカラサルモノハ本籍人口ヲ用ヒタリ

本編ニ掲クル計數ノ出所ハ之ヲ「計數出所目録」トシテ其ノ書目ヲ舉ケ尙精密ナル計數ヲ知ラムトスル者ノ便ニ供セリ

本編中貿易諸表其ノ他往々外國ノ度量衡ヲ用フルモノアリ彼我ノ對照ヲ示セハ次ノ如シ

メートル法	
度	
耗	「ミリメートル」(「メートル」ノ千分ノ一)..... ^厘 3.30000
糲	「センチメートル」(「メートル」ノ百分ノ一)..... ^分 3.30000
粉	「デシメートル」(「メートル」ノ十分ノ一)..... ^釐 3.30000
米	「メートル」..... ^尺 3.30000
籽	「キロメートル」(千「メートル」)..... ^間 550.000 ^{町間} 9.10.000
量	
坵	「ミリリットル」(立方センチメートル)(「リットル」ノ千分ノ一)..... ^勺 0.055435
煙	「センチリットル」(「リットル」ノ百分ノ一)..... ^勺 0.55435
蛸	「デシリットル」(「リットル」ノ十分ノ一)..... ^合 0.55435
立	「リットル」(升ノ二千四百〇一分ノ千三百三十一)..... ^升 0.55435
衡	
匙	「ミリグラム」(「キログラム」ノ百萬分ノ一)..... ^毛 0.26667
厘	「センチグラム」(「キログラム」ノ十萬分ノ一)..... ^毛 2.66667
粒	「デシグラム」(「キログラム」ノ一萬分ノ一)..... ^厘 2.66667
瓦	「グラム」(「キログラム」ノ千分ノ一)..... ^分 2.66667
坩	「キログラム」(貫ノ十五分ノ四)..... ^貫 0.26667
日本採用ヤード、ポンド法	
度	
吋	「インチ」(「ヤード」ノ三十六分ノ一)..... ^寸 0.83820

呎	「フート」(「ヤード」ノ三分ノ一)..... ^尺 1.00584
碼	「ヤード」(尺ノ一萬二千五百分ノ三萬七千七百十九)..... ^尺 2.01752
鎖	「チェーン」(二十ニ「ヤード」)..... ^尺 66.38544
哩	「マイル」(千七百六十「ヤード」)..... ^{間尺} 5310.835
	^{町間尺} 14.45.0.835 ^間 0.40979
量	
瓦倫	「ガロン」(升ノ五萬分ノ十萬四千九百二十三)..... ^升 2.09846
衡	
弓	「オンス」(「ポンド」ノ十六分ノ一)..... ^匁 7.56000
封度	「ポンド」(貫ノ三千二百五十分ノ三百七十八)..... ^匁 120.9600
噸	「トン」(二千二百四十「ポンド」)..... ^斤 270.9504
以上ハ農商務省中央度量衡檢定所編纂ノ度量衡比較表ニ據ル	
哩	「マイル」..... ^町 16.975
佛噸 ^斤 266.6667
擔	「ピコル」..... ^斤 100
合數	
哥	(「グロツス」)..... ^匁 144
打	(「ダズン」)..... ^匁 12

目 錄 概 覽

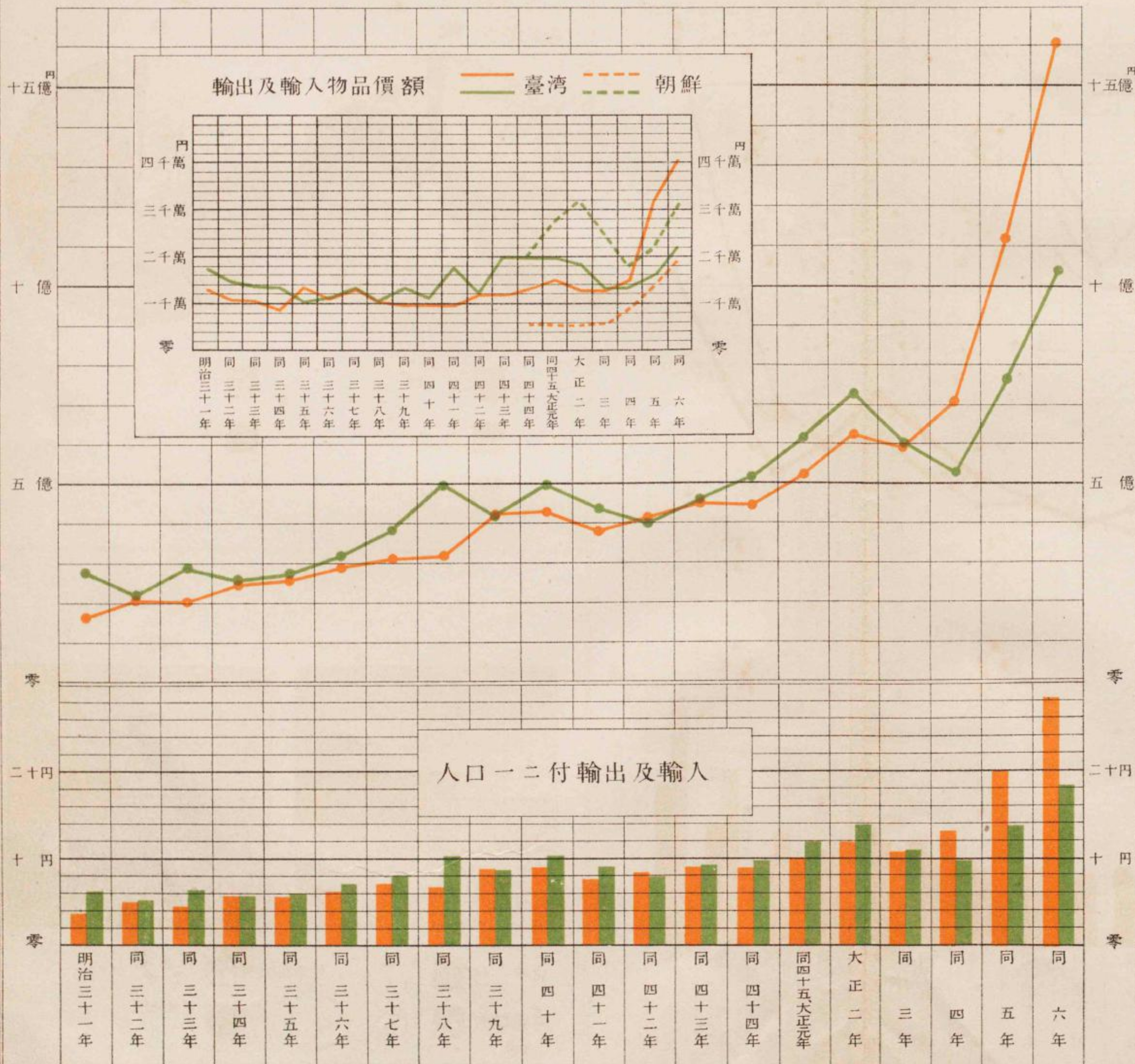
科 目	略說ノ頁	表號	統計表ノ頁
I. 土 地	1—2	1—7	2—9
II. 氣 象	2—3	8—9	10—19
III. 人 口	3—10	10—49	20—79
IV. 農 業	10—14	50—57	80—93
V. 家畜及家禽	14—16	58—69	94—102
VI. 山林及狩獵	16—18	70—74	103—108
VII. 漁業及製鹽	18—21	75—81	109—121
VIII. 鑛 業	21—22	82—88	123—128
IX. 工業及賃金	23—28	89—109	129—158
X. 外國貿易	28—30	110—124	159—206
XI. 內國商業及會社	30—33	125—135	207—227
XII. 產業組合及同業組合	33—33	136—137	228—231
XIII. 電氣事業及瓦斯事業	33—34	138—149	232—243
XIV. 交 通	34—38	150—189	244—277
XV. 通信及郵便爲替貯金事業	38—40	190—210	278—294
XVI. 貨幣及度量衡	40—41	211—217	295—299
XVII. 銀行及金融	41—47	218—314	300—361
XVIII. 保 險	47—48	315—316	366—371
XIX. 官廳使用現業員共濟組合	48—49	317—327	372—376
XX. 救育及慈惠	49—51	328—333	377—383
XXI. 災 害	51—52	334—336	384—387
XXII. 衛 生	52—53	337—345	388—396
XXIII. 教 育	53—57	346—397	397—447
XXIV. 社寺及教會	57—58	398—404	448—453
XXV. 警 察	58—61	405—416	454—464
XXVI. 裁判及登記	61—70	417—471	466—514
XXVII. 監 獄	70—74	472—491	515—542
XXVIII. 陸 軍	74—77	492—505	543—555
XXIX. 海 軍	77—79	506—517	556—565
XXX. 財 政	79—84	518—561	566—631
XXXI. 爵位、勳章及褒章	84—85	562—571	633—640
XXXII. 議員選舉	85—86	572—578	641—647
XXXIII. 官吏公吏恩給	86—88	579—592	648—661
XXXIV. 朝鮮臺灣樺太及關東州附北海道		593—672	662—733

外國貿易

輸出及輸入物品價額 (内地)

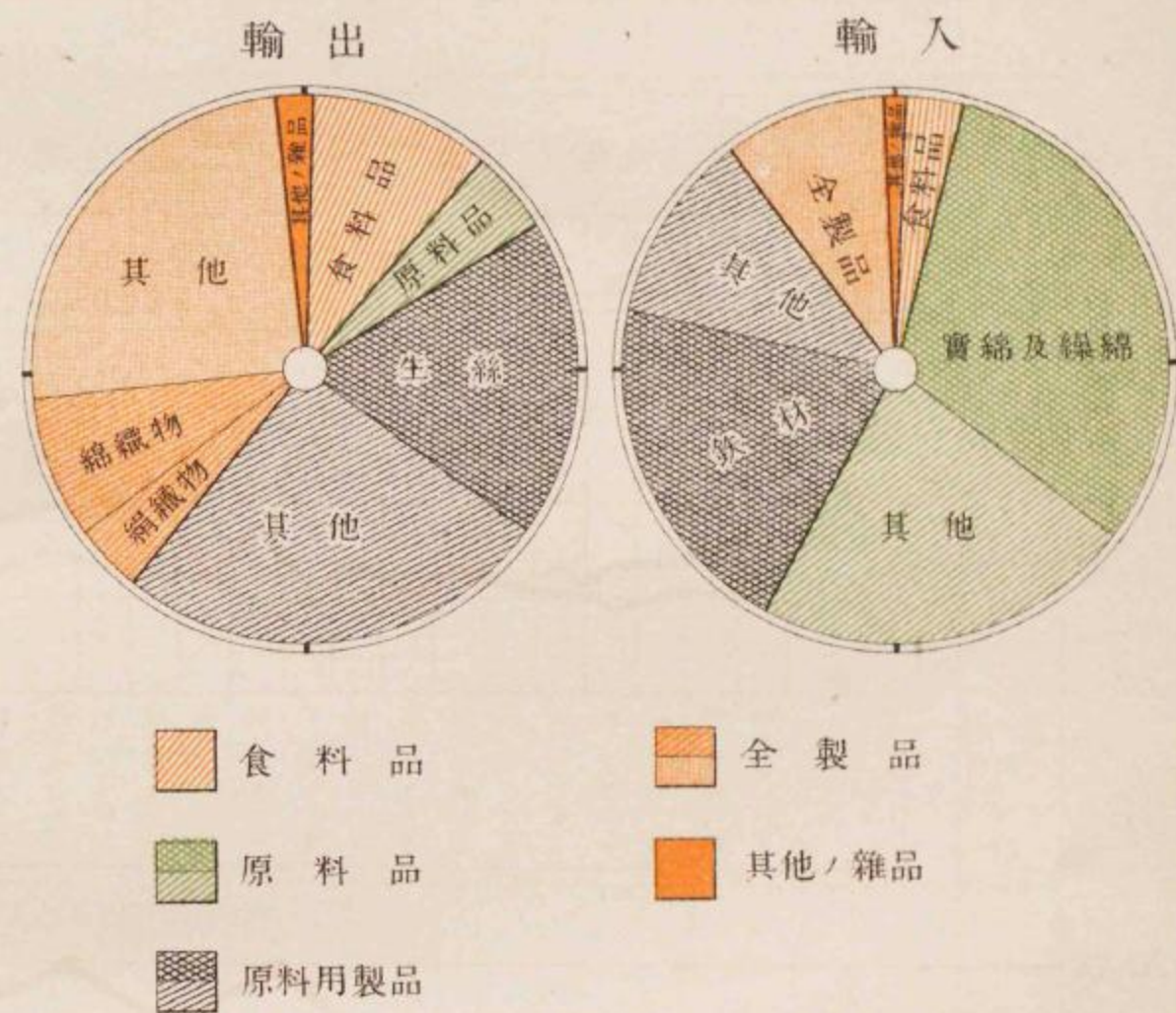
(特別輸出及輸入價額ヲ包含セス)

輸出
輸入



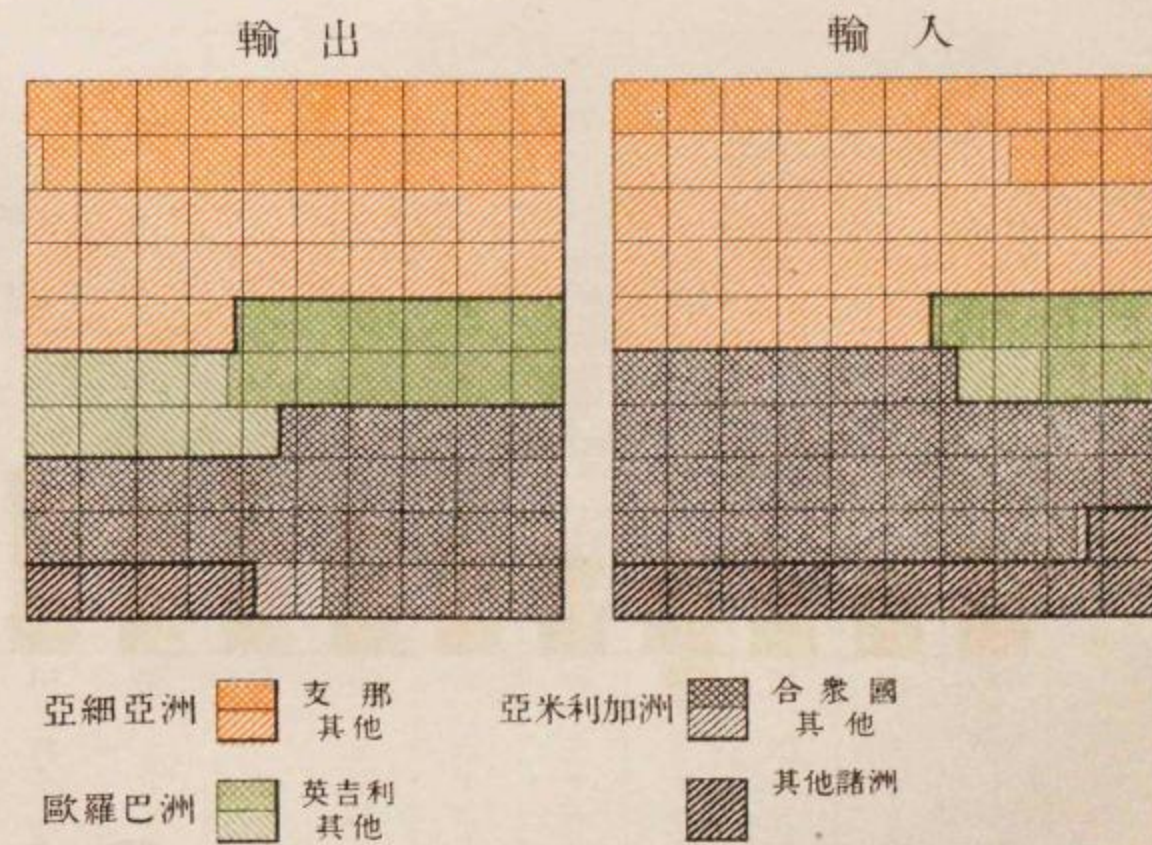
品目別

大正六年



國別

大正六年



日本帝國第三十七統計年鑑

略 說



I. 土 地

本邦ノ極南ハ臺灣阿緞廳至厚里七星岩ノ南端(北緯 21.45度)ニシテ、極北ハ千島國占守郡アライト島ノ北端(北緯 50.56度)ナリ。又極東ハ千島國占守郡占守島ノ東端(東經 156.32度)ニシテ、極西ハ澎湖廳水按瀉花嶼ノ西端(東經 119.18度)ナリ。故ニ本邦ハ南北 29.11緯度、東西 37.24經度間ニ在リ。朝鮮ノ亞細亞大陸ノ半島ナルト、樺太ノ露領ト按續セルトヲ特別トシ、本州、四國、九州、北海道、臺灣ノ五大島及之ニ附屬セル 430有餘ノ小島ヨリ成ル。

【面積】 大正七年首現在ノ本邦總面積ハ 43,458.67方里ナリ。中内地ノ面積ハ 24,794.36方里ニシテ、總面積ノ 57.05%ヲ占ム。

本邦領土發展ノ狀勢ヲ略叙センニ、明治二十七年マテハ上 記ノ内地アルニ過キサリシカ、二十八年ニ臺灣及澎湖島ヲ領有シテ 2,332.39方里ヲ増シ、三十九年ニ樺太ヲ得テ又 2,208.92方里ヲ増シ、更ニ四十三年ニ韓國ヲ併合シテ 14,123.00方里ヲ加ヘタリ。然レハ二十七年現在ノ面積ヲ百トシテ指數ヲ擧クレハ臺灣領有後ハ 109、樺太領有後ハ 118、韓國併合後ハ 166餘ト爲ル。

世界陸地ノ總面積 8,951,462方里(佛國ノ調査ニ基キ換算ス)ニ對スル本邦ノ全面積ハ 4.86%ニ當リ、内地ノ面積ハ 2.77%ニ當ル。又亞細亞洲ノ總面積 2,708,846方里(前同斷)ニ對スル本邦ノ全面積ハ 16.04%、内地ノ面積ハ 9.15%ニ當ル。歐米諸國(植民地ヲ除ク)ノ面積ハ、大貌列國 20,767方里、佛蘭西 34,783方里、伊太利 18,588方里、獨逸 35,068方里、奧地利匈牙利 40,551方里、歐洲露西亞 333,962方里、北米合衆國 508,292方里ニシテ、之カ本邦内地ノ面積百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、大貌列國ハ 82.5、佛蘭西ハ 140.3、伊太利ハ 74.9、獨逸ハ 141.4、奧地利匈牙利ハ 163.6、歐洲露西亞ハ 1,344.5、北米合衆國ハ 2,050.1ニ當ル。

【行政區劃】 大正七年首現在ノ内地ノ行政區劃 1道 3府 4 3縣及 636郡ハ前年ト異ルコトナク、市ハ 77市ニシテ前年ニ比シ 3市ヲ増シ、町ハ 1,317町ニシテ前年ニ比シ 10町ヲ増シ、村ハ 10,882村ニシテ前年ニ比シ 29村ヲ減シタリ。

内地ノ面積ヲ行政區劃別ニ見ルニ、北海道ハ最大ニシテ、之ニ亞クハ岩手、福島、長野、新潟、秋田、岐阜、山形、青森等ノ諸縣ナリ。又最小ハ大阪府ニシテ香川、東京、沖繩、神奈川、佐賀等

ノ諸縣ニ亞ク。

【民有地】 大正七年首現在ノ内地民有地ノ總反別ハ 1,817 萬町ニシテ總面積ノ 47.1%ニ當ル。此ノ比例ハ十四年前ノ明治三十七年ヨリハ 9.1%高ク、九年前ノ明治四十二年ヨリハ 6.9%高ク、四年前ノ大正三年ヨリハ 2.4%高ク、前年トハ正ニ等位ナリ。民有地ヲ有租免租ニ別テ分節比例ヲ求ムレハ有租地 82.67%免租地 5.41%免租年期地 11.92%ニ當ル。

大正七年首ノ民有有租地ヲ地目別ト爲セハ田 290萬町、畑 242 萬町、宅地 39萬町、山林 794萬町、原野及牧場 135萬町、其ノ他ノ地 3萬町ナリ。之カ民有有租地ノ總反別ニ對スル分節比例ハ田 19.28%、畑 16.08%、宅地 2.58%、山林 52.86%、原野及牧場 8.97%其ノ他ノ地 0.22%ニ當リ、又之ヲ總面積ニ比スルニ田ハ 7.5%、畑ハ 6.3%、宅地ハ 1.0%、山林ハ 20.6%ニ當ル。此ノ總面積比例ヲ既往ニ比スルニ田、畑、山林共ニ漸増ノ歩調ヲ取ルヲ見ル、是即年々ニ不毛ノ地ヲ拓キテ有用化スルニ因ル。然ルニ此ノ開拓モ人口增加程度ノ著シキニ若カス、是等有用地ノ人口比例數ハ年毎ニ低下セリ。即大正六年末人口ニ對スル七年首ノ反別ハ田 5畝05步、畑 4畝09步、宅地 21步、山林 1反 4畝 05步ニシテ、明治二十一年ノ同一比例數ハ田 7畝、畑 5畝22步、宅地29步、山林 1反 8畝14步ナレハ三十年間ニ於テ人口増加ノ度カ、如何ニ是等有用地ノ増加度ニ超越セルカヲ知ルニ足ル。

獨逸帝國統計年鑑ニ依リ、歐米諸國ノ總面積ニ對スル農用地ノ面積比例ヲ算出スレハ、大貌列國ハ 77.20%(1913年)、伊太利ハ 76.25%(同上)、佛蘭西ハ 69.53%(1912年)、獨逸ハ 64.84%(1900年)、奧地利匈牙利ハ 52.54%(1912年)、歐洲露西亞ハ 40.80%(1887年)、北米合衆國ハ 25.54%(1910年)ナリ。之ニ基キ農用地ノ面積ヲ算出シ、人口ニ對スル農用地ノ反別ヲ算出セハ、大貌列國ハ 3反 2畝23步、伊太利ハ 6反 2畝04步、佛蘭西ハ 9反 4畝26步、獨逸ハ 5反 4畝23步、奧地利匈牙利 6反 6畝08步、歐洲露西亞ハ 2町 2反 3畝26步、北米合衆國ハ 2町 1反 4畝28步ニ當ル。茲ニ所謂農用地ニハ農耕地ノ外牧場、花園及遊園、葡萄園ヲ含ムカ故ニ、本邦ノ田畑合計ニ牧場及原野ヲ加ヘタルモノヲ以テ比スルニ、本邦ノ人口ニ對スル此ノ反別ハ 1反 1畝26步ニ當ル。是ヲ以テ上

記各國ノ比例數ト嚴密ニ同性質ナリト言フ能ハサレトモ、彼此ノ差ノ大ナル寔ニ驚クヘキモノアリ、農政上豈ニ一顧ノ値ナシトモシヤ。

大正七年首ニ於ケル地方別總面積ニ對スル田畑合計ノ民有耕地反別ノ比例ハ、最高ヲ埼玉縣ノ 40.2%ト爲シ、大阪府ノ 37.6%ニ次キ、千葉縣ノ 36.4%、福岡縣ノ 33.3%、神奈川縣愛知縣ノ共ニ 31.9%ナルハ其ノ高キモノナリ、又最低キハ北海道ノ 0.5%ニシテ和歌山縣ノ 9.9%、岩手縣ノ 10.0%、岐阜縣ノ 11.0%、秋田縣ノ 11.6%、山形縣ノ 11.9%、青森縣ノ 12.6%等ヲ其ノ低キ

II. 氣 象

大正六年ノ氣象ヲ略叙スレハ下ノ如シ。

【氣壓】 一年平均ノ氣壓ハ、支那方面ニ於テ高ク多クハ 763 耗以上ニシテ南京ハ 764 耗以上ニ上レリ。臺灣各地及東海地方ハ概ネ 760 耗以下ニシテ、北海道及樺太ハ多ク 759 耗以下ナリ、最低キ紗那及眞岡ハ 768 耗以下ニ下レリ。月別ノ平均氣壓ハ、朝鮮、支那、臺灣ニ於テハ一月最高ク、瀬戸内海地方及西南各地ハ十一月最高ク、東部及北部ノ北海道及樺太ニ至ルマテ三月最高シ、最低ハ七月八月ナルヲ最多トス。最高最低ノ差ハ大連ノ 16.7 耗最大ニ札幌ノ 4.8 耗最小ナリ。

【氣溫】 一年平均氣溫ハ臺灣、琉球ニ於テ 21 度以上最高 23.6 度ヲ示シ、累年平均ヨリ少シク低ク、九州、四國、中國、近畿、東海ノ各地ハ概ネ 13 度以上 14.5 度ノ間ニ在リテ、15 度以上ニ上リタルハ九州ト四國ト一部ノミ、是亦累年平均ニ比シテ低ク、東山ノ遠海地方及關東ハ低キハ 10 度高キハ 14 度ヲ超ヘ、累年平均ト略相等シ。裏日本ニ於テハ濱田ノ 14 度ヨリ秋田ノ 10.2 度マテ次第ニ低ク、西部ハ累年平均ヨリ僅ニ低ク、東北地方ハ 10 度ヨリ 12 度マノ間ニ在リテ、寧ろ累年平均ヨリ高キ地アリ、北海道及樺太ハ敷香ノ 0.4 度ヨリ函館ノ 8.9 度マテノ差等アレトモ總テ累年平均ヨリ高ク、朝鮮、支那ハ平壤ニ於テ 8.2 度、漢口ニ於テ 16 度以上ニ上レルアリ、總テ累年平均ヨリ低シ。月別ノ平均氣溫ヲ見ルニ、各地概ネ變調ヲ呈シ、樺太、北海道及本州北部ヲ除クノ外殆ト一様ニ一月ヨリ六月マテハ累年平均ヨリ低ク、七月ニ至リ俄然トシテ上昇シ累年平均ヲ抜クコト高キハ 4 度低キモ 1 度ヲ超ヘ、八月ハ下リテ多クハ累年平低以下ト爲リ、九月十月ハ又累年平均ヨリ高ク、十一月ハ略ホ累年平均ト等シク、十二月ニ至リテ降レリ、但シ臺灣ニ於テハ六月ニ於テ俄然トシテ累年平均ヲ抜キ、七月下リ八月又上リタリ。斯ノ如キ變調ハ單リ平均氣溫ニ於テ見ルノミナラス最高平均氣溫ニ於テモ亦最低平均氣溫ニ於テモ殆ト同一ナリ、此ノ變調ハ頗ル注目スヘキ事ニシテ、其ノ及ホス所ハ人

モノトス。

大正七年首ノ民有免租地ヲ地種別ニ見ルニ、既住ニ比シテ増加ノ著シキモノハ學校敷地、保安林、道路及水道用地及其ノ他ノ公用及公共用地トス。

大正七年首ノ民有年期地ヲ地種別ニ見ルニ、既往ニ比シ免租年期地ハ漸ヲ追フテ減少ス、輕租年期地モ亦漸次減少ス、又北海道特別年期地ハ本年モ亦少シク増加シ、東京市區改正條例ニ依ル下附地ハ本年少シク増加セリ。

象

類ノ健康上ニモ將タ作物ノ生育上ニモ至大ノ影響アリタルヲ思フ(農業ノ部參照)。上記一年平均氣溫カ、大部分ニ於テ累年平均ヨリ低ク、北部ノミ之ニ反シテ高カリシ所以ノモノハ、此ノ月別氣溫ノ影響ニ由ルモノニシテ、多クノ地ニ於テハ七月九月十月ノミ累年平均ヨリ高ク他ノ各月ハ概ネ累年平均ヨリ低シ、唯北部ハ全年概ネ累年平均ト等位ニシテ、七月若クハ八月以後十一月ニ至ルマテ累年平均ヨリ高カリシニ因ル。

【濕度】 一年平均(%)ヲ以テ見レハ、各地概ネ 70-80%ノ間ニ在リ、其ノ 80%ヲ超ヘタルハ、臺灣ニ於テ臺中、臺北、澎湖島、本州表日本ニ於テ石巻、小名濱、遠海地方ニ於テ高山、水澤、裏日本ニ於テ境、福井、宮津、伏木、秋田、北海道及樺太ニ於テ釧路、根室、網走、紗那、大泊等ニシテ、石巻、秋田、根室、大泊ノ共ニ 83%ナルヲ最高トス。又 70%以下ナルハ朝鮮、支那ニ於テ見ル所ニシテ天津ノ 58%ヲ最低トス。又之ヲ月別ニ見ルニ、概シテ累年平均ニ大差無シト雖、本州ノ北部ヲ除キタル一般及朝鮮ニ於テハ九月ノ高キヲ一異彩トス。

【日照時】 一年平均ノ可照時數ニ對スル百分比例ヲ見ルニ裏日本ノ各地及樺太ニ於テ 40%以下ナルモノアレトモ、一般ニハ 40-60%ノ間ヲ往來シ、營口ハ 71%ヲ示シ、朝鮮各地ニハ 60%以上ナルモノ少ナカラス、内地ニ於テ最高キハ潮岬ノ 59%トス。又之ヲ月別ニ見ルニ、其ノ比例ノ高キハ臺灣ハ八月九月ニシテ、九州ハ夏季ナリ、裏日本ハ夏季ノミ高ク、朝鮮ハ十二月ヨリ四月マテヲ高シト爲ス。

【降水量】 臺灣ノ一部、琉球、九州ノ一部、土佐、紀伊及東海ノ一部等黒潮ノ影響ヲ受クルコト強キ地ニ於テハ概ネ一年ノ總降水量 2,000 耗以上ニ達シ、裏日本モ亦降水多ク宮津以北秋田ニ至ルマテ 2,000 耗ヲ下ラス、敦賀ヨリ伏木ニ至ル各地ハ實ニ 3,000 耗以上ヲ現シ、金澤ノ 3,476 耗ヲ最多ト爲ス。又支那、朝鮮、樺太ニハ 1,000 耗以下ノ地多ク、天津ノ 443 耗ヲ最少ト爲ス。又之ヲ月

別ニ見ルニ、概シテ累年平均ノ型ヲ追フモ、大阪、新潟、青森ノ如キハ九月ニ累年平均ヲ超ヘ、東京、長崎ノ如キハ十月ニ於テ其ノ高キヲ見ル。

【風】 一年ノ平均方向ハ北寄リノ風多ク、遠海地方、裏日本ノ各地及八丈、父島等ニ於テノミ南寄リノ風多シ。一年ノ平均速度ハ各地甚タ不同ナレトモ、概シテ沿海地及高地ニ強ク 4*/秒以上ヲ示シ、鳥嶼ニ於テハ 6-8*/秒ナルモアリ。本年中ノ最大速度ハ鏡子ノ 50.8*/秒トス。

【天氣日數】 快晴日數ハ支那、朝鮮ニ多ク、本州ハ適ニ少ク、北海道、樺太ニ至リテ愈々少シ。之ヲ月別ニ見ルニ概シテ表日本ニ於テハ秋末ヨリ冬季ニ多ク、裏日本ニ於テハ夏季ニ多シ。

III. 人 口

甲. 人口ノ靜態

【總數】 最近ノ調査ニ係ル大正二年末ノ帝國人口(本籍人口及之ニ相當スルモノ)ハ 71,799,465 人ニシテ内、内地人 53,362,682 人朝鮮人 15,169,923 人、臺灣人 3,265,169 人、樺太人 1,691 人ナリ。故ニ内地人ハ總數ノ 74.22%ニシテ約四分ノ三ヲ占ム。其ノ他朝鮮人 21.28%、臺灣人 4.48%、樺太人 0.02%ニ當ル。此ノ總人口ハ前回ノ調査ニ比スレハ 21,171,754 人ノ増加ヲ示シ、内地人ノミノ増加ハ 3,773,878 人ニシテ人口千ニ付平均一年 14.78%ノ増加率ト爲リ未曾有ノ高率ヲ示ス。之ヲ生死ノ差増ヨリ見レハ右五年間ノ自然増加ハ 3,416,607 人ニシテ其ノ差 35.7 萬人ハ生死ノ届洩及調査ノ正否等ニ因ルモノナランカ。

今 1910 年及 1911 年ノ人口調査ニ基キテ推計シタル世界ノ總人口(佛國ノ調査)ハ 16 億 2,333 萬人ナリ。之ニ對シ本邦ノ總人口ハ 44.23%ニ當リ内地ノ本籍人口ハ 83.49%ニ當ル。又前同様ニ推計シタル亞細亞洲ノ總人口ハ 8 億 0,264 萬人ニシテ之ニ對スル本邦ノ總人口ハ 89.44%、内地ノ本籍人口ハ 66.48%ニ當レリ。世界ノ獨立國ノミニ就テ人口ノ多キモノヲ擧グレバ支那 3 億 0,062 萬人(推計)、歐洲露西亞 1 億 3,403 萬人(1910 年推計)、北米合衆國 9,197 萬人(1910 年)、獨逸 6,493 萬人(1910 年)ノ次ハ本邦内地ノ本籍人口ニシテ實ニ世界ノ第五位ニ當ル。本邦以下ノ大國ハ 奧地利匈牙利 5,136 萬人(1910 年)大貌列顛 4,522 萬人(1911 年)、佛蘭西 3,919 萬人(1911 年)土耳其 3,702 萬人(調査年不詳)、伊太利 3,467 萬人(1910 年)、伯刺西兒 2,462 萬人(1912 年推計)、西班牙 1,995 萬人(1910 年)、墨其西古 1,506 萬人(1910 年)、アリ。之ヲ世界ニ於ケル千萬人以上ノ人口ヲ有スル獨立國トス。

【増加率】 最近二回ノ調査ニ於ケル人口増加ハ韓國併合ノ結果ニ出タルモノ 1,500 萬人餘ナルモ内地人ノミノ増加率ハ一年

曇天日數ハ裏日本ニ多クシテ表日本ニ少シ、秋田ノ 233 日ヲ最多ト爲シ、天津ノ 63 日ヲ最少ト爲ス。之ヲ月別ニ見ルニ、正シク快晴日數ニ反セリ。

降水日數ハ臺灣ノ北部、琉球ニ多ク、遠海地方及裏日本各地モ亦多シ。最多ハ加茂ノ 262 日ニシテ最少ハ天津ノ 55 日ナリ。之ヲ月別ニ見ルニ、臺北ハ四月ヲ最多トシ、大阪ハ九月十月ニ、高知モ九月ニ、東京モ亦九月ニ多ク、裏日本ニ於テハ九月ヨリ三月マテ月ノ三分一ハ降水アリ、京城、大連ハ夏季以外ニ降水日甚タ少ク、大泊ハ殆ト一年ヲ通シテ各月ニ降水日 10-20 日アリ。

暴風日數ハ琉球、八丈島及北海道ニ多シ、之ヲ月別ニ見ルニ、多クハ十二月一月又ハ四月五月ニ多キモ、根室、大泊ノ如キハ十月ニ多シ

平均 14.78%ニシテ未曾有ノ高率ヲ示セリ。臺灣人ノ増加率ハ 14.60%ニシテ略内地人ニ等シ。朝鮮人ハ 44.90%ニシテ樺太人ハ 7.96%ヲ示セトモ斯ル現象ハ移住ニ依ルノ外世界其ノ比ヲ見サルノ高率(正負トモ)ヲ示セリ。是レ昔時調査ノ不完全ナリシニ依ルモノナルヘク殊ニ樺太人ニ在リテハ 37.96%テフ減少率ヲ示セルハ世界稀ナル現象ニシテ恰モ愛耳蘭ノ狀況ニ於ケルカ如シ。明治ノ初年頃ニハ増加率僅ニ 7.74%ナリシモノ幾多ノ高低起伏ハアリタレトモ近時頗ル其ノ率ヲ增高シ 13.21%(明治三十一年乃至同三十六年)、11.93%(明治三十六年乃至同四十一年)ヲ示ス、諸外國ノ人口増加率ヲ見ルニ愛耳蘭 9.1(1881-1891)、-5.2(1891-1901)、-1.5(1901-1911)ノ如ク常ニ人口ノ減少スル所アリ、佛蘭西ノ 1.6(1891-1901)、1.6(1901-1911)ノ如ク人口増加ノ停止セルアリ、諾威ノ 12.0(1890-1900)、6.8(1900-1910)、蘇格蘭ノ 11.1(1891-1901)、6.5(1901-1911)ノ如ク近時頗ル人口増加ノ減少セルアリ、我國及獨逸ノ 9.3(1880-1890)、14.0(1890-1900)、15.2(1900-1910)ノ如ク常ニ若干ノ人口増加率ヲ增高セシメツツアルアリ、加奈太ノ 34.2(1901-1911)、「ニューヰーランド」29.7(1901-1911)ノ如ク高率ヲ示スアリ。

【密度】 我國内地ノ面積ハ 24,794 方里ナルヲ以テ本籍人口ハ一方里ニ付 2,152 人、之ヲ現住人口ニテ算出スレハ、内地ハ一方里ニ付 2,924 人、朝鮮ハ 1,098 人、臺灣ハ 1,520 人、樺太ハ夏季 31 人、冬季 20 人ニ當リ、全體トシテハ 1,652 人ニ當ル。之ヲ諸外國ニ比スレハ一方里ニ付白耳義ノ 3,783 人第一位ヲ占メ、英克蘭威爾斯ノ 3,680 人第二位、和蘭ノ 2,637 人第三位ニシテ我國内地ハ第四位ヲ占ム。其ノ他獨逸ノ 1,851 人、奧地利ノ 1,469 人、伊太利ノ 1,129 人、匈牙利ノ 984 人、佛蘭西ノ 944 人、亞米利加ノ 184 人等

何レモ我國ノ下位ニ在リ。臺灣、朝鮮ト雖其ノ密度甚低カラシテ我國ハ稀ニ見ル人口稠密ノ國土ナリトス。之ヲ既往ニ遡リ其ノ發達ノ狀況ヲ窺フニ二十年前ノ明治三十一年ニハ 1,881人ナリシモノ明治三十六年ニハ 1,958人ト爲リ同四十一年ニハ 2,087人ト爲リ現今ニ至ル。毎十年ニ二百數十人テフ莫大ノ人口稠密ノ増加ヲ示セリ。

【男女】 大正二年末調査ノ本籍人口 53,362,682人中男 26,964,586人女 26,398,096人男女ヲ超過スルコト 566,490人ニシテ女百ニ付男 102.15ニ當ル。朝鮮人ハ 107.88臺灣人ハ 108.61樺太人ハ 100.36ニシテ何レモ男ノ數女ヲ超過セリ。之ヲ諸外國ニ比較スルニ歐洲ニ在リテハ殆ト皆女子ノ數男子ヨリ多ク男百ニ付女ハ葡萄牙最多ク 110.7諾威ノ 109.9之ニ次ク。英克蘭威爾斯ハ 106.8伊太利ハ 103.7埃地利ハ 103.6佛蘭西ハ 103.4獨逸ハ 102.6等ナリ。之ニ反シテ我國ノ 97.9印度ノ 95.3北米合衆國ノ 94.3加奈太ノ 88.6等亞細亞、亞弗利加、亞米利加地方ハ常ニ男ノ數女ヲ超過セリ。抑男女ノ數ニ差ヲ生スル原因ハ移住ニ依ルモノト男女出生ノ數及出生後ノ死亡狀態ニ依ルモノトノ三アリ、何レノ國ニ在リテモ常ニ出生ハ男子ノ數ニ女子ヨリ多ケレトモ出生後幼兒及老年級ニ於テハ男子ノ死亡女子ヨリ多キ爲メ且歐洲諸國ニ於テハ男子ノ海外ニ移住スル者多キ爲メ總數ニ於テハ女子ノ數男子ヲ超過ス。然ルニ我國本籍人口ニ於テ女子ノ數少キ所以ハ一ニ女子ノ死亡多キニ依ルモノト謂ハサルヘカラス。

【年齢】 大正二年末調査ノ内地本籍人口ヲ年齢別ニ見レハ五歳未満ノ者ハ全體ノ一割以上ヲ占メ男ノ方少シク女ヨリ多シ。十歳未満ノ者ハ全體ノ四分ノ一ニ近ク、同様男子ノ數女子ヲ超過ス。二十歳未満ノ者ハ五分ノ二以上ヲ占ム。二十歳乃至五十五歳ノ者ハ二十歳未満ノ者ニ殆ト同シク、五十五歳以上ノ者ハ僅ニ全體ノ十分ノ一餘ナリ。而シテ六十歳以下ニ於テハ常ニ男子ノ數女子ヲ凌キ、六十歳乃至六十五歳階級以上ハ女子ノ數男子ヨリ多シ。既往ト比較シ見ルニ幼齡者ハ増シ、中年者ハ減シ、老齡者又増加セリ。幼齡者ノ増セルハ主トシテ出生率ノ増加ニ歸スヘク、中年者ノ減シタルハ幼齡者増加ノ影響、青年死亡率ノ増高等ニ依ルモノナラン。

諸外國ノ現住人口ニ依リ年齢構成ヲ窺フニ五歳未満ノ幼者最多キハ總數百ニ對シ南亞弗利加ノ 15、印度ノ 14等ヲ除キテハ和蘭ノ 12.6伊太利ノ 12.5等ニシテ埃太利ノ 12.4獨逸ノ 12.0等ハ中庸ヲ得タル國ニシテ愛耳蘭ノ 9.9佛蘭西ノ 8.9等ハ過少ナル國ナリ。我國ノ 13.3ハ亦甚低カラサル國ニシテ主トシテ出生率ノ高キカ爲ナリ。二十歳未満ノ者ハ埃太利ノ 44.48獨逸ノ 43.76伊太利ノ 43.32等ハ高ク瑞典ノ 40.99英克蘭威爾斯ノ 39.89ヲ經テ最低佛蘭西ノ

33.90ニ至ル。我國ノ 44.18ハ埃太利ニ次ク、二十歳乃至六十歳ノ者ハ佛蘭西ノ 53.54英克蘭威爾斯ノ 52.08其ノ高キモノナリ。獨逸ノ 48.39埃太利ノ 47.23ハ我國ノ 47.03ニ比シ高ク而モ幼者ニ於テ我ト伯仲ノ間ニアリ。是レ中年活動年齡者ニ富メル理想ニ近キ國民ナリ。六十歳以上ノ老年者ハ佛蘭西最多ク 12.56ヲ占ム。伊太利ハ 10.19我國ハ 8.79獨逸ハ 7.88英國ハ 8.04ナリ。我國ノ 17歳乃至 40歳ノ兵役義務年齡者ハ人口千ニ付明治三十六年ニハ 180.3ナリシモノ同四十一年ニハ 176.7ト爲リ、大正二年ニハ更ニ下リテ 175.7ト爲レリ。又一方女子ノ妊娠年齡者ヲ見ルモ明治三十一年ニハ 247.3同三十六年ニハ 243.0ナリシモノ、同四十一年ニハ 239.0ト爲リ大正二年ニハ 238.4ト爲ル。之レ皆青壯年者ノ死亡率高キカ爲ナルヘク注意スヘキ現象ナリ。

【配偶ノ有無】 大正二年末調査ノ本籍人口 53,362,682人中有配偶者ハ男女共ニ 9,144,727人、無配偶者ハ男 17,819,859人女 17,253,369人ニシテ女百ニ對シ男 103.3ノ割ナリ。各性人口千中有配偶者男女共ニ明治三十一年ニハ 182.3ナリシモノ調査毎ニ其ノ數ヲ減シ 176.1 173.1ヲ經テ大正二年ノ 171.4ニ至ル。之ニ反シテ無配偶者男ハ 322.1ナリシモノ 328.9 332.0ヲ經テ 333.0ト爲リ、女ニ於テモ同様 313.3ヨリ漸次増加シテ 323.3ト爲ル。斯クノ如ク有配偶者ノ割合漸次減少スルハ主トシテ比較的青年者ノ婚姻減少スルニ依ルモノナラン。

之ヲ諸外國ニ比スルニ有配偶者ハ總數百中英克蘭威爾斯 36.39佛蘭西 42.68獨逸 35.78埃太利匈牙利 36.97伊太利 36.33露西亞 39.07ニシテ我國ハ 34.28ナリ、佛蘭西ノ頗ル高キハ出生少ク幼兒ノ割合過少ナル爲ナルヘシ。

【現住人口】 我國現住人口ハ從來主トシテ市役所、町村役場ニ於ケル二種ノ帳簿ニ基キ算出セリ。即チ戸籍簿ニ依リ本籍人口ヲ調査シ之ニ寄留簿ニ依リ調査シタル出入人員ヲ加除シタルモノヲ以テ現住人口トス、即チ各市町村ノ本籍人口ニ其ノ市町村ノ出入寄留人員並兵營軍艦及監獄ニ在ル人員ヲ加除シタルモノニシテ之ヲ甲種現住人口ト稱ス。此ノ現住人口ハ朝鮮、臺灣、樺太及外國ニ在留スル者ヲ除外シタルモノナルカ故ニ其ノ總數ハ本籍人口ヨリ少ナルヘキ筈ナリ。然ルニ大正二年末調査ノ現住人口ハ 5,131,270人ニシテ本籍人口ヲ超過スルコト 1,768,588人ナリ。若シ之ニ公知ノ朝鮮、臺灣、樺太及外國ノ在留者約 40萬餘人ヲ加フレハ甲種現住人口ノ本籍人口ヲ超過スルコト約 220萬人ニ當ル。斯ノ如キ差額ヲ生スル所以ハ本籍地ニ對スル出寄留ヲ怠ル者アルカ爲出寄留數ニ不足アルト原寄留地ニ對スル退去届ヲ怠ル者アルカ爲入寄留數ニ虚増アルトニ基クモノトス。是レ明白ナル誤謬ニシテ斯ル誤謬ヲ包含スル材料ノ加除ニ依テ得タル現住人口ハ亦其ノ誤

謬ヲ繼承シ全國總計ニ於テ前記差額ニ該當スル虚増ヲ來セリ。仍テ内閣統計局ハ甲種現住人口ニ加工ヲ施シ一種ノ現住人口ヲ推計シ諸般觀察ノ基本ニ供スルコトト爲セリ。其ノ加工方法下ノ如シ。

一 出入寄留ノ差引上、入寄留ノ超過ハ出寄留者ノ出寄留届ヲ怠ルニ依リテ出寄留ニ脱漏アルト、入寄留者ノ退去届ヲ怠ルニ依リテ入寄留ニ重複アルトニ基クモノトス。但シ出寄留届ノ脱漏ト入寄留届ノ重複トカ何程アルヘキヤハ知ルヘカラスト雖要スルニ雙方ニ誤謬アリト假定ス。

二 各府縣ニ就テ此ノ脱漏重複カ何程アルヘキヤハ之ヲ知ルヘカラスト雖各府縣悉ク此ノ脱漏重複アルモノト假定ス。

三 出入寄留ノ多キニ從ヒ雙方同一ノ程度ヲ以テ脱漏重複モ亦多キヲ加フルモノト假定ス。

四 依テ各府縣ノ出入寄留數ニ脱漏重複ヨリ生スル全國ノ誤謬ヲ按分シ先ツ各府縣ノ誤謬ヲ算出セリ。

五 右算出ノ誤謬ヲ某府縣ノ甲種現住人口ヨリ控除シテ茲ニ其ノ府縣ノ乙種現住人口ヲ算出セリ。其ノ算式下ノ如シ。

$$\left(\frac{\text{某府縣甲種現住人口} - \left\{ \frac{(\text{全國入寄留}) - (\text{全國出寄留})}{(\text{全國入寄留}) + (\text{全國出寄留})} \right\}}{\times \{ (\text{其ノ府縣ノ入寄留}) + (\text{其ノ府縣ノ出寄留}) \}} \right)$$

而シテ右人口ハ推計ナルヲ以テ末位ヲ百ニ留メ以下四捨五入セリ。

然ルニ人口調査ヲ行ヒタル年以外ニハ此ノ推計法ヲ施ス能ハサルカ故ニ前二回ノ調査年ニ於テ算出セル乙種現住人口ヲ對比シ其ノ間ニ於ケル一箇年ノ幾何學的人口増加率ヲ算出シ、之ヲ近キ調査年ノ乙種現住人口ニ乘シ逐次各年ノ人口ヲ推計ス、大正六年ノ例ヲ示セハ下ノ如シ、

$$\left(\frac{\text{某府縣大正二年乙種現住人口}}{\times \left(\frac{\text{其ノ府縣ノ大正二年乙種現住人口}}{\text{其ノ府縣ノ明治四十一年乙種現住人口}} \right)^4} \right) = \text{其ノ府縣ノ大正六年乙種現住人口}$$

斯クシテ算出シタル大正二年末乙種現住人口ハ 52,917,600人ニシテ地方的分布ヲ見ルニ關東區ハ總數ノ 187.04%、九州區ハ 145.57%、近畿區ハ 128.23%、東北區ハ 106.17%、中國區ハ 96.87%、東海區ハ 96.16%、北陸區ハ 77.08%、四國區ハ 61.46%、東山區ハ 60.19%、北海道ハ 31.19%、沖繩縣ハ 10.04%ニ當レリ。又面積一方里ニ對スル人口ノ密度ヲ見ルニ最高キハ關東區ノ 4,763人及近畿區ノ 4,581人ニシテ之ニ次ク東海區ハ 3,449人、沖繩縣ハ 3,385人、九州區ハ 2,883人、四國區ハ 2,754人、中國區ハ 2,573人、北陸區ハ 2,496人、東山區ハ 1,768人、東北區ハ 1,323人最低キ北海道ハ 271人從テ全國平均 2,134人ナリ。而シテ大正六年末乙種現住人口ハ 56,035,100人ニシテ人口密度一方里ニ付 2,260人ナリ。之ヲ歐洲ニ比スルニ我國最稠ノ關東及近畿ノ二區ハ獨逸聯邦

中ノ最稠ナル索遜ノ 4,945人ヨリ少シク淡ク、東海區及沖繩縣ハ英克蘭威爾斯ノ 3,680人、白耳義ノ 3,783人等ニ比スヘク、低キ部ノ東山區及東北區ハ伊太利ノ 1,129人埃太利ノ 1,469人等ニ比スヘク、最低キ北海道ト雖亞米利加ノ 184人、露西亞ノ 124人ヨリ遙ニ高シ。其ノ他匈牙利ハ 984人、佛蘭西ハ 944人等ナリ。

此ノ現住人口ヲ前回ノ調査ニ比較スルニ其ノ間五年ニ於テ最烈シキ増加ヲ來セルハ北海道ニシテ一年間ニ平均四分五、六厘ノ増加歩合ニ當ル。之ニ次イテハ大阪、京都、静岡、福岡、宮崎ノ二、三分餘ノ増加歩合ナリ。最低キハ滋賀ノ四厘長崎ノ六厘石川、鳥根、ノ七厘等ナリ。其ノ間宜ク地方ノ經濟狀態ヲ明ニ語ルモノト謂フヘシ。

【現住戸數】 大正二年末ノ現住戸數ハ 9,720,436戸ニシテ乙種現住人口ニ依ル一戸平均ハ 5.44人ナリ。最近ノ調査ニ依ル諸外國ノ狀態ヲ見ルニ獨逸ハ 9.30人、埃太利ハ 4.7人、英克蘭威爾斯ハ 4.5人ナリ。我カ邦ニ於ケル一戸平均ハ概シテ東北ニ高ク、南ニ低ク、大都會ヲ包有スル地方ニ低シ、即山形ノ 6.94人、福島ノ 6.90人、岩手ノ 6.83人等ハ高キ地方ニシテ東京ノ 3.85人、大阪ノ 4.35人、山口ノ 4.89人、廣島ノ 4.98人等ハ低キ地方ナリ。

【占居狀態】 大正二年末調査ノ甲種現住人口ニ就キ市町村ヲ人口ノ多少ニ依リテ階級ニ分テハ 2,001—5,000人ノ人口ヲ有スル町村最多ク全市町村ノ 61.38%ニ當リ其ノ前後ノ階級ニ至ルニ從ヒ一様ニ其ノ數ヲ減少ス。即 1,001—2,000人ノ人口ヲ有スル町村ハ 16.02%、5,001—10,000人ノ人口ヲ有スル町村ハ 14.98%ヲ占メ以上三階級ヲ合算スレハ總數ノ九割以上ニ當ル。故ニ本邦人口ノ分布狀態ハ村落ヲ中心トスルコト明ナリ。獨佛諸國ニ於テハ 500人以下ノ市町村ヲ頂點トシテ人口階級ヲ増大スルニ從ヒテ其ノ數減少ス。即 500人以下ノ町村數ハ獨逸ニ於テハ總數ノ 73.12%、埃太利ニ於テハ 74.68%、佛蘭西ニ於テハ 53.17%ヲ占ム。又人口ノ都市集中狀況ヲ窺フニ明治二十六年ニハ 50,001人以上ヲ有スル都會人口ハ總人口ノ 7.86%ナリシカ同三十一年ニハ 9.40%ト爲リテ 1.54%ヲ増シ同三十六年ニハ 11.44%ト爲リテ 2.04%ヲ増シ同四十一年ニハ 13.31%ト爲リテ 1.87%ヲ増シ大正二年ニハ 14.18%ト爲リテ 0.82%ヲ増シ二十年前ニ比スレハ約倍加セリ。

【都會人口】 我國ニ於テ人口十萬以上ヲ有スル大都會ハ明治三十一年ニハ僅ニ八市ニ過キサリシモ大正二年ニハ十一市ニ増加セリ。又人口増加ノ著シキハ吳市ニシテ毎年平均五、六分ノ増加ヲ示セリ。之ニ反シテ東京市、長崎市ノ如キハ却テ人口減少スル奇觀ヲ呈セリ。次ニ人口五萬乃至十萬ノ中都會ハ明治三十一年ノ調査以來毎回其ノ數ヲ増加シ大正二年ニハ二十ヲ算セリ。近來發展著シキハ澁谷町、旭川區ニシテ何レモ毎年平均一割内外ノ人口増加シツツアリ。人口五萬以下ノ市區ハ其ノ數ニ在リテモ又各市區

ノ發展ニ在リテモ大都會ニ比シ著シカラス。從テ人口減少ヲ來セ

乙. 人口ノ動態

【婚姻】 道府縣ニ本籍ヲ有スル者ノ大正四年中ノ婚姻ハ 44 7.170件ニシテ同五年ハ 433,755件ナリ。故ニ前年ニ比シ 13,415件減少セリ。之ヲ各年末人口千ニ比スレハ大正四年ハ 8.14同五年ハ 7.83ニ當リ、前年ニ比シ夫々 0.28、0.33低シ。

本邦ノ婚姻歩合ヲ見ルニ近ク明治四十一年ノ 9.35ヲ最高トシ、其ノ以前ハ高低常ナラス、其ノ以後ハ逐年低下シ今日ニ及ヘリ。唯其ノ間大正三年ノ 8.40ニ上昇シタルヲ見ルノミ。今大正四年以前毎數年平均ノ婚姻歩合ヲ見ルニ自明治二十九年至同三十八年間ノ平均歩合ハ 8.61自四十一年至大正二年ノ間ハ 8.58ニシテ漸次低下ノ狀況ヲ示セリ。尙之ヲ歐洲ノ諸國ニ見ルモ近年一般ニ其ノ低下シタルヲ見ル。即 1896年乃至 1908年及 1905年乃至 1913年ノ平均歩合ヲ見ルニ人口千ニ付獨逸ハ 8.2 7.8英克蘭威爾斯ハ 7.9 7.6佛蘭西ハ 7.7 7.9 7.5(1913) 奧太利ハ 8.0 7.4伊太利ハ 7.2 7.7瑞西ハ 7.6 7.3匈牙利ハ 8.6 8.9ニシテ何レモ我國ヨリ低率ナリ。大戰以來ノ狀態ヲ窺フニ我國ハ 8.18(1915年) 7.85(1916年)英克蘭威爾斯ハ 9.7(1915) 7.5(1916)匈牙利ハ 3.1(1915) 3.2(1916)等ニシテソノ多クハ低下シ特ニ獨逸側ニ於テ然ルヲ見レトモ一方英克蘭威爾スノ如ク一時增高セシモノナキニシモ非ス。

道府縣ニ本籍ヲ有シテ現在スル者ノ婚姻ハ大正五年ニ於テハ 44 5,210件ニシテ人口歩合ハ本籍人ノソレヨリ少シク高ク、大正四年ハ 8.18ニシテ同五年ハ 7.85ナリ。之ヲ地方別ニ見レハ大正四年ニ於テハ沖繩縣ノ 11.91最高ク中國區ノ 9.27東北區ノ 8.69北陸區ノ 8.56等ハ高率ノ部ニ屬ス。九州區ノ 8.23四國區ノ 8.07東海區ノ 7.96北海道ノ 7.91關東區ノ 7.74等ヲ經テ最低近畿區ノ 6.99ニ至ル。又大正五年ハ東北區ノ 9.11最高ニシテ北陸區ノ 8.35北海道ノ 8.01關東區ノ 7.89等ニ次ク。低キハ東北區ノ 7.65四國區ノ 7.51近畿區ノ 6.87等ナリ。更ニ之ヲ細觀スレハ秋田、宮城、青森及岩手等ノ東北地方概シテ婚姻率高ク徳島、神奈川、大阪、京都及長崎等ノ西南地方及大都會ヲ包有スル地方ニ低キヲ知ル。

種類別婚姻ヲ見ルニ 總數百ニ對スル割合ハ大正四年ニハ普通婚姻 91.22入夫婚姻 2.88婿養子縁組 5.90ニシテ同五年ニハ普通婚姻入夫婚姻ハ前年ニ比シ若干ノ減少ヲ來タシ夫々 90.94、2.85ナリ。從テ婿養子縁組ハ其ノ割合増加シテ 6.21ヲ占ム。之ヲ既往五年間ノ平均ニ比スレハ普通婚姻ハ概シテ増加ノ傾向ヲ示シ、入夫及婿養子ノ婿取婚姻ハ減少スルヲ見ル。之ヲ地方別ニスレハ普通婚姻ハ九州地方及沖繩ニ多ク東北地方ニ少ク恰モ婚姻歩合ト相反セルカ如シ。入夫婚姻ハ北陸、東山、近畿地方ニ高ク、東北、九州、沖繩地

ル市區モアリ。只僅ニ濱松市、大分市高キノミ、

方ニ低シ。婿養子縁組ハ東北、關東高ク、九州、沖繩低シ。

次ニ夫妻ノ婚姻年齢ヲ見ルニ夫ハ二十歳乃至三十歳ニ於テ婚姻スル者最多ク實ニ總數ノ六割四分(四年)、六割六分(五年)ヲ占ム妻ニ於テモ同様二十歳乃至三十歳ニ於テ婚姻スル者最多ク全部ノ四割以上ヲ占メ、其以前ノ年齢階級ニ在リテハ概シテ割合ヲ減少シ其以後ニ在リテハ増加スルノ傾向ヲ有ス。故ニ我國亦漸次晩婚ニ傾キツツアリト謂フヲ得ヘケンカ。

【離婚】 本籍人ノ離婚ハ大正四年ニハ 60,206件、同五年ニハ 60,536件ニシテ各年末人口千ニ就キ夫々 1.10及 1.09ナリ。此ノ歩合ハ婚姻歩合ノ年ニ依リ高低アルニ拘ラス離婚ノ歩合ハ一様ニ低下シ明治十六年ニハ 3.39ノ高率ヲ示シタリシカ、翌年ヨリ 3.0以下トナリ、同三十二年ヨリ 2.0以下トナリ、今日ニ及フ。又婚姻ニ對スル離婚ノ割合ヲ見ルニ其ノ千ニ付大正四年及同五年ハ共ニ 134.6ニシテ一分以上ノ多キヲ示セトモ歐洲諸國ニ比スレハ最近數年間ノ平均獨逸ハ 1.3佛蘭西ハ 1.2英克蘭威爾斯ハ 0.1匈牙利ハ 1.5愛耳蘭ハ 0.002等ニシテ我國ハ尙其ノ割合頗ル高ク世界ニ稀ナル日本特異ノ現象タリ。

次ニ離婚ヲ地方別ニ見レハ東北、北陸地方ニ高ク九州、近畿地方ニ低ク婚姻歩合ノ高低ト略一致シ相互ニ弱キ交聯性ヲ有スルモノト謂フヲ得ヘシ。

種類別離婚ノ割合ヲ見ルニ總數千ニ付妻カ夫ノ家ヲ去ル離婚ハ大正四年ハ 860.9同五年ハ 857.7夫カ妻ノ家ヲ去ル離婚ハ大正四年ハ 111.8同五年ハ 114.4離婚者雙方婚家ニ留ル離婚ハ大正四年ハ 27.6同五年ハ 27.9ナリ。然ルニ婚姻ニ於テ知リタル如ク種類別婚姻ノ割合ハ大正五年ニハ普通婚姻ハ 90.94%、入夫婚姻ハ 2.85%婿養子縁組ハ 6.21%ナリ。故ニ婿取婚姻ノ結果離婚スル者ノ割合ハ婚姻ニ於ケル婿取婚姻ノ割合ヨリ二割以上多ク普通婚姻ノ夫レニ比シテ頗ル高キヲ見ルヘシ。尙夫カ妻ノ家ヲ去ル離婚ノ東北地方ニ多ク九州地方ニ低キヲ見レハ一層其ノ然ルヲ推フヘシ。

又離婚者ノ夫婦關係繼續期間ヲ見レハ滿五年以下ノ者總數ノ六割以上ヲ占ム。更ニ之ヲ一年別ニスレハ滿一年以上二年以下ノ者大正四年ハ 17.38% 同五年ハ 16.59% 滿一年以上二年以下ノ者大正四年ハ 16.16% 同五年ハ 17.66% 等ニシテ漸次其ノ割合ヲ低メ滿五年以下ノ者大正四年ハ 60.82% 同五年ハ 61.71%ニ當ル。而シテ累年其ノ割合ヲ見ルニ概シテ低下シ來ル傾向アルヲ以テ一面無暴ノ婚姻ノ減少シタルヲ窺ヒ得。

【生産】 本籍人ノ生産ハ大正四年ニハ 1,824,888人同五年

ニハ 1,832,931人ニシテ之ヲ各年末人口ニ比スレハ千ニ付大正四年ハ 33.2同五年ハ 32.9ニ當ル。此ノ兩年ノ歩合ハ何レモ前年ヨリ低ク明治四十二年乃至大二年平均ノ 33.7ニ比スレハ其ノ後漸次低下ノ傾向ヲ示セリ。

本邦ノ生産歩合ハ或ハ上昇シ或ハ降下シ起伏常ナラスト雖十九世紀ノ末期ヨリ殆凡テノ歐洲諸國ニ於テ生産歩合ノ著シク下降シタルニ比スレハ尙我國ハ其ノ跡明ナラス。即千八百八十六年乃至千八百九十五年ノ平均生産歩合ハ人口千ニ付獨逸 36.5佛蘭西 22.8英克蘭威爾斯 30.9匈牙利 42.5伊太利 36.6奧太利 37.6等ニシテ可成高率ナリシモ二十世紀ノ初期千九百八年乃至千九百十三年ノ平均生産歩合ハ獨逸 29.5奧太利 31.9佛蘭西 19.5英克蘭威爾斯 24.9匈牙利 36.0伊太利 32.4等ニシテ何レモ前率ニ比シ若干減少セリ。特ニ現戰爭勃發以來頓ニ生産歩合下降シ英克蘭威爾スハ 1915年ニハ 23.0 1916年ハ 22.8 1917年ニハ 19.8匈牙利ハ 1915年ニハ 22.9 1916年ニハ 15.2ノ低率ヲ示スニ至レリ。然ラハ本邦生産歩合ノ最近數年間ニ於テ下降ノ傾向ヲ示セルハ果シテ此ノ風潮ニ從テ現象ナルカ、今後大ニ注目スヘキ重要ノ現象ナリ。

次ニ生産歩合ヲ現在人ニ就キテ見レハ大正四年ハ 33.1同五年ハ 32.7ニシテ共ニ本籍人ノ歩合ニ比シ少シク低シ。此ノ生産歩合ヲ地方別ニスレハ北海道最高ク婚姻歩合ノ高キ東北地方ニ次ク。最低キ地方ハ沖繩縣ニシテ中國區、近畿區等ニ次ク。因テ婚姻歩合ト生産歩合トノ間ニハ密接ナル交聯關係アリテ婚姻歩合ノ高キ地方ハ生産歩合高シ。即東北地方ニ高ク西南地方及大都會ヲ包有スル地方ニ共ニ低シ。生産ヲ男女ニ別テハ大正四年ハ男 918,296人女 881,030人同五年ハ男 921,348人女 883,475人ニシテ女百ニ對スル男ノ割合ハ大正四年ハ 104.2同五年ハ 104.3ナリ。之ヲ歐洲ニ比スレハ其ノ割合獨逸ハ 105.6(1914年)英克蘭威爾スハ 104.0(1915年)匈牙利ハ 105.9(1915年)伊太利ハ 105.1(1914年)西班牙ハ 109.8(1915年)ニシテ概ネ生産男子ノ數女子ヲ超過セリ。而シテ現戰爭ノ影響ナルカ僅ニ男子ノ割合ヲ高メタリ。

身分別ニ生産ヲ見レハ總數百中 大正四年ハ嫡出子 91.3庶子及私生兒 8.7同五年ハ嫡出子 91.1庶子及私生子 8.9ニシテ明治四十三年ノ嫡出子 90.6庶子及私生子 9.4以來漸次嫡出子ノ割合ヲ高メツツアリシカ大正五年ハ稍其ノ歩合ヲ低メタリ。之レ果シテ何ノ原因ニ依ルモノナルカ。又身分別男女ノ割合ハ何レモ男子ノ數女子ヲ超過スレトモ男子ノ割合特ニ嫡出子ニ於テ多シ。即大正四年ハ女百ニ對シ男子ノ割合ハ嫡出子 104.6私生子 100.2大正五年ハ嫡出子 104.7私生子 100.4ナリ。

静岡、富山、新潟、長野ノ諸縣ハ嫡出子ノ割合多ク大阪、鳥取、島根、高知等ハ其ノ割合少ク特ニ北海道ノ低キハ特殊ノ事情アル

ニ依ルモノナラン。

【死産】 内地現在人ノ死産ハ大正四年ハ 141,301人同五年ハ 139,998人ニシテ之ヲ各年末人口ニ比スレハ千ニ付大正四年ハ 2.60同五年ハ 2.53ナリ。之ヲ既往ニ比スレハ頗ル低下シ來レルモ尙獨逸ノ 0.81(1914年)佛蘭西ノ 0.86(1913年)伊太利ノ 1.33(1915年)ニ比スレハ我國ノ率遙ニ高シ。是死産ヲ認ムル月數ノ差ノミニ歸スルヲ得サルヘシ。死産ヲ男女別ニ見レハ女百中男ハ大正四年ハ 114.8同五年ハ 114.8ニ當リ生産ニ比シ男ノ割合頗ル高シ、然レトモ獨逸ノ 126.9(1914年)奧太利ノ 131.3(1913年)佛蘭西ノ 135.1(1911年)ニ比スレハ其ノ割合低シ、而シテ我國ニ於テハ漸次男ノ割合ヲ高メツツアルニ反シテ歐洲諸國ニ於テハ漸次其ノ割合ヲ低メツツアルハ注目スヘキ現象ナリ。又死産ハ公生ヨリモ私生子ニ多キヲ常トス、即大正四年ハ公生百中生産 93.5死産 6.5同五年ハ 93.3及 6.2ナルニ私生子ニアリテソノ百中大正四年ハ生産 83.2 死産 16.8同五年ハ 83.6及 16.4ナリ。從テ死産百中大正四年ハ公生 77.6私生 22.4同五年ハ公生 77.4私生 22.6ヲ示ス。

【死亡】 本籍人ノ死亡ハ大正四年ハ 1,107,237人同五年ハ 1,202,900人ニシテ年末人口千ニ付大正四年ハ 20.2同五年ハ 21.6ナリ。死亡歩合ヲ見ルニ大正五年ハ同三年ヨリ 1.0同四年ヨリ 1.4高ク、最近稍增高ノ傾向ヲ示セリ。

本邦ノ死亡歩合ハ近年ノ最高率明治四十二年ノ 21.9ヨリ年々低下シ來レルモ大正三年ニ至リ俄然上昇シ翌年幾分低下シタルモ同五年ニ至リテ再上昇セリ。歐洲諸國ニ於テハ生産歩合ノ低下ト共ニ死亡歩合モ低下シ自然増加率ノ增高シタル邦國少シトセス。即 1908年乃至 1913年平均ヲ取レハ人口千ニ付丁抹ハ 13.2諾威ハ 13.6和蘭ハ 13.9獨逸ハ 16.5奧地利ハ 21.5佛蘭西ハ 18.6英克蘭威爾斯ハ 14.1匈牙利ハ 24.6伊太利ハ 20.4ナリ、而シテ1914年ニハ獨逸ハ 18.6佛蘭西ハ 19.6伊太利ハ 20.8(1915年)英克蘭威爾スハ 14.9(1915年) 13.3(1916年)等ナリ。現在人ノ死亡ハ大正四年ハ 1,093,793人同五年ハ 187,832人ナリ。年末人口千ニ付大正四年ハ 20.1同五年ハ 21.5ニシテ本籍人ノ歩合ヨリ少シク低シ。之ヲ地方別ニ見レハ北陸區常ニ最高ヲ保チ大正四年ハ 23.3同五年ハ 25.4ナリ。關東區ノ 21.3(四年) 22.7(五年)東北區ノ 19.9(四年) 23.0(五年)ニ次テ高シ。之ニ反シテ沖繩ハ最低ク大正四年ハ 17.4同五年ハ 14.7ナリ。九州區ノ 18.4(四年) 18.7(五年)四國區ノ 19.0(四年) 20.1(五年)中國區ノ 18.8(四年) 20.5(五年)等ニ次テ低キ地方ナリ。

死亡數ヲ男女ニ別テハ大正四年ハ男 556,179人、女 537,610人同五年ハ男 604,156人女 538,674人ニシテ百女ニ付男ノ死亡ハ大正四年ハ 103.5同五年ハ 103.5ナリ。之ヲ大正二年ノ 102.0同三年ノ 1

03.1=比スレハ男子死亡ノ割合増加シタルヲ見ル。此ノ死亡ナ各性人口=比スレハ千ニ付大正四年ハ男 20.3女 19.9同五年ハ男 21.7女 21.3ナリ。嘗テ明治三十七年以降一時女ノ死亡歩合少シク男ヨリ高カリシカ爾來一上一下シテ近年ニ至リ男少シク高シ。然レトモ大都會ヲ包有スル府縣及東北地方ニ在リテハ今尙女子ノ方常ニ高シ。

月別死亡ヲ一年平均一日ノ死亡千ニ付各月平均一日ノ死亡比例ト爲シテ見レハ六月最低ク六月以降急ニ増加シテ九月ニ至リ最高トナリ十月ヨリ再下降ス。又六月以前ハ除々ニ上昇シテ二月ニ至リ最高トナリ一月ヨリ下降ス。而シテ二月ニ於ケル冬ノ頂點ヨリモ九月ニ於ケル夏ノ山常ニ高シ。是例年採ル月別死亡ノ状態ナリ。大正四年ニ於テハ一月ハ二月ヨリ高ク十二月ハ十一月ヨリ高ク六月ハ五月ヨリ高シ。故ニ冬ノ山ハ一月十二月ニ於テ顯レ夏ノ山ハ早クモ八月ニ於テ頂上ニ達セリ。又大正五年ニ於テハ冬ノ山三月ニ於テ顯レ例年ニ比シ異常ニ高シ之冬及早春ニ於ケル氣温低カリシ爲ナラン。

年齢別死亡ヲ見ルニ大正五年ハ五歳以下ニテ死亡スル者ハ總數ノ四割弱ニ當リ一歳以下ニテ死亡スル者ハ二割五六分ニ當ル。各性死亡總數ニ對スル年齢ノ分節比例ヲ求メ男女ヲ比較スレハ一歳未満ハ男ノ比例高ク一歳以上四十歳迄ハ女ノ比例高ク四十歳以上七十五歳迄ハ再男ノ比例高ク七十五歳以上再女ノ比例高シ。幼者及老者ノ女死亡多キコトハ各國概ネ其ノ揆ヲ一ニスレトモ少年青年壯年ニ於テ女ノ死亡多キハ他國ニ多ク其ノ比ヲ見サル所ナリ。

大正四年中ノ生産千ニ付一歳未満ノ乳兒死亡ハ 160同五年ハ 170ナリ。此ノ比例數ハ管テ低カリシモ漸次増加シテ明治四十二年ニハ 166ノ高ニ達シ、再ヒ下降シ大正二年ニ至ル。同三年ヨリハ再上昇シテ同五年ニハ未曾有ノ高率ヲ示スニ至ル。是生産歩合如何ニモ倚ルヘケレト近時乳兒死亡ノ増加シタルハ疑ナシ。而シテ男女ヲ比較スルニ常ニ男ノ歩合女ニ優リ大正四年ハ男 168、女 153同五年ハ男 179、女 161ナリ。今地方別ニ之ヲ觀察スレハ大阪、京都、青森、茨城、秋田地方ニ高ク四國、九州地方ニ低ク出生率ト弱キ交聯性ヲ有ス。歐洲ニ於テハ十九世紀末期頃甚高キモノアリシカ漸次低下セリ。即英克蘭威爾斯ハ 1915年男 123女 96佛蘭西ハ 1913年男 123女 102獨逸ハ 1914年男 177女 149奧地利ハ 1913年男 204女 175伊太利ハ 1914年男 137女 123和蘭ハ 1916年男 94女 74等ナリ。最高及最低ハ匈牙利ノ 1915年男 282女 245、[イスラント]ノ 1915年男 71女 61ナリ。

死亡原因別ト爲セハ下痢腸炎ニテ死亡スル者最多ニシテ毎年十二萬人内外アリ。之ニ次イテ男ハ肺炎及氣管支炎女ハ肺結核或ハ肺炎多シ、老衰ハ女ニ頗ル多ク先天性弱質ハ男ニ多シ。急性傳

染病ヲ見ルニ腸室扶斯ハ稍増加シ人口一萬ニ付大正四年ハ 1.6ナリシモノ同五年ニハ 1.9ト爲ル。又虎列刺ハ一時減退シタルモノ大正五年ニハ一躍シテ 1.4ト爲ル、流行性感胃モ僅ニ増高シ大正四年ノ 0.4ヨリ大正五年ハ 0.8ヲ示スニ至ル。其ノ他麻疹、痘瘡何レモ増加セリ。歐洲諸國ニ比スルニ我國死亡ノ主要原因ニシテ且年々増加スル肺結核死亡ヲ見ルニ獨逸ハ 83,637人佛蘭西ハ 70,011人英克蘭威爾斯ハ 41,676人伊太利ハ 33,261人奧地利ハ 81,767人英吉利ヲ除キ何レノ國ニ在リテモ漸次減少セリ。又下痢腸炎ヲ見ルモ獨逸ハ 102,487人佛蘭西ハ 27,152人英克蘭威爾斯ハ 15,362人(1914年ノ調査)ニシテ我國ヲ凌クモノナシ。我國國民保健ニ注意スヘキ點少シトセス。

【自然増加率】 大正四年ニ於ケル本籍人ノ生産及死亡ノ差、即自然増殖數ハ 717,651人同五年ハ 636,031人ニシテ人口千ニ付 13.0及 11.3ニ當ル。之ヲ既往ニ比スレハ明治ノ初年以來一高一低ハアレトモ漸次増加シ來リ大正二年ノ 13.8ニ於テ最高ヲ占ム。以後漸ク低下シ大正五年ニ至リ明治三十九年以來見サル低率ヲ示ス。蓋生産率ノ低下、死亡率ノ増加共ニ近年稀ナル率ナリシ爲ナリ。又現在人ニ就キテ見ルニ大正四年ハ 13.0同五年ハ 11.3ニシテ本籍人ノソレト大差ナシ。

歐洲諸國ニ於テハ所謂生死併行遞減論ニ適ヒ生死兩率共ニ若干ノ減少ヲ來タセトモ死亡率減少ノ程度大ナル爲却テ自然増殖率ヲ增高セシメタル邦國少カラス。依テ今 1908—1913年及1896—1905年ノ平均ヲ見ルニ匈牙利ハ 11.4、11.3伊太利ハ 12.0、10.8和蘭ハ 14.1、10.5西班牙ハ 9.3、7.3ナリ。之ニ反シテ英克蘭威爾斯ハ 10.8、11.8獨逸ハ 13.0、14.6奧地利ハ 10.4、11.5佛蘭西ハ 0.9、1.4ニシテ多少ノ減少ヲ示セリ。然レトモ我國ハ生産率ノ高キ爲他國ニ多ク見サル高キ増殖率ヲ示セリ。此ノ率ヲ地方別ニスレハ北海道ノ 23.0(四年) 21.8(五年)ヲ最大トシ沖繩ノ 2.4(四年) 9.3(五年)ヲ最低トシ其ノ他ハ此ノ間ヲ上下ス。

【生命表】 國民ノ生命ニ關スル研究ハ人口統計ノ一部ニ屬シ歐米各國ハ國勢調査ノ結果ニ基キ必ス之ニ關スル諸表ヲ公表シ居レリ。我國モ亦人口靜態調査ヲ基礎トシ既ニ調査ヲ重ヌルコト三回ニ及ヘリ。其ノ應用方面ハ種々廣ク公衆ノ保健、衛生ヲ管掌スル行政官、技術官、人口統計研究者、醫師、社會學者、保險家、統計家及特ニ國民保健ノ改善ヲ念トスル者ニ對シ要用ナルハ勿論、損害賠償等法律上ノ目的及年金、恩給金、養老金等ノ計算ニハ缺クヘカラサルモノトス、本書ニ掲グルモノハ大正二年及明治四十一年ノ間ノ事實ニ依リ計算シタルモノナリ。

本表ハ各年齢(一歳未満ハ日齡又ハ月齡別)ニ屬スル人口ニ就キ生存者、死亡者及其ノ死亡率並完全平均命數、折半命數、有限平均

命數(六十歳限リ)ノ六項ヲ掲載ス。第一項ノ生存者トハ同一期ニ生レタル男女各十萬人ヲ假定シ各年齢毎ニ死亡率ニ依リテ算出シタル死亡者ヲ控除シタル殘數ヲ謂フ。故ニ十萬人中ニ於テハ男子ハ百二歳女子ハ百三歳ニ達スル者ナキヲ示ス。然シ事實我國國民ニ百二三歳以上ノ生存者アルハ我國國民男女共一歳未満生存者ノ數假定ノ十萬人ヲ超過スルニヨル。之レーツノ指數表トモ見做スヘキモノナリ。第二項ノ死亡者トハ右假定人口十萬人中ノ各年期ニ於ケル一年間ノ死亡數ヲ意味スルモノニシテ事實死亡者ノヨリ以上多數ナルハ亦前ノ理ニ依ル。第三項ノ死亡率トハ男女各年齢ニ於ケル生存者一人ニ對スル當該年齢ノ死亡割合ヲ謂フ。第四項ノ完全平均命數トハ各年齢人口ノ將來生存スヘキ豫定年數ヲ謂フ。例之二歳ノ男子ハ今後五十三年ヲ平均生存シ得ヘキ豫定トナルカ故ニ享年ハ平均五十五歳ナリトノコトナリ。又十歳ノ女子ハ今後四十八年生存シ得ヘキ豫定ナルカ故ニ五十八歳ニテ死亡スルモノナルコトヲ示ス。但シ實際ニハ夭折スル者アリ長壽ヲ保ツ者アリテ各人ニ就テハ命數一定セスト雖此ニ示ス命數ハ所謂確率論ヨリ推算シタル標準命數ニ外ナラス。第五項ノ折半命數ハ各年齢生存者ノ半數トナルヘキ迄ノ年數ニシテ同年齡生存者ノ半數トナリタル年數ハ所謂其ノ同年齡者ノ平均命數ト考ヘタル時代ノ標準命數ニシテ又一ツノ參考トナルヘキモノタルヲ信シテ茲ニ加ヘタルモノナリ。第六項ノ六十歳限リ有限平均命數ハ六十歳ヲ限度トシタル一種ノ平均命數ニシテ就中十五歳乃至六十歳(又ハ六十五歳)ヲ以テ國民ノ活動スヘキ生産年齢ト看做シ、十五歳ノ六十歳限平均命數ヲ以テ國民ノ生産命數トナスモノアリ。

今死亡率ニ就キ前回調査ノ結果ト比較シ著明ナル部分ノミヲ叙述スルコト次ノ如シ。第一、一歳未満ノ幼兒死亡率ノ增高、即局第一表(明治十八年乃至二十三年ノ事實ニ依ル調査)ニ在リテハ老年階級ニ比スレハ七十九歳乃至八十歳ノ間ニアリシモノ、局第二表(明治三十二年乃至三十六年)ニ在リテハ八十歳乃至八十一歳ノ間ニ位シ、局第三表ニ至リテ八十一歳乃至八十二歳ノ間ニ位スルニ至ル如ク漸次增高シ來ル。更ニ之ヲ日齡月齡等ニ因リテ死亡率ヲ求ムルトキハ生後三ヶ月位マテハ却テ前回ニ比シ死亡率低下シタレトモ以後烈シク上昇ス。從ツテ命數ニ於テモノノ總平均價值零歳ノ命數男子ハ前調査ニ比シ僅ニ延長シタルモ女子ニ於テハ却テ

丙. 在外本邦人及在留外國人

【在外本邦人】 大正七年六月末調査ノ在外本邦人總數ハ 45 萬人餘、前年ニ比シ 5.7 萬人餘増加セリ。總數ニ對スル五大洲別ノ分節比例ハ亞細亞洲ノ 407.84%最多ク、濠洲ノ 251.28%之ニ次ク。北米ハ 246.80%南米ハ 91.82%歐洲ハ 2.76%ニ當リ、更ニ之

短縮セリ。是其ノ前例ヲ見サル現象ナリ。蓋シ出生率ノ増加ニ依ルコト亦少カラストスルモ乳兒死亡ノ減少セサルコトヲ明ニ認メ得。第二、青年死亡率ノ増大、局第一表ニ比シ局第二表ハ男子二十歳乃至二十二歳ノ間女子十四歳乃至二十三歳ノ間ニ於テ却テ高ク、局第二表ニ比シ局第三表ハ男子十三歳乃至二十三歳ノ間、女子七歳乃至二十七歳ノ間ニ於テ却テ高シ。是主タル原因奈邊ニアルヤハ推断ヲ許サスト雖、結核性死亡、自然陶汰等與テカアルモノナラン。第三、老年階級ニ於テノ死亡率上昇、是ハ經驗數不足ニ加フルニ幾多ノ推算ヲ經タルモノナレハ今姑ク不問ニ附ス。第四、女子ノ男子ニ比シ生産年齢者ノ死亡狀況ノ不長、三歳乃至四十二歳間ハ女子ノ死亡率男子ヨリ高キコトハ毎回同シケレトモ男女ノ隔差益甚シク十七八歳ニ於テ特ニ然リトス。爲メニ命數ノ總價值トモ稱スヘキ零歳ニ於テハ前調査ヨリモ却テ低キ結果ヲ得タリ又男女ヲ比較スルモ幼少年ノ女子(一歳乃至十四歳)ハ常ニ男子ヨリ命數大ナリシモノ今回ハ短縮シタルヲ見ル。

之ニ由テ觀レハ局第二表時ト局第三表時トニ於テ死亡率ノ高低ハ最幼年ニ於テ增高シ、少年ニ至リテ少シク減少シ、青年再ヒ増大シ、老年ニ至リテ減少セリ。又男女ノ狀況ハ最幼年ニ於テ男高ク少年ヨリ青年、壯年ヲ經テ初老ニ至ル迄女高ク、以後男、女ヲ凌ク。次ニ完全平均命數ハ一般ニハ延長セリト謂フヲ得ヘケンモ、零歳ノ女ハ却テ低ク且女ハ常ニ男ヲ凌キタルモノ一歳乃至十四歳ニ於テハ却テ反對ナリ。

更ニ之ヲ諸外國ノ生命表ト比較スレハ青年時ノ死亡率異常ニ高ク、特ニ女子ニ於テ甚シク他國ニ見サル一瀾瀾ナリ。又乳兒死亡率ノ高キハ以前ニ於テハ余リニ明白ナラサリシモノ、外國ニ於テハ減少スルニ反シ、我國ニ於テハ增高スルノ結果益顯著トナレリ。

【渡航地及目的別外國旅券下附人員】 大正六年中ニ外國旅券ヲ下附シタル者 6 萬人餘、內露西亞地方最多ク二萬人ヲ超過ス。其ノ他北米一萬人布哇ノ五千人伯刺西爾ノ四千人比律賓、支那ノ三千數百人等多キ地方ナリ。之ヲ目的ニ依リ區別スレハ商用、漁業用ノ増加烈シク移民亦少カラス、修學ヲ除キテハ何レモ若干ノ増加ヲ示セトモ公用ノ餘リ多カラサルハ現戰爭ノ餘波ナルヘク一方女子ノ渡航急増シタルハ注目ニ値ス。

ヲ細別スレハ滿洲ノ 249.64%第一位ヲ占ム。其ノ内大連ノ 97.25%旅順ノ 21.94%等其ノ主ナルモノナリ。第二位ハ北米合衆國ノ 246.80%ニシテ内最多ク邦人ノ在留スル地方ハ「カリホルニア」洲ニシテ實ニ總數ノ 177.62%ニ當ル。其ノ他加奈太ノ 31.31%「シヤ

トル市ノ 12.25%紐育市ノ 6.55%等主ナルモノナリ。布哇ノ 22.7.28%第三位ヲ占メ、「オアーフ」島最多ニシテ布哇島、「マウイ」島等之ニ次ク。亞細亞中滿洲ニ次テ邦人ノ多ク在留スル地方ハ支那本部ニシテ總數ノ 64.70%ニ當リ、天津、濟南、北京等主ナル地方ナリ。其ノ他海峽殖民地、比律賓、露領亞細亞、英領印度等ニモ相當多クノ邦人在留シ夫々總數ノ 17.97% 15.24% 12.72% 2.82%ニ當ル。

歐洲ニハ本邦人ノ在留スル者少ク、英吉利ノ 1,577人(内倫敦 1,512人)最多ク、露西亞ノ 281人、佛蘭西ノ 229人之ニ次ク。葡萄牙ノ如キハ僅ニ三名ニ過キス。

「オセアニア」洲ニハ近來邦人ノ移住盛ニシテ濠洲ニ於テハ大正四年ニハ 2,292人ナリシモ、大正六年ニハ 4,152人ノ多キヲ示ス。又我民政地域タル南洋群島ニハ 699人ノ在留者ヲ見ル。又南米地方ノ移住盛ニシテ伯刺西爾ノ如キハ 18,259人ノ多キヲ示ス。秘露ノ 6,434人、亞爾然丁ノ 1,479人等其ノ主ナルモノナリ。在外邦人ヲ男女ニ別テハ男 286,337人女 164,310人女百ニ付男 174.4ニシテ男遙ニ多シ、前年ノ 179.1ニ比シ 4.7男ノ割合減少セルハ蓋シ東洋ニ於ケル賤業婦ノ増加並家族の出稼人ノ増加シタルニ因ルモノナランカ。

今之ヲ地方別ニ觀察スルニ所ニヨリ男女ノ割合ヲ異ニシ亞細亞洲ノ如キハ女百人ニ付男 123.3ニシテ家族の移住者ノ多キヲ知ラシム。之ニ反シテ歐洲ハ 575.5「オセアニア」洲ハ 158.9亞米利加ハ 300.9ニシテ歐洲ノ如キハ女一人ニ付男數人ノ割合ナリ、之多クハ商業、研學又ハ觀察等ノ者多ク亞細亞地方ニ於ケル移住者ト全ク其ノ趣ヲ異ニス。又佛領及英領印度ノ如キハ却テ女子ノ方多ク其ノ割合女百ニ付男ハ 30.1及 80.9ナリ。其ノ他亞細亞地方ニ於テハ多クハ男ノ割合平均以下ニシテ露領亞細亞ハ 109.2滿洲ハ 116.3香港ハ 125.7支那本部ハ 125.8海峽殖民地ハ 136.6等ナリ、只「シヤム」ノ 22.6ノミ平均ヲ超過セリ。

在外邦人ヲ職業別ニ觀察スルニ大體ニ於テ東洋各地ニ在ル者ハ商工業及雜業ニ從事スル者多ク、米國、布哇方面ニアル者ハ農業、

IV. 農

【作付反別】 大正六年ノ稻ノ作付反別ハ 3,083,595町ニシテ此ノ中 95.74%ハ水稻 4.26%ハ陸稻ナリ。又水稻中ノ 91.21%ハ粳、8.79%ハ糯ニ屬ス。水稻ノ作付反別ヲ同年首ノ田ノ總反別ニ比スルニ、其ノ 92.85%ニ當レリ。大正二年ニ終ル五年平均ノ稻ノ作付反別ヲ百ト爲シ本年ノ各指數ヲ求ムルニ、粳ハ 102.9糯ハ 99.8、陸稻ハ 129.7ニ當リ、糯ノミ少シク減少シ、粳ト陸稻トハ増加セリ、就中陸稻ノ作付著シク増加セルハ、概シテ新田ヨリモ新畑

歐洲ニ在ル者ハ公務自由業ニ從事スル者多キハ例年ト異ルトコロナシ。今各性職業大分類ノ分節比例ヲ探レハ露領亞細亞ニ於テハ工業者最多ク總數ノ 400%ヲ示ム、安東龍井村附近ハ雜業最多ニシテ 448%、關東洲及營口、遼陽、奉天附近北京、天津附近並青島、上海南京方面等ハ何レモ雜業者多ク夫々 380%、406%、536%、466%、592%ニシテ各地共邦人在留者ノ約半數ヲ占ムル所多シ、然レトモ長春吉林方面芝罘、龍口地方ハ商業ニ從事スル者多ク邦人在留者總數ノ 598%及556%ニ當ル。又福州廈門方面ハ工業者多ク 541%ヲ占ム。是皆各地方ノ經濟狀態ヲ語ルモノト謂フヘシ。次ニ馬來半島ハ農業者多ク 390%ニシテ商業者ハ 243%ナリ、農業者ハ殆護謨栽培業者ニシテ商業者ハ雜貨商、會社員、料理店等主ナルモノナリ。比律賓群島ニハ農業者第一位ヲ占メ 544%ニ當ル。其ノ他土木建築業及漁業ニ從事スル者又少カラズ布哇ハ雜業及農業ニ從事スル者夫々 500%、357%ナリ。濠洲ハ近時在留者ノ數ヲ増シ工業者第一位ニシテ農業者之ニ次ク。女ノ職業ニ在リテハ何レノ地方ニ於テモ賤業婦又ハ家族ノ者最大數ヲ占ム。

【在留外國人】 大正六年末調査ノ本邦在留外國人ハ戶數 6,475戶、男 14,219人、女 6,362人計 20,581人、内地人三千人ニ付約外國人一人ノ割合トナル。此ノ外國人ハ大正二年ニ最多數トナリ同三年及四年ト漸次減少シ同五年ヨリ再増加シ來ル。神奈川縣内ニアル者最多ク 6,588人東京、兵庫ハ伯仲ノ間ニ在リテ夫々 4,622人 4,618人ナリ。其ノ他千人以上在留スル府縣ハ大阪ノ 1,229人長崎ノ 1,173人ナリ。埼玉ノ 5人茨城、栃木、岐阜、奈良、鳥根ノ各 7人ハ最小ノ地方ナリ。此ヲ國別ニスレハ支那人最多ク男 10,429人女 3,326人、英吉利人ハ第二位ニシテ男 1,296人女 1,049人、米國人ハ男 871人女 872人第三位ヲ占ム。其ノ他獨逸ノ 650人ニ減シタルハ時局ノ爲ナルヘク佛人ハ 443人露人ハ 439人伊太利人ハ 69人在留セリ。

更ニ之ヲ職業別ニ見ルトキハ商業者最多ク、學生生徒之ニ次ク而シテ漁業及製鹽業ニ從事スル者最少ク農業又少シ。

業

ノ開發多キニ由ルモノナラン。

大正六年ノ麥類ノ作付反別ハ大麥 536,727町、裸麥 641,798町、小麥 568,261町ニシテ、大麥ノ作付ハ漸次減少ノ傾向アリ、裸麥ハ増減不定ナレトモ近クハ減少シ、小麥ノ逐年々増加セリ。大正二年ニ終ル五年平均ヲ百ト爲シ本年ノ各指數ヲ求ムルニ、大麥ハ 84.4、裸麥ハ 93.5、小麥ハ 118.5ニ當レリ。小麥ノ作付ノ斯ク増加スルハ最近其ノ需用著シク増加シタルニ由ルモノナルヘク、大麥

裸麥ノ作付減シタルハ其ノ理由詳カナラサレトモ、近年穀肥ノ裏作多キヲ加フルコトモ一原因ナルヘク、又農家ノ生活徒ラニ向上シ、麥食ニ代フルニ米食ヲ以テスル者漸ク多キニ至レルコトモ其ノ一原因ナラストセス。

米麥以外ノ主要農産物ノ作付反別ハ大正五年ノ事實ヲ掲ク、而シテ之ヲ大正二年ニ終ル五年平均ニ比スルニ、黍、玉蜀黍、甘藷、馬鈴薯ハ増加シ、大豆、小豆、粟、稗、蕎麥ハ減少セリ。就中馬鈴薯ノ作付ハ著シク増加ス。又特用農作物ニ於テハ、菜種ハ減少シ、葉煙草ハ増加セリ。次ニ大正六年ノ桑ト茶トノ作付反別ヲ見ルニ、茶ハ 48,530町ニシテ漸次減少ノ傾向アリ、桑ハ 486,786町ニシテ年々ノ増加著シ。大正二年ニ終ル五年平均ヲ百ト爲シタル指數ヲ求ムルニ、茶ハ 98.9ニ當リ桑ハ 109.2ニ當レリ。桑ノ作付ノ増加ハ寧ロ當然ノコトナレトモ、茶ノ作付ノ減少ハ、製茶高ノ年々増加シ、其ノ輸出量亦敢テ減セサルニ反スル奇異ノ現象ナリ。或ハ思フ、今ヤ製茶業ハ専門的ト爲リ、從テ非専門的茶園ハ漸次他ノ農作ニ供用セラレ、作付反別ノ全體トシテハ寧ロ減少セルニモ拘ラス、専門的ノ所産ハ却テ増加スルモノニアラサルカ。

上記主要農作物ノ反別ヲ地方別ニ見ルニ、各地方ノ耕地面積ニ廣狭ノ不同アルカ故ニ素ヨリ正シキ比較ニアラサレトモ、稻ハ新潟縣最多ク、茨城、千葉ノ二縣之ニ次キ、福岡、愛知、兵庫ノ三縣又次テ多シ。但陸稻ノ作付ハ茨城縣最多ク、愛知、栃木、鹿兒島ノ三縣次テ多シ。大麥ハ埼玉縣最多ク、茨城、千葉二縣之ニ次キ、栃木、群馬、岩手ノ三縣又次テ多シ。裸麥ハ熊本縣最多ク、福岡縣之ニ次キ、山口、愛媛、廣島、兵庫、鹿兒島、大分ノ諸縣亦多シ。小麥ハ茨城縣最多ク福岡縣之ニ次キ、栃木、群馬、熊本、埼玉ノ諸縣又次テ多シ。大豆ハ北海道最多ク茨城縣之ニ次キ、岩手、埼玉、宮城、新潟ノ四縣又次テ多シ。小豆ハ北海道最多ク、新潟、長野ノ二縣次テ多ク。埼玉、茨城、福島、岩手ノ四縣モ亦多シ。粟ハ熊本、鹿兒島ノ二縣最多ク、岩手縣之ニ次キ、青森、大分、長崎ノ三縣又次テ多シ。稗ハ岩手縣最多ク、青森縣之ニ次キ、北海道及岐阜縣亦多シ。黍ハ北海道最多ク、愛知、岐阜ノ二縣次テ多シ。蕎麥ハ北海道最多ク、鹿兒島縣之ニ次キ、青森、宮崎、茨城、岩手ノ諸縣亦多シ。玉蜀黍ハ北海道最多ク、遼ニ下リテ愛媛、高知、熊本ノ三縣ニ多シ。甘藷ハ鹿兒島縣最多ク、沖繩、長崎ノ二縣次テ多ク、熊本、千葉、埼玉、愛媛ノ諸縣ニ多シ。馬鈴薯ハ北海道頗ル多ク、遼ニ下リテ青森、福島、宮城、岩手ノ諸縣ニ多シ。菜種ハ北海道及福岡縣ニ最多ク、鹿兒島、三重、滋賀ノ三縣次テ多シ。葉煙草ハ茨城、鹿兒島、栃木ノ三縣最多ク、福島縣之ニ次キ、岡山、徳島、神奈川、廣島ノ諸縣又次テ多シ。桑ハ長野縣最多ク、福島、群馬ノ二縣之ニ次キ、埼玉、愛知、山形、岐阜、山

梨、岩手、宮城、茨城ノ諸縣亦多シ。茶ハ静岡縣最多ク、遼ニ下リテ鹿兒島、熊本、三重、茨城ノ諸縣及京都府亦多シ。

【收穫高】 大正六年ノ米ノ收穫高ハ 5,456萬石ニシテ之ヲ別テハ粳米 4,900萬石、糯米 443萬石、陸米 113萬石ナリ。此ノ收穫高ヲ稻ノ作付反別ニ比スルニ、粳米ハ一反ニ付 1石 8斗 8升糯米ハ同 1石 7斗 1升陸米ハ同 0石 8斗 6升ニシテ米總體ハ 1石 7斗 7升ニ當レリ。此ノ收穫比例ハ前年ノ豐穰ニ比シテハ粳米 6升糯米 1斗 0升陸米 3斗 5升總米 1斗 3升ヲ減シタルトモ、而モ尙大正二年ニ終ル五年平均ニ比シテハ粳米ハ 1斗 5升糯米ハ 1斗 9升ヲ増シ、陸米ノミ 1斗 1升ヲ減シ、總米ハ 8升ヲ増セリ。故ニ本年ハ全國ヲ通シテハ敢テ豐作ニハアラサレトモ、亦必スシモ凶作ナリト言フ能ハザリキ。又此ノ一反當リ收穫高ヲ地方別ニ見ルニ、奈良縣ノ 3石 3斗 3升最高ク、香川縣ノ 2石 2斗 6升之ニ次キ、鳥取縣ノ 2石 1斗 9升富山縣ノ 2石 1斗 8升宮城縣ノ 2石 1斗 4升兵庫縣ノ 2石 1斗 3升佐賀縣ノ 2石 1斗 2升滋賀縣ノ 2石 1斗 0升石川縣ノ 2石 08升山形縣ノ 2石 05升福井縣ノ 2石 04升大阪府ノ 2石 02升愛媛縣及岩手縣ノ共ニ 2石 01升等ヲ高シト爲ス。又最低キハ沖繩縣ノ 1石 08升ニシテ、茨城縣ノ 1石 2斗 7升東京府及北海道ノ共ニ 1石 2斗 8升之ニ次キ、其ノ他神奈川縣ノ 1石 4斗 1升秋田縣ノ 1石 4斗 2升千葉縣ノ 1石 4斗 5升埼玉縣及鹿兒島縣ノ共ニ 1石 4斗 9升等其ノ低キモノナリ。而シテ是等ノ地方別收穫高ハ之ヲ前年ニ比スルニ大部分ハ減收ニシテ、唯十地方ノミ增收セリ。就中著シキ增收ハ石川縣ノ 5斗 3升岩手縣ノ 3斗 2升宮城縣ノ 2斗 8升ニシテ、其ノ他增收セルハ富山、福島、鳥取、栃木、長野、沖繩、群馬ノ七縣ナリ。減收セル地方ノ中最著シキハ徳島縣ノ 4斗 9升和歌山縣ノ 3斗 8升静岡縣ノ 3斗 6升ニシテ、其ノ他三十四府縣皆盡ク減收セサルハ無シ、而シテ上記ノ如ク主トシテ北陸及東北ノ諸縣ノミ增收シ、他ノ大部分ノ減收ヲ見タル所以ノモノハ、本年ノ氣象上夏期ノ氣温ニ著明ナル變調アリタルニ由ルモノナルヘシ。(氣象ノ部參照)

大正六年ノ麥ノ收穫高ハ大麥 917萬石、裸麥 820萬石、小麥 679萬石ニシテ、之カ作付一反當ハ大麥 1石 7斗 1升裸麥 1石 2斗 8升小麥 1石 1斗 9升ニ當リ、之ヲ大正二年ニ終ル五年平均ニ比スルニ大麥ハ 1斗 3升裸麥ハ 1斗 4升小麥ハ 1斗 7升ノ增收ニシテ、前年ニ比スルモ亦大麥ハ 3升裸麥ハ 1斗 2升小麥ハ 8升ノ增收ナリ。故ニ本年ノ麥作ハ平年以上ノ豐作ナリシカ如シ。此一反當ヲ地方別ニ見ルニ大麥ハ宮城縣ノ 2石 2斗 7升最高ク、埼玉縣ノ 2石 2斗 6升之ニ次キ、大阪府ノ 2石 1斗 2升神奈川縣ノ 2石 08升茨城縣ノ 2石 06升群馬縣及東京府ノ共ニ 2石 03升栃木縣ノ 2石 02升等其ノ高キモノニ屬シ、又最低キハ沖繩縣ノ 4斗 5升ニシテ、

秋田縣ノ8斗1升新潟縣ノ8斗5升鹿兒島縣ノ9斗3升島根縣ノ9斗6升北海道ノ9斗7升山形縣ノ9斗9升等低キモノニ屬ス。稗麥ハ宮城縣ノ1石7斗8升最高ク、香川縣ノ1石6斗7升之ニ次キ、千葉縣ノ1石6斗3升埼玉群馬二縣ノ共ニ1石6斗1升栃木德島二縣ノ共ニ1石5斗9升東京府長野縣ノ共ニ1石5斗1升山梨廣島二縣ノ1石5斗等ヲ高シト爲シ、最低キハ秋田縣ノ5斗6升ニシテ、新潟沖繩二縣ノ共ニ6斗7升山形縣ノ8斗2升青森縣ノ8斗3升鹿兒島縣ノ8斗8升福井縣ノ8斗9升等ヲ低シト爲ス。又小麥ハ香川縣ノ1石5斗8升最高ク、廣島縣ノ1石5斗5升之ニ次キ、兵庫縣奈良縣ノ共ニ1石4斗4升宮城縣ノ1石4斗1升福岡縣ノ1石3斗5升千葉德島二縣ノ共ニ1石3斗4升長崎縣ノ1石3斗2升等ヲ高シト爲シ、沖繩縣ノ4斗3升最低ク、秋田縣ノ4斗8升之ニ次キ、新潟縣ノ5斗9升山形縣ノ6斗2升島根縣ノ7斗3升等ヲ低シト爲ス。是等地方別ノ收穫歩合ヲ前年ニ比スルニ、大麥ハ多少ニモセヨ前年ヨリ增收アリタル地方二十府縣アリ、九州各地東海各地ヲ其主ナルモノト爲シ、減收シタル地方二十二地方アリ、裏日本ノ各地、東山道ノ春椎地方、東北ノ中青森岩手ヲ除キタル各縣及四國之ニ屬シ、増減ナキ地方五縣アリタリ。稗麥ハ增收二十六地方、減收十八地方、増減無シ三地方ニシテ略大麥ニ似タレトモ彼ニ在リテ減收ナリシ四國地方ハ是ニ在リテ增收ナリシナ異ナリトス。小麥ハ增收三十二地方、減收十四地方、増減ナシ一地方ニシテ、九州、四國、中國、東海、關東ハ概ネ增收ニシテ裏日本ニモ亦增收ノ地方多カリキ。

次ニ大正五年ノ事實ニ依リテ、米麥以外ノ農産物ノ收穫高ナ見ルニ、大豆ハ375萬石ニシテ其ノ作付一反當ハ8斗0升ニ當リ前年ニ比シ1升ノ增收ニ當ル、大豆ハ香川縣最豐收ニシテ一反當1石3斗1升ヲ得、奈良縣ノ1石2斗3升大阪府ノ1石2斗2升次テ高シ。小豆ハ總收穫89萬石弱ニシテ、其作付一反當ハ6斗7升ニ當リ、五年平均ヨリ4升増シタレトモ前年ヨリ6升ナ減シタリ。粟ハ總收穫218萬石ニシテ、其ノ一反當ハ前年ヨリ1斗0升ヲ増シタル1石3斗3升ナリ。稗ハ總收穫82萬石ニシテ、一反當1石5斗3升ヲ得、之ヲ前年ニ比スレハ4升ヲ減シタリ。黍ハ45萬石ノ收穫アリ、其ノ一反當ハ1石3斗4升ニ當リ、前年ニ比シテ1斗4升ヲ增收シ、既往始テ見ル增收ナリキ。蕎麥ハ總收穫117萬石ニシテ、其一反當ハ7斗9升ニ當リ、前年ニ比シテハ2升ノ減少ナレトモ、大正二年ニ終ル五年平均ニ比スレハ反對ニ2升ノ增收ナリ。玉蜀黍ハ總收穫77萬石ニシテ、其一反當ハ1石3斗0升前年ニ比シ4升減收シタリ。甘藷ハ總收穫1,092百萬貫ニシテ、其ノ一反當ハ352貫、之ヲ前年ニ比シ9貫、五年平均ニ比シ32貫ノ增收ニ當リ、既往ニ

多ク見サル豐作ナリ。一反當收穫高ヲ地方別ニ見ルニ静岡縣ノ489貫、最高ク、愛知縣ノ450貫、沖繩縣ノ444貫、山梨縣ノ415貫、岐阜縣ノ411貫、長崎縣ノ407貫群馬縣ノ401貫等其ノ高キモノニ屬セリ。馬鈴薯ハ總收穫280百萬貫ニシテ、一反當271貫ヲ得、前年ニ比シテハ7貫減收ナレトモ、五年平均ヨリ高キコト11貫ナリ。菜種ハ87萬石ノ總收穫アリ、作付一反當ハ7斗3升ニシテ、前年ニ比シ1升ノ增收ナレトモ、之ヲ五年平均ニ比スレハ1升ノ減收ナリ。葉煙草ハ總收穫1,278萬貫ニシテ、其ノ一反當ハ44貫ニ當リ、前年ニ比シテハ1貫餘、五年平均ニ比シテハ6貫弱ノ增收ヲ見タリ。即知ル葉煙草ハ一年一年毎ニ增收ノ好況ニ在ルコトヲ而シテ此一反當收穫ヲ地方別ニ見ルニ、静岡縣ノ75貫最高ク、京都府ノ72貫福井縣ノ71貫德島縣ノ61貫等ナ高シト爲ス。

以上ノ農産物ニ就テ各多産地ヲ舉クレハ、粳米ハ新潟縣最多ク全國總產額ノ約53%ヲ占メ、兵庫縣之ニ次キ約49%、其ノ他福岡縣ノ約41%、山形縣ノ約35%宮城愛知二縣ノ共ニ約33%ナルヲ多シト爲ス。糯米モ亦新潟縣最多ク全國總產額ノ約58%ニ當リ、之ニ次クハ福岡縣ノ約42%、其ノ他宮城縣ノ約39%福島縣ノ約37%富山兵庫二縣ノ共ニ約35%等ヲ多産地ト爲ス。陸米ハ關東ト九州トニ多ク、栃木縣ノ約175%茨城縣ノ約149%鹿兒島縣ノ約125%宮崎縣ノ約76%熊本縣ノ約73%等最多産地タリ。大麥ハ關東ト東北トニ多産シ、埼玉縣ノ約114%茨城縣ノ約96%千葉縣ノ約69%栃木縣ノ約62%群馬縣ノ約60%ニ次テ宮城縣ノ約53%岩手縣ノ約50%等アリ。稗麥ハ主トシテ西南地方ニ多ク産シ、熊本縣ノ約92%廣島縣ノ約72%愛媛縣ノ約67%福岡縣ノ約64%兵庫縣ノ約60%德島縣ノ約57%等ヲ最多ト爲ス。小麥ハ茨城縣ノ約91%ヲ最多トシ、福岡縣ノ約67%之ニ次キ、其ノ他群馬岡山二縣ノ共ニ約52%埼玉縣ノ約51%熊本縣ノ約50%等アリテ、多産地ハ必スシモ偏メス。大豆ハ北海道殆ト全國總產額ノ五分一ヲ占メ約197%ニ當リ、其ノ他ハ茨城縣ノ約63%岩手縣ノ約52%熊本縣ノ約45%宮城縣ノ約42%等ヲ多産地ト爲ス。小豆ハ大豆ヨリモ一層比例高ク北海道ニ多産シ約381%ニ當リ全國總產額ノ三分一ヲ超ユ、其ノ他ハ著明ナル多産地殆ト無ク熊本縣ノ約56%茨城縣ノ約34%ヲ最多ト爲ス。粟ハ熊本縣ノ約265%最多ク全國總產額ノ四分一以上ヲ占メ、鹿兒島縣ノ約175%之ニ次キ、長崎縣ノ約54%大分縣ノ約50%等ヲ多シト爲シ、主トシテ九州ニ多産ス。稗ハ岩手縣ノ約336%最多ク、青森縣ノ約148%之ニ次キ、其ノ他北海道ノ約92%、栃木縣ノ約71%、長野縣ノ約59%等ヲ多シト爲シ、是ハ又東北地方ヲ多産地トス。黍ハ過半北海道ニ産シ其ノ全國產額ニ對スル約611%トシ、之ニ次クハ愛知縣ノ約43%東京府ノ約31%トス。蕎麥ハ北海道ノ約184%鹿兒島縣ノ約87

%ヲ最多トシ、此ノ他ニ著シキ多産地ヲ見ス。玉蜀黍モ亦北海道ノ約448%ヲ最多トシ殆ト二分一ニ近ク、之ニ次ク愛媛縣ハ約85%、更ニ次ク高知縣ハ約66%ナリ。甘藷ハ鹿兒島縣ノ約139%沖繩縣ノ約123%ヲ最多トシ、長崎縣ノ約92%熊本縣ノ約59%等九州ニ多産シ、之ニ次ク關東ニ最多キハ千葉縣ノ約55%ナリ。馬鈴薯ハ北海道ニ多産シ約605%ヲ占メ、之ニ次ク青森縣ハ約54%ナルノミ。菜種ハ福岡縣ノ約151%ヲ最多トシ、北海道ノ約136%之ニ次キ、其ノ他鹿兒島縣ノ約106%三重縣ノ約81%滋賀縣ノ約73%等ヲ多産地ト爲ス。葉煙草ハ栃木縣ノ約155%茨城縣ノ約152%ヲ最多トシ、鹿兒島縣ノ約133%德島縣ノ約80%福島縣ノ約59%神奈川縣ノ約57%、岡山縣ノ約56%等ヲ多産地ト爲ス。

歐洲大戰前ニ於ケル各國ノ農産統計ヲ見ルニ、小麥ノ產額ハ歐洲露西亞及高加索(1913年)ノ2,280萬噸最多ク、其ノ作付一畝ノ平均收穫高ハ910担ナリ(竈ハ「ヘクター」ノ略字ニシテ我約一町餘ニ當リ、担ハ「キログラム」ノ略字ニシテ我約267匁ニ當ル)。之ニ次クハ北米合衆國(1913年)ノ2,078萬噸、作付一畝ノ平均收穫1,020担、其ノ他佛蘭西(1912年)ハ910萬噸(一畝平均收穫1,380担)、加奈太(1913年)631萬噸(一畝ニ付1,410担)、伊太利(1913年)584萬噸(一畝1,220担)、亞爾然丁(1912-13年)540萬噸(一畝780担)、獨逸(1913年)466萬噸(一畝2,360担)、匈牙利(1913年)455萬噸(一畝1,280担)等ヲ多シト爲ス。又大麥ハ歐洲露西亞及高加索ノ1,214萬噸(一畝平均收穫990担)最多ク、北米合衆國ノ388萬噸(一畝1,280担)之ニ次キ、其ノ他獨逸ノ367萬噸(一畝2,220担)匈牙利ノ181萬噸(一畝1,440担)埃地利(1912年)171萬噸(一畝1,600担)西班牙(1912年)ノ181萬噸(一畝980担)等ヲ多シト爲ス。又稗麥ハ歐洲露西亞及高加索ノ2,469萬噸(一畝850担)最多ク、獨逸ノ1,222萬噸(一畝1,910担)之ニ次キ、其ノ他埃地利ノ297萬噸(一畝1,460担)匈牙利ノ134萬噸(一畝1,190担)北米合衆國ノ105萬噸(一畝1,020担)等多キモノニ屬ス。馬鈴薯ハ獨逸ノ5,412萬噸(一畝15,860担)最多ク、歐洲露西亞及高加索ノ3,469萬噸(一畝7,440担)之ニ次キ、其ノ他佛蘭西ノ1,503萬噸(一畝9,610担)埃地利ノ1,254萬噸(一畝10,020担)北米合衆國ノ902萬噸(一畝6,080担)匈牙利ノ597萬噸(一畝7,540担)愛爾蘭(1913年)380萬噸(一畝16,120担)等多キモノニ屬セリ、是等產額ノ多寡ハ其ノ國ノ廣袤ニ由リテ差アルコト勿論ナレトモ、此ノ斷片ノ數字モ亦其ノ國々ノ農業一斑ヲ推スル料ト爲スヘク、又一畝ニ對スル收穫ノ多寡ノ如キハ、其ノ國々ノ農業組織ニ應シテ素ヨリ一概ニ論スヘキモノニアラサレトモ、亦以テ自ラ省ミルノ料ト爲スヘシ。而シテ本邦ノ1913年ニ於ケル作付面積一畝ニ對スル收穫ハ、小麥1,440担、大麥1,910担、稗麥1,520担、馬鈴薯10,050担ナリト云

フ。(獨逸ノ計算ニ依ル)
 【養蠶】 大正六年中ノ養蠶戶數ハ1,860,004戶ニシテ、前年ニ比シ94,067戶ヲ増セリ。此ノ増加ハ前年ノ戶數百ニ對スル5.32%ニ當ル本年ノ養蠶戶數中春蠶飼養戶數ハ82.40%夏蠶飼養戶數ハ30.38%秋蠶飼養戶數ハ80.79%ナリ。是ニ謂フ養蠶戶數トハ春夏秋蠶ヲ通シテ、若クハ春蠶秋蠶ヲ、若クハ春蠶ノミ等兎モ角モ一季ニテモ養蠶ヲ爲シタル戶數ニシテ、春蠶飼養戶數トハ春蠶ノミ又ハ他季ノ養蠶ト共ニ春蠶ヲ飼養シタル戶數ノ謂ヒニシテ、他ノ夏蠶飼養戶數秋蠶飼養戶數モ亦同シ。故ニ大正六年ニハ養蠶戶數中17.60%ハ春蠶ヲ飼養セサリシモノ、69.62%ハ夏蠶ヲ、19.21%秋蠶ヲ飼養セサリシモノタリ。而シテ上記ノ各季蠶飼養戶數ノ比例ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ、春蠶飼養戶數ハ2.20%ヲ減シ、夏蠶飼養戶數ハ0.48%ヲ増シ、秋蠶飼養戶數モ4.79%増シタリ。斯ク言ハ、春蠶飼養戶數ノ減少セルカ如キモ、實數ニ於テハ是モ亦増加セルナリ、唯隆々トシテ増加シツ、アル總養蠶戶數ノ増加ニ比シテハ其ノ増加率ノ低キニ由リテ前年ノ歩合ヨリモ減シタルノミ。秋蠶飼養戶數ハ管テ甚タ振ハサリシカ、近年ニ至リテ其ノ増加著シク、年一年毎ニ其ノ歩武ヲ大ニシ今ヤ春蠶ノ揚ヲ摩セントス、是注意シテ見ルヘキ事實ナリ。

養蠶戶數ヲ地方別ニ見ルニ、總養蠶戶數ニ於テハ、長野縣最多ク全國總養蠶戶數ノ約87%ヲ占メ、埼玉縣之ニ次テ約56%、愛知縣ハ約55%岐阜縣及福島縣ノ共ニ約48%、群馬縣ハ約43%茨城縣ハ約36%、三重縣及静岡縣ノ共ニ約33%、山梨縣ハ約32%、新潟縣ハ約31%ニシテ多キモノニ屬ス。春蠶飼養戶數ハ長野縣最多ク全國ノ春蠶飼養戶數ノ總數ニ對スル約77%ニ當リ、埼玉縣ノ約62%愛知縣ノ約61%之ニ次キ、其ノ他群馬縣ノ約48%福島縣及岐阜縣ノ共ニ約47%、静岡縣及茨城縣ノ共ニ約38%、山梨縣ノ約36%、新潟縣ノ約35%等ヲ多シト爲ス。又夏蠶飼養戶數ハ長野縣ノ約192%ニ當リ全國總數ノ五分一弱ヲ占ムルヲ最多トシ、愛知縣之ニ次テ約124%ニ當リ、其ノ他岐阜縣ハ約82%福島縣約47%滋賀縣約46%山形縣約41%三重縣約37%高知縣約36%等ヲ多シト爲ス。秋蠶飼養戶數ハ長野縣約93%最多ク、愛知縣ノ約64%之ニ次キ、其ノ他埼玉縣ノ約57%群馬縣及岐阜縣ノ共ニ約51%福島縣ノ約48%、茨城縣ノ約38%三重縣ノ約35%静岡縣及山梨縣ノ共ニ約34%等ヲ多シト爲ス。以上通覽スルニ長野縣ノ全國ニ冠タル養蠶地タルハ春夏秋ノ各季ヲ通シテ第一位ニ居ルニ由リテ知ルヘク、之ニ次テ三季ヲ通シテ多キハ愛知、岐阜、福島ノ三縣タリ、埼玉、群馬、茨城ノ三縣モ亦著明ノ養蠶地ナレトモ春蠶秋蠶ノ飼養多クシテ夏蠶ノ飼養甚タ少ク、静岡山梨ノ二縣亦然リ、新潟縣ハ春蠶飼養ノミ多ク、三重縣ハ他縣トノ比較上春蠶飼養却テ少ク

シテ夏蠶秋蠶ノ飼養多シ、是各地ノ天然的關係ニモ依ル現象ナルヘキモ、亦因襲ノ然ラシムルモノアルニ依ルモノナラン。

大正六年ノ蠶種掃立枚數ハ合計 6,132,599枚ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 375,185枚ヲ増加シ、養蠶戸數一戸ニ付平均 3.3枚ニ當リ、前年ノ同一比例ト等位ナリ。此ノ掃立蠶種ヲ類別スレハ春蠶 46.00%、夏蠶 10.80%、秋蠶 43.20%ニ當リ、之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ春蠶ハ 3.70%ヲ増シ、夏蠶ハ 0.20%秋蠶ハ 3.50%ヲ減シタリ。更ニ本年ノ比例ヲ大正二年ニ終ル五年平均ノ同一比例ニ比スルニ、春蠶ハ 6.50%夏蠶ハ 2.30%ヲ減シ、秋蠶ノミ 8.80%増シタリ。然レハ秋蠶ノ増加ハ獨リ飼養戸數ノ増加スルノミナラス、蠶種ノ掃立枚數モ亦著シク増加セルヲ見ル。唯前年ニ比シテ本年ノ掃立ノ枚數ノ比較的增加セサル所以ノモノハ、本年ノ八月以後氣温劇變シタル爲自然掃立枚數ヲ斟酌シタルモノアリシニ由ルナルヘシ。

蠶種掃立總枚數ヲ地方別ニ見レハ、長野縣最多ク全國總枚數ノ約 155%ヲ占メ、群馬縣之ニ次キ約 95%ニ當リ、其ノ他埼玉縣ノ約 72%、愛知縣ノ約 68%福島縣ノ約 57%山梨縣ノ約 53%等ヲ多シト爲ス。又春蠶ノ掃立枚數ノミヲ見ルニ、茲ニモ長野縣ノ約 128%ヲ最多ト爲シ、群馬縣ノ約 108%之ニ次キ、其ノ他埼玉縣ノ約 84%、山梨縣ノ約 61%愛知縣ノ約 48%、茨城縣ノ約 44%、岐阜縣及静岡縣ノ共ニ約 36%ナルヲ多シト爲ス。秋蠶ノ掃立枚數ハ長野縣ノ約 137%ヲ最多トシ、群馬縣ノ約 103%之ニ次キ、其他愛知縣及埼玉縣ノ共ニ約 75%、山梨ノ約 54%、岐阜縣ノ約 48%、福島縣ノ約 46%、茨城縣ノ約 44%、静岡縣ノ約 43%等ヲ多シト爲ス。

【果實】 梅ハ大正五年ニ於テ 34萬石ヲ産シ、年々減收ノ傾向アリ。埼玉縣ニ最多産シ全國總産額ノ約 85%ヲ占メ、之ニ次クヲ神奈川、茨城、静岡、和歌山ノ諸縣ト爲ス。桃ハ大正五年ニ 1、

296萬貫ヲ産シ年々其ノ産額ヲ増加ス。岡山縣ノ全國産額ノ約 127%最多トシ、大阪府ノ約 94%之ニ次キ、其ノ他神奈川、福島、新潟ノ諸縣ニ多産ス。梨ハ大正五年ニ 2,464萬貫ヲ産シ、是亦近年著シク産額ヲ増加セリ。而シテ静岡縣ノ全國總額ノ約 86%ヲ最多トシ、之ニ次テ愛媛、奈良、新潟、茨城、福島ノ諸縣ニ多産ス。生柿ハ大正五年ニ 4,004萬貫ヲ産シ、前年ニ比シテ不作ナリシカ如シ。其ノ産額最多キハ福島縣ニシテ全國ノ約 75%ヲ占メ、其ノ他長野、新潟、鹿兒島、福岡、宮城、熊本等ノ諸縣ニ多産ス。干柿ハ大正五年ノ産額 216萬貫ニシテ前年ニ比シテ少シ。苹果ハ大正五年ノ産額 930萬貫ニシテ、前年ノ不作ナリシニ比シテ豊作ナリシカ如キモ、而モ前々年ニ比シテ減收ナリキ。其ノ最多キハ青森縣ニシテ全國總産額ノ約 641%ニ當ル。北海道ハ之ニ次ケトモ約 158%ニシテ適ニ少ク、宮城、長野、山形等ニモ稍多産ス。葡萄ハ大正五年ノ産額 498萬貫ニシテ、近ク年一年毎ニ増收セリ。山梨縣最多ク全國産額ノ約 158%ヲ占メ、長野縣之ニ次キ約 100%、其ノ他岡山、新潟、千葉、大阪ノ諸府縣ニ多産ス。柑橘類中蜜柑ハ大正五年ニ於テ 5,791萬貫ヲ産シ、年々著シキ増收ノ歩調ヲ緩メス。而シテ和歌山縣ノ全國産額ノ約 283%ナルヲ最多トシ、静岡縣ノ約 182%、大阪府ノ約 131%ナルモノ之ニ次キ、其ノ他大分、愛媛、愛知、廣島等ノ諸縣ニ多産ス。[ネーブルオレンジ]ハ大正五年ニ 295萬貫ヲ産シ、是亦年々増收スルコト著シ。而シテ廣島縣ノ約 188%愛媛和歌山二縣ノ共ニ約 128%ナルヲ最多トシ、其ノ他香川、静岡、徳島ノ諸縣ニ多産ス。夏橙ハ大正五年ノ産額 1,722萬貫ニシテ、前年ニ比シテ著ク増收セリ。其ノ産額最多キハ山口縣ノ全國總額ノ約 237%ニシテ、愛媛、和歌山、鹿兒島ノ三縣之ニ次テ多産ス。

V. 家畜及家禽

【家畜】 大正五年末現在ノ家畜ハ牛 1,342,900頭、馬 1,572,500頭、山羊 109,353頭、綿羊 3,370頭、豚 327,892頭ナリ。之ヲ同年末ノ乙種現住人口ニ比スルニ、其ノ千ニ付牛 24.32頭、馬 28.47頭、山羊 1.98頭、綿羊 0.06頭、豚 5.94頭ニ當ル。斯カル人口比例ヲ大戦前ノ歐洲一二國ニ就テ見ルニ、英吉利(1913年)ハ牛 156.17頭、馬 38.30頭、山羊不詳、綿羊 467.95頭、豚 57.42頭ニ當リ、佛蘭西(1912年)ハ牛 370.89頭、馬 81.26頭、山羊 35.52頭、綿羊 415.33頭、豚 174.12頭ニ當リ、獨逸(1912年)ハ牛 305.11頭、馬 68.38頭、山羊 51.56頭、綿羊 87.71頭、豚 331.44頭ニ當レリ。之ヲ本邦ニ比スルニ、英吉利ノ馬ノ頭數カ稍近キノミ、其ノ他凡テ格段ノ差アルヲ見ル、殊ニ佛蘭西、獨逸ノ牛、獨逸ノ豚、英吉利、佛

蘭西ノ綿羊ノ如キ、之ヲ同日ニ論スヘキモノニアラス、本邦畜産ノ振ハサル實ニ甚シト謂フヘシ。

又大正二年末ノ各畜ノ現在頭數ヲ百ト爲シタル本年ノ指數ヲ求ムルニ、牛ハ 96.71、馬ハ 99.31、豚ハ 105.77、山羊ハ 122.20、綿羊ハ 114.39ニ當リ、之ニ由リテ各畜ノ平均一年ノ増減歩合ヲ算出スルニ、牛ハ 1.10%馬ハ 0.23%ヲ減シ、豚ハ 1.92%、山羊ハ 7.40%綿羊ハ 4.80%ヲ増セルコト、爲ル。山羊、綿羊ノ如キ其ノ原數ノ甚低キモノハ少許ノ増減モ比例數トシテ反應スルコト著シキカ故ニ措テ問ハス、上記ノ人口比例ノ比較ニ於テモ、亦此ノ増減歩合ニ於テモ主要家畜ナル牛ト馬ハ共ニ減少ノ歩調ヲ取り、近クハ豚モ亦減少ノ傾向ヲ現セリ。原數既ニ甚低クシテ而モ今日早クモ家畜

減少ノ兆ヲ形露ス、是決シテ等閑ニ見ルヘカラサル重要ノ事實ナリトス。

【家禽】 大正五年末現在ノ家禽ハ鶏 26,059,823羽、鶯 389,632羽ナリ。之ヲ同年末ノ乙種現住人口ニ比スルニ、其ノ千ニ付鶏 471.89羽、鶯 7.06羽ニ當ル。此ノ人口比例ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ鶏ハ 52.23ヲ鶯ハ 0.23ヲ高メタリ又大正二年ニ於ケル各畜ノ現在數ヲ百ト爲シタル本年ノ指數ヲ求ムルニ、鶏ハ 136.07鶯ハ 116.95ニ當リ、之ニ由リテ各畜ノ平均一年ノ増減歩合ヲ算出スルニ、鶏ハ 12.02%鶯ハ 5.65%ヲ増セル割合ナリ。

大正五年末現在ノ家畜及家禽ヲ地方別ニ見ルニ、牛ノ最多キハ廣島、岡山二縣ニシテ、兵庫縣之ニ次キ、大分、鹿兒島、長崎、山口、熊本ノ諸縣モ亦多ク、馬ハ北海道最多ク、鹿兒島縣之ニ次キ、熊本、岩手、福島、宮崎、秋田ノ諸縣モ亦多ク、山羊ハ沖繩縣最多ク全國總數ノ約四分ノ三ヲ占メ、鹿兒島縣、長崎縣之ニ次テ稍多ク、綿羊ハ諸官廳飼養最多ク、其ノ他ハ鹿兒島縣、栃木縣及北海道伯仲シテ多ク、豚ハ沖繩縣最多ク、鹿兒島縣之ニ次キ、其ノ他神奈川、千葉、茨城、静岡、埼玉ノ諸縣ニ多ク、鶏ハ千葉縣最多ク、愛知、鹿兒島ノ二縣之ニ次キ、茨城縣、北海道、福岡縣、秋田縣等ニ多ク、鶯ハ奈良縣最多ク、千葉縣之ニ次キ、新潟、埼玉、京都、兵庫等ノ府縣ニ多シ。

【牛】 大正五年末現在ノ牛ヲ細觀スルニ、牝 908,445頭牡 439,545頭ニシテ、牝百ニ付牡 48.65ニ當ル。上記歐洲三國ノ事實ニ依レハ、獨逸ノミハ、牝百ニ付牡 84.41ニ當リ、牡少ナケレトモ、佛蘭西ハ此ノ比例 102.77、英吉利ハ 152.47ニシテ共ニ牡多シ。本邦牛畜ノ牡少キ所以ノモノハ蓋シ一特徴ニシテ、是食用牛飼養ノ甚々振ハサルニ因スルモノナラサルカ、尙攷フヘキナリ、而シテ此ノ牝牡ノ關係ヲ既往ニ照スニ、本年ノ比例ハ前年ノ比例ヨリ低キコト 1.24又大正二年ノ同一比例ヨリ低キコト 2.62ナリ。然レハ本邦牛畜ノ牡少キコト年毎ニ著シキニ至ルヲ見ル、是一面ニハ食用ノ爲屠殺スルモノ多キヲ加フルニモ拘ハラズ蕃殖之ニ伴ハサルト、他ノ一面ニハ酪農漸ク發達シテ乳牛ノ飼養増多スルトニ由ルモノナラン。

大正五年末現在ノ牛ヲ種類別スレハ、内國種 908,513頭、雜種 418,817頭、外國種 15,660頭ニシテ、之ヲ分節比例ト爲セハ内國種 67.65%雜種 31.19%外國種 1.16%ニ當ル。此ノ分節比例ヲ既往ニ比スルニ、内國種ハ前年ヨリ 0.06%大正二年ヨリ 3.39%高ク、雜種ハ前年ヨリ 0.03%大正二年ヨリ 2.67%低ク、外國種ハ前年ヨリ 0.03%大正二年ヨリ 0.72%低シ。即知ル外國種ト雜種ト漸次減少シ、内國種ノミ増加スルコトヲ。又種牝牛ハ大正五年末現在 6,263頭ニシテ、前年マテハ年々増加シ來リシカ、本年ハ 170頭減少セリ

此ノ種牝牛ヲ種類別分節比例ト爲セハ、内國種 45.28%雜種 18.44%外國種 36.28%ニ當ル、之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ、内國種ハ 1.57%外國種ハ 2.87%増加シ、雜種ノミ 4.44%減少セリ。又大正五年末現在ノ乳牛ハ 55,130頭ニシテ前年ニ比シ 1,564頭ヲ増セリ、即其ノ増加ノ著明ナルヲ見ルヘシ。

次ニ牛ノ動態ヲ見ルニ、大正五年中ノ出産數ハ 192,485頭ニシテ之ヲ年末現在牛ノ總數ニ比スレハ其ノ百ニ付 14.33ニ當リ、前年ヨリ高キコト 0.08ナリ。又之ヲ年末ノ牝牛數ニ比スレハ其ノ百ニ付 21.31ニ當リ、前年ヨリ低キコト 0.05ナリ。然レハ出産比例ハ大體ニ於テ大差ナシト見ルヘキカ。又大正五年中ノ斃死數ハ 15,718頭ニシテ屠殺數ハ 341,307頭アリ、之ヲ年末現在牛ニ比スルニ其ノ百ニ付斃死 1.17、屠殺 25.41ニ當リ、此ノ兩者ヲ合スレハ 26.58ト爲リ、出産比例ヲ超ユルコト 12.24ノ大ナルモノアリ。斯ノ如キハ既往ノ各年概ニ相似ナリ。

【馬】 大正五年末現在ノ馬ヲ細觀スルニ、其ノ牝ハ 883,755頭牡ハ 639,239頭(牝牡不明ヲ除ク)ニシテ、牝百ニ付牡 72.33ニ當ル。此ノ牝牡ノ關係ヲ既往ニ照スニ、本年ノ比例ハ前年ノ比例ヨリ低キコト 0.46、又大正二年ノ同一比例ヨリ低キコト 0.24ナリ。然レハ本邦ノ馬匹ハ一般ニ牝多ク牡少ク、而シテ年々牝ノ多キ割合ヲ高ムルモノ、如シ、但シ其ノ差ハ牛畜ニ於ケルカ如ク甚シカラス。

大正五年末現在ノ馬ヲ種類別(種類不明ヲ除ク)スレハ、内國種 803,135頭、雜種 704,582頭外國種 15,257頭ニシテ、之ヲ分節比例ト爲セハ内國種 52.73%、雜種 46.27%外國種 1.00%ニ當リ、之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ、内國種 3.87%外國種 0.09%ヲ減シ、雜種 3.96%ヲ増セリ。又種牝馬ハ大正五年末現在 5,302頭ニシテ、近年漸次減少ノ傾向アリ、本年モ亦前年ヨリ少キコト 53頭ナリ。此ノ種牝馬ヲ種類別ト爲セハ、内國種 1.23%雜種 48.23%外國種 50.54%ニ當リ、之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ、内國種ハ 0.11%外國種ハ 2.01%ヲ増シ、雜種ハ 2.12%ヲ減シタリ。

次ニ馬ノ動態ヲ見ルニ、大正五年中ノ出産數ハ 119,262頭ニシテ、之ヲ年末現在馬ノ總數ニ比スルニ其ノ百ニ付 7.58ニ當リ、前年ヨリ高キコト 0.08ナリ、又之ヲ年末ノ牝馬數ニ比スルニ、其ノ百ニ付 13.49ニ當リ、是亦前年ニ比シ 0.11ヲ高メタリ。大正五年中ノ馬ノ斃死數ハ 32,716頭屠殺數ハ 80,862頭ニシテ、之ヲ年末現在馬ノ總數ニ比スルニ、其ノ百ニ付斃死 2.08屠殺 5.14ニ當リ、此ノ兩者ヲ合スレハ 7.22ト爲リ、生産比例ヨリ低キコト 0.36ニ該當シ、即馬ハ其ノ百ニ付一ヶ年 0.36%ノ自然増加歩合ヲ有セリ。

【牛乳】 大正五年末現在ノ搾乳場ハ 5,591箇所ニシテ、之ニ飼養スル成牛乳牛ハ 44,791頭ナリ。此ノ搾乳場ニ於テ大正五年中

ニ搾取セル乳量ハ 208,091石ニシテ、其ノ價額ハ 8,057,138圓トス。此ノ事實ニ依リ成牛乳牛ノ平均三分一カ泌乳期ニ在ルモノトスレハ、一頭ノ一日平均泌乳量ハ 5升6合5勺ニ當リ、一搾乳場ノ一日平均搾取乳量ハ 1斗 5升 1合ナルノミ。

【屠畜】 大正五年末現在ノ屠場ハ 531箇所ニシテ、前年ヨリ増加スルコト 4箇所ナリ。此ノ屠場ニ於テ食用ノ目的ヲ以テ屠殺セルハ、成牛 328,879頭、犢 12,428頭、馬 80,862頭豚 281,51

VI. 山林及狩獵

【森林及原野】 大正四年末森林ノ總反別ハ 1,864萬町ニシテ、之ヲ全國ノ總面積ニ比スレハ 48.34%ニ當ル。又原野ノ總反別ハ 364萬町ニシテ、總面積ノ 9.44%ニ當レリ。斯ノ如ク森林ニ富メル邦國果シテ何處ニカアル、總面積ニ對スル森林面積ノ瑞典(1911年) 52.69%、芬蘭(1911年) 50.72%ハ歐洲ニ比ナキ所ニシテ、歐洲露西亞(1887年)サヘ 32.59%ニシテ、奧地利(1912年)ノ 32.61%ト共ニ森林多キ邦國ノ稱アリ、獨逸(1900年)ハ 25.89%、匈牙利(1912年)ハ之ヨリモ多ク 27.54%ナリ、佛蘭西(1912年)ノ如キハ 18.67%、白耳義(1895年)ハ 20.00%、伊太利(1913年)ハ 15.92%ニシテ稍相近キモノニ屬シ、和蘭(1912年)ノ 7.97%、西班牙(1912年)ノ 9.63%、丁抹(1912年)ノ 8.55%ハ同階級ニ在ルモノ、英虞蘭威耳斯(1913年)ノ 5.05%ニ至リテハ最少キモノ、ノタリ、北米合衆國(1910年)ノ廣漠タル地モ森林ハ唯 28.56%ノミ、南米ノ智利(1913年)ハ 23.81%、英領印度(1911—12年)ハ少クシテ 13.12%ニ當ル。斯ク詮シ來レハ本邦ノ如ク森林ニ富メルハ蓋シ稀ナリ。惟フニ本邦ノ森林ハ大正四年ノ調査ニ於テ立木地ニ限リタトレモ、而モ因襲ノ久シキ地目トシテ森林ト稱スルモノ、中ニハ今尙無立木地ヲモ包含セスト謂フ能ハス、其ノ雜木林ヲ包含スルコト勿論ニシテ、時ニハ磊々タル急峻ノ崖地モ亦森林面積中ニ算セラル、ノ奇觀ナキニアラス。故ニ此ノ森林ヲ以テ直ニ歐洲諸國ノ森林ト正シキ比較ヲ爲シ能ハサルモノ多シ。

大正四年末ノ森林反別ヲ其ノ所有者ニ依リテ分テハ、御料林 7.06%、國有林 39.32%、公有林 15.35%、社寺有林 0.59%私有林 37.68%ニ當ル、此ノ分節比例ヲ明治四十一年度末ニ就テ見ルニ、御料林ハ 9.49%、國有林ハ 53.00%、公有林ハ 10.08%、社寺有林ハ 0.41%、私有林ハ 27.02%ナリキ。此ノ兩比例ヲ比較スルニ最強ク減少シタルハ國有林ニシテ御料林モ減少シタレトモ國有林ノ如ク甚シカラズ、最強ク増加シタルハ私有林ニシテ、公有林モ社寺有林モ亦増加シタリ。斯ノ如キハ國有林、御料林ニ整理行ハレタルコトモ重キ理由ナレトモ、拂下其ノ他ノ事由ニ依リテ所有者ノ變更アリタルト、地目ノ變換セラレタルモノ尠ナカラサリシ

1頭ナリ。此ノ屠畜數ヲ前年ニ比スルニ各畜皆増加シタルモ就中増加著シキハ成牛ニシテ、前年ノ頭數ヲ百ト爲シタル指數實ニ 123.77ニ當レリ。

【獸疫】 大正五年中ニ發生セル家畜傳染病ハ、炭疽牛 196頭、馬 32頭 豚 1頭、氣腫痘牛ニノミ 164頭、假性皮疽馬 1頭、豚コレラ 300頭、狂犬病犬 714頭、牛 9頭、馬 10頭ナリ。

ニ原因スルコト大ナリ。

森林ノ反別ヲ地方別ニ見ルニ、御料林ハ其ノ約 67%ハ北海道ニ存シ、約 120%ハ長野縣ニ在リ、其ノ他靜岡縣ニ約 62%、岐阜縣ニ約 39%、山梨縣ニ約 23%、愛知縣ニ約 21%、群馬縣ニ約 18%アルヲ多シト爲ス。國有林モ亦北海道ニ多ク存シ總反別ノ約 44%ヲ占ム、而シテ岩手縣ノ約 59%、青森縣ノ約 58%福島縣ノ約 56%、秋田縣ノ約 54%、山形縣ノ約 48%等其ノ多キモノニ屬セリ。公有林ハ長野最多ク約 94%ニ當リ、岐阜縣ノ約 69%之ニ次キ、山梨縣ハ約 50%、兵庫縣ハ約 47%、京都府ハ約 43%、福島縣及新潟縣ハ共ニ約 41%ニ當リ、是等ハ其ノ多キモノニ屬セリ。社寺有林ノ最多キハ兵庫縣ノ約 72%ニシテ、滋賀縣ノ約 61%之ニ次キ、靜岡縣ノ約 51%岐阜縣ノ約 50%、岡山縣ノ約 49%、長野縣及鳥根縣ハ共ニ約 41%等其ノ多キモノニ屬ス。私有林ハ全國ニ布置スレトモ、而モ尙多クノ不同アリ、福島縣ノ約 49%最多ク、廣島縣ノ約 48%之ニ次キ、岐阜縣ノ約 45%、岩手縣ノ約 44%、鳥根縣ノ約 43%、北海道ノ約 39%、靜岡縣ノ約 37%、兵庫縣ノ約 34%、高知縣ノ約 33%、和歌山縣ノ約 31%等其ノ多キモノナリ。又原野ハ北海道最多ク全國總反別ノ約 101%ニ當リ、岩手縣ハ約 73%、秋田縣ハ約 72%、福島縣ハ約 66%、長野縣ハ約 65%、靜岡縣及岐阜縣ハ共ニ約 28%ニ當レリ。即森林モ原野モ北海道最之ニ富ミ、之ニ次クモノハ東北地方及信飛地方ニシテ、近畿以西ニ於テハ其ノ存スルモノ、多クハ私有若クハ公有ナリトス。

【保安林】 大正五年末ノ保安林ハ總數 289,839箇所ニシテ、其ノ面積 1,314,381町ナリ。之ヲ前年ニ比スルニ 19,898箇所 40,812町ヲ増セリ。又之ヲ大正二年度末ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ、箇所ハ 121.6面積ハ 108.2ニ當リ、嘗テハ面積ノ増加著シカリシカ、近年ニ至リ其ノ箇所ノ増加旺ナルニ至レルカ如シ。保安林ヲ其ノ所有者ニ依リテ分テハ、箇所ハ總箇所ニ對スル御料林 0.22%、國有林 1.86%、公有林 14.20%、社寺有林 2.37%、私有林 81.35%ニ當リ、面積ハ總面積ニ對スル御料林 0.85%、國有林 48.82%、公有林 31.51%社寺有林 0.66%私有林 18.16%ニ當レリ。

之ニ由テ觀レハ箇所トシテハ私有林最多ク、公有林之ニ次キ、面積ニ於テハ國有林最多ク、公有林之ニ次キ、私有林更ニ次ク。惟フニ私有林ハ其ノ性質上入賃ニ近キモノ多ク、從テ土砂打止等ノ必要アル部分多カルヘク、爲ニ保安林ニ編入セラレタル箇所多キモ、何レモ小區域ニ止マリテ反別少ク、國有林ハ入賃ニ遠キモノ多キタケニ箇所ハ多カラサレトモ其ノ反別廣シ、公有林ハ國有林ト私有林トノ中間ノ性質ヲ帶フルカ故ニ、箇所トシテハ私有林ニ次キ、面積トシテハ國有林ニ次キ共ニ第二位ナリ。

保安林ハ箇所ヲ其ノ種類ニ依リテ分チ分節比例ヲ算出スレハ、土砂打止林最多ク 53.68%ヲ占メ、水源涵養林之ニ次キ 22.10%ニ當レリ、而シテ其ノ他ノ四分ノ一ヲ多キモノヨリ列記スレハ魚附林 6.33%、防風林 4.19%、潮害防備林 3.67%、飛砂防止林 3.12%、水害防備林 3.05%、風致林 2.50%、積雪防止林 1.15%、隘石防止林 0.11%、航行目標林 0.08%、公衆衛生林 0.06%トス。上記最多ノ保安林タル土砂打止林ノ總數中 82.57%ハ私有林ニ屬シ、水源涵養林ノ 83.52%モ亦私有林ニ屬セリ、併シナカラ之ヲ面積ニ就テ見レハ、土砂打止林ノ總面積中 46.78%ハ公有林ニシテ、26.56%ハ國有林、25.86%ハ私有林ニ屬シ、又水源涵養林中 65.47%ハ國有林、21.53%ハ公有林ニシテ、11.37%ノミ私有林ナリ。

保安林ノ箇所ヲ地方別ニ見レハ、岡山縣最多ク全國總數ノ約 18%ヲ占メ、岐阜縣ノ約 10%、福井縣ノ約 9%之ニ次キ、其ノ他長野縣ノ約 61%群馬縣ノ約 53%廣島縣ノ約 44%滋賀縣ノ約 39%富山縣石川縣ノ共ニ約 35%等ヲ多シト爲ス。若シ夫之ヲ面積ニ就テ見レハ、北海道ノ全國總數ニ對スル約 259%ヲ最多トシ、岐阜縣ノ約 131%之ニ次キ、長野縣ノ約 60%、山形縣ノ約 59%、富山縣ノ約 58%山梨縣ノ約 51%、岡山縣ノ約 43%、福井縣ノ約 39%ナルヲ多シト爲ス。保安林ノ箇所ハ其ノ地形上必要ナル地ヲ擇フコト勿論ナレトモ、之ヲ面積ヨリ見レハ自然ニ森林多キ地方ニ保安林ニ編入セラレタル反別廣キヲ見ルナリ。

【森林植栽】 大正五年中ニ植栽ヲ行ヒタル森林ハ 128,472町ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 30,197町ヲ減シタリ。是前年ニ於ケル植栽反別ノ著シク多カリシニ依ル反動カ、此ノ植栽反別ヲ前年末森林ノ總面積ニ比スルニ 6.86%ニ當リ、前年ノ同一比例ヨリ低キコト 1.71%ナリ。此ノ植栽比例ヲ各種森林ニ就テ見ルニ最高キハ公有林ノ 10.75%ニシテ社寺有林ノ 9.53%私有林ノ 8.85%第二位ニ居リ、國有林ノ 4.03%御料林ノ 3.63%ヲ第三位トス。國有林御料林ノ斯ク植栽ノ比例低キ所以ノモノハ其ノ新伐多カラサルカ爲ナルヘク、私有林ノ植栽比例カ公有林ヨリ低キコトハ前年ニモ見ヘタル所ニシテ、其ノ何ノ故タルヲ詳ニセス。以上ノ植栽比例

ニ依リテ推算スレハ御料林ハ約三百年、國有林ハ約二百五十年ニシテ更新一周シ、私有林ハ約百十五年、社寺有林ハ約七十年公有林ハ約九十年ニシテ更新一周スル割合ナリ。惟フニ御料林國有林ノ總反別中ニハ今モ尙地目ノミ森林地ニシテ實ハ植栽ニ適セサル急峻ノ地ヲモ包含スルモノアルヘク、爲ニ植栽比例ヲ彌カ上ニモ低カラシムル關係アランモ、而モ此ノ比例ノミヲ以テ見テハ、更新植栽ノ甚タ緩慢ナルヲ思ハサルヘカラス。

【森林伐採】 大正五年度中ノ森林伐採價額ニ依リテ示セハ 80,307,724圓ニシテ、之ヲ前年度ニ比スレハ約 22%餘ノ増額ナリ。此ノ増額ハ用材薪材共ニ單價ノ昂騰シタルニモ因レトモ、伐採數量モ亦增多シタルカ爲ナリ。即用材ノ單價ハ大正四年度ニ於テ總平均尺 1石ニ付 1圓 9錢 5厘ナリシモノ、本年度ハ 1圓 36錢 4厘ニ昂騰シ、薪材ハ大正四年度ニ於テ一割ニ付 1圓 87錢 4厘ナリシモノ、本年度ハ 1圓 92錢 7厘ニ昂騰シ、伐採數量ニ於テ用材ハ大正四年度ニ比シ約 22%ヲ増シ、薪材ハ約 10%ヲ増シタルニ見テ明カナリ。森林ノ面積ニ對スル伐採價額ハ之ヲ前年末ノ總反別ニ比スルニ、其ノ百町ニ付 431圓ニ當ル、此ノ百町當伐採價額ヲ森林ノ各種ニ就テ見ルニ、御料林ハ 168圓、國有林 108圓、公有林ハ 142圓ニシテ共ニ甚タ低ク、社寺有林ハ之ニ反シ 778圓私有林ハ 929圓ニシテ甚タ高シ。森林ノ伐採ハ林業終局ノ目的ニシテ而シテ又森林保護ノ一要素タリ、若シ之カ適正ヲ失センカ、當ニ森林經濟上ニ損失ヲ招來スルノミナラス、或ハ國土ノ保安上ニ容易ナラサル影響ヲ及ホスナリ。故ヲ以テ濫伐ノ弊ナキヲ期スルト共ニ、伐採遲徐ヨリ來ル損失ノ虞ナカラコトヲモ亦期セサルヘカラス。上記大正五年度ノ伐採價額ニ於テ社寺有林私有林ノ頗ル高ク、國有林公有林乃至御料林ノ甚タ低キカ如キ、果シテ何レカ適正ヲ得タルモノナリヤ、敢テ識者ノ誠鑑ヲ望ム。

【森林被害】 大正五年度中ニ受ケタル森林ノ被害ハ反別 6,064町ニシテ、前年度ニ比シ 8,637町多ク、此ノ被害價額ニ見積レハ 643,400圓ニ當リ、又之ヲ前年ニ比スルニ 173,575圓少シ、即知ル、本年度ノ被害ハ其ノ反別ニ於テ前年度ヨリ廣カリシモ、被害ノ程度ハ甚タ輕カリシモノ、如シ。又此ノ森林ノ被害反別ヲ森林ノ總反別ニ比スルニ、3.24%ニ當リ、被害反別一反當ノ平均被害價額ハ 10圓 61錢ニ當レリ。

【狩獵】 大正五年度中ニ狩獵免狀ヲ下付シタルハ 89,884人ニシテ、前年度ニ比シ 11,910人多ク、其ノ中銃器ヲ用キサル甲種免狀下付ハ 7,515人ニシテ、前年度ニ比シ 497人多ク、銃器ヲ用ユル乙種免狀下付ハ 82,369人ニシテ、前年度ニ比シ 11,413人多シ。即總數ニ於テハ前年度ヨリ 15.27%ノ増加ニシテ、甲種ハ 7.08%、乙種ハ 16.09%ノ増加ニ當レリ。然レハ狩獵免狀下付ノ増加ハ主

トシテ乙種免狀ノ下付増加シタルニ由ル。

狩獵免狀下付數ヲ地方別ニ見ルニ、甲種ニ於テハ岐阜縣最多ク全國總數ノ約 205%ヲ占メ、長野縣ノ約 84%、石川縣ノ約 82%之ニ次キ、其ノ他愛知縣ノ約 69%、千葉縣ノ約 65%、山形縣ノ約 50%ヲ多シト爲シ、乙種ハ福島縣ノ約 45%、長野縣ノ約 40%最多ク、其ノ他静岡縣ノ約 36%、北海道ノ約 35%、鹿兒島縣及新潟縣

VII. 漁業及製鹽

【漁船】 大正五年末現在ノ漁船總數ハ 394,701艘ニシテ、内 2,800艘ハ動力ヲ有スルモノ、391,901艘ハ動力ヲ有セサルモノ、即 0.71%ノミ動力ヲ有スルモノニシテ他ノ 99.26%ハ動力ヲ有セサルモノナリ。此ノ動力ヲ有スルモノハ中 4.54%ノミ蒸氣機關ヲ有スルモノニシテ他ノ 95.46%ハ發動機ヲ有スルモノナリ。又動力ヲ有セサルモノ中 97.12%ハ 5噸未満若クハ 50石未満ノ小船ニ屬シ、0.07%ノミ 20噸以上又ハ 200石以上ノ稍大ナル船ナルノミ。以テ本邦漁業ノ規模ヲ推知スヘク、其ノ性質ノ主トシテ沿岸漁業ナルコトヲ知ルニ足ル。

漁船數ヲ地方別ニ見ルニ、動力ヲ有スルモノハ静岡縣最多ク全國總數ノ約 126%ヲ占メ、茨城縣ノ約 97%、三重縣ノ約 95%之ニ次キ、其ノ他岩手縣ノ約 85%、千葉縣ノ約 73%、高知縣ノ約 71%、和歌山縣ノ約 54%、宮城縣ノ約 53%等ヲ多シト爲シ、又動力ヲ有セサルモノハ北海道ノ全國總數ニ對スル約 156%ナルヲ最多トシ、長野縣ノ約 67%之ニ次キ、其ノ他愛媛縣山口縣及千葉縣ノ共ニ約 44%、三重縣兵庫縣ノ共ニ約 31%、鳥根縣新潟縣大分縣及静岡縣等ノ共ニ約 29%ナル等ヲ多シト爲ス。

【水産物】 大正五年中ノ主ナル水産物ノ數量及價額ヲ擧ケレハ、真鱈ハ漁獲量年々増多シ、本年ハ 6,250萬貫ヲ獲、其ノ價額ハ 710萬圓ナリ。此ノ數量及價額ヲ前年ニ比スルニ、98萬貫、66萬圓ヲ増セリ。又此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、長崎縣ノ 103萬圓最多ク、石川縣ノ 71萬圓、北海道ノ 70萬圓之ニ次キ、其ノ他山口縣ノ 54萬圓、青森縣ノ 43萬圓、岩手縣ノ 35萬圓、新潟縣ノ 33萬圓、福岡縣ノ 27萬圓、福井縣ノ 21萬圓等ヲ多シト爲ス。背黑鯧ハ年々ノ漁獲ニ多少アリシカ、本年ハ豐漁ニシテ數量 3,212萬貫價額 459萬圓ヲ獲之ヲ前年ニ比スルニ 677萬貫 135萬圓ヲ増セリ。又此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、千葉縣ノ 73萬圓最多ク、三重縣ノ 53萬圓、愛媛縣ノ 42萬圓之ニ次キ、其ノ他兵庫縣ノ 37萬圓、北海道ノ 33萬圓、山口縣ノ 28萬圓、青森縣ノ 22萬圓、廣島縣ノ 19萬圓等ヲ多シト爲ス。鯉ハ年々消長アリ前年ハ大漁ナリシカ本年ハ甚タ不漁ニシテ、數量 948萬貫價額 464萬圓ヲ獲タルノミ、之ヲ前年ニ比スルニ、973萬貫 381萬圓ヲ減シ殆ト前年ノ半量ニ當レリ。

ノ共ニ約 34%、兵庫縣及熊本縣ノ共ニ約 32%、東京府ノ約 31%、等ヲ多シト爲ス。乙種免狀ノ下付ハ概シテ各地方ニ平等ナルトモ、甲種免狀ハ地方ニ依リテ、其下付數ノ多少ニ大ナル懸隔アリ、是甲種狩獵ハ乙種狩獵ノ如クニ遠距離遊獵ノ便少キカ故ニ、從テ其ノ住地ノ狀況ニ依リテ限局セラル、モノアルニ由ルナランカ。

此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、鹿兒島縣ノ 129萬圓最多ク、宮城縣ノ 49萬圓、高知縣ノ 42萬圓之ニ次キ、其ノ他茨城縣ノ 34萬圓、愛媛縣ノ 32萬圓、千葉縣ノ 28萬圓、岩手縣ノ 25萬圓、福島縣ノ 22萬圓等ヲ多シト爲ス。鯖ハ年々ノ漁獲ヲ増シ本年モ亦増多セリ、本年ハ數量 1,188萬貫價額 300萬圓ニシテ、前年ニ比シ 141萬貫 31萬圓ヲ増セリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、長崎縣ノ 31萬圓最多ク、福井縣ノ 22萬圓之ニ次キ、其ノ他鳥根高知二縣ノ共ニ 21萬圓、山口縣ノ 18萬圓、兵庫縣ノ 17萬圓、神奈川縣ノ 16萬圓、鹿兒島縣、静岡縣ノ共ニ 15萬圓等ヲ多シト爲ス。鮪ハ年々漁獲ニ多少アリ、本年ハ不漁ノ年ナリキ。數量 298萬貫價額 205萬圓ヲ獲、之ヲ前年ニ比スレハ數量 99萬貫價額 67萬圓ヲ減シタリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、千葉縣ノ 32萬圓最多ク、和歌山縣 21萬圓之ニ次キ、其ノ他静岡宮城二縣ノ共ニ 20萬圓、茨城縣高知縣ノ共ニ 15萬圓、神奈川宮崎二縣ノ共ニ 12萬圓等ヲ多シト爲ス。鱈ハ年々漁獲ヲ増シ本年モ亦大漁ナリキ、數量 857萬貫價額 568萬圓ニシテ、前年ニ比シ 131萬貫 63萬圓ヲ増シタリ。之カ價額ヲ地方別ニ見レハ神奈川縣ノ 91萬圓最多ク、富山縣ノ 75萬圓之ニ次キ、其他京都府ノ 48萬圓、石川縣ノ 47萬圓、三重縣静岡縣ノ共ニ 43萬圓、高知縣ノ 39萬圓、長崎縣ノ 36萬圓等ヲ多シト爲ス。鱈ハ本年漁獲量ヲ減シ 195萬貫此ノ價額 64萬圓ヲ獲、前年ニ比シ 15萬貫 4萬 5千圓ヲ減シタリ、之カ價額ヲ地方別ニ見ルニ、山口縣ノ 12萬圓最多ク、其ノ他千葉縣ノ 6萬圓、青森縣ノ 5萬圓、和歌山縣及岩手縣ノ共ニ 4萬圓、宮崎縣ノ 3萬圓等ヲ多シト爲ス。鯛ハ年々其ノ漁獲量ヲ増シ、本年ハ前年ニ比シ數量 3萬7千貫ヲ増シ 524萬貫ヲ獲、價額モ亦前年ヨリ 23萬圓多ク 588萬圓ヲ得タリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、山口縣ノ 94萬圓最多ク、長崎縣ノ 54萬圓之ニ次キ、其ノ他兵庫縣ノ 46萬圓、福岡縣ノ 43萬圓、愛媛縣ノ 37萬圓、鳥根縣ノ 30萬圓、廣島縣ノ 25萬圓、大分縣ノ 23萬圓等ヲ多シト爲ス。黒鯛ハ本年不漁ニシテ數量 74萬貫此ノ價額 74萬圓ナリ、之ヲ前年ニ比スルニ數量 8萬 6千貫價額 8萬 5千圓ヲ減シタリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ愛知縣ノ 7萬圓最多ク、兵庫縣 6萬圓、熊本縣 5萬 5千圓、山口縣、香川縣、愛媛縣共ニ 4萬圓ヲ多シト爲ス。鱒ハ本年少シ

ク漁獲ヲ減シ前年ヨリ 9萬貫少キ 136萬貫ヲ獲、價額ハ前年ヨリ 2萬圓多キ 80萬圓ニ當レリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ茨城縣ノ 14萬圓最多ク、福島、宮城、千葉三縣ノ各 9萬圓、新潟縣ノ 7萬圓、愛知縣ノ 4萬圓等ヲ多シト爲ス。鰯ハ數量 1,137萬貫、價額 220萬圓ヲ得、前年ニ比シ 69萬貫 26萬圓ヲ増セリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、北海道ノ 90萬圓最多ク、宮城縣ノ 14萬圓、福島縣 13萬圓、兵庫縣 12萬圓、石川縣 9萬圓、福井新潟二縣各 8萬圓等ヲ多シト爲ス。鱈ハ近年漸次漁獲ヲ減シ本年モ亦前年ヨリ 16萬貫少ク 87萬貫ヲ得、價額モ前年ニ比シ 6萬圓ヲ減シ 98萬圓ナリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、香川縣ノ 17萬圓最多ク、山口縣 12萬圓、神奈川縣 11萬圓、静岡縣 8萬圓、兵庫縣 7萬圓、岡山縣 6萬圓、廣島縣 5萬圓等ヲ多シト爲ス。鱒ハ本年豐漁ニシテ 1,204萬貫ヲ漁獲シ、前年ヨリ多キコト 198萬貫、從テ價額モ前年ヨリ 19萬圓ヲ増シ 121萬圓ナリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、大部分ハ北海道ニ屬シ其ノ額 78萬圓ニ當リ、他ニハ石川縣ノ 12萬圓、山形縣ノ 10萬圓、青森縣ノ 6萬圓、富山縣ノ 5萬圓等ヲ多シト爲ス。鱈ハ漁獲量年々不同ナレトモ本年ハ略前年ト同量ニシテ僅ニ 3萬貫少キ 644萬貫ヲ獲タリ、但シ價額ハ 54萬圓ニシテ前年ヨリ少キコト 2萬圓ナリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、新潟縣ノ 20萬圓、北海道ノ 18萬圓、富山縣ノ 13萬圓ヲ最多シト爲ス。文鱈魚ハ前年ヨリ漁獲量ヲ減スルコト 29萬貫ニシテ 174萬貫ヲ得、價額ハ 52萬圓ニシテ前年ヨリ僅ニ少キノミ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、東京府及沖繩縣ノ共ニ 10萬圓最多ク、鹿兒島縣ノ 8萬圓、長崎縣、鳥根縣及鳥取縣ノ各 3萬圓等ヲ多シト爲ス。秋刀魚ハ本年甚タ不漁ニシテ數量 374萬貫價額 98萬圓ナリ、之ヲ前年ニ比スルニ 168萬貫 25萬圓ヲ減セリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見レハ、宮城縣 27萬圓、茨城縣 26萬圓、千葉縣 21萬圓ヲ最多シト爲ス。鯛ハ 170萬貫 118萬圓ヲ獲、前年ニ比シ 24萬貫 18萬圓ヲ増シタル豐漁ナリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ愛知縣ノ 16萬圓、三重縣ノ 12萬圓、廣島縣ノ 9萬圓、山口縣ノ 6萬圓等最多シ。鱈ハ本年大漁ニシテ 378萬貫ヲ獲前年ヨリ多キコト 99萬貫ナリ、價額ハ 147萬圓ニシテ是亦 22萬圓ヲ増セリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ静岡縣 20萬圓最多ク、沖繩縣及千葉縣ノ共ニ 14萬圓、神奈川縣ノ 13萬圓等ヲ多シト爲ス。鱈ハ年々漁獲量ヲ増シ本年ハ 13,807萬貫ヲ獲、前年ヨリ多キコト 1,875萬貫ナリ、從テ價額モ亦上リ前年ヨリ 79萬圓増シタル 894萬圓ニ達ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、其ノ大部分ナル 820萬圓ハ北海道ニ屬シ、其ノ他秋田縣ノ 36萬圓、青森縣ノ 24萬圓等ヲ多シト爲ス。鮭ハ本年頗ル不漁ニシテ 194萬貫ヲ獲タルノミ、前年ニ比スレハ半ニモ達セス實ニ 232萬貫少ク、價額モ亦前年ヨリ 61萬圓少キ 148萬圓ヲ得タルノミナリキ。此ノ價

額ヲ地方別ニ見ルニ、是亦大部分ハ北海道ニ屬シ其ノ額 96萬圓ニ達シ、其ノ他ニハ岩手縣ノ 10萬圓、新潟縣ノ 9萬圓、宮城縣ノ 8萬圓等ヲ多シト爲ス。鱒(鮭ヲ含ム)モ亦本年ハ不漁ニシテ前年ノ半ニモ達セス 306萬貫ノミ、前年ヨリ 473萬貫少シ、價額モ前年ヨリ少キコト 75萬圓ナル 117萬圓ナリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見レハ、北海道ノ 48萬圓最多ク、山口縣ノ 23萬圓之ニ次キ、新潟縣 8萬圓、富山縣 7萬圓、山形縣 5萬圓、秋田縣滋賀縣共ニ 4萬圓等ヲ多シト爲ス。鮎ハ本年稍豐漁ニシテ數量 78萬貫價額 121萬圓ヲ獲、前年ヨリ多キコト 10萬貫 22萬圓ナリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、熊本縣滋賀縣各 7萬圓、神奈川縣德島縣福井縣兵庫縣各 6萬圓等ヲ多シト爲ス。鯉ハ年々漁獲量ヲ増シ本年ハ 113萬貫 130萬圓ニ達シ、前年ヨリ 12萬貫 19萬圓ヲ増セリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、長野縣ノ 25萬圓最多ク、滋賀縣新潟縣ノ各 10萬圓之ニ次テ多シ。鰻ハ年々漁獲量ヲ増シ本年ハ 98萬貫 170萬圓ニ達セリ、前年ヨリ多キコト 10萬貫 26萬圓ナリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、愛知縣 33萬圓、静岡縣 20萬圓最多ク、其ノ他千葉縣 9萬圓、東京府熊本縣各 8萬圓、神奈川縣 7萬圓、岡山縣 6萬圓等ヲ多シト爲ス。鮑ハ本年不漁ニシテ 105萬貫ヲ獲、前年ヨリ 28萬貫少ク、價額ハ 81萬圓ニシテ前年ヨリ 5萬圓少シ、地方別ニハ岩手縣最多ク千葉縣長崎縣青森縣北海道茨城縣等ニ多シ。牡蠣ハ本年豐漁ニシテ 1,014萬貫 68萬圓ヲ獲、前年ヨリ多キコト 238萬貫 12萬圓ナリ、地方別ニハ佐賀縣廣島縣福岡縣最多ク、熊本縣香川縣宮城縣次テ多シ。蛤ハ本年ノ漁獲 105萬貫 14萬圓ニシテ、前年ヨリ 5萬貫少シ、地方別ニハ千葉縣三重縣愛知縣神奈川縣最多シ。鳥賊ハ昨年ノ不漁ニ反シ本年ハ豐漁ニシテ 155萬貫 76萬圓ヲ獲 28萬貫 18萬圓ヲ増セリ、之ヲ地方別ニ見ルニ福島縣熊本縣愛媛縣岡山縣千葉縣愛知縣神奈川縣等ニ多シ。柔魚モ亦本年ハ豐漁ニシテ 2,362萬貫 606萬圓ヲ獲、前年ヨリ多キコト 1,023萬貫 282萬圓ナリ、之ヲ地方別ニ見ルニ北海道最多ク、長崎縣青森縣鳥根縣沖繩縣岩手縣神奈川縣次テ多シ。鱈ハ漁獲年々増加シ本年ハ 348萬貫 101萬圓ヲ獲、前年ヨリ數量 22萬貫多ク價額 8萬圓少シ、之ヲ地方別ニ見ルニ兵庫縣最多ク、北海道岡山縣香川縣廣島縣山口縣等ニ多シ。鰐(龍蝦ヲ含ム)ハ本年ノ漁獲 640萬貫 244萬圓ニシテ、前年ニ比シ 64萬貫 18萬圓多シ、之ヲ地方別ニ見ルニ、静岡縣最多ク、愛知縣山口縣千葉縣三重縣廣島縣大阪府ニ多シ。鱈ハ豐漁ニシテ 2,069頭ヲ獲、前年ヨリ 777頭ヲ増シ、價額モ亦前年ヨリ 18萬圓ヲ増シ 103萬圓ナリ、之ヲ地方別ニ見ルニ岩手縣高知縣宮城縣北海道最多シ。珊瑚ハ 3,795貫ヲ獲、前年ヨリ 392貫ヲ増シタレトモ、價額ハ寧ロ 2萬圓少キ 57萬圓ナリキ。之ヲ地方別ニ見ルニ長崎縣最多ク高知縣之ニ次キ、鹿兒島愛媛ノ二縣ニ僅ニ在ス。

昆布ハ本年頗ル豐獲ニシテ 2,827萬貫 443萬圓ニ達セリ、之ヲ前年ニ比スルニ 1,532萬貫 254萬圓多ク實ニ倍以上ニ上レリ。地方別ニハ此ノ殆ト全部ハ北海道ニ屬シ岩手縣石川縣及其ノ他ノ四縣ニ多少ノ收穫アリタリ。紫菜ハ本年 243萬貫 233萬圓ヲ採收シ、前年ニ比シ 11萬貫 7萬圓多シ、之ヲ地方別ニ見ルニ、東京府最多ク、神奈川縣千葉縣廣島縣次多シ。石花菜ハ本年 170萬貫 123萬圓ヲ採收シ、前年ヨリ 25萬貫 26萬圓ヲ増シタリ、之ヲ地方別ニ見レハ静岡縣最多ク、北海道東京府和歌山縣神奈川縣次多シ。海藻ハ本年ノ採收頗ル多ク 150萬貫 32萬圓ニ達ス、之ヲ前年ニ比シ 81萬貫 7萬圓ヲ増セリ、之ヲ地方別ニ見ルニ北海道最多ク、長崎縣之ニ次多シ。以上ノ漁獲物並ニ其ノ他ヲ併セ本年中全國ニ於ケル總漁獲物ノ價額ハ 10,224萬圓ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 741萬圓ヲ増セリ、故ニ概シテ本年ノ豐漁ノ年ナリシカ如シ。而シテ此ノ總價額ヲ地方別ニ見レハ、北海道ノ 2,266萬圓最多ク、前年ニ比シ 608萬圓ヲ増シ、之ニ次クモノハ長崎縣ノ 498萬圓、山口縣ノ 447萬圓、千葉縣ノ 404萬圓ニシテ、前年ニ比シ長崎縣ハ 31萬圓ヲ増シタレトモ山口縣ハ 8萬圓、千葉縣ハ 33萬圓ヲ減セリ。又之ニ次クハ静岡縣ノ 336萬圓、神奈川縣ノ 308萬圓、三重縣ノ 298萬圓、鹿兒島縣ノ 292萬圓、兵庫縣ノ 259萬圓、高知縣ノ 282萬圓、石川縣ノ 273萬圓、福岡縣ノ 256萬圓、愛媛縣ノ 252萬圓等ニシテ、是亦前年ニ比スルニ、三重縣ハ 27萬圓、兵庫縣ハ 36萬圓、石川縣ハ 34萬圓、福岡縣ハ 37萬圓ヲ増シ、静岡縣ハ 119萬圓、神奈川縣ノ 11萬圓、鹿兒島縣ハ 1萬圓高知縣及愛媛縣ハ共ニ 38萬圓ヲ減シタリ。是ニ由テ觀レハ、本年ノ漁獲ハ概シテ日本海方面ニ於テ豐漁ニシテ、太平洋方面ハ不漁ナル地多カリシモノ、如シ。

【水産製造物】 節類ニ於テハ本年鯉及鮭ノ漁獲少カリシ爲メ節類節類共ニ製造量少ク、鯉節ハ 207萬貫 771萬圓、鮭節ハ 59萬貫 175萬圓ニシテ、之ヲ前年ニ比シ鯉節ハ 105萬貫 714萬圓、鮭節ハ 42萬貫 67萬圓ヲ減セリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、鯉節ハ静岡縣ノ 167萬圓、鹿兒島縣ノ 154萬圓最多ク、愛媛縣 65萬圓、福島縣 59萬圓、沖繩縣 57萬圓、宮城縣 53萬圓、高知縣 47萬圓、岩手縣 46萬圓等ヲ多シト爲シ、鮭節ハ宮城縣ノ 5萬圓、高知縣鹿兒島縣ノ各 2萬圓ヲ多シト爲ス。素乾類ニハ柔魚ノ漁獲多カリシカ爲メ鰯最多産シ、630萬貫 808萬圓ノ多キニ上リ、前年ニ比シテハ 351萬貫 489萬圓ヲ増セリ。鱈ハ製出甚少ク 5萬貫 14萬圓ナルノミ、之ヲ前年ニ比スレハ 8萬貫 4萬圓ヲ減セリ。鯨ノ中身缺鯨ノ製出ハ前年ヨリ 32萬貫 14萬圓ヲ減シタル 297萬貫 101萬圓ナリシカ、鯨鯨ハ 84萬貫 56萬圓ヲ製出シ、前年ニ比シ 17萬貫 9萬圓ヲ多産セリ。田作ハ製出前年ノ同量ニシテ 44萬貫ナリシモ價額ハ 3萬圓ヲ増シタル 30萬圓ニ達セリ。鰯ハ 73萬貫 32萬圓ノ製出アリ、之ヲ前年

ニ比シ 13萬貫 6萬圓ヲ増セリ。以上素乾類ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、北海道最多ク、鰯ハ 516萬圓身缺鯨ハ 100萬圓鯨鯨ハ 55萬圓鯨ハ 25萬圓ヲ占ム、鰯ハ北海道ノ他ニ長崎縣ノ 108萬圓、青森縣ノ 31萬圓、岩手縣 23萬圓、沖繩縣ノ 21萬圓、島根縣ノ 18萬圓等多キモノアレトモ、鯨ハ他ニ多キモノナク、鰯ハ山形縣ノ 6萬圓稍多シ、鱈ハ山口縣最多ク、長崎縣宮崎縣島根縣沖繩縣ニ多ク、田作ハ青森縣三重縣茨城縣岩手縣ニ多シ。鹽乾類ハ眞鱈 春黑鱈ヲ含ム鱈、鮭共ニ前年ヨリ多産シタレトモ、鱈ハ其ノ漁獲少カリシ爲メ製出甚少ナカリキ。即眞鱈ハ 259萬貫 94萬圓ニシテ前年ヨリ 46萬貫 11萬圓ヲ増シ、鱈ハ 17萬貫 10萬圓ニシテ前年ヨリ 4萬貫 2萬圓ヲ増シ、鮭ハ 74萬貫 25萬圓ニシテ前年ヨリ 39萬貫 7萬 5千圓ヲ増シタルニ、鱈ハ前年ヨリ 7萬貫ヲ減シタル 2萬 5千貫ニ過キス、價額モ亦 5萬圓ヲ減シタル 2萬圓ナリキ。此ノ鹽物類ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、眞鱈ハ長崎縣ノ 24萬圓最多ク、三重縣山口縣ノ共ニ 12萬圓之ニ次キ、千葉縣大分縣ノ共ニ 5萬圓、熊本縣富山縣ノ共ニ 4萬圓等ヲ多シト爲シ、鱈ハ三重縣千葉縣神奈川縣ニ多ク、鮭ハ山口縣福井縣島根縣ニ多ク、鱈ハ鹿兒島縣山口縣富山縣ニ多シ。煮乾類ニ於テハ眞鱈(春黑鱈ヲ含ム)海參、鰻ハ前年ヨリ多産セルモ、貝柱、鮑、淡菜ハ前年ヨリ少シ、即眞鱈ハ 577萬貫 414萬圓ニシテ前年ニ比シ 103萬貫 99萬圓ヲ増シ、海參ハ 16萬貫 65萬圓ニシテ前年ヨリ 1萬貫 20萬圓ヲ増シ、鰻ハ 87萬貫 137萬圓ニシテ前年ヨリ 19萬貫 34萬圓ヲ増シタルニ、貝柱ハ 20萬貫 90萬圓ニシテ前年ヨリ 24萬貫 30萬圓ヲ減シ、鮑ハ 8萬 6千貫 52萬圓ニシテ前年ヨリ 2萬貫ヲ減シ、價額ノミ 3萬圓ヲ増シ、淡菜ハ 6千貫 9千圓ニシテ前年ヨリ 2千貫 1千圓ヲ減シタリ。而シテ此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、眞鱈ハ兵庫縣ノ 45萬圓最多ク、愛媛縣ノ 43萬圓之ニ次キ、其ノ他山口縣ノ 39萬圓、廣島縣ノ 37萬圓、三重縣ノ 31萬圓、大分縣ノ 29萬圓、愛知縣ノ 20萬圓、静岡縣ノ 15萬圓等ヲ多シト爲シ、海參ハ北海道ノ 48萬圓大部分ヲ占メ、其ノ他三重縣青森縣長崎縣ニ多ク、貝柱ハ北海道ノ 87萬圓最多ク、鮑ハ岩手縣青森縣長崎縣北海道ニ多ク、淡菜ハ愛知縣山口縣ノ特産ニシテ三重縣ニ僅ニ産シ、鰻ハ山口縣ノ 17萬圓、大分縣ノ 15萬圓最多ク、愛媛縣香川縣岡山縣静岡縣ニ多産ス。鹽物類ニ於テハ眞鱈 春黑鱈ヲ含ム鱈ノ外總テ前年ヨリ少ク、即鮭ハ 143萬貫 101萬圓ニシテ前年ニ比シ 95萬貫 108萬圓ヲ減シ、鱈ハ 200萬貫 76萬圓ニシテ前年ニ比シ 299萬貫 108萬圓ヲ減シ、鰯ハ 51萬貫 16萬圓ニシテ 4萬貫ヲ減シ價額ノミ 1萬圓ヲ増シ、鮭ハ 146萬貫 60萬圓ニシテ 7萬貫ヲ減シ是亦價額ノミ 2萬圓ヲ増シ、鱈ハ 1萬 4千貫 1萬圓ニシテ前年ニ比シ 2萬貫 6千圓ヲ減シタルニ、眞鱈ハ 206萬貫 47萬圓ニシテ前年ニ比シ 65萬貫 15萬圓ヲ増シ、鱈ハ鹽乾

ニ於テ大ニ減シタルニモ拘ハラズ、84萬貫 71萬圓ニシテ前年ニ比シ 62萬貫 57萬圓ヲ増セリ。而シテ此ノ鹽物類ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、眞鱈ハ長崎縣ノ 8萬圓最多ク、青森縣 7萬圓山口縣 5萬圓福井縣石川縣ノ共ニ 4萬圓等多キモノニ屬シ、鮭ハ福井縣 24萬圓最多ク京都府島根縣共ニ 7萬圓鳥取縣 5萬圓、石川縣 4萬圓等ヲ多シト爲シ、鱈ハ石川縣神奈川縣ニ多ク鮭ハ京都府 30萬圓富山縣 17萬圓石川縣 7萬圓最多ク、鮭ハ北海道ノ 52萬圓、新潟縣ノ 47萬圓ヲ最多トシ、鱈ハ新潟縣 50萬圓、北海道 22萬圓ヲ最多トシ、鰯ハ北海道ノ 13萬圓ニ次クモノナシ。漚海苔ハ 138萬貫 354萬帖ノ製出アリ、之ヲ前年ニ比スルニ 5萬貫ヲ増シ 19萬帖ヲ減セリ、此ノ價額ハ 265萬圓ニシテ前年ニ比シ 21萬圓ヲ減シタリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ東京府 142萬圓最多ク、千葉縣ノ 36萬圓神奈川縣ノ 27萬圓次多シ。肥料ハ鱈及鱈推粕 2,951萬貫 942萬圓、鱈 325萬貫 76萬圓、其ノ他ノ肥料ハ 683萬貫 149萬圓ヲ製出セリ。之ヲ前年ニ比スルニ推粕ハ著シク増額シ、鱈ハ率ニ減少シ其ノ他ノ肥料ハ僅ニ増額セリ。各肥料ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ推粕ハ大部分北海道ニ屬シ、其ノ額 702萬圓、石川縣 58萬圓之ニ次キ、其ノ他長崎縣 40萬圓、青森縣 29萬圓、福井縣 25萬圓、山形縣 20萬圓、岩手縣 19萬圓等ヲ多シト爲シ、鱈ハ長崎縣ノ 29萬圓、千葉縣ノ 127萬圓等最多ク、其ノ他ノ肥料ハ北海道ノ 148萬圓ヲ最多トス。魚油ハ本年多産シ 258萬貫 114萬圓ヲ得タリ、之ヲ前年ニ比スルニ 72萬貫 53萬圓ヲ増セリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、

VIII. 鑛

【鑛區】 大正五年末現在ノ稼業鑛區ハ 2,009箇所ニシテ其ノ總坪數ハ 672,348,000坪ナリ。其ノ外休業鑛區ハ 3,352箇所アリテ其ノ坪數ヲ 638,304,000坪トス。即チ總鑛區ノ箇所ノ分節比例ヲ求ムレハ稼業ハ 37.47%ニシテ、休業ハ 62.53%ニ當ル。又坪數ノ分節比例ヲ求ムレハ稼業ハ 151.30%、休業ハ 48.70%ニ當レリ。前年即チ大正四年末現在ノ分節比例ニ對照スルニ、箇所ノ稼業ニ於テ 4.59%ノ増加ヲ示セリ。又坪數ノ分節比例ニ於テモ稼業ハ 2.94%ノ増加ニ當ル。此ノ鑛區箇所ヲ十年前即チ明治三十九年末現在ニ比シ、其ノ百ニ對スル大正五年末現在ノ指數ヲ求ムルニ稼業鑛區ハ 87.01、休業鑛區ハ 106.38ニ當ル。又鑛區坪數ノ同一指數ヲ求ムルニ稼業鑛區ハ 157.78、休業鑛區ハ 141.75ニ當レリ。是ニ依レハ稼業鑛區ノ指數ハ低ク、其ノ坪數ノ指數ハ高キヲ以テ、近年稼業鑛區ノ合併盛ニ行ハレタルヲ知ルヘク、一方休業鑛區ノ許可ヲ得タル箇所甚タ尠ナカラサルヲ知ルヘシ。

稼業鑛區ノ鑛種別ニスレハ、金屬山ニ於テハ二種以上ノ鑛種ヲ産出スルモノ多シ、今各鑛種毎ニ延數ト爲シ、其産出山ヲ算スル

北海道ノ 60萬圓最多ク、岩手縣ノ 15萬圓、宮城縣ノ 11萬圓次多シ。漚海苔ハ 23萬貫 35萬圓ヲ製出シ、前年ニ比シ 4萬貫少ナキモ、價額ハ却テ 2萬圓多シ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ東京府ノ 13萬圓最多ク、三重縣 8萬圓、大阪府 6萬圓次多シ。以上ノ諸品及其ノ他ノ水産製造物ノ總價額ハ 6,410萬圓ニシテ前年ニ比シ 79萬圓ヲ増セリ、此ノ總價額ヲ地方別ニ見ルニ北海道ノ 2,433萬圓最多ク、静岡縣 329萬圓、長崎縣ノ 311萬圓、鹿兒島縣 214萬圓等ヲ多シトナス、

【水産養殖】 大正五年末現在ノ水産養殖場ハ 104,529箇所ニシテ其面積ハ 174百萬坪、即 1養殖場平均面積 1,660坪ニ當ル、之ヲ前年ニ比スルニ少シク其ノ平均坪數ヲ減シタリ。

【製鹽】 大正五年度ノ鹽製造人員ハ 10,366人ニシテ前年ニ比シ 517人ヲ減シ、従業員ハ 52,212人ニシテ前年ニ比シ 496人ヲ増シタリ。又鹽田ノ反別ハ 5,881町ニシテ前年ニ比シ 2町ヲ減シ鹽煎釜數ハ 6,403箇ニシテ前年ニ比シ 286箇ヲ減シ、鹽製造高ハ 103,416萬斤ニシテ前年ニ比シ 3,889萬斤ヲ増セリ。是等ノ事實ヲ綜合スレハ、本邦ノ製鹽事業ハ漸ク統一セラレ普テ小製造者ノ多カリシモノ、今合併行ハレ事業ノ規模大ナルニ至レルカ如シ。製鹽高ヲ專賣支局別ニ見ルニ阪手ノ 30,412萬斤最多ク、三田尻ノ 18,574萬斤之ニ次キ神戸ノ 13,325萬斤、廣島 12,858萬斤等其ノ多キモノニ屬ス。

業

ニ銅ヲ最多トシ、其ノ箇所 703、銀之ニ次キ 458箇所、金又之ニ次キ 379箇所アリ。其他 129箇所、亞鉛ハ 99箇所、硫化鐵及滿他ハ各 58箇所ニシテ、鐵ハ僅ニ 14箇所ナルノミ。又非金屬山ニ於テハ石炭ヲ最多トシ、530箇所、石油之ニ次キ 174箇所アリ。其他亞炭ハ 95箇所、硫黃ハ 89箇所ニシテ、其他ノ産出鑛區ハ 116箇所ナリ。前年ト比較對照スルニ、大體ニ於テ各種産出鑛區ノ増加ヲ見タレトモ、亞鉛ニ於テハ 2箇所ノ減少ヲ見ルニ至レリ。

大正五年末ノ砂鑛區ハ稼業河川 113箇所ニシテ、此ノ延長 106里 13町アリ、其他鑛區 28箇所、此ノ坪數 16,403,000坪ナリ。又休業河川鑛區ハ 494箇所ニシテ、此ノ延長 486里 27町アリ、其他ノ鑛區ハ 692箇所、此ノ坪數 46,466,000坪ナリ。亦鑛種ヲ延數ト爲シ稼業鑛區ノ數ヲ算スルニ砂金河川 47箇所、其他 6箇所、砂鐵 56箇所、其他 226箇所、砂錫河川 2箇所、其他 1箇所アリ、其外砂鑛ハ河川 8箇所、其他 4箇所ナリ。前年ニ對照スルニ稼業河川僅ニ 1箇所ヲ増加シ、延長ニ於テ 10里 4町減少セリ。尙ホ其他鑛區及坪數ニ於テモ減少スルニ至レリ。

【鑛夫】 大正五年六月末現在ノ鑛夫ハ 352,512人ニシテ、此ノ中 139,175人ハ金屬山ニ屬シ、197,907人ハ石炭山ニ屬シ、5,871人ハ石油山ニ屬シ、9,559人ハ其他ノ非金屬山ニ屬スル鑛夫トス。之ヲ前年ニ比スレハ 金屬山ニ從事スル者ニ於テ六割一分、石炭山ニ於テ二分、石油山ニ於テ三割一分、其他ノ非金屬山ニ於テ五割七分、鑛山全體ニ於テ二割二分ノ増加ニ當ル、又盛ナリト謂フヘシ。各種鑛山ニ從事スル鑛夫平均一人一箇年ノ勞役日數ヲ算スルニ、金屬山ハ 260日、石炭山ハ 239日石油山ハ 306日、其他ノ非金屬山ハ 233日ニシテ、鑛山全體ノ平均ハ 248日ニ當ル。

【鑛產物】 大正五年中ノ鑛產物ハ概シテ 豐産ニシテ、就中鐵ハ 1億0,455萬貫ノ産額ヲ示シ、前年ニ比シ 8,239萬貫約五倍ノ增收ニ當ル、之レニ時局ノ影響ナルヘク、從來我邦鐵ノ産出ハ甚タ振ハサル有様ナリキ。銅ハ本邦主要ノ鑛產物ニシテ 1億6,773萬斤ヲ産出シ、前年ニ比シ之レ又 4,203萬斤增收ニ當ル。次ハ亞鉛ニシテ大正三年以後本邦ニ於テ 製鍊スルニ至リ、長足ノ進歩ヲナシ 6,499萬斤ヲ産シ、前年ヨリ 2,977萬斤ヲ增收セリ。鑛鑛ハ 3,095萬貫ヲ産シ、前年ヨリ多キコト 1,523萬貫ニ當ル。又鉛ハ 1,595萬斤ヲ産シ、前年ヨリ 1,101萬斤ヲ多ク産セリ。金ハ前年ノ 2,212貫ノ採取ニ反シ、2,105貫即チ 107貫ノ減産ヲ觀ルニ至レリ。錫ハ 48萬斤ノ産額ニシテ前年ヨリ 15萬斤ヲ減産セリ。硫化安質母尼ノ如キハ大正三年中ノ收産ナク、前年收産ノ 5萬斤ニ對シ 大正五年中ハ 4萬斤ノ收産ニシテ1萬斤ノ減收ニ當レリ。以上列記以外ノ鑛產物ノ前年ニ比シ大正五年中ニ於テ增收ヲ見タルハ、銀 48,180貫ヲ産出シ、5,710貫ノ增收。安質母尼 1,801萬斤ヲ産出シ、414萬斤ノ增收ニ當リ。硫化鐵 2,427萬貫ヲ産出シ、626萬貫ノ增收ニ當リ。格魯鐵 221萬貫ヲ産出シ、141萬貫ノ多額ナル增收ニ當レリ。滿鐵 1,315萬貫ヲ産出シ、625萬貫ノ增收ニ當レリ。重石鑛ハ前年ニ比シ約二倍弱 19萬貫ヲ産セリ。石炭ハ亦本邦重要ノ鑛產物ニシテ、前年ニ於テ少シク減退セシモ、大正五年中ノ産出ハ 2,290萬佛噸ニシテ、241萬佛噸ノ增收ヲ觀ルニ至ル。此ノ他石油ハ 259萬石ヲ産シ、前年ヨリ 2萬石ヲ增收セリ。鑛物ノ産額ヲ正シク外國ト比較センコトハ困難ナレトモ其ノ大概ヲ比スルニ 1916年ノ調査ニ依レハ金ハ世界ニ於ケル一年ノ總産出量約 93萬斤ニ對シ 亞弗利加洲各國合計約 31萬斤ニシテ最モ多ク、北米ニテハ合衆國約 12萬斤、加奈太約 3萬斤ニシテ之ニ亞キ、墨其西ハ 9千斤ニシテ本邦ノ約 8千斤ト相通シ、濠洲 6萬斤ノ内 4萬斤ハ聯邦ノ産ナリ、歐洲ニ於テハ露西亞ノ約 4萬斤ヲ除ク外本邦ノ如ク 多産ナルハナシ。銀ハ世界ノ總産出量約 502萬斤ニ對シ北米合衆國約 207萬斤、加奈太約 73萬斤ヲ産ス。1915年ニハ濠洲約 59萬斤、墨其古約 11萬斤ニシテ之ニ亞ケリ。歐洲中ノ最多國タル獨逸 約 16萬斤、西班牙 約

13萬斤、皆本邦(18萬斤)ノ下位ニ在リ。銅モ亦(北米合衆國約 37萬噸、墨其古約 5萬噸、加奈太約 5萬噸最モ多ク本邦(約 10萬噸)ハ北米ニ次ク多産國ナリ。石炭ハ 1915年ニ本邦(約 2,254萬噸)甚タ鈔キニアラサレトモ而モ英吉利(約 2億 6千萬噸)ノ約十一分ノ一弱、獨逸(約 1億72百萬噸)ノ約七分ノ一強、佛蘭西(約 39百萬噸)ノ約二分ノ一強、奧地利(約 1百萬噸)ニ少シク優レルノミ。石油ハ北米合衆國(約 32億萬石)ノ如キ露西亞(約 77千萬石)ノ如キ墨其古(約 4億21百萬石)ノ如キ多産國ニシテ 之ニ亞クハ埃及(約 234萬石)ナリ。而シテ本邦(約 259萬石)ハ世界ノ第1位ニ居リ秘露(約 263萬石)ト伯仲ノ間ニ在リ殆ント獨逸 約 105萬石、ニ倍セリ。鐵ニ至リテハ本邦大正五年ノ産額僅ニ 39萬噸ナルニ北米合衆國ハ約 3,946萬噸ヲ産シ本邦ノ約百倍ニ當ル。獨逸ハ 1915年ニ約 1,160萬噸ヲ産シ本邦ノ約二十九倍強、佛蘭西ハ 1915年ニ約 435萬噸ヲ産シ本邦ノ約十一倍ニ當ル、英吉利ハ約 891萬噸ヲ産シ本邦ノ二十二倍強ニ當ル是本邦ノ最モ苦痛トスル所ナルヘシ。

大正五年中ノ鑛產物ノ産額ヲ最多額ヨリ順次地方別ニ配列スルニ金ハ茨城、鹿兒島、秋田、新潟、岩手ノ諸地方ニ多ク産シ。銀ハ茨城、秋田、岐阜、栃木、青森、岡山、兵庫ノ諸地方ニ多ク産シ。銅ハ栃木、茨城、愛媛、岡山、大阪ノ諸地方ニ産シ。鉛ハ岐阜、岡山、秋田、宮城地方ニ多ク。亞鉛ハ岡山、福岡、山口、大阪地方ニ多ク。鐵ハ岩手ノミ多ク總産額ノ過半ヲ占ム、其他岡山、鳥取、鳥根、山形、福島ノ諸地方ニモ産出アリ。硫化鐵鑛ハ和歌山、岡山、山梨、愛媛、岩手地方ニ多ク、重石鑛ハ山口、茨城、岐阜地方ニ多ク、水鉛鑛ハ鳥根、富山、岐阜地方多ク。石炭ハ 福岡、北海道ニ最モ多ク福島、佐賀、長崎、山口地方亦可成リノ 産出アリ。石油ハ新潟最モ多ク産シ總産額ノ大半ヲ占ム、秋田、北海道等ニ次テ多ク産ス。

大正五年中ノ鑛山ノ變災ハ 151,655回ニシテ前年ニ比シ 2.78回ヲ増加セリ。此ノ多數ノ變災ハ主トシテ 石炭山ヨリ起レルモノニシテ、總數中 70.87%ヲ占ム、金屬山ハ 27.71%ニ當リ、其他ノ非金屬山ハ僅ニ 1.42%ニ當レリ。前年ノ同比例ニ對シ石炭山ハ 1.19%ヲ減少シ金屬山ハ 2.46%ヲ増加ス、隨テ其他ノ非金屬山ハ 1.27%ヲ減少スルニ至レリ。變災ノ最モ多キ坑内ニシテ 其ノ割合ハ總數百ニ對シ 77.68%ニ當リ。地表ハ 22.32%ニ當レリ、死亡者ノ最モ多キ坑内ノ落盤ニシテ 318人、重傷者 812人、輕傷者 45,388人ナリ。是レニ次クハ坑車ノ爲メノ死傷ニシテ死亡者 1人、重傷者 243人、輕傷者 13,561人ヲ出セリ。又捲揚坑道ニ於テ死亡者 1人、重傷者 49人、輕傷者 17,200人ヲ出セリ。

IX. 工業及賃金

【官營工場】 大正六年度末現在ノ諸官廳直轄工場ハ總數 82個所ニシテ 前年度末ニ比シ 1個所ヲ減シタリ。是等ノ工場ニ於ケル原動機ノ臺數ハ 6,125臺ニシテ其ノ馬力ハ合計 344,073馬力ナリ。此ノ臺數ヲ種類別ト爲セハ蒸氣 9.71%電氣(發電氣共) 88.98%其他 1.31%ニ當リ、又其馬力ハ蒸氣 42.28%電氣(發電氣共) 56.30%其他 1.42%ニ當ル。此ノ分節比例ヲ五年前即チ大正元年度末ニ比スレハ同年ノ臺數ハ蒸氣 16.14%電氣 82.24%其他 1.62%ニシテ其馬力ハ蒸氣 57.19%電氣 41.96%其他 0.85%ナリ。即チ僅ニ五年後ニ於テ電氣原動機カ如何ニ蒸氣原動機ヲ壓シテ 之ニ代レルカ又電氣原動機カ如何ニ強大ニシテ 其ノ效用大ナルカ多言ヲ要セスシテ明カナリ。

大正六年度末ノ官營工場ノ職工ハ男 111,831人、女 13,048人、計 124,879人ナリ。此ノ職工員數ヲ五年前即チ大正元年度末ニ比スレハ其百ニ對スル指數男ハ 119.5、女ハ 151.7ニ當ル、以テ官營工場ノ漸次大ヲ爲セルヲ知ルヘク、而シテ女職工ヲ使用スヘキ部面ノ擴張セラレタルヲ知ルヘシ。但シ男女職工ハ前年ニ比スレハ男 12,409人、女 2,902人減少シ居レリ其ノ原因果シテ何ゾ、是等職工ノ一日平均給料ハ(男女合算ヲ除ク)男 79錢、女 35錢ニシテ之ヲ五年前ノ大正元年度末ニ比スレハ男女共ニ金五錢ヲ増加セリ、蓋シ諸物價騰貴ノ趨勢ニ伴ヒ 勞銀モ自ラ増加セシナラン。又是等職工ノ一ケ年度間ノ平均就業日數ハ男 306日、女 295日ニシテ之ヲ五年前ニ比スレハ男ハ 9日減シ、女ハ 16日ヲ減シタリ又一日平均ノ就業時間ハ男 10.7時、女 9.2時ニシテ之ヲ五年前ニ比スレハ男 0.3時ヲ増シ、女 0.6時ヲ減シタリ。

官營工場ニ就テ職工一日平均ノ給料ヲ見ルニ 男ニ於テハ海軍省各工場平均ノ 106錢ヲ最高トシ陸軍省各工場ノ 89錢之ニ亞キ、鐵道院ノ 77錢印刷局ノ 75錢ト相次第シ製鐵所ノ 69錢造幣局ノ 65錢最モ低シ、又女ニアリテハ陸軍省各工場ノ 48錢ヲ最高トシ海軍省各工場ノ 41錢之ニ亞キ、印刷局ノ 38錢製鐵所ノ 34錢相次第シ造幣局ノ 30錢遞信省ノ 24錢最モ低シ。

又官營工場ノ一ケ年度間ノ就業日數ハ男ニ於テハ 海軍工場ノ 324日ヲ最高トシ遞信省ノ 309日ニ次ギ、製鐵所ノ 307日、陸軍省ノ 304日相次ギ、造幣局ノ 289日最モ少シ、又女ハ海軍工場ノ 307日最モ多ク、陸軍工場ノ 300日ニ次ギ、印刷局ノ 297日造幣局ノ 292日ト次第シ、鐵道院ノ 263日ヲ最モ少シトス。又平均就業時間ハ男ニアリテハ陸海軍工場ノ 11時間最モ長ク、女ニ於テハ陸軍工場ノ 10時間最モ長シ。

【一般工場】 官營工場ヲ除キタル 一般工場中職工徒第十人

以上ヲ有スル工場ハ大正五年末ニ於テ 19,299箇所アリ、之ヲ前年ニ比スレハ 2,490箇所ノ増加ヲ見タリ、更ニ之ヲ五年前即チ明治四十四年ニ比シ 其百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 135.6ニ當リ僅々五年間ニ三割五分餘ノ増加ヲ示セリ、以テ工業ノ盛大ニ赴クヲ知ルヘキナリ。此ノ工場ヲ原動力ヲ用ユルモノト否ラサルモノトニ依リテ分テハ原動力ヲ用ユルモノ 65.4%、用キサルモノ 34.6%ニ當リ之ヲ五年前ノ原動力ヲ用ユルモノ 54.5%、用キサルモノ 45.5%ニ比スレハ此ノ五年間ニ於テ當ニ工場數ノ増加セルノミナラス 規模ノ大ヲ爲セルヲ知ルヘキナリ。是等工場ニ於ケル職工ノ員數ハ男 458,632人、女 636,669人計 1,095,301人ニシテ總員ノ前年ヨリ増加セルコト實ニ 184,502人ナリ。此ノ職工員數ヲ五年前ナル明治四十四年ニ比シ其百ニ對スル指數ヲ求ムレハ男ハ 144.5、女ハ 133.6ニ當リ、之ヲ官營工場ノ男女職工ト比較スルニ男工ノ増加率ハ一般工場ノ方遙ニ多ク、女工ノ増加率ハ官營工場ノ方多キコトヲ示セリ、即チ一般工場ハ男女殆ト同等ニ増加シ 官營工場ノ如ク女職工ヲ要スル部面ノミ著シク増加セサリシナリ。元來官營工場ハ女職工少ナク今日ト雖男 89.55%ニ對スル女 10.45%ノ割合ナルニ一般工場ハ男 41.87%ニ對スル女 58.13%ニシテ女職工過ニ多シ、然レハ一般工場ハ業ニ既ニ女職工ヲ要スル 部面ノ發達著シカリシナリ、故ニ今日男女工ノ増加カ官營工場ノソレト 歩調ヲ一ニセサルコト敢テ怪シムニ足ラサルナリ。

一般工場ニハ職工ノ外ニ勞働人夫アリ、其員數男 48,723人、女 13,516人計 62,239人ニシテ大體ニ於テハ漸次其員數ヲ減シツ、アリ、即チ五年前ノ明治四十四年ニ比スレハ 其ノ百ニ對スル指數ハ男 39.8、女 33.4ニ當レリ。

一般工場ノ職工一人一日ノ平均賃金ハ十五歳以上男 57錢、女 28錢、十五歳未満男 23錢、女 18錢ナリ、之ヲ前年ニ比スレハ十五歳以上ハ男 1錢女 2錢ヲ増シ、十五歳未満男亦男 1錢 女 2錢ヲ増加セリ、賃金増加率女ノ方高率ナルハ 注意スヘシ。概シテ一般工場ハ官營工場ヨリ賃金低ク其ノ増加率モ大體ニ於テ 一般工場ノ方低キヲ示ス、是一般工場ハ技術拙劣ナル者モ尙ホ從事シ得ル餘地アレ共官營工場ハ反之熟練ナル職工ヲ要スル 事業ノミ多キカ故ナルカ又或ハ思フ一般工場ハ私人ノ經營ナルカ 故ニ課税等ノ關係上其ノ事業ヲ過少ニ報告スルノ弊アリ、爲メニ職工賃金ノ如キモ實際ヨリ少額ニ報告スルモノ無シト 言フヲ得ス、其ノ結果何等課税等ニ顧慮ナク眞實ヲ報告スル官營工場トノ 間ニ格段ノ差違ヲ生スルニ非ラサルナキカ暫ク疑ヲ存シテ後致ニ待タントス。

一般工場一年間ノ就業日數ハ 男女ヲ通シ 304日ニシテ之ヲ五年

前=比スレハ5日ヲ増セリ、之ヲ官營工場ノソレニ比スレハ未タ及ハサル2日ナリ、又平均一日ノ就業時間ハ11.8時ニシテ五年前ニ比シ0.8時ノ増加ヲ示セリ之ヲ官營工場ニ比スレハ約二時間長シ

大正五年末ノ一般工場ヲ其種類ニ依リテ分テハ染物工場48.67%機械及器具工場9.62%化學工場11.73%飲食物工場12.88%雜工場15.90%特別工場1.20%ナリ、之ト比較シテ爲メ五年前即チ明治四十四年ノ同一ノ分節比例ヲ算出スルニ染物工場55.53%機械及器具工場7.44%化學工場10.34%飲食物工場12.31%雜工場11.96%特別工場2.42%ニ當ル、而シテ各種工場ノ明治四十四年ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ染物工場ハ118.9機械及器具工場ハ175.4化學工場ハ153.3飲食物工場ハ141.9雜工場ハ180.4特別工場ハ67.4ニ當レリ。斯ク詮シ來レハ特別工場ヲ除クノ外、他ノ總テハ増加シ就中紙製品業、木竹莖莖製品業及革製品業等ヲ包含セル雜工場最モ増加シ、機械及器具工場之ニ亞キ、化學工場ハ第三位ニアリ。茲ニ減少ヲ示タル特別工場トハ電氣業、瓦斯業、金屬精練業等ヲ其ノ内容トスル工場ニシテ管テハ之ニ採鑛業ヲ包含セシメアリシヲ大正三年以後之ヲ他ニ移シタルニ依リ斯クハ減シタルモノニシテ此ノ調査上ノ變更ナカリセハ是亦増加セシモノノ一ナラン、以上ノ工場中染物工場ハ原動力ヲ用ユルモノ70.05%、用キサルモノ29.95%ニシテ一工場ノ平均一日使用職工ハ68人ニ當リ此種工場中最モ多キハ織物業ノ4,241製糸業ノ3,114ニシテ最モ使用職工多數ナルハ紡績業ノ平均職工993人ナリ。機械及器具工場ハ原動力ヲ用ユルモノ83.85%、用キサルモノ16.15%ニシテ平均職工80人ニ當リ此ノ種工場中最モ多キハ金屬製造業ノ744機械製造業ノ577ニシテ最モ大ナルハ船舶車輛製造業ノ平均職工358人ナリ。化學工場ハ原動力ヲ用ユルモノ53.95%、用キサルモノ46.05%ニシテ平均一日ノ使用職工ハ56人ニ當リ此種ノ工場中最モ多キハ窯業ノ4,044製紙業ノ303製藥業ノ202等ニシテ最モ大ナルハ發火物製造業ノ平均職工123人ナリ。飲食物工場ハ原動力ヲ用ユルモノ49.88%、用キサルモノ50.12%ニシテ一工場平均一日ノ使用職工22人ニ當リ、此種ノ工場中最モ多キハ釀造業ノ1,336精穀及製粉業ノ272製茶業ノ228ニシテ最モ大ナルハ製糖業ノ平均職工94人ナリ。雜工場ハ原動力ヲ用ユルモノ59.11%、用キサルモノ40.89%ニシテ一工場平均一日ノ使用職工33人ニ當リ其最モ多キハ木竹莖莖製品業ノ881印刷製本業ノ676ニシテ最モ大ナルハ皮革製品業ノ平均職工63人ナリ、特別工場ハ原動力ヲ用ユルモノ86.64%、用キサルモノ13.36%ニシテ一工場平均一日ノ使用職工100人ニ當リ、其最モ多キハ電氣業、金屬精練業ノ98人ニシテ最モ大ナルハ金屬精練業ノ平均職工190人ナリ。

一般工場數ヲ地方別ニ見ルニ原動力ヲ用ユルモノハ大阪府ノ1,

596ヲ最モ多シトシ東京府ノ1,478之ニ次キ愛知縣ノ1,174兵庫縣ノ933長野縣ノ679静岡縣ノ546群馬縣ノ438福井縣ノ435神奈川縣ノ341等其ノ多キモノニ屬シ、原動力ヲ用キサルモノハ大阪府ノ854最モ多ク兵庫縣ノ802之ニ次キ愛知縣ノ715東京府ノ511京都府ノ440等ハ多キ方ニ屬ス。

【各種工業】 大正五年ノ事實ニ依リ本邦各種ノ工業ヲ見ルニ製糸業ハ年末現在戶數(上記ノ工場數ヲ包含ス以下同シ)284,500戶ニシテ前年末ニ比シテ3,907戶ヲ減シタリ、製糸戶數ハ前年ヨリ減シタルノミナラス既往ノ各年ニ於テ減少ヲ示セリ、即チ五年前ノ明治四十四年ノ百ニ對スル本年ノ指數ハ76.8ニ當レリ。然ルニ蠶糸類ノ生産高ハ大正五年中ニ於テ約608萬貫ヲ得、之ヲ前年ニ比スレハ約62萬貫ヲ増加セリ、此ノ現象ハ前年ヨリ増加セルノミナラス既往ニ於テ年々増加セリ。即チ五年前ノ百ニ對スル指數ハ136.6ニ當リ全然製糸戶數ト相反比例ス、斯ノ如キハ大規模ニシテ機械設備ノ工場漸ク増加スルニ反シ舊來ノ手工的ノ製糸戶數ハ自然之ニ壓倒サレ減少セルモノナランカ、即チ之ヲ製糸業ノ專門的發達ヲ爲スニ至レルモノト見ルヲ得ヘシ。製糸戶數ヲ地方別ニ見レハ群馬縣ノ28,673戶最モ多ク長野縣ノ28,599戶之ニ亞キ福島縣ノ21,987戶山形縣ノ19,652戶埼玉縣ノ19,564戶等ノ多シト爲ス、又蠶糸生産高ヲ價額ニ見積レハ全國總額ハ約3億2,255萬圓ニシテ之ヲ地方別ト爲セハ長野縣ノ約9,693萬圓最モ多ク愛知縣ノ約3,229萬圓群馬縣ノ約2,358萬圓埼玉縣ノ約1,908萬圓山梨縣ノ約1,587萬圓福島縣ノ約1,428萬圓岐阜縣ノ約1,395萬圓等其多キモノニ屬セリ。本年中執業シタル眞綿製造業ハ227,708戶ニシテ是ハ又年々増加ノ微アリ、即チ前年ニ比シ16,491戶ヲ増シ五年前ノ百ニ對スル指數ハ124.5ニ當リ眞綿ノ生産高ハ119,525貫ニシテ前年ニ比シ20,243貫増加セリ、之ヲ五年前即チ明治四十四年ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ137.4ニ當リ年々増加ノ趨勢ナリ又眞綿製造戶數ヲ地方別ニ見ルニ長野縣ノ42,413戶最モ多ク群馬縣ノ21,295戶之ニ次キ岐阜縣ノ19,606戶佐賀縣ノ15,648戶新潟縣ノ14,271戶京都府ノ12,859戶滋賀縣ノ10,336戶等ヲ多シトス、又眞綿ノ生産高ヲ價額ニ見積レハ約265萬圓トナリ前年ヨリ増加スルコト約77萬圓ナリ、之ヲ地方別ト爲セハ滋賀縣ノ約88萬圓最モ多ク長野縣ノ約37萬圓之ニ次キ新潟、群馬兩縣ノ約18萬圓福島縣ノ約17萬圓等シト爲ス。蠶種業ハ年末戶數11,566戶ニシテ前年ニ比シ244戶ヲ減シタリ是亦年々減少シ五年前ノ百ニ對スル指數ハ75.5ニ當ル、併シ乍ラ其ノ生産高ハ敢テ減少セス。普通製蠶種ハ271萬枚ニシテ前年ニ比シ31萬枚ヲ減シタリ、反之樞製蠶種ハ5億5,232萬蛾ニシテ前年ヨリ4,883萬蛾ヲ増加セリ而シテ普通製蠶種ハ近年其ノ産額ヲ減シ樞製蠶種ハ年々増加ヲ示ス即チ五年前ノ各

百ニ對スル指數ヲ求ムレハ普通製ハ70.3ニ當リ、樞製ハ127.5ニ當レリ、蠶種製造戶數ヲ地方別ニ見レハ長野縣ノ3,648戶ヲ最トシ福島縣ノ859戶之ニ次キ其他群馬縣ノ620戶埼玉縣ノ578戶岐阜縣ノ533戶愛知縣ノ401戶等多シトス普通蠶種ノ生産高ヲ地方別ニ見ルニ長野縣ノ約144萬枚最モ多ク群馬縣ノ約28萬枚山梨縣ノ約24萬枚、埼玉縣ノ約17萬枚福島縣ノ約15萬枚等ヲ多シト爲シ、樞製蠶種ハ長野縣ノ約7,758萬蛾最モ多ク愛知縣ノ約5,978萬蛾岐阜縣ノ約5,367萬蛾福島縣ノ約3,549萬蛾埼玉縣ノ約2,740萬蛾等ヲ多シト爲ス。紡績業ハ年末現在ノ戶數、綿糸紡績240戶絹糸紡績12戶麻糸紡績9戶ニシテ各ヲ前年ニ比スレハ綿糸紡績ハ33戶ヲ減シ、絹糸紡績ハ4戶ヲ増シ、麻糸紡績ハ12戶ヲ減シタリ、之ヲ五年前ナル明治四十四年ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ綿糸ハ266.7絹糸ハ150.0麻糸ハ56.3ニ當ル、又是等紡績ノ職工ヲ五年前ニ比シ其百ニ對スル指數ヲ算出スレハ綿糸146.4絹糸136.4麻糸172.5ニ當リ紡績戶數ノ増加ニツレ職工モ亦増加セリ而シテ紡績ノ産額ヲ見ルニ綿糸ハ約9,300萬貫絹糸ハ約49萬貫麻糸ハ約205萬貫ニシテ之カ五年前ノ各百ニ對スル指數ハ綿糸ハ166.3絹糸ハ122.9麻糸ハ146.5ニ當レリ。紡績戶數ヲ地方別ニ見レハ綿糸ハ愛知縣ノ139戶最モ多ク大阪府ノ27戶之ニ次キ絹糸モ亦愛知縣ノ4戶ヲ最モ多シトシ京都府ノ3戶之ニ次キ麻糸ハ栃木縣ノ3戶最モ多シ又産額ハ綿糸ハ大阪府ノ約2,541萬貫最モ多ク兵庫縣ノ約1,357萬貫之ニ次キ岡山縣ノ約780萬貫、愛知縣ノ約766萬貫、東京府ノ約601萬貫最多シト爲シ絹糸ハ神奈川縣ノ約23萬貫京都府ノ約16萬貫等ヲ多シト爲シ、麻糸ハ兵庫縣ノ約75萬貫、東京府ノ約30萬貫、栃木縣ノ約29萬貫、大阪府ノ約26萬貫ヲ多シト爲ス。機業ハ年末現在戶數490,063戶ニシテ前年ニ比シテ71,614戶ヲ増シタリ、更ニ之ヲ五年前ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ110.2ニシテ他ノ戶數ノ増加率ニ比シテ稍々遲々タルノ感アリ機業ノ職工ハ年末現在820,499人ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ105,156人ノ増加ヲ示セリ、過去三四年前ハ寧ろ減少ノ傾向アリシモ最近ニ至リ著シク増加セリ織物ノ生産高ヲ價額ニ見積レハ約5億6,423萬圓ニシテ之レカ五年前ノ百ニ對スル指數ハ178.3ニ當レリ、コハ一面ニ於テハ事業ノ増大セルヲ語ルモノナルコト勿論ナルモ他面單價ノ昂騰ニ因リ増加シタルコトヲ記セサルヘカラス、而シテ機業戶數ヲ地方別ニ見レハ群馬縣ノ40,547戶最モ多ク長野縣ノ37,510戶埼玉縣ノ36,191戶熊本縣ノ27,545戶沖繩縣ノ24,898戶京都府ノ23,161戶等ヲ多シト爲ス、又織物ノ産額ヲ價額ニ見積リ地方別ニ見ルニ大阪府ノ約13,666萬圓最モ多ク愛知縣ノ約4,484萬圓京都府ノ約4,246萬圓福井縣ノ約3,942萬圓東京府ノ約3,495萬圓和歌山縣ノ約2,923萬圓等ヲ多シトス、斯ク機業者少ナキ地ニ於テ却テ産額多キハ或ハ産額ハ織物稅

ノ納稅地ニ於テ調査セラル、等ノ事アルニ由ルモノナラン。莫大小製造業ハ年末現在2,181戶ニシテ年々著シク増加シ之カ從業職工ハ21,588人ニシテ是亦増加著シク即チ五年前ノ百ニ對スル指數、戶數ハ207.1職工ハ273.4ニ當ル。其産額ノ價額ヲ見積レハ約5,423萬圓ニシテ是亦年々著シク増加ヲ爲シ五年前ノ百ニ對スル指數525.2ノ巨額ニ上レリ然レ共此ノ巨大ナル増加ヲ以テ直チニ莫大小業ハ異狀ニ擴大セリト爲スヘカラス價額ノ増減ヲ以テ其ノ事業ノ盛衰ヲトスルハ早計ナリ何トナレハ莫大小ノ單價ノ昂騰ハ之直チニ價額ノ増加ヲ來スモノナレハナリ、莫大小製造業ノ最モ多キハ大阪府ノ1,217戶東京府ノ196戶愛知縣ノ184戶兵庫縣ノ153戶等ニシテ其産額ノ最モ多キハ大阪府ノ約4,250萬圓東京府ノ約359萬圓和歌山縣ノ約246萬圓愛知縣ノ約207萬圓等ナリ。時計製造業ハ年末現在18戶ニシテ既往ニ比シテ減少セリ。然レ共其從業職工數ハ減少セス、年末現在2,248人ニシテ五年前ノ百ニ對スル指數130.9ニ當レリ、其産額ハ數量約101萬個金額約193萬圓ニシテ五年前ノ百ニ對スル指數ハ個數ニ於テ118.0金額ニ於テ108.1ニ當リ個數ノ増加ト價額ノ増加ト相伴ハサルハ價額ハ其時ノ市價ニ依リ變動常ナラサルモノナルカ故ナラン、今之ヲ地方別ニ見ルニ製造戶數ハ愛知縣ノ16戶ヲ始メ東京、大阪ニ各一戶ツ、アリ、其價額ハ東京府約122萬圓愛知縣約76萬圓ナリ。陶磁器製造業ハ年末現在6,832戶ニシテ前年ヨリ1,107戶増加セリ。又之ニ從事スル職工ハ43,550人ニシテ前年ヨリ増加セルコト11,248人ニシテ更ニ之ヲ五年前ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ127.9ニ當ル即チ斯業ノ漸次盛況ニ赴クヲ知ルナリ、其製造價額ハ2,522萬圓ニシテ五年前ノ百ニ對スル指數ハ163.9ニ當リ單價ノ昂騰ヲ想ハシム。陶磁器製造業ヲ地方別ニ見ルニ戶數ハ愛知縣ノ1,796戶最モ多ク岐阜縣ノ1,149戶之ニ亞キ其他三重縣ノ784戶石川縣ノ431戶山口縣ノ240戶等ヲ多シト爲ス、又産額ハ愛知縣ノ約1,069萬圓最モ多ク岐阜縣ノ約470萬圓京都府ノ約214萬圓佐賀縣ノ約199萬圓等ヲ多シト爲ス。玻璃製造業ハ年末現在戶數629戶ニシテ五年前ノ百ニ對シ67.3ヲ増加セリ、其從業職工ハ15,503人ニシテ五年前ノ百ニ對シ107.5ノ増加ニ當ル、玻璃製品ノ産額ハ約1,676萬圓ニシテ五年前ノ百ニ對スル261.7ノ著シキ増加ヲ示セリ、之ヲ地方別ニ見レハ戶數ハ大阪府ノ322戶東京府ノ117戶愛知縣ノ40戶福岡縣ノ19戶等多キニ居リ、産額ハ大阪府ノ約63萬圓福岡縣ノ約345萬圓東京府ノ約270萬圓兵庫縣ノ約186萬圓等ヲ多シト爲ス。煉瓦製造業ハ年末戶數711戶ニシテ職工11,304人ナリ、其産額ハ約五億九千萬圓金額ハ約1,109萬圓ナリ。本工業ハ從來稍々衰運ノ傾向アリシカ近來ニ到リ異狀ノ盛況ヲ呈シ昨年ニ比シ個數約一億個金額約500萬圓ノ増加ヲ示セリ。瓦業モ略ハ煉瓦業ニ似テ年末現在戶數11,9

80戸職工 37,644人其ノ産額數量約五億三千萬個金額 1,133萬圓ニシテ是亦最近ニ至リ著シク増加セリ。革類製造業ハ年末現在戸數 976戸、職工 4,019人ナリ、本工業ハ煉瓦製造業ト同シク既注ハ甚タ振ハス寧ロ減少ノ傾向ナリシカ最近時局ノ影響ヲ受ケ急遽ニ盛況ヲ呈シ本年ノ産額ハ 6,081萬圓ニシテ前年ニ比シ 4,112萬圓ノ増加ヲ爲シ、五年前ノ百ニ對スル指數實ニ 941.0ニ當レリ、斯ノ如キハ勿論單價ノ騰貴モ其ノ原因ナランモ然モ事業ノ盛大ハ否定スヘカラス、之ヲ地方別ニ見ルニ 戸數ニ於テハ東京府ノ 259戸兵庫縣ノ 178戸最モ多ク 産額ニ於テハ大阪府ノ約 4,318萬圓ヲ最モ多シトシ東京府ノ約 1,165萬圓兵庫縣ノ約 255萬圓和歌山縣ノ約 199萬圓等之ニ次ケリ。和紙製造戸數ハ年々減少シ年末現在 45,621戸ニシテ前年ニ比シ 1,611戸、五年前ニ比シ 9,791戸ヲ減シタリ、職工モ亦減少シテ 145,621人トナレリ但シ前年ヨリハ 227人増加シタレ共既往各年皆減少シ居レリ、然レハ其ノ産額ニ於テモ減少スヘキ筈ナルニ既往ニ比シ増加シ居レルハ 單價ノ騰貴ニ因ルナラン、即チ本年ノ産額ハ約 2,474萬圓ニシテ前年ニ比シ約 200萬圓ヲ増加セリ、製造戸數ヲ地方別ニ見レハ岐阜縣ノ 4,227戸最モ多シト爲シ高知縣ノ 3,506戸島根縣ノ 3,264戸長野縣ノ 2,979戸等之ニ次ケリ、産額ノ最モ多キハ高知縣ノ約 409萬圓ニシテ愛媛縣ノ約 253萬圓岐阜縣ノ約 161萬圓福岡縣ノ約 151萬圓ニ次ク。西洋紙ノ製造戸數ハ 51戸ニシテ是ハ大ニ増加シ職工モ 10,290人ニシテ増加著シ、從テ其産額モ増加スルコト勿論ニシテ數量ハ 5億 5,859萬封度ニシテ五年前ノ百ニ對スル指數ハ 187.5ニ當リ價額ハ約 4,388萬圓ニシテ五年前ノ百ニ對スル指數 244.9ニ當レリ。蓋シ近年和紙ノ用途減少シタルニ反シ、西洋紙ノ需要著シク増加シタルカ爲メ如上ノ現象ヲ呈シタルモノナラン、之ヲ地方別ニ見レハ 静岡縣ノ 9戸大阪府ノ 7戸東京府ノ 5戸ヲ最モ多シトナシ 其産額ハ静岡縣ノ約 802萬圓北海道ノ約 711萬圓大阪府ノ約 592萬圓兵庫縣ノ約 572萬圓等ハ主タルモノナリ。油類製造業ハ近年漸次衰退ノ狀勢ナリシカ最近遽ニ増加ジテ戸數 13,084戸職工 18,965人トナリ、從テ産額モ増加シ約 2,739萬圓ノ多額ニ上レリ、油類製造戸數ノ最モ多キハ岩手縣ノ 3,732戸長崎縣ノ 3,503戸ニシテ其産額ノ最モ多キハ神奈川縣ノ約 601萬圓大阪府ノ約 564萬圓ナリ。木蠟ハ漸次其製造戸數ヲ減シ現在ハ 1,347戸ニシテ五年前ニ比シ 306戸ヲ減シ 職工ハ 3,242人ニシテ五年前ニ比シ 483人ヲ減シタリ、其産額ハ生蠟約 184萬貫、晒蠟約 151萬貫ニシテ價額ハ前者ハ約 257萬圓、後者ハ約 241萬圓ナリ、木蠟製造家ハ福岡縣ノ 283戸佐賀縣ノ 213戸愛媛縣ノ 184戸ヲ多シト爲シ、其ノ産額ハ生蠟ハ福岡縣ノ約 85萬圓愛媛縣ノ約 46萬圓大分縣ノ約 27萬圓ヲ主タルモノト爲シ、晒蠟ハ兵庫縣ノ約 96萬圓福岡縣ノ 58萬圓佐賀縣ノ約 39萬圓ヲ多シト爲

ス。酒類ノ醸造家ハ 12,104戸ニシテ漸次減少シ五年前ノ百ニ對スル指數 91.5ニ當ル、併シ乍ラ其産額ハ取テ減少スルコトナク約 500萬石ニ上リ五年前ノ百ニ對スル指數 132.1ニ當ル酒類製造家ノ最モ多キハ兵庫縣ノ 814戸福岡縣ノ 494戸山口縣ノ 493戸愛媛縣ノ 466戸廣島縣ノ 461戸等ニシテ 其産額ノ最モ多キハ兵庫縣ノ約 69萬石福岡縣ノ約 29萬石廣島縣ノ約 21萬石京都府ノ約 19萬石愛知縣ノ約 16萬石等ナリ。麥酒ハ製造戸數漸次減少シテ 9戸トナリタルモ其産額ハ益々増加シ約 42萬石ニ上リ、五年前ノ百ニ對スル指數ハ 236.5トナレリ。酒精及酒精含有飲料ハ其製造戸數年末現在 260戸ナリ、既往ニ比シ年々減少ノ傾向アルモ而モ其ノ産額ハ益々上リテ 27,969石ト爲レリ。醬油製造業モ亦減少著シク 12,732戸トナレルモ其ノ産額ハ約 259萬石ニ上リ 五年前ノ百ニ對スル指數 112.5トナレリ、醬油製造家ハ岡山縣ノ 680戸廣島縣ノ 647戸兵庫縣ノ 615戸山口縣ノ 557戸岐阜縣ノ 514戸ヲ多シト爲シ 其産額ハ千葉縣ノ約 41萬石愛知縣ノ約 18萬石兵庫縣ノ約 15萬石香川縣ノ約 14萬石福岡縣ノ約 10萬石ヲ多シト爲ス。工業藥品製造業ハ年々増加シ戸數 717戸職工 10,805人トナリ職工ハ殆ト前年ノ倍額ヲ増加セリ、之ヲ五年前ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ戸數 311.7職工 168.9ニ當ル、其ノ産額ハ年々増加セルモ殊ニ歐洲大戰勃發以來異狀ノ増加ヲ示シテ約 3,785萬圓ノ多額トナリ 五年前ノ百ニ對スル指數 590.5ニ當レリ。石鹼ノ製造モ亦發達シ戸數 268戸職工 2,608人トナリ其産額ハ約 1,258萬圓ニ上レリ、之カ五年前ノ百ニ對スル指數ハ戸數 147.5職工 174.3産額 257.6ニ當リ斯業ノ盛大ナルヲ知ルヘキナリ。粗製樟腦及樟腦油ハ戸數 4,329戸從業職工 11,197人トナリ戸數、職工共ニ既往ニ比シ増加シ居ルモ産額ハ反テ減少セリ、即チ本年ハ約 157萬斤ニシテ 前年ヨリ減少セルコト約 100萬斤ナリ、然レ共之レ一時的ノ現象ニシテ大勢ハ増加シツ、アルカ如シ。樟腦油ハ約 303萬斤ニシテ 前年ヨリ稍々増加セリ今之ヲ五年前ノ各百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 粗製樟腦ハ 142.3樟腦油ハ 161.3ニ當ル、而シテ此ノ製造家ハ鹿兒島縣ノ 1,183戸熊本縣ノ 630戸宮崎縣ノ 454戸最モ多シ。薄荷ノ製造家モ又増加シ戸數 9,204戸從業職工 16,252人其産額取卸薄荷約 80萬斤薄荷油約 35萬斤薄荷油約 41萬斤ニシテ何レモ五年前ニ比スレハ約三倍ノ増加ヲ示セリ、薄荷製造家ハ北海道ノ 8,232戸ヲ最モ多シト爲シ 岡山縣ノ 887戸之ニ次ケリ、製藍業ハ久シク振ハサリシカ最近時局ノ影響ヲ蒙リテ著シク増加シタリ、即チ戸數 11,062戸從業職工 15,288人ト爲リ其産額ハ藍約 90餘萬貫、藥約 236萬貫ニシテ其ノ價額ハ藍約 115萬圓、藥約 310萬圓ナリ價額ハ五年前ノ百ニ對スル前者ハ 259.8、後者ハ 486.1ニ當レリ、藍ノ製造家ハ宮城縣ノ 3,236戸最モ多ク徳島縣ノ 1,772戸鹿兒島縣ノ 1,346戸等多キモノナリ、而シテ其産額ハ徳島

縣ノ約 320萬圓最モ多ク岐阜縣ノ約 13萬圓之ニ次ク。漆液ノ製造ハ戸數 512戸ニシテ五年前ノ約半數ニ減ス、産額ハ約 74萬圓ニシテ五年前ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 142.9ニ當ル、概シテ斯業ハ近年振ハサルノ感アリ、漆器ハ年末現在戸數 6,825戸ニシテ前年ヨリ増加スルコト 186戸從業職工ハ 21,684人ニシテ之亦前年ヨリ増加セリ、而シテ産額ハ 1,058萬圓ニシテ五年前ノ百ニ對スル指數 123.0ヲ示セリ、漆器製造家ヲ地方別ニ見レハ 静岡縣ノ 794戸石川縣ノ 785戸最モ多ク 其産額ハ石川縣ノ約 147萬圓ヲ最モ多シト爲シ 静岡縣ノ約 108萬圓之ニ次ク。構寸ハ製造戸數 185戸ニシテ近年減少シタレ共事業ハ取テ衰退セス職工 21,933人ヲ算シ五年前ノ百ニ對スル指數 133.9ニ當リ産額ハ數量約 6億0,736萬打金額約 2,781萬圓ニシテ數量ハ五年前ニ比シ約一割五分ノ増加ナルモ金額ハ約十二割八分ノ増加ニ當レリ。機械製麥粉ハ製造家 16,875戸ニシテ前年ヨリ増加スルコト 1,667戸ナリ産額ハ約 58,587萬斤ニシテ前年ヨリ増加スルコト 10,536萬斤ナリ。澱粉製造ハ戸數 71,309戸ニシテ前年ヨリ減少シタルモ産額ハ異狀ノ増加ヲ示シタリ、即チ數量 1億2,611萬貫ニシテ前年ヨリ増加スルコト約 5,377萬貫ナリ。寒天製造ハ戸數 367戸職工 4,008人ニシテ共ニ多少ノ増加ヲ爲シ産額ハ數量約 34萬貫價額約 200萬圓ニシテ之ハ共ニ前年ニ比シ減少セリ然レ共既往ニ比スレハ 増加シ居ルコトハ實蹟ノ示スカ如シ。罐詰ノ製造戸數ハ漸次減少シテ 本年ハ 659戸トナリ職工モ又減シテ 546人トナレリ、産額ハ約 535萬圓ニシテ 前年ヨリ増加スルコト 68萬圓ナリ。製茶戸數ハ 1,103,968戸ニシテ前年ヨリハ稍々減シタレ共既往ニ比スレハ増加セリ 其産額ハ數量約 1,015萬貫價額約 1,681萬圓ニシテ之カ五年前ノ百ニ對スル指數ハ數量 117.2價額 117.1ニ當リ五年前ヨリ 17.1ノ増加ヲ示セルト同時ニ他而當時ノ市價ト本年ノ市價ト同一ナルコトヲ示セリ、製茶戸數ヲ地方別ニ見ルニ鹿兒島縣ノ 109,725戸最モ多ク廣島縣ノ 87,629戸熊本縣ノ 63,866戸宮崎縣ノ 57,648戸山口縣ノ 55,348戸等其多キモノニ屬シ其産額ハ静岡縣ノ約 674萬圓最モ多ク 三重縣ノ約 129萬圓京都府ノ約 106萬圓茨城縣ノ約 68萬圓鹿兒島縣ノ約 67萬圓滋賀縣ノ約 62萬圓等多シトス。壘表製造家ハ 88,650戸ニシテ前年ヨリ 1,215戸ヲ増セリ産額、壘表、萘萘、萘萘ヲ合セタルモノハ約 1,100萬圓ニシテ之カ五年前即チ明治四十四年ヲ百トシタル指數ヲ求ムレハ 105.6ニ當ル、壘表ノ製造家ハ大分縣ノ 20,370戸最モ多ク鹿兒島縣ノ 11,267戸廣島縣ノ 10,248戸等ヲ多シトシ、萘萘及萘萘ノ製造家ハ廣島縣ノ 6,330戸ヲ始メトシ福岡縣ノ 5,722戸鹿兒島縣ノ 2,084戸等ハ最モ多キモノナリ、壘表ノ産額ハ廣島縣ノ約 174萬圓大分縣ノ約 173萬圓岡山縣ノ約 78萬圓最モ多ク、萘萘及萘萘ハ岡山縣ノ約 186萬圓福岡縣ノ約 77萬圓廣島縣ノ約 72萬圓ヲ多

シト爲ス。麥稈眞田及經木眞田ノ製造戸數ハ 1,308戸ニシテ前年ヨリ増加セルコト 82戸、之ヲ地方別ニ見ルニ香川縣ノ 55,918戸岡山縣ノ 33,327戸最モ多シ又其産額ハ約 306萬圓ニシテ岡山縣ノ約 156萬圓香川縣ノ約 86萬圓廣島縣ノ約 42萬圓ヲ最モ多シト爲ス。マニラ眞田ハ製造戸數及其ノ從事人員ヲ詳ニセズ、之カ産額ハ約 1,100萬圓ニシテ之ヲ地方別ニ見レハ 神奈川縣ノ約 385萬圓東京府ノ約 146萬圓愛知縣ノ約 124萬圓兵庫縣ノ約 57萬圓等ヲ多シト爲ス。刷子及刷毛ノ製造家ハ 667戸ニシテ從事職工ハ 5,485人ナリ共ニ近年増加著シク 其産額ハ齒磨用約 478萬打其他約 143萬打此ノ價額前者ハ約 207萬圓、後者ハ約 224萬圓ニシテ 事業ノ發達見ルヘキモノアリ。鉛製造ハ 1,493戸ニシテ前年ヨリ増加スルコト約二倍ナリ從事職工亦從テ増加シ 14,965人ニシテ前年ニ比シ 8,684人ノ増加ヲ示セリ其産額ハ約 665萬圓ニシテ五年前ノ百ニ對スル指數 263.4ニ當ル鉛製造家ヲ地方別ニ見レハ 奈良縣ノ 536戸大阪府ノ 430戸最モ多ク 之カ産額ハ大阪府ノ約 266萬圓奈良縣ノ 136萬圓ヲ最モ多シトス。

【發明特許、實用新案、意匠、商標登録】 大正五年中ノ發明特許出願數ハ 6,388件ニシテ前年ヨリ増加スルコト 24件、其特許數 1,797件中内國人ノ出願ニ係ルモノ 1,457件外國人ノ出願ニ係ルモノ 340件ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ内國人ハ 13件ヲ減シ外國人ハ 28件ヲ増加セリ。實用新案登録ノ出願數ハ 14,195件ニシテ前年ヨリ少ナキコト 1,543件ニシテ其登録數ハ 3,749件中内國人 3,745件外國人 4件ナリ、之ヲ前年ニ比スレハ内國人 451件ヲ減シ外國人 1件ヲ減シタリ。意匠登録、出願數ハ 3,109件ニシテ前年ニ比シ 563件ヲ減ス其登録數ハ 1,479件中内國人 1,474件外國人 5件ニシテ之ヲ前年ニ比スルニ内國人ハ 188件ヲ減シ外國人ハ 4件ヲ増加セリ。商標登録ノ出願數ハ 14,074件ニシテ前年ニ比シ 860件ヲ増シ其登録數ハ 6,776件中内國人 6,397件外國人 382件ニシテ前年ニ比シ内國人 50件外國人 83件ヲ減シタリ。發明特許及實用新案登録ノ趨勢ヲ知ランカ爲メ近キ十年間ヲ二分シ明治四十年ヨリ同四十四年ニ至ル前五年ト大正元年ヨリ同五年ニ至ル後五年トヲ比較スルニ發明特許ノ出願數ハ前五年 28,383件後五年ハ 33,470件ニシテ前五年ノ百ニ對スル後五年ハ 117.9ニ當リ出願數ノ漸次増加シツ、アルヲ知ルヘク而シテ内國人ニ係ル特許數ハ前五年ハ 6,836件後五年ハ 6,890件ニシテ前五年ノ百ニ對スル後五年ハ 102.3ニ當リ出願數ノ増加ニ若カス、出願ニ對スル特許ノ比例ハ(假ニ内國人ノミヲ算ス)前五年ハ 24.08%後五年ハ 20.58%ニ當ル即チ出願數ノ増加ト共ニ特許數モ増加シタレ共而モ其出願件數中ニハ特許ニ値セサルモノ甚タ多カリシヲ知ル。實用新案モ略々之ニ同シク前五年ノ出願數ハ 59,038件ニシテ後五年ハ 77,616件ナリ之ヲ前五

年ノ百ニ對スル後五年ノ指數ヲ求ムレハ 131.5ニ當リ出願數ノ遞増セルコト夥シキヲ知ルヘシ而シテ内國人ニ係ル登錄數ハ前五年 18,710件後五年ハ 18,979件ニシテ前五年ノ百ニ對スル後五年ハ 101.4ニ當リ當ニ出願數ノ増加ニ若カサルノミナラス、特許ノ同一指數ヨリ更ニ低シ、此ノ出願ニ對スル登錄ノ比例前五年ハ 31.69%後五年ハ 24.45%ニ當リ是亦登錄ニ値セサルモノヲ多ク出願セルニ因ルナラン。然レ共此ノ事實ヲ以テ直ニ本邦人ノ發明力カ漸次枯渴セルカ如ク看做スヘカラス、何トナレハ科學ノ進歩ニ伴ヒ發明ニ對スル審査ノ標準モ高マリ且ツハ萬一ノ僥倖シテ不完全ナルモノヲ出願スル者多キカ故ニ特許比例ノ低下スヘキハ當然ノコトナレハナリ、故ニ發明ノ特許比例並ニ實用新案ノ登錄比例カ今日以上彌カ上ニモ増進センコトハ希フ所ナレ共而モ之カ低キハ審査精撰ノ結果ナリトスレハ今日ノ如ク出願ニ對スル特許數登錄數ノ少ナキハ反テ發明家ノ努力ヲ促シ我カ發明界ノ爲メニ寧ロ悦フヘキナリ。大正五年ノ内國人ノ出願ニ係ル發明ノ特許數ヲ種類別ト爲セハ機械工業ニ關スルモノ 735件化學工業ニ關スルモノ 312件電氣工業ニ關スルモノ 163件家具及被服類ニ關スルモノ 217件ナリ。又内國人ノ出願ニ係ル實用新案登錄數ヲ種類別ト爲セハ機械工業ニ關スルモノ 1,395件化學工業ニ關スルモノ 145件電氣工業ニ關スルモノ 191件家具及被服類ニ關スルモノ 2,014件ナリ、更ニ之ヲ百分比比例ニテ示セハ發明特許ハ機械工業ニ關スルモノ 50.45%化學工業ニ關スルモノ 23.47%電氣工業ニ關スルモノ 11.19%家具及被服類ニ關スルモノ 14.89%ニ當リ、實用新案ハ機械工業ニ關スルモノ 37.25%化學工業ニ關スルモノ 3.87%電氣工業ニ關スルモノ 5.10%家具及被服類ニ關スルモノ 53.78%ニ當レリ。由是觀之發明特許ハ機械工業ニ關スルモノ最モ多ク化學工業ニ關スルモノ之ニ次キ電氣工業ニ關スルモノ最モ少ナシ。實用新案ハ之ト異リ家具及被服類ニ關スルモノ最モ多ク機械工業之ニ次キ化學工業ニ關スルモノ最モ少ナシ。是ハ發明ト新案トノ性質上ヨリ應ニ然ルヘキコトナラン。

X. 外國貿易

大正六年中本邦内地ニ於ケル輸出入物品總價額ハ 2,694,231,423圓ニシテ、内輸出 1,640,709,288圓、輸入 1,053,522,135圓、差引輸出超過 587,187,153圓ナリ。之ヲ前年ニ比スルニ、總額ニ於テ約 7億7,050萬圓、輸出 4億 8,752萬圓、輸入 2億 8,298萬圓ヲ増加セリ、隨テ輸出超過額亦 2億 453萬圓ヲ増加セリ、右輸出入額ヲ帝國内地現住人口ニ比スルニ、人口一ニ付輸出 29圓23錢、輸入 18圓80錢、總額 48圓 9錢ニ當リ、前年ニ對シ輸出 8圓41錢、輸入 4圓86錢、總額 13圓 26錢ノ増加ヲ示ス。

今 1917年ト主要外國ノ貿易總額ヲ見ルニ北米合衆國 180億圓、

トナラン、以上ノ事實ハ以テ本邦發明界ノ一斑ヲ知ルノ料ト爲スニ足ランカ。

【諸備實金】 諸備實金ハ各職業共ニ年々上昂シ 近キ既往ニ於テハ大正二年ヲ最高トシ同三年ニ至リ稍低下シ 同四年更ニ低落セリ、而シテ大正五年ニ至リテ又昂騰セリ。今各職業ニ就キテ見ルニ同シク騰貴セルモノノ中ニ於テモ 其間自ラ弱弱ノ差アリ、即チ諸職業中最モ著シキ騰貴ヲ爲セルハ 器具製造ニ關スル職業ニシテ例ヘハ鍛冶職ハ 74.8錢ニシテ前年ヨリ 5.8錢高ク、明治三十三年ヲ百トシタル指數（以下單ニ指數ト稱ス）156.3ニ當リ。鑄物職ハ 74.5錢ニシテ前年ヨリ 4.7錢高ク指數 159.6ニ當リ。鋳職ハ 68.5錢ニシテ前年ヨリ 4.2錢高ク指數 164.3ニ當ルカ如キハ其ノ最ナルモノナリ。次ニ騰貴シタルハ衣服身製品ニ關スルモノニシテ就中袋物職及綿打職ハ主タルモノナリ、即チ前者ハ 68.8錢ニシテ前年ヨリ 6.0錢高ク指數 156.8ニ當リ、後者ハ 52.0錢ニシテ前年ヨリ 5.2錢高ク指數 140.5ニ當ル。次ニ騰貴率高キハ建築ニ關スル職業ニ油絞職、日雇人夫、下男、下女等ヲ包含スル雜職業ニシテ、飲食物ニ關スル職業。農事ニ關スル職業ハ其騰貴率微々タリ。建築ニ關スル職業中最モ騰貴セルハ 煉瓦積職ノ前年ヨリ 2.5錢騰貴セルト、石工ノ前年ヨリ 2.3錢騰貴セル等ナリ。雜職業中ニ於テハ紙漉職、日雇人夫、油絞職等ハ騰貴セルモノニ屬ス。飲食物ニ關スル職業中ニハ米搗、菓子製造職ハ騰貴ノ著シキモノナリ。農事ニ關スル職業ニ特ニ騰貴セルモノナキモ 農作日傭男ノ如キハ其ノ主タルモノナリ。而シテ諸職業中前年ヨリ低下シタルモノヲ求ムルニ皆無ナリト言フ能ハス 即チ農事ニ關スル職業中漁夫、蠶絲繰女ヲ始メ和服仕立職、煙草刻職、船大工等數種アリ、漁夫ハ 57.0錢ニシテ指數 146.2ニ當リ前年ヨリ 2.0錢低下シ蠶絲繰女ハ 30.8錢ニシテ指數 155.0ニ當リ之亦前年ヨリ 2.0錢低下セリ 其他ハ極ク僅少ノ低下ヲ示セルニ過キス。以上ハ日傭ニ就テノ事實ノ一、月傭、年傭ニ於テモ大體以上ト同一歩調ヲ辿リ居ルヲ見ル。

英帝國 162億圓、佛國 78億圓（1916年）、西班牙 13億圓、伊太利 89億圓ニシテ、英、佛、伊ノ三國ハ悉ク輸入超過巨大ナリ。就中佛、伊ノ輸入ハ輸出ノ約三倍ニ當リ 英國ハ約二倍ニ近シ。反之米國ハ輸出額輸入ノ倍以上タリ。右各國ノ貿易總額ヲ人口一人ニ對スル比例ヲ以テ示セハ米 171圓 74錢、英 341圓 26錢、佛 196圓 77錢、西 51圓 06錢 伊 109圓 50錢ナリ。

外國貿易ニ關スル統計材料ハ 明治維新以來我國統計中最モ豊富ニシテ且比較の整備セルモノ、一タリ、隨テ本書ニ於テモ明治元年以來ノ累年數ヲ掲出セリ、而シテ此間ニ於ケル貿易ノ趨勢ハ之

ナ本書前回ノ部ニ略述シタリ、即チ更ニ其ノ大要ヲ掲ケレハ、明治元年僅ニ 2,600萬圓ヲ以テ初マリシ我貿易ハ、極メテ少數ノ例外ヲ除クノ外逐年増加シ二十七八年十倍ノ額ニ上リ、大正六年ニ至リテ正ニ元年數ノ百倍ニ達セリ、而シテ其ノ間輸出入ノ差ヲ見ルニ元年ヨリ十四年ニ至ルマテハ、僅ニ二回ノ輸出超過アル外常ニ輸入超過ニ在リ、反之十五年ヨリ二十六年ニ至ルマテハ同シク二回ノ例外アル外常ニ輸出超過タリ、而シテ二十七年以降大正二年ニ至ル二十年間ハ、四十二三年ノ二年間ニ亘リ少額ノ輸出超過ヲ示シタル外全ク輸入超過ヲ以テ終始セリ、此ノ殆ント一定ノ我貿易上ノ恒例ハ最近ノ大戰役ノ期ニ入りテヨリ全ク變調ヲ來シ著シキ輸出超過ト爲リ、而モ大正六年ニ於テハ其ノ額 5億圓ニ上リ全ク空前ノ大數ヲ示ス。

帝國ノ外國貿易ハ右ノ外尙朝鮮及臺灣ノ數アリ、其ノ大正六年ノ額朝鮮ハ 4,924萬圓、臺灣ハ 6,131萬圓ニシテ 共ニ前年ニ比シ約 1,460萬圓ノ増加ヲ示ス、而シテ臺灣ハ本土ト同シク輸出超過ナルニ、朝鮮ハ反之輸入超過ナルモ亦前年ト等シ、右二地方ニ於ケル帝國内地ノ地方トノ移出入ノ數ハ固ヨリ 前記貿易額中ニ之ヲ含マス。

前掲内地貿易額中ニハ、輸出ニ 3,770萬圓、輸入ニ 1,771萬圓ノ所謂特別輸出入額、即チ、在外公館用品、外國艦船用品、博覽會用品、外國航行内國船船用品（以上輸出）御料品、外國公館用品、海軍艦船及同材料、兵器彈藥及爆發物、本邦ヨリ 出漁セル船舶ノ捕獲採集セル水産物（以上輸入）ノ輸出入ノ金額ヲ包含ス、仍テ之ヲ除キタル大正六年普通ノ貿易額ハ、輸出 16億 3,005萬圓、輸入 10億 3,581萬圓ナリ、尙此ノ輸出中ニハ外國產ノ再輸出 1,851萬圓、輸入中ニハ内國產ノ再輸入 583萬圓ヲ各包含ス。

右特別輸出入ヲ除キタル内地ノ貿易額ヲ相對國ノ大洲別又ハ國別ニ就キテ見ルニ、輸出ハ亞細亞 7億 411萬圓、北米 4億 9,597萬圓、歐羅巴 3億 3,518萬圓、南米 758萬圓、亞弗利加 2,080萬圓、其他 3,593萬圓ニシテ、之ヲ分節比例數ニ依リ示セハ、亞細亞 439%、北米 309%、歐羅巴 209%、南米 4%、亞弗利加 13%、其他 24%ナリ、尙之ヲ國別トスルトキハ北米ノ殆ント全部即チ 4億 7,853萬圓 298%ハ合衆國ニ屬シ 我輸出國中ノ第一タリ、次テ支那ノ 3億 1,838萬圓、198%、英國ノ 2億 264萬圓 126%、相次テ著シク多額ナリ、之ニ次テハ英領印度 1億 135萬圓、63%、佛蘭西 9,782萬圓、61%等ニシテ 皆前年ニ比シ大ニ増加セリ、而シテ前年ニ於テ合衆國支那ニ次テ我輸出國中ノ第三位タリシ 露領亞細亞ハ本年大ニ其ノ額ヲ減シ 7,423萬圓 46%ニシテ實ニ佛國ノ次ニ位スルニ至レリ、尙歐洲露西亞亦著シク減少セル外、亞細亞、歐羅巴ノ各國一トシテ前年ヨリ 増大セサルハナシ、就中露領印度及伊太利ニ對スル

輸出大ニ増加セリ、亞弗利加各地及南米諸國ニ對スル輸出ハ其實額未タ多カラサルモ前年ニ引續キ更ニ一層ノ増進ヲ示ス、獨リ濠洲其他大洋洲ノ各地ニ對シテハ 何等ノ進展ヲ見ス、殆ント前年ト同一ナリ。

大正六年中ノ輸入貿易ハ、亞細亞 4億 7,551萬圓、北米 3億 6,227萬圓、歐羅巴 8,217萬圓、亞弗利加 3,979萬圓、南米 1,448萬圓、其他 3,983萬圓ニシテ之ヲ分節比例トスルトキハ亞細亞 459%、北米 349%、歐羅巴 79%、亞弗利加 38%、南米 14%、其他 38%ナリ、而シテ尙之ヲ國別ニ細觀スルトキハ合衆國 3億 5,970萬圓、347%ニシテ 北米ノ殆ント全部ヲ占ムルコトモ 將々我輸入國中ノ第一タルコトモ前年ト異ルナク、而モ前年ヨリノ 増加著大ニシテ其額實ニ 1億 5,563萬圓ヲ算ス、英領印度 2億 2,394萬圓、216%、支那 1億 3,327萬圓、128%ニシテ第二位、第三位タル亦前年ト異ルナシ、而シテ英吉利ノ第四位タルハ 其ノ順位前年ト異ルナキモ其額ハ 6,330萬圓、61%ニシテ甚シク減少セリ、以上ノ諸國ヲ除ケハ我國ニ對スル貿易ノ輸入國ハ大體亞細亞ノ 各國ハ前年ニ比シ其ノ額ヲ少シク増加シ歐羅巴ノ 各國ハ何レモ減少セリ、又濠洲等ハ前年ヨリ減少シ亞弗利加各地及南米諸國ヨリノ 輸入ハ著シク増加シタルモ輸出ノ場合ト同一轍ナリ 殊ニ喜望峯殖民地及ナタル地方ヨリノ輸入ノ増大異常ナリ。

大正六年中ノ輸出品ノ金額ヲ其ノ 物品六大種別ニ就キ之カ分節比例ヲ見ルニ、粗生食料品 4.5%、製造食料品 6.2%、原料品 5.1%、原料用製品 45.3%、全製品 36.7%、其他ノ雜品 2.2%ニシテ、原料用製品最モ多ク全製品之ニ次キ此ノ二者ヲ合シテ 82.0%ニ當リ我輸出貿易品ノ大部分ヲ占ム、今此ノ六種別ヲ十年前ノ明治四十一年ヲ 100トシタル指數ニ付十年間ノ發達ヲ見ルニ、粗生食料品 514、製造食料品 369、原料品 197、原料用製品 425、全製品 484、其他ノ雜品 836、平均 423ナリ、サレハ六種何レモ十年間ニ大ナル發達ヲナセルヲ見ルモ原料品及製造食料品發達遲緩ニシテ 平均以下ニ在リ雜品及粗生食料品平均ヲ超ユルコト 高ク顯著ナル發達ヲ示ス、而シテ我輸出品中ノ 83%ヲ占ムル全製品及原料用製品ノ二者ハ其發達略平均ニ近ク少シク其ノ上ニ在リ。

六大種別ノ輸入ニ付同一比例ヲ見ルニ、粗生食料品 2.0%、製造食料品 1.6%、原料品 54.5%、原料用製品 31.1%、全製品 10.0%、其他ノ雜品 0.8%ナリ、即チ輸入品中ノ主要ナルモノハ原料品及原料用製品ノ二種ニシテ二者ヲ合シテ 85.6%ヲ占ム、之ヲ輸出ト對照スルトキハ我國ノ貿易ハ原料品及原料用製品ヲ輸入シ原料用製品及全製品ヲ輸出スル貿易ナリト言フヲ得ヘシ、今右輸入品ノ六大種別ヲ、輸出ニ於ケル同シク 明治四十一年ヲ 100トシタル指數ニ付キテ見ルニ、粗生食料品 49、製造食料品 60、原料品 308、原

料用製品 883、全製品 81、其他ノ雜品 238、平均 237ナリ、サレハ輸入ノ輸出ノ場合トハ大ニ趣ヲ異ニシ、原料品及原料用製品ノ輸入ノ主要種類ハ大ニ増加シ、雜品ノ發達ハ殆ト平均ニ等シキ外他ノ三種類ハ十年前ニ比シ絶對的ニ減少シタルヲ見ル、但シ全製品及粗生食料品ノ二種ハ前年ヨリハ少シク増加セリ。

大正六年中輸出品ノ金額 10%以上ノ物ヲ、百萬圓單位ヲ以テ列記スレハ、生糸 355.1(221%)、綿織絲 108.1(67%)、汽船 97.6(60%)、銅(塊及錠) 87.4(54%)、羽二重 47.4(29%)、生金巾及生シ一チング 40.1(25%)、豆類 33.6(21%)、綾木綿 26.8(16%)、石炭 26.4(16%)、精糖 26.1(16%)、燐寸 24.5(15%)、亞鉛(塊及錠) 20.9(13%)、眞鍮及黃銅(板) 18.7(11%)、綿メリヤス肌衣 16.7(10%)、等ニシテ、以上悉ク前年ニ比シ増加セサルハナシ殊ニ生絲及汽船ノ激増甚シク綿類及蠶産物ノ増加亦顯著ナリ、比較其増加ノ緩ナルハ燐寸及羽二重ナリ、尙絹、綿等ノ絲及其織物ノ總價額ヲ合算スルトキハ 7億圓ヲ超エ我輸出ノ大部分ハ一ニ此ノ二種ノ原料及製品ニ存スルヲ知ルヘク、同時ニ又我輸出ノ對手國ハ北米合衆國及支那ニ在ルコトモ容易ニ之ヲ推察スルヲ得ヘシ。

輸入品ニ付キテ同シク 10%以上ノ物ヲ百萬圓單位ヲ以テ列記スレハ、綿綿 329.9(318%)、鐵(電鍍セサル板) 91.7(88%)、羊毛 52.1(50%)、鐵(條、竿、テ、アングル形類) 46.3(44%)、鐵(塊及錠) 25.2(24%)、大麻、黃麻及マニラヘンブ 16.7(16%)、葉鐵及葉鋼 11.7(11%)、砂糖 11.6(11%) 等ニシテ、砂糖ノ輸入前年ニ比シ少シク減少シタル外悉ク増加セリ、殊ニ鐵類ノ激増甚シ、但シ右ハ主トシテ價格ノ騰貴ニ基クモノ、如シ其ノ數量ノ増減如何ハ前年鑑所掲ノ數ト對照セハ之ヲ明ニスルヲ得ヘシ。

大正六年中ノ外國貿易ヲ月別ニ依リテ見ルニ一月二月ノ年始ニ

XI. 內國商業及會社

【商業會議所】 大正五年末内地ニ於ケル商業會議所ノ總數ハ 60所アリ、同一府縣ニシテ二個所以上ヲ有スルモノ北海道及青森、山形、栃木、群馬、東京、新潟、富山、福井、長野、岐阜、静岡、愛知、三重、京都、廣島、福岡ノ 1道 2府 14縣アリ、又全ク存セサルモノ岩手、福島、千葉、奈良、鳥取、愛媛、大分、宮崎、沖縄ノ 9縣アリ、他ハ悉ク一縣一個所ヲ有ス、昔前年ト同一ナリ、議員數及特別議員數ハ 1,837及 398ニシテ共ニ前年ニ比シ稍々増加シタリ、選舉權者ノ數ハ營業稅改正ノ結果前年ニ於テ激減シタルモ、本年ハ前年ニ比シ 3,890人ヲ増加セリ、一箇年度ノ經費ハ 395,632圓、一會議所平均 6,594圓、前年ニ比シ 37,679圓一會議所平均 628圓ヲ増加シタリ。

【取引所】 大正五年末内地現在取引所ノ數ハ 42ニシテ悉ク

於テハ却テ前年末ヨリ少ク、漸次増加シ殊ニ九月以降激増ス、但シ四月、六月、八月等ハ却テ前月ヨリ少シ、尙同年中ハ各月共輸出超過ヲ以テ一貫セル點前年ト軌ヲ一ニス。

大正六年中輸出貿易ノ事實アル港數二十九港ナリ、其貿易金額ノ多キモノヲ總價額ニ對スル比例ヲ以テ掲クレハ、横濱 416%、神戸 299%、大阪 159%、敦賀 28%、門司 26%、長崎 12%、名古屋 10%等ニシテ他ハ其ノ以下ナリ、右ノ内敦賀ハ前年ニ比シ激減シタルモ他ハ定數ニ於テハ何レモ増加ヲ呈ス就中大阪ノ増加著シ。

同年輸入ノ事實アル港數三十港其ノ額ノ多キモノハ、神戸 512%、横濱 277%、大阪 90%、門司 38%、四日市 27%、長崎 12%、等ナリ他ハ 10%ニ達スルモノナシ、茲ニ掲出セル諸港ノ貿易實數ハ獨リ長崎ヲ除ク外皆前年ヨリ増加セリ、殊ニ輸入港トシテ神戸ノ發展顯著ナリ、大阪ハ輸出ニ於テ激増セルニ似ス輸入ノ増加甚タ少シ。

輸出入物品價額ヲ物品ノ積載船籍別ニ見ルニ、輸出入共ニ其ノ約 80%ハ本邦ノ在籍船ニ屬シ、輸出ノ 9%輸入ノ 10%ハ英船ニ屬シ、他ハ佛、露、蘭及其他ノ國ノ船舶ニ分屬ス、本邦船ノ量前年ニ對シ更ニ一層増加セリ、從テ外國船ノ積載ニ係ルモノ愈減少セリ。

大正六年中ノ金銀貨及金銀地金ノ輸出入ノ總額 545,961,337圓、内輸出 153,736,340圓、輸入 392,224,997圓ニシテ差引輸入超過額 238,488,627圓ナリ、前年ニ比シ更ニ 165,538,144圓ノ輸入超過額ヲ増加セリ、而シテ輸出ハ英領印度(102.9百萬圓)、支那(25.2百萬圓)、香港(19.6百萬圓)等ニ向ヒ、輸入ハ主トシテ北米合衆國(338.5百萬圓)、露領亞細亞(39.0百萬圓)等ヨリス。

株式會社組織ナリ、前年ニ比シ 2ヲ減セシハ株式會社組織タル福島縣ノ福島蠶絲米穀取引所及唯一ノ會員組織タル兵庫縣ノ加東米穀取引所ノ解散セシニ據ル、從テ會員組織ノ取引所ハ一ツモ存セサルニ至レリ、仲買人員 806是亦前年ニ比シ 4人ヲ減ス、取引所ノ拂込資本金ハ 28,597,200圓、一取引所平均 680,888圓ナルモ東京株式ノ 8百萬圓大阪株式 7百萬圓 其他百萬圓以上ノモノ 5會社アル外各地方ノ取引所多クハ法令ノ最低限タル 10萬圓ナリ、同年末準備積立金ハ 3,197,743圓ニシテ、取引所數ハ前年ニ比シ減少シタルニ拘ラス、647,228圓ヲ増加セリ、一年間ノ收入亦前年ニ比シ總額ニ於テ、3,668,629圓ヲ増加シ、賣買手數料ニ於テ 3,231,815圓ヲ増加ス、支出亦増加ヲ示ス。

取引所中米穀取引所、若クハ米穀ノ取引ヲ爲ス取引所ノ數ハ 38

ナリ、右 38個所ノ取引所ニ於テ大正五年中取引シタル總石高ハ 3,9,207,903石ニシテ前年ニ比シ 87,051,600石ヲ増シ、3割 4分ノ増加ニ當ル、之ヲ月別ニ見ルニ、大體ニ於テ本年ハ取引額多額ナルモ、正月ニ激減シ爾後五月ニ至ルマテ甚タシキ増減ヲ見サリシニ、六月ニ急ニ増加シ爾後十月ヲ除ク外遞次増加ニ向ヒ、年末最高ニ達セリ。

取引高ニ次テ掲ケタル 公定相場ノ取引所施行規則第十八條ニ依リ取引所ニ於ケル當限米毎日平均相場ヲ一箇月間ニ平均シタルモノニシテ、其累年表ハ更ニ各取引所ノモノヲ全國平均シタルモノナリ、今其數ニ就キテ見ルニ、大正五年ハ最近數年中ノ最モ暴落シタル前年ニ比スレハ、稍々上騰シタルモ、最近五箇年間ノ平均 16圓 7錢餘ニ比スレハ、概シテ下落ノ域ヲ脱セサルナリ、即チ前年第二ノ高價ヲ示シタル十二月以後本年十月マテ十二、三圓臺ヲ上下シ、甚タシキ上騰ヲ見サリシニ、十一月ニ至リ、急ニ上騰シ、十二月更ニ上騰シ、最近五箇年間ノ平均數ツニ近ツクニ至レリ。

【物價】 本書ニ掲ケル物價ハ農商務省ニ於テ各地商業會議所ヨリ報告セシメタル 主要物品ノ一箇年平均物價ニシテ二表ヲ掲出セリ、一ハ東京、大阪、兩市ニ就キ、明治三十二年以降大正五年ニ至ル米以下二十種ノ物價累年表ニシテ、一ハ同シ物品ニ就キテ大正五年ニ於ケル全國二十六都會ノ物價ナリ。

東京大阪二市ニ於ケル累年物價ヲ見ルニ、年ノ豐凶ニ依リ、供給ノ差異アル米、麥、大豆等ノ如キ、貿易ノ關係ニ依リ相場ノ高低アル綿絲、生絲、石炭等ノ如キ、若ハ稅率ノ變更ニ依リ著大ノ影響ヲ受ケル清酒、醬油、砂糖等ノ如キ一律ナラスト雖モ大體物價ノ逐年騰貴ハ自然ノ形勢ニシテ、而モ最近大正元年乃至三年ニ最高ヲ占ムルモノ多キニ居ルガ如シ、然ルニ此ノ騰貴ノ趨勢ハ大正四年ニ於テ一旦下落ノ徵ヲ現シタリシカ大正五年ニ於テ再ヒ騰貴ノ趨勢ニ向フ即チ東京ニ於テ薪、大阪ニ於テ茶、醬油ハ前年ニ比シ稍々下落シタルモ、其ノ他ハ悉皆騰貴シタリ殊ニ東京ニ於テ茶、紡績綿絲、生絲、晒木綿、晒金巾、石油、石炭、炭、半紙、大阪ニ於テ和白糖、石油、半紙、杉四分板アリ。

【會社】 大正五年末現在帝國內地ニ本店ヲ有スル會社ノ總數ハ 18,219會社ニシテ其拂込資本金ハ 24億 3,407.4萬圓ナリ、前年ニ比シ社數 1,070資本金 2億 66百萬圓ヲ増加セリ、右大正五年末ノ數ヲ組織別ニ見ルニ、株式會社(株式合資會社ヲ含ム) 7,500社、20億 9,078.6萬圓、合資會社(相互會社ヲ含ム) 7,485社、1億 4,434.7萬圓、合名會社 3,234社、1億 9,894.2萬圓ニシテ前年ニ比シ株式 300社 231,832圓、合資 591社 16,657圓、合名 179社 17,862圓ヲ増加セリ。

右會社ヲ拂込資本金ノ多少ニ依リテ見ルニ、五萬圓未滿ノ社數

最モ多ク、會社總數ノ 68.67%ヲ占ム、之ニ五萬圓以上十萬圓未滿ノ 9.70%、十萬圓以上五十萬圓未滿ノ 14.58%ヲ加フルトキハ 92.95%、即チ總數ノ 九割二分強ハ資本金五十萬圓ニ滿タサル會社ニシテ五十萬圓以上ノ會社ハ 1,284社 7.05%ニ過キス、併シナカラ、大正三年ト同四年トノ間ヲ割シテ著シク現レタル大會社増加ノ趨勢ハ本年モ亦之ヲ看取スルコトヲ得、即チ五萬圓未滿ノ會社數ハ前年ト大差ナキモ五萬圓以上十萬圓未滿ノ會社數ハ減少シ、反之五十萬圓以上ノ會社數ハ前年ノ 6.71%ヨリ 7.05%ニ増加シタリ、此現象ハ主トシテ株式會社ノ増資又ハ創立ニ基キ、合資合名等ハ深ク關與セサルカ如シ、尙資本金集中ノ多少ヲ拂込資本階級別並ニ組織別ニ就テ見ルトキハ株式會社ニ於テ大資本ノ會社級ニ最モ資本ヲ集中シ居ルカ、之ニ次テハ合名會社亦大資本ヲ集中セリ、反之合資會社ハ小資本會社級ニ資本金ヲ集中セリ。

大正五年末會社數ヲ營業目的別ニ依リテ見ルニ、農業 485工業 5,942、商業 10,551、水陸運輸業 1,241ニシテ即チ半數以上ハ商業會社ナリ、之ヲ前年ニ比スルニ、商業、工業最モ増加シ、之ニ次テ運輸業稍々増加シ農業會社ハ却テ 7ノ減少ヲ示ス、更ニ組織別ニ見ルニ、工業會社ハ各組織ヲ通シテ其増加ヲ示スモ、就中合資會社増加夥シ、運輸業ハ株式會社合資會社ニ増加セシニ反シ、合名會社ニ減少ス、商業ハ株式、合資、合名ノ何レモ皆増加ス、農業ニ於テハ合資及合名組織増加シ、株式組織減少セリ。

拂込資本金ヲ目的別ニ見ルニ、農業 3,174.6萬圓、工業 10億 5,710.8萬圓、商業 10億 7,142.4萬圓、運輸業 2億 7,379.5萬圓ニシテ何レモ前年ニ比シ増加ス、但シ各組織別ニ入りテ見ルトキハ、農業ノ株式會社並運輸業ノ合名會社ハ社數減シテ却テ資本金増加シ農業ノ合名會社、商業ノ合資會社並運輸業ノ合資會社ハ社數増シテ資本金減少セリ、一會社平均拂込資本金ハ運輸業 220,624圓、工業 117,904圓、商業 101,547圓、農業 65,456圓ノ順位ニシテ、悉ク前年ニ比シ増加セリ、各種共ニ株式資本最多ニシテ、合資資本最少ナリ、尙拂込資本金ヲ各種ノ會社ニ分チ、百分比例トシテ見ルトキハ商業 44.02%、工業 43.43%、運輸業 11.25%、農業 1.30%ヲ示ス、商業ノ最多ハ其ノ會社數最モ多キニ基ク、工業會社ニ投下セラルル資本ハ今日未タ商業ニ及ハスト雖モ其明治三十八年以來進歩ノ偉大ナル、近ク商業ヲ凌駕スヘキノ時アルヲ想ハシム、運輸業會社ノ資本明治三十八年ニ於テ 32.45%タリシニ、最近 11.25%ニ減シタルハ、鐵道國有ノ結果ニ外ナラス。

次ニ積立金ハ大正五年末 8億 4,173.8萬圓ニシテ前年ヨリ 1億 7,651.9萬圓ヲ増加ス、拂込資本金ニ對シ 34.9%強ニ當ル、此ノ割合亦前年ヨリ稍々増加セリ、之ヲ營業種類ニ依リテ見ルトキハ、商業會社最モ積立金ノ割合多ク、運輸業會社及農業會社少シ、多キ

ハ舊設ノ會社多數ヲ占ムルニ基ツキ、少キハ新設ノモノ多キニ依ルナランカ。

大正五年末現在會社數及其資本金ノ營業種類細別ヲ見ルニ、先ツ農業ニ於テハ會社數ハ蠶業ノ 31、漁業 96、牧畜及搾乳 81、等多ク、拂込資本金ハ開墾及耕作 1,531萬圓、漁業 765萬圓、捕鯨 338萬圓、山林 219萬圓等ニ多ク投下セラル、而シテ平均一會社ノ拂込資本金ノ多キハ捕鯨 56.4萬圓、開墾及耕作 21.2萬圓、漁業 7.9萬圓等ナリ。工業ハ其種類甚々多シ、其内會社數ノ多キハ、酒造 503、電氣業 393、生絲 302、味噌醬油及酢 284、印刷及製本 205、製材 186、染物及絲布ノ精練整理 175、綿織物 165、精穀 151、諸機械 141、醫藥及賣藥 129、工業業 119 採礦及製煉業 115、土木建築工業 106、麴 102、等多ク、拂込資本金ハ電氣業 26,903萬圓、採礦及製煉業 11,390萬圓、綿絲紡績 9,289萬圓、瓦斯等 7,041萬圓、石炭採掘 5,306萬圓、石油採掘及精製 3,958萬圓、製紙 3,563萬圓、造船 3,170萬圓、毛織物 1,928萬圓、工業藥 1,866萬圓、銅鐵工場 1,833萬圓等ニ最モ多ク投資セラル。而シテ一會社平均拂込資本ノ多額ナルハ、麥酒 336萬圓、綿絲紡績 273萬圓、製糖 161萬圓、造船 117萬圓、石油採掘及精製 164萬圓ニシテ、右ハ何レモ平均百萬圓以上ノ大資本會社ノ下ニ經營セラルル工業ナリ。次ニ商業ハ會社數最モ多ク其種類モ亦多種ナリ、社數ノ多數ナルハ、銀行及貸金 3,544ニシテ商業會社總數ノ三分ノ一以上ヲ占ム、次テ諸織物 534、倉庫業 408、穀類 364、水産物 339、不動産賣買及貸貸 319、信託業 298、遊覽場及演戲場 223、木材 206、肥料 132、酒醬油及味噌 184等多數ナリ、拂込資本金ニ就キテ見ルニ、是亦銀行及貸金 67,527萬圓最モ多ク、商業會社ノ總資本ノ半額以上ヲ占ム、之ニ次テハ所有財産ノ保管及管理 9,170萬圓、不動産賣買及貸貸 3,122萬圓、取引所 2,842萬圓、保險業 2,771萬圓、貿易 2,133萬圓、諸織物 2,284萬圓等ニシテ、各種ノ販賣業ニ關スル會社ハ社數頗々多キニ拘ラス、投下資本比較的少シ、從テ一會社平均資本ニ於テモ、所有財産ノ保管及管理ノ 509萬圓ヲ除クノ外、取引所ノ 66萬圓ヲ最高トシ、他ハ其以下ノモノノミニシテ、工業會社ノ如ク一會社平均百萬圓以上投下セラルルカ如キ大資本ノモノナシ。次ニ運輸會社ハ水運業會社數最モ多ク、軌道運輸會社數之ニ次クモ其資本額ハ軌道運輸業ニ多ク、水運業ハ少シ、從テ一會社平均資本ニ於テハ、軌道運輸業 65萬圓ナルモ水運業ハ 34萬圓ニスキス、尙會社ノ營業種類細別ハ之ヲ各種毎ニ前年ノ數ト對照スルトキハ、少ナカラス變動ヲ認ムト雖モ、本表ノ分類ニ就キテハ、原材料ニ於テ多少ノ疑ヲ揮ムノ餘地アルカ如キヲ以テ、深ク立入

リテ記述スルヲ避ケタリ。

大正五年末現在會社ノ各府縣分布ノ狀況ヲ見ルニ、其事業ハ數府縣又ハ全國ニ及フモノアリト雖モ主タル事務所ノ所在ニ依レハ東京 2,231ノ最多ハ固ヨリ論ナク、之ニ次キテ、大阪 1,330、兵庫 1,217、愛知 1,153、北海道 825、長野 804、静岡 652、神奈川 632、京都 500、等會社數多ク、沖繩 29ヲ最少トシ、宮崎 81、鹿兒島 83、奈良 94、徳島 95等ハ會社少キ方ナリ、資本金ノ多少分布ハ必スシモ右會社數ノ多少ト一致セス、東京 975百萬圓ニ次キテハ、大阪 331百萬圓、兵庫 163百萬圓、神奈川 118百萬圓等ニシテ愛知 82百萬圓、福岡 61百萬圓、新潟 60百萬圓、京都 55百萬圓ノ順位ナリ、最少ノ方面ニ於テモ亦、宮崎ノ 5百萬圓ニ達セサルヲ最少トシ、鳥取、沖繩、僅ニ五百萬圓臺ナリ、尙金額別ニ就キ各府縣ノ特徴ヲ細觀スルコトハ、茲ニ之ヲ略スルモ、五百萬圓以上ノ大資本會社ノミニ就キ一言スレハ、右ノ大會社ヲ有スルハ東京 62、大阪 21、兵庫 10、神奈川 7、京都3、福岡 3、北海道 2、愛知2、其他群馬、新潟、三重、山口、熊本、沖繩各 1ナリトス。

次ニ會社ノ營業種類別ヲ府縣ニ就キテ見ルニ、農業會社ハ北海道 63ヲ最多トシ、長野 39、東京 31、愛知 30、岐阜 27、兵庫 19、福島 18、等ヲ多數ノ順位トシ、沖繩及鳥取ノ皆無ヨリ山口、徳島、香川、宮崎、各 1、茨城、栃木、各 2等ヲ少數ノ方面トス。工業會社ハ東京 867ヨリ大阪 630、愛知 447、兵庫 345、北海道 217等多數ノ順位ニシテ、次テ長野、静岡、岡山、京都、廣島、秋田、神奈川、新潟等頗ル多シ、最モ少キハ沖繩 5、宮崎 12、鹿兒島 27、大分 29、等ナリ。次ニ商業ハ其性質上都會ヲ包有スル府縣ニ於テ其數多カルヘキハ當然ナリト雖モ、會社組織ニ於テ營マル商業ハ必スシモ之ト一致セサルモノ無キニアラサルカ如シ、即チ商業會社多數ノ第一ハ東京 1,253ナリト雖モ之ニ次テハ兵庫 752、大阪 617、愛知 615、長野 530、北海道 445、神奈川 438、静岡 401等順次相次キ、京都、新潟、福岡、廣島、岡山、富山、福島、等 200乃至 300ノ間ニアリテ所謂第二ノ階級ニ屬スルカ如シ、反對ニ最少ノ方面ヨリスレハ、沖繩 20ヨリ徳島 37、鹿兒島 38、奈良 45等ノ順序ナリ、運輸業ハ兵庫最モ多ク、會社數 101、ナリ、次テハ、北海道 95、東京 80、大阪 70、静岡 54、長野 44、新潟 43、富山、福岡、各 38、等ニシテ、他ノ種類ノ會社ノ府縣分布ノ狀況トハ稍々趣ヲ異ニスルモノアリ、最少ノ方ニ於テモ亦、宮崎ノ 3ヲ最少トシ、次テ沖繩 4、福井 5、高知 熊本各 8、佐賀 9等順次其數ヲ増ス、其他ノ府縣ハ右ノ中間ニ在リ、而シテ運輸業會社ハ最多ト最少トノ間隔甚々大ナラス、各府縣ニ比較的平等ニ分布存立スルカ如シ。

XII. 産業組合及同業組合

大正五年末現在、各種産業組合ノ數ハ 11,753ナリ前年ニ比シ、244ヲ増加セリ、明治三十三年産業組合法公布セラレ、其年末現在數値ニ 21ナリシカ、累次増加シ前記ノ數ヲ示スニ至レリ、而シテ大正五年末ノ數ニ就テ、組合ノ目的物ヲ見ルニ、信用組合 3,070、販賣組合 221、購買組合 448、生産組合 134、其他ハ二種乃至四種ノ目的ヲ併有兼營スル組合ナリ、其中信用販賣購買組合ノ 2,795ヲ最多トシ、信用購買組合ノ 2,692ニ次キ生産購買組合ノ 29ヲ最少トス。各種類毎ニ前年ニ對照スルニ信用販賣購買生産組合、信用販賣購買組合、信用購買組合、信用組合等、信用ヲ兼ヌル組合最モ多ク増加シ、信用ヲ兼ヌサル購買組合、販賣組合等ハ却テ減少ヲ呈ス。

産業組合ノ大正五年末各府縣分布ノ狀況ヲ見ルニ、最モ多キハ兵庫縣ノ 694ニシテ次テ長野縣 491、群馬縣 473、愛知縣 436、新潟縣 427等多ク、又之ニ次テハ廣島縣 387、岡山縣 377、茨城縣 362、千葉縣 355、福島縣 354、埼玉縣 336、三重縣 322、岩手縣 317等ノ諸縣多キモノニ屬ス、反之沖繩縣ノ 36ヲ最少トシ、東京府 100、大阪府 109、徳島縣 111、熊本縣 127等ノ府縣次テ其少キモノトス。産業組合ノ種類ハ信用ヲ目的トスルモノ最モ多キ事實ヨリ考フルトキハ、金融機關ノ最モ完備セル、東京、大阪ノ如キ大都

XIII. 電氣事業及瓦斯事業

【電氣事業】 大正五年末現在ノ開業電氣事業ハ 546ニシテ、外ニ自家用電氣工作物 1,946、官廳施設電氣工作物 125アリ、此ノ合計 2,617ナリ、尙此ノ外未開業ノ事業及工作物合計 181アリ。本事業ヲ十三年前ナル明治三十六年ニ比シ 同年ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ、開業 574、未開業 362ニ當リ又前年ノ此ノ指數ニ比シ、開業 83、未開業 26ヲ増加シ、其ノ進歩著シキヲ見ル。是等事業ノ發電力ヲ見ルニ、使用認可ノモノ 805,289「キロワット」、使用未認可ノモノ 414,959「キロワット」、合計 1,220,248「キロワット」ナリ。此ノ電力ヲ明治三十六年ニ比シ 其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、使用認可ノモノハ 1,820、未認可ノモノハ 1,153、合計ハ 1,521ニ當ル、以テ其ノ事業ノ規模ノ激増セルヲ知ルヘシ。大正五年末ノ開業電氣事業ヲ其ノ目的ニ依リ分テハ、電氣供給事業 472、電氣鐵道事業 26、兩者兼營事業 48ナリ。之ヲ總數ニ對スル分節比例ト爲セハ電氣供給事業ハ 86.45%、電氣鐵道事業ハ 4.76%、兩者兼營事業ハ 8.79%ニシテ前年ニ比スレハ電氣供給事業ハ 0.57%ヲ増加シ、電氣鐵道事業ハ 0.14%ヲ減シ兩者兼營事業ハ 0.43%ヲ減シタリ。大正五年末現在ノ使用認可電力ヲ發電原動力ニ依リテ分テハ、

會ヲ有スル府縣ニ産業組合ノ却テ少キハ蓋シ首肯セラレ得ルカ如シ。

産業組合ヲ組織別ニ見ルニ、大正五年末現在ニ於テハ、有限責任 8,047、無限責任 3,460、保證責任 246ニシテ、有限責任最モ多ク、無限責任之ニ次キ、有限責任ノ約半數ナリ、保證責任ハ其數最モ少シ、而シテ之ヲ本書ニ載スル事實ニ依リ 明治三十九年以後ニ就テ通覽スルニ明治四十一年迄ハ無限責任多カリシカ、同四十二年以後有限責任其數ヲ増加シ、今日ノ狀態ヲ示スニ至レリ、而シテ之ヲ前年未現在ト對照スルニ有限責任ニ於テ 414ヲ増シ、無限責任 186ヲ減シ、保證責任 16ヲ増シ計 244ヲ増加セリ。

重要物産同業組合法モ、産業組合法ト同シク 明治三十三年ノ公布ニ係リ、同年四月一日ヨリ施行セラレタルモ、本書載スル所ハ大正元年以來五ケ年ノ事實ニ過キス、而シテ大正五年末現在組合數 1,042ニシテ前年ニ比シ 25ヲ増加セリ之ヲ大正元年末現在ノ組合數ナ 100トシテ指數ヲ見ルニ 114ニシテ其發達甚々遅々タリ、其種類ニ就テ見ルニ 蠶絲及蠶種業組合 251ニシテ最モ多ク織物業ノ 134、米穀業ノ 60、材木業ノ 37等之ニ次ケリ。又同業組合聯合會ハ同年末現在數 48ニシテ前年ニ比シ 2ヲ増加シタリ。

水力 469,634「キロワット」、火力 335,655「キロワット」ナリ。之ヲ總量ノ分節比例ト爲セハ水力 58.32%、火力 41.68%ニ當リ、前年ノ同一比例ニ比シ水力 0.10%ヲ増加セリ。若シ夫明治三十六年末ノ同一比例ヲ見シカ水力 29.66%、火力 70.34%ナリシナリ。又明治三十六年ノ各百ニ對スル指數ヲ求メンカ、水力ハ 3,578ニシテ火力ハ 1,078ナリ。是等ノ事實ニ依リテ、水力電氣ノ發達頗ル著シキヲ見ルヘシ。殊ニ之ヲ各種類ニ就テ見ルニ、營利事業ハ最水力ヲ利用スルコト多ク、使用認可總電力ノ 70.28%ハ水力電氣ニシテ、29.72%ノミ火力電氣ナリ。而シテ之ヲ前年ニ比スルニ水力電氣ノ比例 1.43%ヲ増加セリ。即水力電氣利用ノ益盛ナルヲ知ルヘシ。然ルニ自家用電氣工作物ハ之ニ反シテ、寧ロ火力電氣多ク用キラレ、水力電氣ノ 27.31%ニ對シ火力電氣ハ 72.69%ヲ含ム。殊ニ官廳施設電氣工作物ハ火力電氣ヲ用ユルコト多ク、水力電氣僅ニ 1.42%ニシテ、他ノ 98.57%ハ火力電氣ナリ。

次ニ電氣事業ヲ地方別ニ見ルニ、營利事業ノ事業數ニ於テハ、兵庫縣最モ多ク、北海道之ニ次キ、岐阜、千葉、愛知、福島、静岡等ノ諸縣ハ事業多キ地方ノレトモ、發電力ヲ以テ比スレハ、東京府ヲ最

多トシ、大阪府之ニ次キ、神奈川、兵庫、愛知、三重等ノ諸縣及北海道ヲ多キ地方トス。自家用電氣工作物ヲ電力ニ依リテ比スレハ、福岡縣最多ク、之ニ次クモノハ兵庫縣、大阪府ニシテ北海道及秋田、栃木、長崎等ノ諸縣ヲ多キ地方トス。又官廳施設電氣工作物ハ福岡縣最多ク東京、群馬、大阪、兵庫等ノ諸府縣之ニ次キテ多シト爲ス。

原動力別ノ發電力ヲ地方別ニ見ルニ、水力電氣ハ東京府最多ク、福岡縣之ニ次キ、其ノ他北海道及神奈川、愛知、静岡、福島等ノ諸縣ヲ多キ地方トシ、火力電氣ハ福岡縣最多ク、大阪府之ニ次キ、兵庫縣、東京府、北海道、神奈川縣等ヲ多キ地方トス。

大正五年ニ於ケル營利電氣事業ノ各營業決算期末ノ事業數ヲ見ルニ 512ニシテ、其ノ拂込資本金ノ總額ハ 513,839,794圓ナリ。此ノ拂込資本金ヲ明治三十六年ニ比シ 其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 2,115ニ當リ、即十三ケ年間ニ於テ二十一倍強ノ放資ノ激増ヲ見ル。此ノ放資ノ増加ハ、畜ニ事業ノ増加ニ依ルノミナラス、各事業其ノモノカ尠大ナルニ至リタルニ由ルナリ。即明治三十六年ノ一事業平均拂込資本金ハ 270,808圓ナリシカ、大正五年ハ平均額 1,008,593圓ト爲リ、明治三十六年ノ百ニ對スル大正五年ノ指數ハ實ニ 371ニ當ル。上記營利事業ノ内電燈事業ヲ營ムモノハ 501ニシテ、總數ノ 97.83%ニ當リ、殆ト總テハ電燈事業ヲ營ムモノナリ。大正五年ニ於ケル電燈取附總數ヲ十燭光ニ換算スレハ 10,790,776 箇ト爲リ、之ヲ電力ニ換算スレハ 200,400「キロワット」ニ當ル。又動力供給事業ヲ營ムモノハ 343アリ、總數ノ 66.99%ニシテ、其ノ大部分ハ電燈事業ヲ兼營スルモノナルヘシ。大正五年ニ於ケル取附電動機ノ換算電力ハ 175,520「キロワット」ニ當リ、之ヲ馬力ニ換算スレハ 235,470馬力ニ當ル。此ノ他電氣事業總數中ニハ鐵道事業ヲ營ムモノアルモ、交通ノ部ニ詳記セルヲ以テ茲ニハ記載セス。

電氣供給事業ニ就テ大正五年末ノ電燈供給數ノ總燭光ハ 9,801 萬燭光ニシテ、之ヲ同年末推計人口ニ比スレハ、百ニ付 177燭光ニ當リ、之ヲ前年ニ比シ 47ヲ増ス。又之ヲ面積ニ比スレハ一ノ方里ニ付 3,958燭光ニ當リ、前年ニ増スコト 0.95燭光ナリ。此ノ面積ニ對スル燭光數ヲ地方別ニ見ルニ神奈川縣最多ク、東京府之ニ次キ、大阪府、愛知縣等其ノ多キモノニシテ、兵庫縣、香川縣、静岡縣、和歌山縣等稍多キモノトス。又電力供給ノ電動機ノ換算馬力ハ 635萬

XIV. 交

【道路及橋梁】 大正四年末調査ノ道路延長ハ、國道 2,174里 10町、縣道 9,535里 17町、里道 112,974里 11町ナリ。之ヲ大正元年末ノ調査ニ比スルニ、國道 2里 26町ヲ減シ、縣道 355里 22町、里道 5,206里 3町ヲ増セリ。縣道里道ノ延長ノ著シク増加セルハ

馬力ニシテ、前年ニ比シ 10萬馬力ヲ増ス。地方別ニ見テ此ノ馬力ノ最高キハ福岡縣ニシテ大阪府、東京府、北海道、兵庫縣、神奈川縣等之ニ次キテ多キモノナリ。

大正五年中ノ電氣事業ノ故障災害件數ハ 3,179件ニシテ、之ヲ分テハ自然的損傷 1,180件、不可抗力ニ因ルモノ 923件ヲ最高トシ、操業者ノ過失ニ因ルモノ 425件、操業者外ノ過失ニ因ルモノ 361件設備不完全ニ因ルモノ 18件、其ノ他ノ原因 272件ナリ。今此ノ最多ナル原因ノ自然的損傷中 87.12%ハ送電中止ニシテ、送電不完全ナルハ 1.10%、其他ハ 11.78%ニ當リ、不可抗力ニ因ルモノハ、中 83.97%ハ送電中止ニシテ、送電不完全ナルハ 1.30%、負傷ハ 0.54%、火災ハ 5.09%、其ノ他ハ 9.10%ニ當ル。又各原因ノ故障災害件數ヲ明治四十四年ニ比シ其百ニ對スル本年ノ指數ヲ求ムルニ設備不完全ハ 58、操業者ノ過失ハ 295、操業者外ノ過失ハ 1,444、不可抗力ハ 138、其ノ他ハ 52ニ當リ、總數ハ 229ニ當レリ。又災害場所ニ就テ見ルニ、架空配電線路ノ 1,052箇所最多ク、之ニ次クモノハ電氣鐵道ノ 824箇所、架空送電線路ノ 483箇所等ナリ。

【瓦斯事業】 大正六年三月末日現在ノ瓦斯事業ノ總數ハ 87ニシテ、其ノ中 84ハ石炭瓦斯 2ハアセチリン瓦斯、1ハ天然瓦斯ナリ。是等ノ瓦斯事業ハ總テ營利事業ニシテ、其ノ拂込資本金ノ總額ハ 98,676,209圓ナリ。此ノ拂込資本金額ヲ六ヶ年前ナル明治四十四年末ニ比スルニ、其ノ百ニ對スル指數 238ニ當リ、前年ノ同一指數ヨリ高キ事 29ニシテ發達著シ。需用家ニ於ケル取附口數ヲ明治四十四年ニ比較シ、其ノ指數ヲ求ムルニ燈用ハ 183、熱用ハ 273ニシテ、前年ノ同一指數ニ比シ、燈用ハ 8ヲ増シ、熱用ハ 10ヲ減シタリ。又動力供給ニ於テハ、基數ハ年毎ニ増減常ナラス。本年ハ明治四十四年ノ百ニ對スル指數 87ニ下リタレトモ、力量ハ同一指數 111ヲ示シテ増加ヲ見ル。惟フニ大正六年ニ於テ熱用ノ減退セシハ、一時的ノ現象ナルヘク、瓦斯事業ハ依然トシテ益々盛況ナルカ如シ。瓦斯事業中、重要ナル副生物ハ「コークス」及「コールタール」ニシテ、大正六年三月末日ニ終ル一ケ年間ノ「コークス」副生額ハ 378,861噸、「コールタール」副生額ハ 150,480石ナリ、之ヲ明治四十五年三月末日ニ終ル一年間ニ比シ 其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ「コークス」ハ 124、「コールタール」ハ 110ニ當レリ。

其ノ何ノ故タルヲ詳ニセス。三年間ニ斯ノ如ク多クノ開發アリタルカ、將タ調査ニ遺漏アリタル爲カ致ラヘシ。

國道ニ架設セル橋梁ノ總數ハ 9,537箇所ニシテ 道路延長 7町餘ニシテ一橋梁アリ、縣道ノ橋梁ハ 39,616箇所ニシテ 8町餘ニシテ

一橋梁アリ、里道ノ橋梁ハ 296,991箇所ニシテ是ハ道路延長 13町餘ニシテ一橋梁アル割合ナリ。

【鐵道】 大正五年度末鐵道線路延長ハ開業 7,621哩 9鎖、未開業 1,740哩 28鎖ニシテ此ノ開業線路中 5,856哩 64鎖ハ國有ニシテ總開業線路ノ 76.85%ニ當リ、200哩 4鎖(2.62%)ハ私設鐵道、1,564哩 21鎖(20.53%)ハ輕便鐵道ナリ。開業鐵道線路ノ延長ヲ面積ニ比スルニ、大正五年度末ハ百方里ニ付 30哩 40鎖ニ當リ、之ヲ明治五年末ノ同比例 6鎖ニ比較スレハ四百倍以上ニシテ 寒ニ隔世ノ感ナキ能ハス。以上ノ開業線路中國有ニ於テハ 87%ハ單線、12.65%ハ複線、0.53%ハ三線以上、私設ニ於テハ 85%ハ單線、14%ハ複線、0.7%ハ三線以上、輕便ニ於テハ 98.47%ハ單線、1.53%ハ複線ナリ。輕便鐵道バ之ヲ別トシ、普通鐵道ニ於ケル單、複兩線ノ關係ハ國有、私設、略ホ相同シキハ 鐵道經營上ノ必要ニ由ル暗合ナルヘシ。

大正五年度末ノ停車場數ハ國有 1,665箇所ニシテ 開業線路延長 3哩 4鎖ニ付一停車場アリ、私設ハ 93箇所是ハ 2哩 1鎖ニ付一停車場アリ、輕便ハ 1,235箇所アリテ 1哩 21鎖ニ付一停車場アル割合ナリ。

大正五年度末ノ各鐵道ノ機關車、客車、貨車數ヲ見ルニ、國有ハ開業線路延長百哩ニ付機關車 46.5輛、客車 117.4輛、貨車 758.0輛アリ、私設ハ同百哩ニ付機關車 34.1輛、客車 141輛、貨車 501.1輛アリ、輕便ハ同百哩ニ付機關車 25.4輛、客車 83輛、貨車 255.5輛アリ、此ノ客車ノ座席ハ國有ニ在リテハ一輛平均 43.5、私設ハ同 46.9、輕便ハ同 39.3ニ當リ、又貨車ノ積載噸數ハ國有ニ在リテハ、一輛平均 9.7噸、私設ハ同 7.2噸、輕便ハ同 6.1噸ニ當レリ。以テ設備ノ大體ヲ知ルニ足ラン。

大正五年度中機關車走行哩ハ 國有ハ 7,793萬哩、私設ハ 165萬哩、輕便ハ 788萬哩ニシテ之ヲ各有スル 機關車ニ比シ一輛平均一日ノ走行哩ヲ算出スレハ、國有ハ 78.3哩、私設ハ 65.4哩、輕便ハ 54.3哩ニ當ル。又客車ノ走行哩ハ國有ハ 39,188萬哩、私設ハ 1,314萬哩、輕便ハ 2,893萬哩ニシテ、之ヲ又各有スル客車ノ總數ニ比シ一輛平均一日ノ走行哩ヲ算出スレハ國有ハ 155.6哩、私設ハ 127.3哩、輕便ハ 61.1哩ニ當ル。又貨車ノ走行哩ハ國有ハ 91,793萬哩、私設ハ 895萬哩、輕便ハ 2,296萬哩ニシテ、之ヲ各有スル貨車ノ總數ニ比シ是亦一輛平均一日ノ走行哩ヲ算出スルニ國有ハ 56.7哩、私設ハ 24.5哩、輕便ハ 15.7哩ニ當レリ。而シテ又列車走行哩ノ合計ハ國有ハ 6,454萬哩、私設ハ 136萬哩、輕便ハ 743萬哩ニシテ、之ヲ各種列車ニ分テテ 分節比例ヲ算出スレハ、國有ハ旅客列車 40.36%、貨物列車 41.17%、混合列車 18.47%ニ當リ、私設ハ旅客列車 37.78%、貨物列車 25.44%、混合列車 36.78%ニ當リ輕

便ハ旅客列車 2.75%貨物列車 4.49%、混合列車 92.76%ニ當レリ。又大正五年度中ノ國有鐵道ノ平均一日營業哩ハ 5,810哩ナリ、之ヲ以テ列車走行哩ノ總數ヲ除シ、更ニ一日平均走行回數ヲ算出スレハ、30.4ヲ得、私設鐵道ノ平均一日營業哩ハ 196哩 7分ニシテ是亦國有同様ニ處置スレハ一日平均走行回數ハ 17.8ニ當リ、輕便鐵道ハ平均一日營業哩 1,489哩 9分ニシテ其ノ一日平均走行回數ハ 13.7ニ當レリ。以上ノ諸關係數ハ各種鐵道ノ作用ヲ示スモノニシテ、國有ト私設トノ間並ニ普通鐵道ト輕便鐵道トノ間ニ自ラ別種ノ作用アル事ハ之ニ依リテ知ラルヘク、今ハ其ノ煩ヲ避ケテ細論ニ入ラサルヘシ。

大正五年度中ノ鐵道乘客數ハ國有 19,704萬人、私設 1,705萬人、輕便 4,173萬人ニシテ之ヲ等級別ト爲シ總數ニ對スル分節比例ヲ求ムレハ、國有一等 0.15%二等 4.27%三等 95.58%、私設ハ一等 0.01%二等 0.82%三等 99.17%、輕便ハ一等 0.00%二等 1.11%三等 98.89%ニ當リ、此ノ各等ヲ通シタル 延入哩ニ就テ乘客一人ノ平均乘車哩ヲ算出スレハ國有ハ 21哩 8鎖、私設ハ 9哩 13鎖、輕便ハ 6哩 12鎖ニ當レリ。又大正五年度中ノ鐵道運輸貨物ノ手荷物、大貨物ヲ合セテ國有 4,227萬噸此ノ延噸哩ハ 417,913萬噸哩、私設ハ 177萬噸 3,498萬噸哩、輕便ハ 579萬噸 6,425萬噸哩ナリ。此ノ延噸哩ヲ各一日平均營業哩ニ比例シ 各哩一日平均輸送噸數ヲ算出スレハ國有 1,970噸、私設 487噸、輕便 118噸ニ當レリ。

鐵道職員ノ大正五年度末現在ハ國有 115,282人、私設 2,463人、輕便 10,430人ナリ。此ノ總職員ヲ平均一日營業哩ニ比スルニ國有ハ一哩ニ付 20人、私設ハ同 13人、輕便ハ同 7人アル割合ナリ。

大正五年度ニ於ケル鐵道ノ益金ヲ營業哩ニ比シ 一日一哩ニ付平均益金ヲ算出スレハ國有ハ 37圓 77錢、私設ハ 27圓 23錢、輕便ハ 6圓 89錢ニ當レリ。

大正五年度中ノ鐵道事故ハ、國有 1,311件、私設 16件、輕便 323件ナリ。之ヲ各一日平均營業哩ニ比スルニ 各百哩ニ付國有ハ 2.56件、私設ハ 8.12件、輕便ハ 21.67件アリタリ。大正五年度中ノ鐵道死傷人員ハ合計 4,300人ニシテ此ノ中 2,058人ハ死者 2,242人ハ傷者ナリ。此ノ死者ヲ鐵道ニ依リテ別テハ國有 1,904人、私設 69人、輕便 85人ニシテ、傷者ハ國有 2,125人、私設 28人、輕便 89人ナリ、又之ヲ死傷者ノ種類ニ依リテ別テハ死者ハ乘客 52人、職員 98人、公衆 1,908人ニシテ傷者ハ乘客 531人、職員 1,042人、公衆 (6)人ナリ。此ノ死傷者ヲ死傷ノ原因ニ依リテ 別テ各分節比例ヲ算出スレハ、乘客ハ過失 33.79%、自殺 2.06%、其他 64.15%、職員ハ過失 83.33%自殺 0.26%其ノ他 16.41%、公衆ハ過失 37.52%、自殺 59.84%、其他 2.64%ナリ。茲ニ謂フ其ノ他ニハ鐵道事故ノ及ホセル危害ヲ包含ス、サレバ乘客ノ死傷ハ前年ニ於テハ 乘客

自家ノ過失ト鐵道事故ト相半セシニ反シ、本年度ニ於テハ後者ハ前者ノ約2倍ニ當レリ、是當局者ノ考ヲ要スル事ナラン、職員ノ死傷ハ自家ノ過失大部分ヲ占メ鐵道ノ事故ニ由ル事少ナク、公衆ニ至リテハ多少ノ過失ニ由ル者アリト雖、多クハ自ラ死ヲ求ムル者ノ結果ナルカ如シ。而シテ此ノ公衆ノ死傷ヲ列車走行哩ニ比シ其ノ十萬哩ニ對スル比例ヲ求ムレハ、國有ハ3.65人、私設ハ6.32人、輕便1.78人ニ當レリ。

【電氣鐵道】 大正五年末現在ノ電氣鐵道ハ64ニシテ之ヲ六年前ノ明治四十三年ニ比シ37ヲ増ス。其ノ線路延長ハ682哩62鎖ニシテ一經營者平均線路延長ハ10哩53鎖ニ當リ。之カ有スル車輛總數ハ4,113輛ニシテ一經營者平均64輛餘ニ當ル。又大正五年中乗客總數ハ6億8,077萬人ナリ。

【馬車鐵道】 大正五年末現在ノ馬車鐵道ハ37ニシテ之ヲ六年前ノ明治四十三年ニ比シ4ヲ増ス。其ノ線路延長ハ260哩03鎖ニシテ一經營者ノ平均線路延長ハ7哩2鎖ニ當リ、之カ有スル車輛1,057輛、馬匹727頭ニシテ一經營者平均車輛28輛餘、同平均馬匹20頭弱トス、大正五年度中ノ乗客總數ハ461萬人ナリ。

【人車鐵道】 大正五年末現在ノ人車鐵道ハ13ニシテ之ヲ六年前ノ明治四十三年ニ比シ10ヲ増ス、其ノ線路延長ハ66哩ニシテ一經營者平均線路延長ハ5哩9鎖ナリ。

【自動車鐵道】 大正五年末現在ノ自動車鐵道ハ28ニシテ其線路延長ハ282哩35鎖ニシテ一經營者平均線路延長ハ10哩9鎖餘トス。

【諸車】 大正七年三月末現在ノ有稅諸車ハ總數3,403,784輛アリ。其ノ内馬車ハ乗用7,691輛ニシテ明治四十四年以來自働車ノ發達スルニ從ヒ漸次其ノ數ヲ減少スルニ反シ、荷積用ハ208,880輛アリテ漸次其ノ數ヲ増加セリ。牛車ハ36,362輛ニシテ大正二三年頃ヨリ其ノ發達止マリシモノ今年ハ稍其ノ増加著シク、荷車モ亦年々増加シ來リ193萬輛以上ト爲ル。自働車中荷積用ノモノハ一時頗ル多カリシカ近年著シク減少シ前年ノ如キ僅ニ23萬輛數ヘタルニ過キサレモノ、今年ハ稍増加シテ42萬輛トナルト雖モ往年ノ勢ナシ。之ニ反シテ乗用ノモノハ累年激増シテ2,757萬輛ノ多キヲ加ヘ前年ニ比シ二倍以上ヲ示セリ。人力車ハ交通機關ノ備ハルニ伴ヒ年々衰微シ113,274輛ト爲リ明治三十年頃ニ比スレハ約半減セルノ状態ニ在リ。但シ前年ニ比シ僅ニ増加シタルハ今後ノ状態ナルカ將タ經濟界ノ發展ニ依ル一時ノ現象ナルカ注目ニ値ス。自働車ハ自働1,057輛、通常1,072,387輛アリテ何レモ長足ノ進歩ヲ爲セリ。コレ地方ニ於ケル唯一ノ交通機關トシテ使用セララル爲ナランカ。

【河川】 内務省ノ所謂重要河川ハ全國(北海道ヲ除ク)ニ於

テ135川アリ。此ノ重要河川中舟路、筏路ヲ合セタル航路ノ延長十里以上ノ河川ヲ舉ケレハ78川アリ。之ニ北海道ニ於ケル幹川流路延長三十里以上ノ8川ヲ加フレハ本邦ノ大川ハ86川トス。此ノ大川中幹川ノ流路最長キモノハ信濃川ノ94里、石狩川ノ93里ニシ利根川ノ82里、天鹽川ノ78里、北上川ノ62里、吉野川(阿波)ノ60里、木曾川ノ59里、最上川、天龍川ノ共ニ55里等其ノ長キモノニ屬ス。又北海道ヲ除キタル各川ノ航路ヲ見ルニ、幹川ノ航路延長72里ナル信濃川ノ最長トシ、利根川ノ70里ニ次キ、北上川ノ59里、天龍川ノ55里、最上川ノ50里等其ノ長キモノニ屬セリ。

【港灣】 大正六年十月一日現在ノ港灣總數ハ1,461港ニシテ之ヲ港種別トナシ分節比例ヲ求ムレハ軍港及要港0.41%、開港2.46%、商港51.92%、漁港36.59%、避難港8.62%ナリ。以上ノ中重ナル七十二港ニ就テ大正五年ノ入港數ヲ見ルニ汽船ノ入港船數最多キハ下關ノ73,687隻ニシテ、神戸ノ21,249隻ニ次キ、門司ノ11,921隻、大阪ノ10,390隻等最多キモノニ屬シ、其ノ噸數ヨリ見ハ神戸ノ1,541萬噸最多クシテ、門司ノ1,289萬噸ニ次キ下關ノ855萬噸、横濱ノ494萬噸、大阪ノ394萬噸、佐賀關ノ203萬噸、高松ノ202萬噸等其ノ多キモノニ屬セリ。又帆船ハ大阪ノ124,572隻最多ク横濱ノ62,381隻ニ次キ、門司ノ61,094隻、若松ノ56,558隻、下關ノ53,016隻、御手洗ノ48,905隻等其ノ多キモノニ屬シ、其ノ噸數ヨリ見レハ御手洗ノ308萬噸最多クシテ大阪ノ300萬噸ニ次キ、若松ノ197萬噸、門司ノ172萬噸、横濱ノ108萬噸等其ノ多キモノニ屬セリ。

【航路標識】 大正五年末航路標識ハ官設燈臺141箇所、公設燈臺27箇所、其他各種ノ夜標官設63箇所、公設39箇所、各種畫標、官設25箇所、公設91箇所、私設9箇所ナリ。是等標識以外ニ官設ノ各種警號26箇所、信號所7箇所アリ。燈臺ノ發達ハ最著シク其ノ數ノ増加ト共ニ構造亦完全トナリ、今ヤ光達距離20哩以上ノモノ官設33箇所、10—20哩ノモノ官設76箇所、公設9箇所ヲ見ルニ至レリ。

【船舶】 大正五年末船舶總數ハ38,825隻ニシテ此ノ中2,159隻(5.56%)ハ登簿汽船、1,723隻(4.43%)ハ不登簿汽船、9,314隻(23.99%)ハ登簿帆船、11,288隻(29.07%)ハ不登簿帆船、1,171隻(3.02%)ハ登簿石數船、13,170隻(33.93%)ハ不登簿石數船ナリ。此ノ他噸數五噸未満、積石數五十石未満ノ小船大正六年度末ニ於テ239,903隻アリ。登簿汽船トハ二十噸以上ノ汽船ノ謂ヒニシテ其ノ隻數近時著シク増加シ、之ヲ明治三十八年ニ比スルニ其ノ百ニ對スル指數155.3ナリ、又其ノ噸數ヲ積算スレハ大正五年ハ1,696,631噸ニシテ、明治三十八年ノ932,740噸ニ比シ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ181.8ニ當ル。即チ隻數ノ増加ニ比シ噸數ハ一層増加

シ漸次大船ノ多キヲ加フルヲ示セリ。不登簿汽船トハ五噸以上二十噸未満ノ汽船ノ謂ヒニシテ是亦隻數頗ル増加シ、之ヲ明治三十八年ニ比シ百ニ對スル指數ヲ示シ、其ノ噸數合計ハ21,098噸ニシテ是亦明治三十八年ニ比シ百ニ對スル指數ヲ示ス。登簿帆船ハ二十噸以上ノ帆船ノ謂ヒニシテ其ノ隻數明治三十八年ノ百ニ對スル指數251.8ニ當リ、噸數合計585,593噸ニシテ之ヲ明治三十八年ニ比シ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ178.5ニ當リ、隻數ノ増加ト噸數ノ増加ト一致セス、即チ汽船ト反シ小船多キヲ加フルノ徵ヲ示セリ。又不登簿帆船ハ五噸以上二十噸未満ノ帆船ノ謂ヒニシテ其ノ隻數ハ明治三十八年ノ百ニ對スル指數2,606.9ニ當リ、増加最著シク其ノ増加力ハ不登簿汽船ニ九倍ス、其ノ噸數合計ハ159,858噸ニシテ是亦明治三十八年ニ對スル指數2,437.6ニ當リ、登簿帆船ト同様ニ増加最著シキハ小形船ナルコトヲ示セリ。又積石二百石以上ナル石數登簿帆船ハ明治三十八年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數103.2ニ當リ、其ノ積石數合計ハ380,116石ニシテ明治三十八年ノ百ニ對スル指數ハ85.97ニ當リ減少セリ。五十石以上、二百石未満ナル不登簿石數船モ登簿石數船ト同ク其ノ隻數ヲ減シ、明治三十八年ニ對スル指數ハ66.8ニシテ其ノ積石數合計ハ1,465,075石、是亦明治三十八年ノ百ニ對スル指數ハ77.09ニ當ル。

大正五年末現在ノ登簿汽船ノ船質ヲ見ルニ鋼又ハ鐵製964隻、銅及木製又ハ鐵及木製15隻、木製1,180隻ナリ。之ヲ分節比例ト爲セハ鋼又ハ鐵製44.66%、木製又ハ木鐵製0.69%、木製54.65%ニシテ、今尙木製過半ヲ占メタリ。而シテ是等船舶ノ船齡ヲ見ルニ鋼又ハ鐵製船ハ五年未満ナルモノ23.14%五年以上十年未満ノモノ20.12%、十年以上十五年未満ノモノ11.90%、十五年以上ノモノ45.54%ナリ。又木船ハ五年未満ノモノ21.78%、五年以上十年未満ノモノ17.71%、十年以上十五年未満ノモノ22.97%、十五年以上ノモノ37.54%ナリ。之ニ由テ觀レハ、若齡及老齡船ハ鋼及鐵船ノ比例高シ、是ハ本邦過去ニ於ル造船ハ木製船多カリシモ近來ニ至リテ鋼又ハ鐵船ノ大ニ増加セシ徵象ニシテ、其ノ老齡船ニ鋼又ハ鐵船ノ多キハ木船ニ比シ前者ノ耐久力大ナルニ依ルナリ。又登簿帆船ノ船質ヲ見ルニ、是ハ殆ト全部木製ニシテ唯僅ニ4隻ノ鋼製船アリ、而シテ此ノ木製船ヲ見ルニ五年未満ノモノ28.98%、五年以上十年未満ノモノ18.44%、十年以上十五年未満ノモノ22.77%、十五年以上ノモノ29.81%ナリ。即チ汽船ニ比シ寧ろ若齡ナルモノ多キモ最近ニ至リテ造船力少シク弱マリタルモノノ如シ。

大正七年三月末現在ノ有稅小船ハ239,903隻ニシテ中動力ヲ有スルモノ583隻アリテ總數ノ99.75%ハ動力ヲ有セサル船ナリ。既往ヲ見ルニ大正二年以前ハ動力ノ有無ニ區別セス報告シタルヲ以テ暫ク之ヲ除キ大正三年以降50萬隻内外ナリシモノカ前年ヨリ

殊ニ甚シク減少シタルハ(從來ノ55.68%ニ當ル)從來漁船ヲ包含セシメテ報告シ來レル地方アリシカ之ヲ統一シテ除外シタル爲ニシテ今年尙有動力船ニ於テ増加シタルモ其ノ他ニ於テ減少シタルハコレ近時益々小船ノ減少スルニ由ルモノナリ。(漁船ノ數ハ漁業ノ部ニ載セタリ)。

大正五年中ノ登簿船異動ヲ見ルニ汽船ノ新規登録124隻、其ノ登録抹消97隻ニシテ差引27隻ヲ増シ、帆船新規登録949隻、其ノ登録抹消291隻ニシテ698隻ノ差増アリ、石數帆船ノ新規登録ハ1隻、其登録抹消87隻ニシテ差引86隻ヲ減シタリ。以上ノ登録事實ヨリ見レハ本邦ノ本年度ノ船舶ハ汽船及帆船(噸數船)ニ於テ増加シ、就中後者ノ増加ハ大ニシテ、獨リ石數帆船ノミ其ノ數減少セリ。

【造船】 大正五年末現在ノ造船ハ219箇所ニシテ、前年ヨリ増スコト10箇所ナリ。又船渠數ハ59箇所ニシテ、前年ヨリ減スルコト1箇所ナリ。浮船渠數ハ2箇所ニシテ、前年ト増減ナシ。大正五年中ニ於ケル造船數汽船ハ94隻144,024噸ニシテ、一隻ノ平均噸數ハ1,532噸ニ當ル。帆船ハ519隻45,831噸ニシテ、一隻ノ平均噸數88噸ニ當レリ。然ルニ造船數ハ汽船ニ於テハ明治四十五年大正元年ヲ最高トシ、高低ハアレトモ漸次其ノ隻數ハ減シ、噸數ハ却テ増加シ、明治四十五年大正元年ノ一隻平均噸數僅ニ287噸ナリシモノカ、大正三年ニ於テハ隻數コソ半ハニ足ラサルマテニ減少シタルトモ、一隻平均噸數ハ1,049噸ニ増加シタリ。本年ハ隻數ハ前年ニ比シ少シク増加セシカ噸數ニ於テハ未曾有ノ増加ヲナセリ。又帆船ハ大正二年ヲ頂巔トシテ爾來隻數漸減シタリ。但シ一隻平均噸數ハ大正二年66噸、同三年62噸ナルカ故ニ、其ノ大サニハ大ナル差違ナキカ如シ。本年ハ隻數モ少シク増加シタルト噸數ハ頗ル増加セリ。前年ニ於テハ歐洲大戰ノ影響ヲ被リ造船原料ノ輸入一部杜絶ノ爲造船數ハ減少セシカ、本年ニ至リテ増加セシハ、其ノ原因何處ニ存スルヤ詳ニセサルモ、惟フニ管テ杜絶セシ原料輸入ノ道開キシカ、或ハ幾分之ヲ自給自足スルニ至リシモノナルヘシ。

大正五年中新ニ造船獎勵認許證書ヲ下付シタルモノ99隻アリ、支出シタル獎勵金總額ハ307萬圓餘トス。

【海員】 大正五年末現在ノ海技免狀受有者ハ84,327人ニシテ中内國人33,976人(98.98%)、外國人351人(1.02%)、之ヲ明治三十八年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ、内國人189ニ當リ、外國人ハ100ニ當ル。即チ外國人海員ニ増加無クシテ内國人海員著シク増加シタルコトヲ、内國人及外國人ノ受有スル海技免狀ヲ種類ニ依リ分チ各總數ニ對スル分節比例ヲ算出スレハ、内國人ハ甲、乙、丙各種ノ船長7.28%、同各種ノ運轉士63.97%、機關長及

機關上 28.75%ニシテ外國人ハ船長(甲種ノミ) 50.43%、各種運轉士 13.67%機關長及機關士 35.90%ナリ。

【遭難】 大正五年度中ノ遭難船舶ハ合計 1,057隻ニシテ、中滅失 157隻 14.85%、損傷 900隻 85.15%ナリ。此ノ遭難船ノ船種ニ由リテ分テハ汽船 684隻 64.72%、帆船 373隻 35.28%ニシテ、汽船ハ滅失 37隻損傷 647隻帆船ハ滅失 120隻損傷 253隻ナリ。遭難ノ最多カリシハ瀬戸内海ニシテ北海道沿海、九州沿海之ニ次ケリ。遭難ノ最多カリシ月ハ十二月ニシテ、二月之ニ次キ、三月、十月等其ノ多キ月ナリ。一月ハ最少ナク六月十一月次テ無事ナリキ、遭難船ニ因ル死傷人員ハ 669人ニシテ中死者 160人負傷者 60人行衛不明者 449人ナリ。遭難船ハ累年ニ比較スルニ多少増加シタリ。遭難人員ハ明治三十八年ヲ除キテハ最多シ、遭難船及人員ノ増加ノ原因ハ近時大船ノ多ク遭難セルニ因ルモノ、如シ。大正五年度中遭難船ニ對シ人命救助ヲ爲シタル者 740人ニシテ之ニ依リテ救助セラレタル者 477人ナリ。

【海員審判】 大正五年度中地方海員審判所ニ於テ受理シタル件數ハ 476件、629人ナリ。其中裁決 332件 452人ニシテ免狀行使停止 235人(内免狀行使禁止 1) 54.02%譴責 118人(27.13%)不懲戒 82人(18.85%)ナリ。又此ノ免狀行使停止者ヲ事件ノ種類ニ依リテ分テ總數ニ對スル分節比例ヲ算出スルトキハ、衝突 42.76%乗揚 26.67%放棄又ハ沈没 3.91%、汽機又ハ汽罐ノ毀損 6.90%、法規違背 9.88%、職務怠慢 2.07%、其他 7.81%ナリ、

又同年中高等海員審判所ニ於テ受理シタル控告件數 61件ニシテ此ノ人員 75人ナリ。其中裁決 31件、人員 40人ニシテ、原裁決ヲ破棄シ更ニ裁決シタルモノ 19件(61.29%) 28人(70.00%)、棄却 12件(38.11%) 12人(30.00%)ナリ。

【命令航路】 大正五年度ニ於ケル命令航路ニ屬スル汽船會社ハ、日本郵船株式會社、大阪商船株式會社、東洋汽船株式會社、日清汽船株式會社、南洋郵船株式會社、北日本汽船株式會社ノ六トス。日本郵船株式會社ハ拂込資本金 2,750萬圓ニシテ、汽船 138隻(此ノ噸數 458,574噸)ヲ有シ政府ノ補助金及獎勵金ヲ受クルコト 2,712,673圓、大阪商船株式會社ハ拂込資本金 2,062萬圓ニシテ、汽船 134隻(此ノ噸數 213,881噸)ヲ有シ、政府補助金及獎勵金ヲ受クル

コト 1,739,479圓、東洋汽船株式會社ハ拂込資本金 1,787萬圓ニシテ、汽船 13隻(此ノ噸數 95,014噸)ヲ有シ、政府ノ補助金及獎勵金ヲ受クルコト 1,941,364圓、日清汽船株式會社ハ拂込資本金 810萬圓ニシテ、汽船 23隻(此ノ噸數 31,698噸)ヲ有シ、政府補助金及獎勵金ヲ受クルコト 536,189圓、南洋汽船株式會社ハ拂込資本金 75萬圓ニシテ、汽船 4隻(此ノ噸數 14,938噸)ヲ有シ政府ノ補助金及獎勵金ヲ受クルコト 229,368圓、北日本汽船株式會社ハ拂込資本金 50萬圓ニシテ汽船 8隻(此ノ噸數 7,560噸)ヲ有シ政府ノ補助金及獎勵金ヲ受クルコト 137,746圓ナリ。以上ノ各會社ノ本年度中ニ於ケル船客及貨物ノ運賃總額ヲ百ト爲シ之ニ對スル政府ノ補助金及獎勵金ノ比例ヲ算出スルニ下ノ如シ、日本郵船株式會社 4.42%、大阪商船株式會社 4.34%東洋汽船株式會社 13.46%、日清汽船株式會社 11.06%、南洋郵船株式會社 21.48%、北日本汽船株式會社 18.28%ナリ。

【土木費】 大正二年度中支出土木費ノ決算總額ハ 6,498萬圓ニシテ、之ヲ明治三十五年度ニ比スレハ其ノ百ニ對スル指數 156.1ニ當リ、著シク増加シタリ。此ノ總額中國庫ノ支出ハ 502萬圓(7.7%)ニシテ地方費ノ支出ハ 5,995萬圓(92.3%)ナリ。之ヲ各工種ニ分テ分節比例ヲ算出スレハ、道路費 29.8%、橋梁費 9.1%河川費 22.4%、港灣潮除、其ノ他ノ諸費 38.7%ナリ。而シテ之ヲ明治三十五年ノ同一比例ニ比スルニ、道路費ハ 2.4%、橋梁費ハ 0.1%、河川費ハ 5.6%ヲ減シ、獨リ港灣潮除、其ノ他ノ諸費ハ 8.1%増シタリ。

上記大正二年度ノ地方土木費ヲ負擔者別トナシ、之カ分節比例ヲ算出スレハ、府縣費 45.91% 郡市區町村費 43.00%寄附金 4.51%其ノ他 6.58%ニ當リ、是等ノ各負擔者別土木費ヲ明治三十五年ニ比シ各其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ府縣費ハ 155.6郡市區町村費ハ 198.5寄附金 145.9其ノ他ハ 158.9ニ當リ、郡市區町村費最増額シ、殆ト明治三十五年度ニ倍セントス。

大正二年度ノ道路費ヲ通常費ト災害費トニ分テハ、通常費ハ 91.5% 災害費ハ 8.5%ニ當リ、橋梁費ハ通常費 77.8%災害費 22.5%河川費ハ通常費 50.2%災害費ハ 49.8%ニ當レリ。

XV. 通信及郵便爲替貯金事業

【逓信官署】 大正五年度末現在ノ逓信省所管通信官署ハ郵便局 7,506箇所、電信局 1,041箇所、無線電信局 102箇所、(船内無線電信局 93箇所ヲ包含ス)電話局 20箇所ナリ。之ヲ前年度ニ比スレハ、郵便局ハ 171箇所、電信局ハ 6箇所、無線電信局ハ 2箇所、船内無線電信局ハ 24箇所ヲ増加シ、電話局ハ増減ナシ。又之ヲ十年

前ナル明治三十九年度末ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、郵便局ハ 114、電信局ハ 154、電話局ハ 400ニ當リ(無線電信局ハ當時絶無ナリ)又大正五年度末現在ノ自働電話所ハ 730箇所、郵便切手賣捌所ハ 58,176箇所、郵便函 62,062箇所ニシテ、是亦明治三十九年度末ニ比シ指數ヲ求ムルニ、自働電話所ハ 431、郵便切手賣捌所

ハ 115、郵便函ハ 117ニ當ル。又大正五年度末現在ノ郵便切手賣捌所ヲ、宅地ノ面積ニ比スルニ、約 2萬坪ニ付キ、郵便切手賣捌所アル割合ニシテ、郵便函ハ約 1萬 9千坪ニ付キ、一個アル割合ナリ。十年前ノ同一比例ノ約 2萬 3千坪ニ付キ 郵便切手賣捌所一個所、約 2萬 2千坪ニ付キ、郵便函一個ノ割合ニ比スレハ、通信機關ノ發達著シキヲ見ルヘシ。

【郵便線路】 大正五年度末現在ノ陸上郵便線路ハ道路 8,242里、鐵道 7,463哩ニシテ之ヲ全面積ニ比スルニ、百方里ニ付キ、道路ハ 33.24里、鐵道ハ 30.10哩ニ當ル。又水上線路(河海湖ノ總括數)ハ 19,29哩ナリ。此ノ線路ヲ十年前ナル明治三十九年度ニ比スレハ、其ノ百ニ對シ道路ハ 68、鐵道ハ 158、水上ハ 91ニ當ル。斯ク陸上ノ道路及水上線路ノ減縮セル所以ノモノハ、即鐵道ノ發達ニ由ル影響ナリトス。

【郵便物】 大正五年度中ノ引受郵便物ノ總數ハ 20億 4,360萬通ニシテ、配達郵便物ノ總數ハ 20億 3,075萬通ナリ。之ヲ前年度ト比較スルニ引受郵便物ハ 1億 5,560萬通、配達郵便物ハ 1億 6,806萬通ヲ増加セリ。又十年前ナル明治三十九年度ト比較シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ、引受郵便物ハ 168ニ當リ、配達郵便物ハ 171ニ當ル。而シテ人口ノ同一指數カ 115ナルニ比スレハ、通信ノ發達殊ニ顯著ナルモノアルヲ見ル、而シテ上記ノ引受配達郵便物總數ヲ年末ノ人口ニ比スルニ一人平均 74通ヲ發受シタルコト、爲リ、之ヲ前年ノ同一比例 169通ニ對照スレハ 5通ノ増加ナリ。又以上ノ中外國郵便物ヲ摘出スレハ、大正五年度中ノ發送總數 1,416萬通到著總數 1,137萬通ナリ。此ノ到著總數ヲ、五大洲別ト爲シ分節比例ヲ算出スレハ、亞細亞洲發送 55.24%、到著 45.52%亞米利加洲發送 23.32%、到著 26.24%歐羅巴洲發送 11.80%、到著 22.34%、大洋洲發送 9.54%、到著 5.45%、阿弗利加洲發送 0.60%、到著 0.45%ニ當レリ。

【小包郵便】 小包郵便物ハ大正五年度中、引受總數 2,958萬箇、配達總數 2,662萬箇ニシテ、此ノ中外國ニ發送シタルモノ 135萬箇、外國ヨリ到着シタルモノ 16萬箇ナリ。前年度ニ比シ、引受總數ニ於テ 3,451箇ヲ、配達總數ニ於テ 2,581箇ヲ増セリ。上記ノ引受總數ヲ十年前ナル明治三十九年度ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 198ニ當ル。是亦發達著シト謂フヘシ。

【電信線路】 大正五年度末ニ於テ陸上線ノ架空線ハ、線路 8,126里、線條 43,888里、架空[ケーブル]線ハ心線 340里、地下[ケーブル]線ハ心線 1,036里アリ。之ヲ面積ニ比スルニ百方里ニ付キ陸上線ノ線條ハ 177.01里、心線ハ 5.55里ニ當リ。明治三十九年度末ノ線條 143.20里、心線 2.43里ニ比較スルニ此ノ十ヶ年間ニ於テ延長スルコト百方里ニ付キ線條ハ 33.81里、心線ハ 3.12里ニ當

ル。陸上線ノ發達大ナリト謂フヘシ。又 海底河底線及湖底線ハ大正五年度末ニ於テ線條 5,200哩心線 5,895哩ニシテ、明治三十九年度末ノ百トシタル指數ヲ求ムレハ、線條ハ 138、心線ハ 130ニ當リ、著シキ進歩ヲ見タリ。

【電信】 大正五年度中ニ於ケル電信總通數ハ、發信 4,067萬通、著信 4,155萬通ニシテ、無線電信局ニ於テ取扱タル無線電信ハ發信 94萬通、著信 36萬通ナリ。之ヲ十年前ナル明治三十九年度ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ、發信ハ 172、著信ハ 173ニ當リ、是亦曩ニ揭ケタル人口ノ指數ニ比シ甚タ高キヲ見ル。無線電信ハ之ヲ明治四十一年度ニ比較スルニ、發信約十四倍、著信約十二倍ノ増加ナリ。

【電話】 大正五年度末ニ於ケル、電話交換取扱局所ハ 1,168箇所ニシテ之ヲ明治四十年度末ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ハ 699ニ當リ、本年度末現在電話加入人員ハ 231,724人ニシテ是亦明治四十四年度末ニ比シ指數ヲ求ムルニ 395ニ當ル。爾ク局所ノ指數ニ比シ、加入人員ノ指數ノ低キ所以ノモノハ、取扱局所ノ設置カ漸ク加入者ノ少ナキ小都會ニ及ボシタルニ由ルモノナルヘシ。又大正五年度末ノ電話加入者數ヲ、人口ニ比例スルニ千ニ付 4.20ニ當リ、前年度ノ同一比例ニ比スレハ 0.14ヲ高メタリ。本年度末ノ電話加入者ノ人口比例ヲ、各地方別ニ見ルニ東京府ノ 16.4 最大ニ、之ニ次クモノハ大阪府、京都府ノ 10.0兵庫縣ノ 5.7、北海道 5.6、愛知縣ノ 5.3ニシテ、高知縣ノ 1.6、徳島縣ノ 1.4、岩手、宮崎ノ兩縣ハ各 1.2、沖繩縣ノ 0.6ヲ最低キモノトス。

【郵便爲替】 大正五年度中ニ 逓信省所管通信局所ニ於テ取扱ヒタル郵便爲替ハ、振出口數 2,131萬口、拂渡口數ハ 2,230萬口ニシテ、其ノ金額振出ハ 2億 9,479萬圓、拂渡ハ 3億 0,654萬圓ナリ。大正五年三月ヨリ取立金ヲ郵便爲替トシテ取扱フ規定實施セラレ、之カ取立口數 175萬口、其ノ金額 1,990萬圓アリ、(以上ノ爲替取扱口數及金額ニ包含ス)。又大正五年度中ニ取扱ヒタル外國郵便爲替ハ聯合諸外國ヘノ振出口數 17,673口、其ノ金額 67萬圓、聯合諸外國ヨリノ振込 177,851口、其ノ金額 1,058萬圓ニシテ、特約諸外國ヘノ振出 15,315口、其ノ金額 49萬圓、特約諸外國ヨリノ振込 161,790口、其ノ金額 1,003萬圓ナリ。即振出額中 27.34%ハ聯合國、72.66%ハ特約國トシ、又振込額 5.19%ハ聯合國、94.81%ハ特約國ナリ。而シテ大正五年度中ノ外國爲替振出總額ヲ國別ニ分節比例ヲ求ムルニ、北米合衆國ノ 42.25%ヲ最高トシ、之ニ次クモノハ英吉利ノ 13.24%、瑞西ノ 11.83%、香港ノ 5.06%、佛蘭西ノ 4.48%ニシテ、殘ル 23.14%ハ其ノ他ノ諸外國ナリ。振込總額ハ北米合衆國第一位ヲ占メ總數ノ 53.70%ニ當リ、第二位ハ布哇ノ 20.77%ニシテ、之レニ次クハ加奈太ノ 11.44%、香港煤介國ノ 3.13%、

蘭領東印度ノ2.12%等ナリ、殘レル8.84%ハ其ノ他ノ諸外國ニ係ルモノナリトス。

【郵便貯金及保管證券】 大正五年ニ於ケル 遞信省、朝鮮總督府、臺灣總督府、關東都督府及樺太廳ノ所管ニ係ル郵便貯金ノ總數ハ、同年末現在人員 1,491萬人ニシテ、此ノ預金額ハ 2億9,857萬圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ人員 114萬人、金額 7,672萬圓ヲ増加セリ。又十年前ナル明治三十九年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ、人員ハ 221、金額ハ 413ニ當リ、預金者ノ數モ頗ル増加シタレトモ就中金額ノ増加著シキモノアルヲ見ル。即明治三十九年ニハ預金者一人ニ付平均預金額ハ 10圓 71錢ナリシニ、大正五年ハ一人ニ付平均預金額 20圓 01錢ト爲リ約倍額ニ昇レリ。又内地ノ此ノ事實ヲ總人口ニ比スルニ 明治三十九年ハ人口一人ニ付平均 1圓 45錢ナリシニ、大正五年ハ 5圓 07錢即三倍半ノ増加セル好況ヲ呈セリ。又保管證券モ各年トモ漸次盛況ヲ呈シ、遞信省保管ノ内地、朝鮮、臺灣、關東州ニ於テ、受入レタル證券ノ大正五年末現在預人員ハ 55萬人、其ノ額面金額 5,857萬圓ニシテ、前年ヨリ増スコト人員 6萬人、證券額面金額 929萬圓ナリ。是等ノ數ヲ十年前ナル明治三十九年ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ、同年ハ日露戰役ニ關スル行賞貯金ノ最多キ年ナリシニモ拘ハ

XVI. 貨幣及度量衡

【貨幣】 大正六年度中造幣局ニ於テ 貨幣鑄造ノ爲受領シタル地金ノ量ハ金 30,678貫 322匁、銀 30,700貫 694匁、白銅 5,821貫、青銅 43,881貫ニシテ、前年ニ比シ金 13,733貫 333匁、銀 1,861貫 57匁、白銅 803貫、青銅 17,604貫ヲ各増加セリ、而シテ金ハ帝國人民及外國人ヨリノ 輸納ニ係ルモ銀以外ハ悉ク政府ヨリノ 受領ナリ。

大正六年度中、硬貨鑄造高ハ、金貨 130,993,120圓、銀貨 7,103,888圓、白銅貨 200,020圓、青銅貨 470,035圓、合計 138,767,043圓ニシテ金貨ハ悉ク二十圓貨幣、銀貨ノ内 4,502,723圓ハ五十錢貨幣、2,601,145圓ハ十錢貨幣、白銅貨ハ總テ五錢貨幣、青銅貨中 420,031圓ハ一錢貨幣 50,004圓ハ五厘貨幣ナリ。

同年度中、硬貨幣發行高ハ 149,600,600,802圓ニシテ上記鑄造高ト同シラス、即チ金貨ハ 167,780圓ノ 供試高ヲ除キ、更ニ前年度中ヨリノ 造幣局在高ヲ加ヘ、本年度中發行セラレタル額 141,830,802圓ニ達ス、銀貨以下ハ各千位以下ノ 端數ヲ供試ノ爲メ除キタル 殘額、即チ五十錢銀貨 450萬圓、十錢銀貨 260萬圓、一錢白銅貨 20萬圓、一錢青銅貨 42萬圓、五厘青銅貨、5萬圓ヲ發行セリ。之ヲ前年ニ對照スルニ、白銅貨ノ前年發行ノ額ト同一ナル外、金貨 8,157萬餘圓、銀貨 40萬圓、青銅貨 22萬圓ノ各増加セリ、而シテ

ラス、本年ノ指數ハ人員 144、金額 138ニ當リテ 遙ニ上レレヲ見ル。

【郵便振替貯金】 大正五年度末現在ノ 遞信省、朝鮮總督府、臺灣總督府、關東都督府及樺太廳ノ所管ニ係ル、郵便振替貯金加入口數ハ 88,188口ナリ。之ヲ十年前ナル明治三十九年度ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、1,102ニ當リ、其ノ進歩頗ル長足ナリト謂フヘシ。又大正五年度中ノ新規加入口數ハ 15,888口ニシテ、受入總金額ハ 54,304萬圓ナリ。此ノ中基本預金ハ僅ニ 0.03%ニシテ、其ノ他 99.97%ハ受入金額ナリ。斯ク急速ニ發達セルハ此ノ機關ノ簡易便法ナルニ依ルモノナラン。

【年金恩給拂渡】 大正五年度ニ於ケル、年金恩給取扱ハ 120萬口ニシテ、其ノ金額 3,529萬圓ナリ。今之ヲ五年前ナル明治四十四年度ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ口數ハ 111、金額ハ 122ニ當ル。

【郵便電信電話收入】 通信事業ハ上記ノ如ク 長足ノ進歩ヲ爲セリ從テ其ノ收入モ亦年々増加セリ。即大正四年度ノ收入ハ、決算總額 6,424萬圓ニシテ、内通常郵便ハ 2,458萬圓、小包郵便ハ 499萬圓、郵便爲替ハ 170萬圓、郵便貯金ハ 205萬圓、電信ハ 1,329萬圓、電話ハ 1,764萬圓ナリ。

同年度中ノ鑄造高ハ銀貨 535,954圓、白銅貨 22,679圓、銅貨 204,936圓、合計 710,890圓ニシテ、前年ノ鑄造高ニ比シ著シク少額ナルヲ以テ新ニ世上ニ流通スルニ至リシ 額ハ前年ニ比シ一層多額ナリ。

大正六年度ニ於テハ前記硬貨ノ外小額紙幣五拾錢 3,210萬圓、貳拾錢 437.5萬圓、拾錢 322.5萬圓、計 4,000萬圓ヲ新ニ發行シ以テ補助銀貨ニ代用セシメタリ。

明治三年造幣寮創設以來、貨幣發行ノ狀ヲ見ルニ 同年十一月ヨリ六年ニ至ル間ニ於テハ、約 5,600萬圓ノ發行アリ、爾後二十六年ニ至ル迄ノ每五年期間ニ 3千萬圓ヨリ 6千萬圓ニ次第ニ増加セシカ明治二十七年乃至三十一年度ノ五年期間ニ一躍 1億 9千餘萬圓ノ多額ニ上レリ、是レ言フマテモナク 日清戰役ノ期ヲ對シ生シタル戰費ノ増大ト国力ノ發展トノ結果ニ外ナラス、次ノ五年期間ニ於テモ亦 1億圓以上ノ發行アリ、更ニ明治三十七年度ヨリ四十一年度ニ至ル期間ニ於テ亦 2億圓ヲ突破セリ、四十二年度乃至大正二年度ノ期間ニ於テモ 1億 9千餘萬圓ノ發行アリ 其後未タ五年ノ期間ニ滿タサルモ既ニ 2億 7千餘萬圓ヲ超スルニ至レリ、假ニ右ニ 4千萬圓ノ小額紙幣ヲ加算セハ 3億圓以上ニ上ル。

尙明治三年以來ノ貨幣發行ノ總額ハ 12億 1,257萬圓ニシテ同期

間ニ於ケル鑄造高ノ總額ハ 7,805萬餘圓ナルヲ以テ、差引 11億 3,452萬餘圓ナルモ、密ニ民間ニ於テ鑄造サレ、又ハ國外ニ輸出セラレ、類ヲ知ルヲ得サルヲ以テ、實際社會ニ流通スル硬貨ノ幾何ナルヤヲ推測シ難シ。尙兌換銀行券ニ就キテハ之ヲ銀行ノ部ニ掲ケ置キタリ。

【度量衡】 大正五年度中、度量衡器ノ檢定數ハ度器 5,000,215、量器 976,785、衡器 1,185,592ニシテ、内中央度量衡檢定所竝ニ其ノ支所ニ於テ農商務大臣カ檢定ヲ與フル所謂甲種檢定ハ、度 19,914、量 153,078、衡 22,433、又地方長官ニ於テ檢定ヲ與フル所謂乙種檢定ハ、度 47,9231、量 818,707、衡 1,163,129ナリ。右ノ内檢定合格數ハ度器 4,875,058、量器 945,630、衡器 1,151,301ナリ、上記度量衡器ノ大正五年度ノ檢定數竝ニ其ノ合格數ハ各種共ニ前年ニ比シ増加ヲ示ス就中衡器ニ於テ著シ、尙本年度ヨリ瓦斯計器ノ檢定行ハレ其數 81,226、内檢定合格シタルモノ 77,777ナリ。

同年度中ノ度量衡器ノ販賣數即チ需用高ヲ見ルニ、全國ニ於テ度器 4,205,581、量器 913,500、衡器 738,884ニシテ、前年ニ比シ量器少シク減少シタル外、度衡ノ二器ハ何レモ増加セリ、但シ其ノ人口千ニ對スル比例ヲ見レトキハ、度 77.23%、量 16.54%、衡 13.38%ニシテ、其ノ前年ヨリ増加シタルハ獨リ度器アルノミ、衡

XVII. 銀行及金融

【銀行總說】 大正五年末帝國内（朝鮮ニ本店ヲ有スル銀行ノ朝鮮ニ於ケル數ヲ除ク）ニ本店ヲ有スル銀行ノ總數ハ 2,143、内普通銀行 1,427、貯蓄銀行 664、特殊銀行 52ナリ、而シテ是等ノ銀行ノ支店及出張所數ハ 3,731、其ノ拂込資本金 677,507,592圓、積立金 273,613,234圓ナリ、又同年中是等ノ銀行ノ取扱ヒシ入金及出金ハ共ニ約 1,773.3億圓ニシテ、其ノ純益金 1億 4,421萬圓、配當金 5,322萬圓ナリ。前年ニ比シ本店 8ヲ減シ支店及出張所 301ヲ増シタルヲ以テ一銀行平均支店出張所ノ數ハ 1.74ト爲リ 0.15ノ増加ト爲ル、又銀行數ヲ減シタルニ拘ラス、拂込資本金及積立金共ニ増加シタル結果、其ノ一銀行平均ハ拂込資本金 316,149圓、積立金 127,697圓ト爲リ各 13,589圓及 9,060圓ノ増加ヲ示ス、又拂込資本金及積立金百圓ニ付キテノ入金又ハ出金ハ各 18,043圓及 18,641圓ニシテ前年ヨリノ増加 6千餘圓ニ達シ本年銀行ノ活動ノ顯著ナルヲ示ス、從テ拂込資本金百圓ニ付純益金ハ 21圓 19錢ニシテ前年ニ對シ 1圓 9錢ヲ増セリ。

大正五年中銀行ノ總預金ハ 572.2億圓ニ上リ前年ヨリ増加セルコト 207.8億圓、又其年末殘高ハ 35.6億圓ニシテ前年ヨリ増加セルコト 9.6億圓ヲ超ス、橫濱正金銀行ヲ首トシ其他小銀行ノ借入

器モ亦少シク減少ノ數ヲ示ス。右需用高人口比例ヲ府縣別ニ就キテ見ルニ、度器ハ最高大阪 204.43%、東京 200.91%、京都 194.04%、北海道 115.09%、兵庫 106.71%ノ順ニシテ、最低沖縄 29.98%、宮城 35.06%、鳥根 35.26%、埼玉 37.59%ノ順位ナリ、次ニ量器ハ佐賀 31.76%、愛媛 28.34%、京都 27.29%、大阪 25.39%福岡 25.24%ヲ多キ順位トシ、栃木 9.30%、山形 9.41%、富山 9.66%、岡山 9.79%ヲ少キ順位トス、又衡器ハ大阪 29.92%、東京 25.80%、京都 21.71%、北海道 18.95%等多ク、奈良 2.19%、鹿兒島 4.66%、宮城 5.89%等少シ。

度量衡器ノ第一種檢査即チ府縣知事ニ於テ行フ取締ノ、大正五年度中ノ成績ヲ見ルニ、檢査戶數 1,376,525、其ノ器數度 497,089、量 3,031,262、衡 1,953,529ニシテ、各器ノ檢査百中不合格ノ割合ハ、度6.0%、量5.0%、衡10.0%ナリ、前年ニ比シ檢査ノ戶數竝ニ各器數共著シク多ク、其不合格ノ割合亦度器ノ同一ナル外他ノ二種ハ増加セリ、而シテ本年度ニ於ケル 各府縣ノ檢査不合格ノ多少ヲ見ルニ度器ハ、青森、鹿兒島、長崎、大阪等、量器ハ、大阪、佐賀、長崎等、衡器ハ熊本、群馬、福島、高知等不合格ノ割合高シ。右ノ外度量衡ノ檢査ニハ市町村長ニ於テ行フ所謂第二種檢査アルモ其ノ材料無シ。

金並再割引手形モ前年ニ於テハ其ノ前年ヨリ減シタルニ拘ラス大正五年ニ於テハ總テ激增ヲ示ス。

同年中貸出金ノ總高ハ 157.3億圓、其ノ年末殘高 28.8億圓、割引手形ノ總割引高 98.0億圓、其年末殘高 10.3億圓、荷爲替手形ノ總貸付高ハ 17.8億圓其年末殘高 0.4億圓ナリ、之ヲ前年ノ數ト對照スルニ割引手形ノ年末殘高ヲ減少シタル外、悉ク増加ヲ示シ殊ニ貸出金ノ總高殘高共ニ又荷爲替手形ノ總貸付高ニ於テ何レモ前年ノ二倍ニ増加セリ。

次ニ同年中ノ預ケ金ハ 201.4億圓、其ノ年末殘高 4.4億圓、有價證券ノ年末在高ハ實價 7.4億圓、金銀年末在高ハ 3.6億圓ニシテ何レモ前年ニ比シ膨脹ヲ示ス。

【日本銀行】 明治十五年 200萬圓ノ拂込資本ヲ以テ創立セラレタル日本銀行ハ、大正五年末現在ニ於テハ支店及出張所ノ數 117ヲ有シ拂込資本金 3,750萬圓ト爲リ、共ニ前年ト異ルナキモ、積立金 3,124.5萬圓ヲ算シ前年ニ比シ 102萬圓ヲ増加セリ、同年中ノ入金及出金ハ各 243.1億圓餘ニシテ是亦 70.0億圓ヲ増セリ、從テ純益金モ亦増加ヲ示ス。

日本銀行兌換券發行高ノ狀況ヲ見ルニ、大正五年末ニ於テハ 6

億 0.122 萬餘圓ニシテ從來嘗テ見サル最高額ナリ、其ノ同年中各月末ノ狀況ヲ尋ヌルニ 一月末ニ於テ前年末ノ數ヲ大ニ減シタルヨリ以後五月末マテハ一高一低ノ數ヲ示シタリシカ 例年ノ如ク六月末ニ奔騰シ、七月末再々激減シ爾後各月遞増シテ 終ニ年末ノ最高ニ達セリ、從テ同年中ハ二月乃至五月ノ四箇月ヲ除クノ 外各月末常ニ制限外發行ヲ見タリ、右ニ對スル金貨及金塊ノ準備モ亦六月以降特ニ著シク増加シ年末ニ於テハ 4.1 億圓ニ上リ前年末ニ比シ 1.6 億圓以上ヲ激増セリ。同年中ノ交換高ハ銀行券受入金貨拂出額 3,150 萬圓、金貨受入銀行券拂出額 22 萬餘圓ニシテ 共ニ前年ヨリ減少セリ。

日本銀行ニ於ケル預金ノ大正五年中總預高ハ 150.5 億圓、其ノ年末殘高ハ 3.8 億圓ニシテ前年ニ比シ共ニ 5 割以上ノ増加ナリ、從テ從來嘗テ有ラサル最高ニ達セリ、而シテ之ヲ官公預金ト普通預金トノ別ヲ見ルニ一年中ノ總預高ニ於テハ官公預金 28 億圓、普通預金 122.5 億圓ニシテ 普通預金著シク多額ナルモ 其年末殘高ハ官公預金 3.5 億圓、普通預金 0.2 億圓ノ數ヲ示シ兩者ノ割合全ク轉倒ス之レ實ニ日本銀行預金ノ特徴ナリ、併シナカラ前年ニ對スル本年増加ノ狀況ハ寧ろ普通預金ニ於テ著シ。

貸出金ノ大正五年中總貸付高ハ 4.7 億圓ニシテ前年ニ比シ 1.7 億圓ヲ増加シタルモ、既往累年ノ數ト比較スルトキハ明治三十二、三年同三十七、八年、同四十四年乃至大正二年等更ニ多額ノ年アリ、然レトモ其ノ年末殘高 1.4 億圓ハ前年ニ比シ 1 億餘圓ヲ増加シタルノミナラス、明治三十七年ヲ除クノ外嘗テ有ラサルノ多額ナリ、而シテ其ノ内容ハ政府貸上金ハ同年中貸上金並其ノ年末殘高共ニ 2,200 萬圓ニ過キサルヲ以テ、其ノ大部分即チ總貸付金 4.4 億圓、年末殘高 1.2 億餘圓ハ普通貸付金ニシテ、而モ其ノ中六割強ハ外國爲替貸付金ニ屬ス。前年ノ異常ナル少額ニ對シ本年ハ顯著ナル増加ヲ示ス。

本年中割引手形ノ總割引高ハ 3.4 億圓、其年末殘高 0.6 億圓ニシテ前年ノ激減ニ反シ、大ニ増加ノ數ヲ示スモ、既往ノ數ニ比シテハ必スシモ多額ト云フヲ得ス。

次ニ預ケ金ハ大正五年中總預ケ高 8,314 萬圓、年末殘高 5,470 萬圓ニシテ前年ニ比シ大ニ増加シ、殊ニ年末殘高ハ未タ嘗テ有ラサルノ最多ナリ、金銀年末在高モ亦 9,888 萬圓ニシテ前年ヨリ 1 千萬圓ヲ増シタルニ 公債證書ノ年末在高實價 3,672 萬圓ナルハ前年ヨリ減少ヲ示ス。

諸手形中、送金手形ハ大正五年中振出 18.5 億圓、受込 19.0 億圓ニシテ共ニ前年ニ比シ約 7 億圓ノ増加ナリ、蓋シ未曾有ノ最高ナルノミナラス、累年増加ノ趨勢中ノ激増ヲ呈ス。

【橫濱正金銀行】 橫濱正金銀行ハ明治十三年拂込資本金 14

0 萬圓ヲ以テ開業シタル所ナルカ 大正五年末ニ於テハ拂込資本金 3,000 萬圓ト爲リ、内地及支那歐米南洋等重要ナル各地ニ支店出張所 30 ヲ有スルニ至リ前年ヨリ更ニ 1 出張所ヲ増セリ。大正五年中ノ入金及出金ハ共ニ 295.6 億圓餘ニシテ 前年ニ比シ 各約 100 億圓ヲ増シタリ、前年ニ於テハ其ノ前年ノ不振ヲ受ケ大ニ之ヲ回復シタリシカ未タ大正二年ノ最高ヲ超ユルヲ得サリシニ 本年ニ於テハ實ニ從來ノ最高タル大正二年ニ優ルコト約 90 億圓ナリ、但シ同年ニ於ケル純益金ハ 621 萬餘圓ニシテ前年ヨリハ増加シタルモ却テ大正三年ヨリハ少シ。

橫濱正金銀行モ亦明治三十九年勅令ニ依リ、關東州及支那ニ於テ銀行券ヲ發行スルコトヲ得、其ノ大正五年末ニ於ケル發行額ハ之ヲ日本貨ニ換算シ 1,805 萬餘圓ニシテ前年末ニ比シ 1,085 萬圓ノ増加ナリ。

預金ノ大正五年中總預高ハ 56.4 億餘圓、其ノ年末殘高 2.7 億餘圓ニシテ、前年ニ對シ約 24 億圓及 1 億圓ノ増加ナルノミナラス、從來嘗テ見サルノ最高ナリ、而シテ右年末殘高ハ政府ノ國債元利仕拂基金 1,423 萬餘圓ト普通預金 2 億 5,591 萬餘圓トヨリ成リ、政府預金ハ前年ト大差ナキモ普通預金ノ激増ハ實ニ注目ニ値ス。

大正五年中借入金ノ總高ハ 5.6 億圓ニ上リ、其ノ年末殘高 1.4 億餘圓ナリ、是亦前年ニ對シ總高ニ於テ約 1.8 億圓、殘高ニ於テ 1.0 億圓ノ著増ニシテ累年中ノ最高ヲ示ス。反之再割引手形ハ同年中總割引高 1.6 億餘圓、年末殘高 4,051 萬圓ノ數ニシテ、總割引高ハ前年ヨリ却テ減少シ年末殘高ハ前年ト殆ント同額ナリ。

貸付金ハ大正五年中總高 11.1 億餘圓、年末殘高 0.9 億餘圓ナリ、是亦前年ニ對スル 激増並累年中ノ最多ナル預金ト其軌ヲ一ニス、貸付金ハ政府ニ對スル 貸上金年末僅ニ 112 萬圓ニシテ他ハ悉ク普通貸付金ナリ。

割引手形ハ大正五年中總割引高 13.6 億餘圓、年末殘高 2.9 億餘圓ナリ前年ノ減少ニ反シ著シク増加セリ。

次ニ大正五年中ノ預ケ金總高ハ 29.7 億圓、其ノ年末殘高 0.7 億餘圓ニシテ 是亦前年ニ對スル 激増ト從來ノ最多額ト共ニ顯著ニ認めラル、所ナリ。同年末金銀在高 3,071 萬圓モ亦前年ヨリ 7 百萬圓ノ増加ヲ示ス、有價證券ハ同年末 2,153 萬餘圓ニシテ前年ニ比シ僅ニ増加シタルノミ。

橫濱正金銀行ニ於ケル業務ノ主要ナルモノハ 實ニ其ノ爲替殊ニ海外トノ爲替ニ在リ、今大正五年中ニ於ケル内地本支店ト他トノ間ノ爲替ノ數ヲ見ルニ割引手形又ハ買入爲替手形ト、各地ヘ向ケタルモノ 6.1 億圓、内内國 1.6 億圓、海外 4.4 億餘圓、又各地ヨリ受ケタルモノ 5.4 億餘圓、内内國 2.4 億餘圓、海外 3.0 億餘圓ニシテ皆前年ニ比シ恰モ二倍ノ増加ヲ示ス。送金手形ハ各地、向ケケ

ルモノ 12.4 億餘圓、内、内國 8.9 億餘圓、海外 3.5 億餘圓、又各地ヨリ受ケタルモノ 11.8 億餘圓、内、内國 9.1 億餘圓、海外 2.7 億圓ナリ、是又前年ニ對シ殆ント二倍ニ増額セリ。代金取立手形ハ向ケタルモノ 0.3 億餘圓、受ケタルモノ 0.4 億餘圓、ニシテ何レモ前年ニ比シ増加シ殊ニ前者ハ約二倍ト爲レリ 而シテ此手形ハ主トシテ内國ノ爲替ニ屬ス。爲替預金手形及利付爲替手形ハ何レモ海外爲替ニ係ルモノニシテ爲替預金手形ノ各地ヘ向ケタル額 9 百萬圓、各地ヨリ受ケタル 1 千萬圓餘亦前年ニ二倍ス、利付爲替手形ハ向ケタルモノ 1.1 億餘圓、受ケタルモノ 0.6 億餘圓、前年ニ對スル増加約五割ニ相當ス。以上爲替取扱ノ地方別數ハ之ヲ各表ニ就キテ見ルヘシ。

【日本勸業銀行】 日本勸業銀行ハ 明治三十年資本金 250 萬圓ノ拂込ヲ以テ創立セラレシカ、最近大正五年末ニ於テハ恰モ其ノ十倍 2,500 萬圓ノ拂込資本ヲ有シ前年ト同一ナルモ、積立金ハ 6.44 萬餘圓ニ上リ 90 萬餘圓ヲ増加セリ。同年中ノ入金及出金ハ 3 億餘圓ニシテ前年ヨリ減少ス 是レ他ノ銀行トハ全ク反對ノ現象ナリ、然ルニモ拘ラズ純益金ハ 888 萬餘圓ニシテ前年ヨリ増加セリ之レ正金銀行トハ全ク相反ス。

勸業銀行ノ特權ニ屬スル勸業債券ノ大正五年中新ニ發行シタル金額 1,442 萬圓、償還額 649 萬餘圓、差引増發 492 萬餘圓ナリ之ニ從來ノ越高ヲ加ヘ年末殘高 2 億 1,083 萬餘圓ヲ算ス、同年中ノ新發行並償還額共ニ前年ヨリ減少セリ。

大正五年中ノ預金總額ハ 2,585 萬餘圓ニシテ 其年末 630 萬餘圓ナリ、同銀行ノ預金業務ハ事新シキニ係ルノミナラス、業務中甚タ重要ナラサルモノナルカ故ニ其額亦多カラス。

次ニ貸付金ハ大正五年中總貸付高 2 億 5,683 萬餘圓、其年末殘高 2 億 2,179 萬餘圓ナリ、前年ニ比シ年末高少シク減少セリ、本年ハ前年ト少シク現象ヲ異ニシ 定期償還稍増加シ年賦償還減少セリ。割引手形ハ同年中著シク増加シ、總割引 2,036 萬圓、年末殘高 534 萬圓ヲ示シ前年ニ約二倍ス。

日本勸業銀行ノ大正五年末殘高ノ年賦償還貸付金 2 億 1,620 萬圓ヲ其年賦年限別ニ見ルニ十五年 6,050 萬圓、二十年 5,370 萬圓、十年 4,108 萬圓等著シク多ク、他ハ甚タ少キ等前年ト大差ナシ但シ本年始メテ五十箇年ノ長期ニ 67,187 圓ノ數ヲ見ルニ至リタリ。次ニ右借主ノ業體別ニ見ルニ 農業者 7,823 萬圓ヲ最高トシ、工業者 5,505 萬圓ヲ次位トスル等前年ト略同一ナルモ耕地整理 2.6 78 萬圓ハ更ニ前年ヨリ増大シタルコト 産業組合水利組合等年々増額ノ數ヲ示シツ、アルトハ注目スルニ足ル。

定期償還貸付金ハ前年末ニ比シ増加シタリトハ大正五年末 559 萬圓ニ過キス、之ヲ年限別トスルトキハ二箇年著シク多シ、從來恒ニ五箇年最多ナリシト全ク現象ヲ變化セリ。業體別ニ見ルトキハ其他ノ諸業者ト稱スル一團ヲ除クノ外 工業者抽シテ、多額ナリ、是レ年賦貸付ト異ル點ナリ。

大正五年中勸業銀行ノ預ケ金總高ハ 1 億 2,032 萬圓ニシテ前年ニ比シ約 1,400 萬圓ヲ増シ、年末殘高ハ 1,105 萬圓ニシテ是亦 192 萬圓ヲ増セリ、年末在高公債證書 1,191 萬餘圓、株券社債券 56 萬餘圓ナリ共ニ前年ニ比シ増加セル所ナルカ 就中公債證書ノ額激増セリ、金銀ノ年末在高ハ 11 萬餘圓ナリ。

【農工銀行】 農工銀行ハ明治三十一年一月 静岡農工銀行ノ開業ヲ以テ初マリ、同三十三年八月阿波農工銀行ノ開設ニ及シテ全國總數 46 ヲ算シ爾來其數ニ變動ナク 大正五年ニ於テモ 同數ナリ、支店及出張所 6 是亦前年ト同シ、大正五年末拂込資本金 4,689.5 萬圓、前年ニ比シ 180 萬圓ヲ増加セリ、積立金 2,363 萬餘圓是亦 334 萬圓ノ増加ナリ、從テ一銀行平均資本金 1,016,456 圓、積立金 513,779 圓ト爲レリ、同年中ノ入金及出金ハ各 6.5 億圓ニシテ前年ニ比シ約 0.5 億圓ヲ増セリ、勸業銀行ノ減少シタルト同シカラス、純益金亦 903 萬餘圓、前年ニ増セル收益ヲ舉ケタリ。

農工債券ノ大正五年中發行セラレタル額 1,186.6 萬圓、同年中償還セラレタル額 549.1 萬圓、從テ同年中ノ増發 637.4 萬餘圓、之ヲ前年ノ越高ニ加ヘ、大正五年末殘高 9,895.4 萬圓ヲ存ス。

大正五年中農工銀行ノ預金總高ハ 1 億 4,354 萬圓ニシテ前年ニ對シ 2,275 萬圓ヲ増シ、其ノ年末殘高 4,636 萬餘圓ニシテ、前年ヨリ 825 萬圓ヲ増加セリ、右年末高ノ内容ハ官公預金 584 萬餘圓、普通預金 4,051 萬餘圓ヨリ成リ、兩者共ニ前年ヨリ増加ヲ示ス。

農工銀行ノ大正五年中借入金總額ハ 424,610 圓ニシテ、其ノ年末殘高ハ 351,577 圓ニ過キス、逐年減少ノ趨勢ヲ追ヒ前年ヨリ更ニ減少セリ。

農工銀行貸付金ノ大正五年中總貸付高 1 億 9,091 萬餘圓、其ノ年末殘高 1 億 6,262 萬餘圓、前年ニ比シ 1,726 萬餘圓、並 843 萬餘圓ヲ各増加セリ、今年年末殘高ヲ種類別トシ掲ケレハ、年賦貸付 1 億 4,172 萬餘圓、定期貸付 1,109 萬餘圓、短期貸付 45 萬餘圓、其他貸付 934 萬餘圓ニシテ、年賦及定期貸付ハ前年ニ比シ増加ヲ示スモ他ノ二種ハ減少セリ。同年中ノ 割引手形ハ 412 萬餘圓、其年末殘高 85 萬餘圓ヲ示シ、前年一旦減少シタリシカ本年ハ再々増加セリ。

農工銀行貸付金ノ主タル年賦貸付金ノ大正五年末數ヲ年限別ニ見ルトキハ、十五年以上二十年ノ期間最も多ク 6,484 萬圓ヲ占メ、總數ノ約半ニ當ル、之ニ次テハ十年以上十五年 3,780 萬圓及二十年以上二十五年 2,629 萬餘圓ナリ、而シテ大體ニ於テ逐年長期貸付ニ傾キツ、アルカ如シ。次ニ之ヲ借主業體別ニ見ルニ 農業者最も多

ク其額 8,932萬圓、即チ總體ノ三分二強ヲ占ム、之ニ次テハ工業者ノ 2,653萬餘圓ナリ、以上二者ヲ合シテ約十分ノ八ニ當ル、而シテ耕地整理及産業組合等ハ勸業銀行ノ場合ニ於ケルカ如ク重要ナル借主ニアラス。次ニ之ヲ抵當ノ有無別ニ見ルニ、有抵當 1億 3,574萬餘圓、無抵當 597萬餘圓ナリ、無抵當ハ前年ヨリ減シ有抵當年々増大ス、惟フニ借主ハ公共團體等寧ロ減少ノ傾向アルニ反シ、普通農工業者ノ著シク増加スル事實ト相關連スルナルヘシ

次ニ定期貸付金ノ大正五年末數ヲ償還年限別ニ見ルニ總額ノ約半數ハ四箇年以上五箇年ノ年限ニ屬ス、一年、二年、三年ハ各殆ソト同額ニシテ一年未滿ハ更ニ之ヨリ少シ。更ニ之ヲ業種別ニ見ルトキハ、農業者連帶、農業者、工業者等最モ多シ之ニ次テハ前年ニ於テハ産業組合ナリシカ本年ハ公共團體ト其ノ順位ヲ轉倒セリ又之ヲ抵當別ニ見ルニ大正五年末定期貸付金ハ抵當貸 633萬餘圓、信用貸 476萬餘圓ニシテ、年賦貸付ノ殆ソト大部抵當貸ナルト大差アリ。

農工銀行ノ大正五年中預ケ金總高ハ 2億 6,408萬餘圓、其ノ年末殘高 4,038萬圓ニシテ共ニ前年ニ比シ甚大シ且逐年増加ノ趨勢ニ適ス。次ニ同年末有價證券在高ハ實價 1,438萬餘圓ヲ示シ前年ニ對シ二倍以上ノ激増殊ニ公債證書ハ三倍以上ナリ。金銀年末在高ハ 98萬餘圓、前年ヨリ少シク減ス。

【北海道拓殖銀行】 北海道拓殖銀行ハ明治三十三年ノ開業ニ係リ、大正五年末ニ於テハ支店出張所數 10、拂込資本金 500萬圓、積立金 170萬餘圓ナリ、即チ前年ニ比シ、出張所 2、積立金 14.5萬餘圓ヲ増加セリ、又同年中ノ入金及出金ハ共ニ 6.7億圓ニシテ前年ニ比シ約 2.5億圓ノ大激増ニシテ從テ純益金亦 71萬圓前年ニ勝ルコト 11萬餘圓ナリ。

北海道拓殖銀行債券ノ大正五年中發行セラレタルモノ、562萬餘圓、償還セラレタルモノ 466萬餘圓、差引増發額 95萬餘圓ナリ、之ヲ前年ノ越高ニ加算シ年末殘高 2,090萬餘圓ナリトス、發行並償還高共ニ前年ニ比シ著シク高額ナリ。

大正五年中總預金高 1億5,053萬餘圓、其ノ年末殘高 1,562萬餘圓、總預高ハ前年ニ約二倍シ年末高ハ 400萬圓ヲ増加セリ、而シテ此ノ年末高ノ内容ハ定期預金 729萬餘圓、當座預金 236萬餘圓、其他預金 596萬餘圓ニシテ何レモ前年ヨリ増加セサル無キニ、就中其他預金ノ増加額大ナリ。

次ニ大正五年中ノ貸付金總高ハ 3,970萬餘圓、其年末殘高 2,839萬餘圓ニシテ前年ニ比シ總貸付高稍増加シタルモ、年末高却テ少シク減少セリ、然ルニ同年中ノ割引手形ノ總割引高 4,228萬餘圓、其年末高 879萬餘圓ニシテ前年ニ對シ總割引額約 2,510萬圓、年末殘高 647萬圓ノ大増加ヲナシ、又荷爲替手形モ總貸付高 1,445萬

圓、年末殘高 101萬餘圓、前年ニ比シ 410萬圓ノ總貸付 41萬圓ノ年末殘高ヲ増加シタルヲ見レハ、北海道拓殖銀行ニ於ケル貸付ノ投資ハ普通貸付ヨリハ寧ロ割引又ハ荷爲替ノ方面ニ主トシテカノ用ユルニ至リシヲ知ルニ足ル。尙同年末貸付金高ヲ種類ニ分チ見ルニ、年賦貸付 2,110萬餘圓、定期貸 140萬餘圓、當座貸 57萬餘圓、其他貸付 30萬餘圓ナリ。

大正五年末北海道拓殖銀行年賦貸付金ノ年限別ヲ見レハ、最短ハ四箇年最長三十箇年ニシテ、十五箇年、十箇年、十二箇年、二十箇年、十三箇年等著シク多額ナリ。又之ヲ借主業種ニ區別シテ見ルトキハ、農業者著シク多キ外之ニ次テハ土功組合及商業者多ク工業者却テ少キ等ノ事實ハ勸業銀行及農工銀行等ト趣ヲ異ニス

次ニ定期貸付金ノ年限ハ二箇年及一箇年最モ多ク次テ五箇年、三箇年ナリ、殊ニ大正五年ニ於テハ一箇年ノ數益多キヲ加ヘタリ、更ニ之ヲ借主業種別ニ見レハ、漁業者最モ多ク次テ農業者、雜業者、土功組合、商業者等ナリ是又此ノ銀行ノ特色ナルカ如シ。

手形ノ取扱數亦大正五年ニ於テ著シク増加セリ、即チ送金手形ハ前年ハ減少セシカ大正五年ニハ振出 2,419萬餘圓、受込 2,634萬餘圓ニシテ約五割ノ増加ナリ、代金取立手形當所 774萬圓、他所 303萬餘圓共ニ激増セリ。

次ニ大正五年中預ケ金總高ハ 1億7,283萬餘圓ニシテ前年ニ對シ異狀ノ増加ヲナセシモ、其年末預ケ高ハ 501萬餘圓ニシテ却テ前年末ヨリ減少ス、又有價證券ノ年末在高ハ 289萬餘圓、金銀年末在高ハ 133萬餘圓、共ニ前年ヨリ増加セリ。

【臺灣銀行】 臺灣銀行ハ明治三十二年ヨリ營業ヲ開始シ、同年末ニ於テ拂込資本金 125萬圓ナリシカ、大正五年末ニ於テハ本店ノ外 26ノ支店及出張所ヲ有シ拂込資本金ハ更ニ前年ヨリ増額シ 14,992,475圓、ト爲リ積立金亦 73萬圓ヲ増加シ 488萬圓ト爲レリ、同年中入金及出金ノ額ハ非常ナル膨大ヲ示シ共ニ 83億餘圓ニ上リ前年ニ増スコト實ニ 33億圓ナリ、純益金 203萬圓ニ上ル。

臺灣銀行ニ於テ發行セル兌換銀行券ノ大正五年末現在發行高ハ 25,451,688圓ニシテ、前年末ニ比シ約 78萬圓ヲ増加シ、且ツ既往各年中ノ最多額ナリ、而シテ之カ準備ハ金 8,819,199圓、銀 2,183,943圓、保證準備 14,448,546圓ナリ、何レモ前年ヨリ増加シ殊ニ金準備及保證準備ノ額膨脹セリ。

大正五年ニ於ケル預金總高ハ 18億 6,754萬餘圓、其ノ年末殘高 1億 1,101萬餘圓ナリ、前年ニ對スル増加 6億 8,500萬圓及 3,643萬圓ナリ、右年末殘高ヲ種類別ニ掲ケレハ、定期 5,884萬餘圓、當座 1,998萬餘圓、其他 3,224萬餘圓ニシテ定期預金ノ増加特ニ大ナリ。

又借入金ノ同年中ノ總高ハ 439萬餘圓ニシテ前年ニ比シ僅ニ増加シタルニ拘ラス其年末高 150萬圓ハ約二倍ノ増加ナリ。臺灣銀

行ニ於ケル信託金ハ益膨脹シ大正五年中ノ總受入額 1,934萬圓ニシテ其年末殘高 643萬圓ヲ超ユ、前年ヨリ五割以上ノ増加ナリ。

貸付金ノ大正五年中ノ總額ハ、2億 6,327萬圓、其年末殘高 3,662萬圓、前年ニ比シ 8,924萬餘圓及 1,373萬餘圓ヲ各増加ス、此ノ増加モ亦頗ル甚大ナリ、右年末殘高ヲ種類別トセハ、政府貸上 591萬餘圓、定期 952萬餘圓、當座 837萬餘圓、利付爲替手形 1,281萬餘圓ニシテ、前年ニ對シテハ政府貸上金獨リ減少セル 外他ハ悉ク増加シ利付爲替手形ノ増加殊ニ甚シ。

割引手形ノ大正五年中ノ總割引高ハ 7億 6,092萬餘圓、其ノ年末殘高 1億 3,067萬餘圓、前年ニ對スル増加約 3億圓及 5千萬圓ナリ、銀行開業以來ノ數普通貸付ノ増加ニ比シ割引手形ノ増加特ニ著シキヲ見ル、又荷爲替手形ノ大正五年中ノ總貸付高ハ 3,665萬餘圓ニシテ其年末殘高 530萬餘圓ナリ是又顯著ナル發達ナリ、次ニ同年中ノ送金手形ハ振出 3億 7,156萬餘圓受込 3億4,734萬餘圓、又代金取立手形ハ當所 1,592萬餘圓、他所 1,706萬餘圓ナリ、何レモ管テ有ラサル最多數ヲ示ス。

臺灣銀行ノ大正五年末預ケ金ハ 313萬餘圓、有價證券實價 1,114萬餘圓、金銀在高 1,038萬餘圓ナリ、預ケ金獨リ前年ニ比シ少シク減少ス。

【日本興業銀行】 日本興業銀行ハ明治三十五年拂込資本金 250萬圓ヲ以テ營業ヲ開始シタル所ナルカ、大正五年末ニ於テハ拂込資本金 1,750萬圓、積立金 204萬餘圓ヲ有ス、積立金ハ前年末ニ對シ 12萬餘圓ヲ増加セリ、同年中ノ入金及出金ハ各約 9億2,460萬圓ニシテ前年ニ比シ 2億 2,890萬圓ヲ増セリ、純益金 123萬餘圓ハ前年ヨリ稍減少セリ。

大正五年中ノ債券ノ發行高ハ 1,500萬圓、償還高ハ 198萬餘圓、差引増發 1,306萬餘圓ニシテ、前年ヨリノ越高ニ加ヘタル同年末殘高ハ 7,727萬餘圓ナリ。

預金ノ大正五年中總預高ハ 12億 6,165萬餘圓、其年末殘高 3,550萬圓、前年ニ對スル増加 6,378萬圓及 1,713萬圓ニシテ、其ノ年末高ノ内譯定期 1,271萬餘圓、當座 199萬餘圓、其他 2,079萬餘圓ナリ、右ノ内譯定期預金ハ前年ヨリ減少シ、其他預金獨リ著シク増加シ前年ノ十倍以上ニ及ヘリ。興業銀行資金ノ主要タル信託金ハ大正五年ニ於テハ兩三年來ノ多額ニ上リ同年中ノ總受入 6,071萬餘圓ニ達シ、且ツ其ノ年末殘高 1,462萬圓タル從來ニナキ最高ヲ示セリ、右ノ信託金ニハ擔保付社債信託契約ノ數ヲ含マス。

貸付金ノ大正五年中ノ總高ハ 3,690萬餘圓、其ノ年末殘高 3,199萬圓、共ニ前年ヨリ増加ニ在ルモ他ノ増加ニ比シ多カラズ、其ノ年末殘高ノ殆ソト全部即チ 3,110萬餘圓ハ定期貸付金ニシテ、當座貸付並不動産擔保貸付金ハ極メテ少シ。

割引手形ハ貸付金ヨリハ遙ニ多ク、大正五年中ノ總割引高 1億 7,894萬餘圓ニシテ、前年ヨリ 1千萬圓ヲ増加セシカ其年末殘高ハ 4,546萬餘圓ニシテ此ノ額ハ前年ヨリ 1,600萬圓ヲ増加セリ。

大正五年中ノ預ケ金總高ハ 3億 1,540萬圓、其年末殘高 1,207萬圓、又有價證券ノ年末在高ハ 4,106萬圓ノ多額ヲ示シ、他ノ各種ノ銀行ニ比シ、特ニ多シ之レ又此ノ銀行ノ特徴ノ一ナルカ如シ、金銀ノ大正五年末在高ハ 306,399圓ナリ。

【普通銀行】 大正五年末普通銀行ノ總數ハ 1,427、其ノ支店出張所數 2,193、拂込資本金 3億 7,448萬圓、積立金 1億 3,474萬圓ナリ、前年ニ比シ、行數 15ヲ減シ、支店及出張所 218ヲ増シ、拂込資本金 1,677萬圓、積立金 704萬圓ヲ増加セリ、從テ大正五年末ニ於テハ一銀行ニ對スル支店出張所數ハ 1.52ト爲リ 0.17ヲ増加シ、資本金ハ 262,425圓ト爲リ 14,361圓ヲ、積立金ハ 94,425圓ト爲リテ 5,889圓ヲ各増加セリ、我國ノ銀行モ幾分カ合併行ハレ小銀行ノ合併ヨリ資本合同支店組織ノ制ニ漸向シツ、アルノ趨勢觀知セラル、同年中ノ入金及出金ハ各約 901億圓ニシテ拂込資本金及積立金合計百圓ニ對シ約 19,460圓ニ當リ、是又前年ニ比シ約 6,840圓ヲ増セリ、其活動モ亦本年ハ著シク増進シタルヲ知ル、拂込資本金百圓ニ對スル純益金ハ 23.62%ニ當リ之亦前年ヨリ著シク増加セリ。我國ノ普通銀行ヲ明治三十二年以來ノ數ニ就キ見ルニ其ノ行數ニ於テハ明治三十四年ヲ最多トシ漸次減少シ來リ、同四十四年及大正元年ニ再ヒ少シク増加シタルモ大體ニ於テ年々行數減シ支店出張所數増加シ、資本金及積立金ハ全然例外ナク漸増シ、次第ニ實質ノ充實ニ趣キツ、アリ、但シ本書所掲ノ統計表大正四年ノ數ニ異變アルハ從來貯蓄銀行兼營ノ銀行數ヲ該年ニ於テ除キタル計算上ノ差ニ基クハ前年ニ鑑ミ掲ケタル所ノ如シ。

普通銀行ノ大正五年末ニ於ケル府縣分布ノ狀況ヲ見ルニ、本年ハ前年ト地位ヲ轉倒シ兵庫縣ノ 131ヲ最多トシ、靜岡縣ノ 130ヲ以テ第二位ニ下リ、東京府 107、長野縣 78、福岡縣 61、大阪府 49、新潟縣 48等之ニ次キ多數ナリ、而シテ德島縣ハ銀行一モ之ヲ有セス、支店出張所ヲ多ク有スルハ、兵庫、大阪、東京、岐阜、愛知等皆 100以上ヲ有ス、本店一モ有セサル德島縣ハ支店モ亦全國中最少ク僅ニ 3ヲ有スルノミ、本店數ノ多キ地方必スシモ資本金多キニアラス、其ノ拂込資本金ノ最モ多キ府縣ヲ摘記スレハ、東京、大阪、兵庫、靜岡、新潟等ナリ。

大正五年中預金ノ總預高ハ 310億圓、其年末殘高 22億餘圓ナリ、右預金ノ年末高ノ種類ヲ見ルニ、官公預金 3.4億餘圓、定期預金 9.8億餘圓、當座預金 5.9億餘圓、其他 6.3億餘圓ナリ、右ノ内譯定期預金及其他預金ノ増殖特ニ著大ナリ、尙府縣中、普通預金ノ多キ地方ハ、東京、大阪、兵庫、京都、愛知等抽シテ多額ナリ。借入

金ハ大正四年中總借入額 17.6億圓、年末殘高 1.2億圓ニシテ前年減少ノ後ヲ承ケ大ニ増加セリ、又再割引手形ハ同年中總割引高 2.6億圓、年末殘高 0.5億圓ナリ是亦前年ニ比シ著シク膨脹セリ、而シテ再割引手形ハ各地方中事實ナキ府縣亦少カラズ。

大正五年中ノ貸出金ノ總高 116.4億圓、其年末殘高 17.1億圓ノ激増ヲ示シ、殊ニ其ノ大部分ハ 定期貸出金ニ係ルモ、之レ銀行條例施行細則改正ノ結果、從來割引手形中ニ包含セシ手形貸付金ヲ茲ニ改メ掲クルニ至リタルヲ以テ前年ト比較對照シ難シ。貸付金ノ抵當別本年ニ至リ候ニ動産及信用ヲ増加シタルモ 右ト同一ノ原因ニ基クヘシ、割引手形ノ年末殘高 4.8億圓ニシテ前年ノ半ニ達セサル亦右ノ原因ニ依ル、荷爲替手形ハ大正五年中總貸付高 14.8億圓、前年ノ二倍以上ニ登リ、其年末殘高ハ 0.3億圓ニシテ約五割ノ増加ナリ。

貸付金ノ大正五年末殘高ノ多キ府縣ヲ舉グレハ東京、大阪、兵庫ノ特ニ多キ外ハ神奈川、愛知、静岡、京都、福岡等ナリ、前年ノ順位ト異ル所アルハ主トシテ 割引手形合算ノ結果ニ依ルモノト察セラル。割引手形ノ多少府縣順位モ亦殆ント貸付金ノ順位ト異ルナシ、但シ荷爲替手形ハ少シク 趣ヲ異ニシ、東京、大阪殆ント同一ニシテ之ニ次テハ北海道、兵庫、熊本等多シ。

普通銀行ニ於ケル送金手形ノ發達ハ甚タ遅々タルハ 前年鑑ニ於テ之ヲ略述セシカ、大正五年ニ於テハ著明ニ増大シ 前年ノ約二倍ニ上レリ即チ各地ヘ向ケタルモノ 47.5億圓、各地ヨリ受ケタルモノ 42.3億圓ナリ、代金取立手形ノ増加ハ更ニ之ヨリ甚シク、當所ハ 32.1億圓ニシテ恰モ前年ノ二倍ナルモ、他所ハ 24.7億圓ニシテ、前年ノ三倍以上ナリ。

大正五年中普通銀行ノ 預ケ金總預ケ高ハ 133.8億圓ニシテ 前年ニ比シ少カラサル増加ヲ示スモ、其ノ年末殘高ハ 1.1億圓ニシテ前年ニ比シ 1,700萬圓ノ増加ヲナシ、他ノ各種ノ 狀態ノ増加ニ比シ其度高カラズ、恐クハ、同年資金ノ需要多ク 銀行ノ活動盛ナリシ結果タルヘシ、又同年末有價證券ノ在高ハ 4.2億圓、其ノ内譯、公債 3.0億圓、株券 0.6億圓、社債券 0.5億圓ニシテ前年ニ比シ公債獨リ約 1.0億圓ノ増加ヲナセリ、同年末金銀在高ハ 1.8億圓ナリ前年ヨリ少シク増加セリ。

【貯蓄銀行】 貯蓄銀行ノ大正五年末現在數ハ 663 其ノ支店出張所數ハ 1,480、前年ニ比シ本店 7、支店出張所 79ヲ増加セリ、普通銀行ハ其ノ數ヲ減セルニ拘ラス 貯蓄銀行ノ此ノ増加ハ主トシテ普通ヨリ貯蓄ニ轉業ノ多カリシニ由ル、拂込資本金モ亦總額ニ於テ増シタルモ、其ノ一行平均額ハ 182,146圓ニシテ前年ヨリ却テ約 2千圓ヲ減少セリ、積立金ノ増加ハ一行平均ニ於テモ亦約 4千圓ヲ増シ 68,970圓ト爲レリ、入金及出金ハ共ニ約 126.5億圓ニシテ

拂込資本金及積立金合計百圓ニ對シ約 7,340圓ニ當リ 2千餘圓ノ激増タリ。各府縣中貯蓄銀行ノ最モ多キ地方ハ、東京 83、愛媛 37、神奈川 34、新潟 34、長野 29、兵庫 28等ニシテ、其ノ支店出張所ノ多キ地方ハ東京 258、愛知 100、長野 75 神奈川 71、兵庫 67、廣島 66等ナリ。而シテ拂込資本金ノ新潟縣最多タル 前年ト同シ。

貯蓄銀行ノ大正五年末、官公預金ハ 928萬圓、普通預金ハ 4億 2,465萬餘圓ナリ、前年ニ比シ前者ハ約 4百萬圓、後者ハ約 1億圓ヲ増加セリ。借入金ノ年末高 1,927萬餘圓、再割引手形ノ年末高 189萬餘圓ニシテ、前年ノ減少ニ比シ増加シタルモ甚シキ膨脹ト云フヲ得ス。

貯蓄銀行ノ貯蓄預金大正五年中ノ總預高ハ 5.4億餘圓ナルモ、其年末高ハ恰モ 2.0億圓ニシテ、前年ニ比シ僅ニ 7百萬圓ノ増加ニ過キズ、而シテ此ノ預人員ハ却テ前年ヨリ減少シ 9,705,600人ナルヲ以テ其一人平均ハ 20圓強ト爲リ前年ヨリ増加シタリ、貯蓄銀行ニ於ケル貯蓄預金ノ増加ハ郵便貯金ノ増加ニ及ハサルコト益々遠キニ至ラントス。貯蓄預金ヲ其ノ預金者ノ職業別ニ見ルニ、人員金額共ニ雜業最モ多ク次テ商、農、工ノ順位ナリ、但シ一人平均ノ金額ニ於テハ商業特ニ多ク工、雜、農ノ順序ヲ以テ之ニ次ク。貯蓄預金ノ最モ多キ地方ハ東京、大阪、愛知、京都等ナリ。

貯蓄銀行ノ貸付金モ亦本年ニ於テハ報告様式改正ノ結果、異常ノ大數ニ上ル、即チ大正五年中ノ總貸付高 17.0億圓、年末高 4.5億圓ナリ、從テ割引手形ノ數ニ影響ヲ及ホシ、其一年間ノ割引手形額 8.3億圓中年末殘高 0.5億圓ヲ示シ前年ヨリ減少セリ、荷爲替手形ハ總貸付高 2.4億圓、年末殘高 7百萬圓ナリ。

送金手形ノ大正五年中各地ヘ向ケタルモノ 7.4億圓、各地ヨリ受ケタルモノ 4.8億圓ニシテ此方面ニ於ケル本年ノ 貯蓄銀行ノ發達著シキモノアルモ、之ヨリモ更ニ發展ノ顯著ナルハ 代金取立手形ナリ、即チ當所 3.0億餘圓、他所 3.3億餘圓ニシテ實ニ前年ノ三倍ナリ。

貯蓄銀行ノ大正五年末預ケ金ハ 1.3億圓ナリ、前年末ニ比シ 4千萬圓弱ヲ増セリ、有價證券ハ 1.8億餘圓ニシテ 55百萬圓ヲ増加ス、又金銀ノ年末在高ハ 3,848萬餘圓ナリ。

貯蓄銀行ノ供託金ハ業務ノ發展ト共ニ當然増額ス 其ノ大正五年末ノ額ハ 6,380萬圓ニシテ 1,422萬圓ヲ増加シタリ。

【擔保附社債信託事業】 大正五年末擔保附社債信託事業ヲ營ム會社ハ 12會社ニシテ前年ニ比シ 2ヲ増セリ、悉ク銀行ナリ、拂込資本金 1億 99萬餘圓、積立金 3,472萬餘圓ナリ、年末ノ信託契約額ハ 42口、6,884萬圓及英貨 100萬磅ナリ、本年中ノ新契約 9口、2,008萬圓ニシテ、解約又ハ償還 4口、734萬餘圓ナリ、前年ニ對シ 5口、1,373萬餘圓ヲ増セリ、而シテ年末現在ヲ分類スレハ

第三者總額引受 8口 1,439萬圓及 100萬磅、受託會社總額引受 15口 2,359萬餘圓、受託會社募集 19口 3,086萬圓ナリ。

【手形交換】 手形交換所ハ大正六年九月ヨリ 更ニ臺北ヲ増加シ同年末ニ於テ 13箇所アリ、同年中ノ交換高ハ 16,047,162枚 317.8億餘圓ニシテ前年ニ對シ約 250萬枚 115.5億圓ヲ増加セリ。一枚平均金額モ亦大ニ増額セリ。手形交換ノ發達ハ逐年顯著ナルモノアリシハ前年鑑ニモ略述シタル所ナルカ 殊ニ大正五年及六年ノ急激ナル膨脹ハ誠ニ駭クヘキモノアリ。同年中交換高ノ多少ヲ月別ニ見ルニ枚數ハ七月金額ハ八月ニ於テ中途ノ山ヲ劃スルモ 大體ニ於テ年首ヨリ年末ニ及ビ遞次ノ増加ヲナス、又各交換所ノ地方ニ依リテ見レハ東京、大阪最モ多ク神戸、横濱之ニ次ク、但シ枚數ハ京都却テ横濱ヨリ多シ。

【金利】 大正六年ニ於ケル銀行定期預金ノ年利全國平均ハ、前年低下ノ歩合ヲ維持シ、一月ヨリ五月ニ至ル迄ハ最高 5.6%、最低 4.6%ヲ以テ繼續シタリシカ、六月更ニ最高 0.1%ヲ低下シ 5.5%ト爲リ九月迄進ミタリ、十月ニ至リ更ニ騰貴シ 5.6%ニ復シ、十二月ニ至リ再ヒ 0.1%ヲ上リ 5.7%ト爲レリ、而シテ此間最低ハ殆ント變動ナク 4.6%ナリシカ、十一月 4.7%ニ騰貴セリ、從テ大正六年末ノ預金利子歩合ハ最高 5.7%、最低 4.7%ナリ。

次ニ銀行貸付金ノ全國平均年利ハ、大正六年ニ於テハ一月中前年末ノ 狀況ヲ維持シ、即チ最高 10.4%、最低 7.2%ナリシカ、月ヲ逐ヒ次第ニ低下シ七月其極ニ達シ最高 10.1%、最低 6.9%ニ陥レリ、尤モ最高ハ六月一旦上昇ノ兆アリシモ翌月直ニ低下セリ、八

XVIII. 保

大正五年度末ニ於ケル内國保險會社總數ハ 65會社アリ。一會社ニシテ二種以上ノ 保險ヲ兼營スルモノ 少カラサルカ故ニ之ヲ營業ノ 目的ニ依リテ計上スルトキハ 95ト爲リ、細別スレハ普通生命保險 40(内兼業 2)、徴兵保險 2、傷害保險 3、内兼業 2)火災保險 22(内兼業 5、海上保險 16(内兼業 10)、運送保險 9(皆兼業)、信用保險 1(兼業)、機關汽罐保險 1、自動車保險 1(兼業)ナリ。

保險會社中生命ニ關スルモノ、普通生命保險會社ハ前年ニ比シ減少シ疾病保險會社亦其跡ヲ絶テリ、然レトモ其營業狀態ハ何レモ長足ノ 進歩ヲナシ、拂込資本金ハ普通生命 807萬圓餘、徴兵 42.5萬圓餘ニシテ積立金ハ普通生命 1億 7,805萬圓餘、徴兵 943萬圓餘ナリ。而シテ收入ハ普通生命 6,350萬圓餘、内保險料 4,631萬圓餘、徴兵 286萬圓餘、内保險料 164萬圓餘ナリ、又支出ハ普通生命 3,305萬圓餘、内保險金 1,338萬圓餘、徴兵 140萬圓餘、内保險金 11萬圓弱ナリ。本年度事業ノ 狀況ヲ見ルニ 年度始現在契約ハ普通生命 181.6萬件餘、其金額 10億 7,223萬圓弱、徴兵 27萬件餘、ソノ

月以後ハ最高ト最低ト上下ノ 調相一致セサルモノアリシカ、年末ニ及ヒ再ヒ上昇シ、十二月ノ 狀況ハ最高 10.3%、最低 7%ニ終レリ。

大正六年ニ於ケル銀行手形割引歩合ノ 全國平均モ亦、前年末ヨリノ 低下ノ趨勢ヲ受ケ更ニ低下ス、即チ一月ニ於テ、百圓ニ付日歩最高 2.70錢、最低 1.84錢ヲ以テ始マリ殆ント毎月低落シ、七、八月ノ 兩月其最低底ニ陥リ、最高 2.62錢、最低 1.78錢ヲ示シ、九月以後最高ト最低トノ 間稍變調ヲ來シ 十二月ニ至リテハ最高ハ更ニ低落シ最低ハ却テ上昇シ兩者ノ 間隔相近クニ至リタリ 即チ其年末ニ於ケル割引歩合ハ最高 2.60錢、最低 1.84錢ト爲レリ。

【外國爲替相場】 大正六年ニ於ケル一年平均ノ外國爲替相場ハ、倫敦我金貨一圓ニ對シ 2志 1.6片、巴里 2.95法、桑港及紐育我百圓ニ對シ 50.67弗、孟買 150.79[ルピアナナ]、上海 55.20兩 香港ハ彼ノ 香銀百弗ニ付 123.44圓ナリ、即チ本年モ亦前年ニ引續キ歐米ニ安ク、上海、香港、孟買等ノ 東洋ニ高シ、輸出超過益々増大シテ正貨受取勘定ノ 多キト銀ノ 騰貴ハ其主因タルヘシ。

右ノ事實ヲ月別ニ依ツテ見ルニ 倫敦ハ十月以降益々低落ニ向ヒ、桑港紐育ハ五月以後殆ント 毎月低落シ、一月ニ於テ 50.50弗ナリシモノ十二月ニ於テハ 51.00弗ヲ示スニ至レリ、反之上海及香港ハ年首ヨリ月ノ 進ムニ從ヒ次第ニ騰貴シ、九月ニ於テ其ノ最高ニ達セシカ十月一度低落シ十一月、十二月ニ至リ再ヒ騰貴セリ、其ノ十二月ノ 相場ハ上海 49.83兩、香港 139.81圓ナリ。

險

金額 4,377萬圓弱ナリシモ新規契約夫々 30萬件餘及 3萬件餘アリテ若干ノ 死亡解約等アリタル爲、年度末現在契約ハ前者ハ 185萬件餘ソノ 金額 11億 3,035萬圓弱、後者ハ 28萬件餘、ソノ金額 4,547萬圓餘ト爲リ前年ニ比シ件數及金額ニ於テ増加ヲ來セリ。生命保險事業ハ實施以來果年件數ニ於テモ 金額ニ於テモ増加シ來レルモノニシテ大正三年ニ於テ其極ニ達シ、翌年ハ不景氣ノ 爲ナルカ將タ戰時ノ 爲ナルカ稍不振ノ傾向ニアリシモ 同五年ニ於テハ再ヒ隆盛ヲ極ム。徴兵保險ハ果年發展ノ 趨勢特ニ顯著ナリ、尙保險契約高ノ 一人平均ヲ算出スルニ 明治三十四年ニハ生命保險加入者一人平均契約高 250圓弱ナリモノカ 大正三年ニハ 582圓餘トナリ同四年ニハ 590圓、同五年ニハ更ニ昇リテ 600圓以上トナル、其發展大ナリト謂フヘシ。

傷害保險ハ唯一會社アルノミニシテ資本金 25萬圓、積立金 8.8萬圓餘ナリ、別ニ兼業 2會社アリテ 是等 3會社ノ大正五年度中ノ 保險料ハ 17萬圓餘、保險金 4萬圓餘ニシテ新規契約 1.5萬件ア

リテ年度末契約 1.4 萬件、2,198 萬圓弱ナリ。是亦前年度ニ比シ多
少ノ増加ヲ來セルモ設立當時ノ如ク爾ク激烈ナラス。

損害保險中火災保險ハ 17 會社、外ニ兼業ノモノ 5 會社アリテ前
年ニ比シ 2 會社増加セリ。其ノ拂込資本金ハ 1,217.5 萬圓、積立金
ハ 1,627 萬圓弱ニシテ同年度内收入保險料ハ 1,067 萬圓餘、支出
保險金ハ 490 萬圓餘ナリ。本年度事業ノ狀況ハ年度中新規契約 12
2 萬件餘、金額 55 億 4,950 萬圓弱アリテ 年度末現在契約 111 萬件
弱 28 億 2,523 萬圓弱トナレリ。此ノ外日歩保險ノモノ年度末ニ 7
63 件、4,968 萬圓弱アリ。過去殊ニ前年ニ比スルニ收入保險料ハ頗
ル増加シ支出保險金ハサシテ増加セシ。又新規契約並ニソノ金額
増大セリ。此亦發展シツ、アリト謂フヘシ。

海上保險ハ 6 會社、此ノ外兼業ノモノ 10 會社アリテ前年ニ比シ
兼業ニ於テ 4 會社増加セリ、ソノ拂込資本金ハ 894 萬圓ニシテ、積
立金 3,001 萬圓餘ナリ。大正五年度ノ收入保險料ハ 3,376 萬圓弱、
保險金支出ハ 2,032 萬圓餘ニシテ 大正三年以來新規契約激増シ特
ニ大正五年度ハ未曾有ノ多數 168 萬件以上ヲ示セリ。從テ 4.7 萬
件ノ年度始契約ヨリ 6.3 萬件餘ノ年度末契約ニ増加シ、ソノ金額ノ
如キ 2 億 9,954 萬圓餘ヨリ一躍 5 億 7,988 萬圓弱、約倍加セリ。前
年ニ比シ著シキ膨脹ニシテ戰時海上危險ノ大ナルニ伴フ結果タル
ハ素ヨリ疑フヘカラス、蓋シ稀有ノ偉觀ナリ。

次ニ運送保險ハ悉ク他會社ノ兼營ニ係リ本年 1 會社増加シテ 9
會社トナル。運送保險ハ由來差シタル發展ヲ爲ササリシモ本年ハ
海上保險ト相俟ツテ長足ノ進歩ヲナシ、保險料收入ハ 22.5 萬圓餘

XIX. 官廳使用現業員共済組合

官廳使用現業員ノ共済組合ハ、明治四十年ニ鐵道院ニ之ヲ設
ケタルヲ創メトシ、大正六年度末ニ於テ現ニ存スルモノ五アリ、
即印刷局現業員共済組合、鐵道院現業員共済組合、專賣局現業員
共済組合、海軍共済組合、爲替貯金局及地方逓信官署現業員共済
組合是ナリ。是等五組合ノ總組合員ハ 235,159 人ニシテ前年ニ比
シ 17,206 人ヲ増シ、其ノ増加著シ。本年度中ノ總掛金ハ 1,313.50
5 圓ニシテ、組合員一人ノ平均額ハ 5 圓 58 錢ニ當ル、此ノ掛金ノ外
ニ政府ノ補給金 977,962 圓アリ、掛金額ノ約 74%ニ當レリ。本年
度中ニ救済金ノ給與ヲ受ケタル者 65,343 人アリ、組合員年末現員
ノ 27.78%ニ當リ、之ニ給與シタル救済金及其ノ他ノ支出總額ハ
1,378,913 圓ニシテ、本年度總收入金額 2,835,839 圓ニ對スル 48.
62%ニ當レリ。更ニ各組合ニ就テ之ヲ細觀スレハ下ノ如シ。

【印刷局現業員共済組合】 大正六年度末ノ組合員總數ハ 3,
047 人中男 1,515 人(49.72%)女 1,532 人(50.28%)ナリ。本年度中
ノ組合員ノ掛金總額ハ 16,876 圓ニシテ、年度末現員ノ一人ニ付平

保險金支出ハ 3 萬圓餘ニシテ年度内新規契約ニ依ルモノ 31.7 萬件
餘、ソノ金額 5 億 7,355 萬圓弱ナリ。

信用保險ハ兼營ニナルモノ 1 會社アリ。保險料ノ收入及保險金
ノ支出共ニ 2 萬圓餘ニシテ 年度内新規契約ハ 2 千件弱、ソノ金額
189 萬圓弱ニシテ既往ニ比シテ發展ノ跡ヲ認メス。

此ノ外機關汽織保險會社 1 及自働車保險兼業ノモノ 1 會社アリ。
前者ハ一進一退シテ其發展明ナラサレトモ、後者ハ自働車ノ増加
ト共ニ新規契約者激増シ新規契約 4.3 萬件餘ニ及ヒ、ソノ金額約
1,666 萬圓ニ達セリ。

以上記載ノ外、外國保險會社ノ我國ニ來リテ 保險業ヲ營ムモノ
33 會社アリ。前年ニ比シ火災及海上保險ニ於テ著シク減少セリ。
内生命ニ關スルモノ 4 會社アリテ供託金 825 萬圓餘ヲ提供シ保險
料收入 349 萬圓弱、保險金支出 86 萬圓餘ニシテ新規契約 3.8 萬件
ソノ金額 1,073 萬圓餘ニシテ益々發展ノ傾向アリ。

火災ニ關スルモノ 23 會社アリテ供託金 319 萬圓餘、保險料收入
345 萬圓弱、保險金支出 138 萬圓餘ニシテ新規契約 17 萬件、ソノ金
額 13 億 4,566 萬圓餘ニシテ漸次發展シツ、アリ。海上ニ關スルモ
ノハ著シク減少シテ 6 會社トナレリ。其供託金 135 萬圓餘、保險
料收入 302 萬圓餘、保險金支出 182 萬圓餘、新規契約ニ係ルモノ
14.6 萬件餘、ソノ金額 6 億 8,654 萬圓餘ニシテ會社ノ減少セルニモ
拘ラスソノ事業大ニ發展シタルハ 時局ノ影響ナル一語ヲ以テ説明
シ得ヘキカ。然レトモ内國保險業ノ狀況ニ比シ遜色アルハ 内國保
險ノ發達ニ基クモノナランカ。

均 5 圓 54 錢ニ當ル。此ノ外ニ政府ノ補給金 11,191 圓アリ、掛金總額
ノ約 66%ニ當レリ。本年度中救済金ノ給與ヲ受ケタル者 1,239 人
アリ、年度末現員ノ 40.66%ニシテ前年ニ比シ其ノ比例ヲ減セリ、
此ノ被給與者ノ 68.77%即現員ノ 27.96%ハ勤続給與金受領者ニシ
テ一箇年以上勤続者ノ脱退シタル者トス。其ノ他疾病勤務ニ耐エ
シテ退職シ疾病退職給與金ヲ受ケタル者 105 人(被給與者ノ 8.4
7%)アリ、既往ニ比シテ著ク多シ、傷痍給與金ヲ受ケタル者 5 人、
公務上ノ傷痍療養費ヲ受ケタル者 121 人アリ、此ノ二者ヲ合スレ
ハ被給與者ノ 10.17%ニ當リ、是亦頗ル多カリキ。又給與金額ハ
合計 20,552 圓ニシテ總支出金ノ 50.97%ニ當リ、給與金以外 19.7
61 圓ノ有價證券ヲ買入レタリ。此ノ給與金ヲ各種類ニ依リテ分チ
分節比例ヲ算出スレハ、傷痍給與金 0.78%、傷痍療養金 0.96%、疾
病療養金 0.02%、罹災給與金 2.65%、死亡給與金 2.58%、祭祀
料 0.07%、疾病退職給與金 14.96%、勤続給與金 77.98%ニ當リ、
印刷局共済組合ノ脱退者ノ救済ニ向テ最大ナル 働キアルモノ、如

シ。
【鐵道院現業員共済組合】 大正六年度末ノ現組合員總數ハ
113,915 人ニシテ、此ノ中 97,321 人(85.43%)ハ規定上當然組合ニ
加入スヘキ現業員即甲種組合員ナリ。本年度中ノ掛金總額ハ 681,
127 圓ニシテ 年度末現員一人平均 5 圓 9 錢ニ當ル。此ノ外政府ノ
給與金 464,184 圓アリ、掛金總額ノ 68.15%ニ當レリ。本年度中救
済金ヲ受ケタル者 20,101 人ニシテ年度末現員ノ 17.65%ニ當リ、前
年ノ同一比例ニ比シ 1.49%低シ。此ノ被給與者中最多キモノハ拂
戻金受領者(印刷局ノ勤続給與金受領者ト略ホ同一性質ノ者)ニシ
テ被給與者ノ 56.94%ヲ占ム、之ニ次クモ醫療金 給與者 34.93
%アリ、傷痍救済金給與者ハ 3.44%死亡救済金 給與者ハ 3.64%
ニ當レリ。支出金總額 644,909 圓ノ大部分ハ救済金ニシテ、其ノ
1.38%ナル 8,905 圓ノミ 建物器具機械其ノ他ニ充用セリ。而シテ
救済金ヲ各種類ニ依リテ 分チ分節比例ヲ算出スレハ、傷痍救済金
27.32%、死亡救済金 30.82%、老衰救済金 1.38%、同上ノ利子
0.16%、拂戻金 39.04%、醫療金 1.78%ニ當ル、支出額ノ最多キ
ハ拂戻金ナレトモ、死亡者及傷痍者ニ救済金ヲ給與スルコト亦決
シテ尠ナカラス、殊ニ前年度ヨリ新ニ設ケタル醫療金ハ公務ニ因
ラサル傷痍又ハ疾病者ニ對スル醫療費ノ補給ニシテ、其ノ概宜ニ
適シタル新事業タルヲ見ルヘシ、前年ニ比シ其ノ額モ亦著ク増額
セリ。

【專賣局現業員共済組合】 大正六年度末ノ現組合員總數ハ
26,239 人ニシテ中男 6,479 人(24.69%)、女 19,760 人(75.31%)ナリ。
本年度中ノ掛金總額ハ 61,881 圓ニシテ年度末現員ノ一人ニ付平均
2 圓 36 錢ニ當ル、此ノ外ニ政府ノ補給金 43,660 圓アリ、掛金總額
ノ 73.55%ニ當レリ。本年度中救済金ヲ受ケタル者 16,819 人アリ、
年度末現員ノ 64.10%ニ當リ、未ダ曾テ見サル 高率ヲ示セリ。此
ノ被給與者中最多キハ 脱退給與金受領者(鐵道院ノ拂戻金受領者
ト略ホ同一性質ナリ)ニシテ總被給與者ノ 74.34%ヲ占ム、斯ノ如キ
ハ前年度ニ規則ヲ改正シ一般ノ脱退者ニ救済金ヲ給與スルコト、
爲シタルカ爲ナリト云フ。之ニ次テ多キハ年功給與金受領者 10.3
5%、疾病給與金受領者 10.01%産婦給與金受領者 4.01%等ナリ。
支出金總額 112,057 圓ノ中救済金以外ニ用キタルモノ僅ニ 4 圓ニ
シテ他ハ總テ救済ノ爲ニ支出セラレタリ、之ヲ種類ニ依リ分チ分
節比例ヲ算出スレハ、傷痍給與金 1.20%、療養金 0.93%、産婦

【罹災救助基金】 大正五年度ニ於ケル罹災救助基金ノ支出
總額ハ 87,117 圓ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 26,810 圓ノ減額ニシテ
前五箇年ノ平均ナル 435,785.4 圓ニ比スレハ約五分ノ一ニ當リ近

給與金 3.00%、疾病給與金 4.25%、死亡給與金 3.37% 脱退給與
金 55.88%、年功給與金 31.37%ニ當ル、年功給與金モ亦一種ノ脱
退給與金ナルノミ、然レハ此ノ組合モ亦今ハ其ノ力ノ大部ヲ脱退
者救済ノ爲ニ盡シツ、アルモノ、如シ。

【海軍共済組合】 大正六年度末ノ現組合員總數ハ 54,087 人
ニシテ、其ノ殆ト全部 52,844 人(97.70%)ハ男ナリ。本年度中ノ掛
金總額ハ 335,530 圓ニシテ、年度末現員一人ニ付平均 6 圓 76 錢ニ
當ル、此ノ外ニ政府ノ給與金 332,962 圓アリ、掛金總額ノ 91.09%
ニ當レリ。本年度中救済金ヲ受ケタル者 7,007 人ニシテ年度末現員
ノ 12.96%ニ當リ既往ニ曾テ見サル 高率ナリ、而シテ此ノ被給與者
中最多キハ 脱退救済金受領者ニシテ被給與者總數ノ 66.16%ヲ占
ム、前年度マテ甚タ少ナカリシモノ 本年度ニ至リテ俄然トシテ増
加セリ、次ニ多キハ療養救済金受領者ノ 22.19%ナリ。本年度中ノ
總支出額 275,653 圓中雜費 325 圓ヲ除ク他ハ總テ救済金ニ支出セ
ラル、其ノ種類別分節比例ヲ舉ケレハ、傷痍救済金 16.30%、死亡
救済金 10.72%、特症救済金 7.09%、脱退救済金 58.42%、療養
救済金 7.45%、葬祭料 0.02%ニ當レリ。此ノ特症救済金ハ他ノ組
合ニ見サル所ニシテ、肺結核ニ罹リ雇傭ヲ解カレタル者ニ給スル
救済金ナリ本年度ニ於テハ 被給與者一人ニ付平均 81 圓 33 錢ヲ給
與セリ。

【爲替貯金局及地方逓信官署現業員共済組合】 大正六年末
ノ現組合員數ハ 37,871 人ニシテ男 25,573 人(67.53%)女 12,298 人
(32.47%)ナリ。本年度中ノ掛金總額ハ 188,081 圓ニシテ年度末現
員一人ニ付平均 4 圓 9 錢ニ當ル。此ノ外ニ政府ノ補給金 125,965 圓
アリ、掛金總額ノ 66.97%ニ當ル。本年度中ニ救済金ヲ受ケタル者
20,177 人アリ、年度末現員ノ 53.28%ニ當リ、此ノ被給與者中最多
キハ脱退給與金受領者ニシテ總被給與者ノ 60.27%ヲ占ム、脱退者
ニ附帶給與スヘキ勤続給與金受領者ニ次キ 23.84%ニ當リ、此ノ
兩者ヲ合スレハ 84.11%ト爲ルナリ。支出金總額ハ 305,981 圓ニ
シテ、雜費 1,467 圓、缺損金 71 圓以外ハ總テ救済ノ目的ニ支出セ
ルモノ、今此ノ救済金ヲ種類別ト爲シ分節比例ヲ算出スレハ、傷
痍給與金 1.07%、疾病給與金 0.08%、療養給與金 2.69%、死亡
給與金 4.83%、災害給與金 1.78%、脱退給與金 59.07%、勤続給
與金 29.49%、醫療給與金 0.90%ニ當リ、是亦殆ト脱退者ノ爲ニ
存立スルモノ、如キ觀アリ。

XX. 教育及慈善

年ニ見サル少額ナリ、以テ本年度救助ヲ要スル 罹災ノ甚タ少カリ
シコトヲ知ルニ足ル。本年度支出額ヲ費途ニ依リテ 別チ總數ニ對
スル分節比例ヲ算出シ近キ五箇年平均(明治四十四年度乃至大正

四年度)ノ同一比例ト比スルニ、避難所費ハ 1.57%ニシテ五年平均ヨリ高キコト 0.47%、食料費ハ 34.94%ニシテ五年平均ヨリ高キコト 1.41%、被服費ハ 6.19%ニシテ五年平均ヨリ高キコト 5.10%、治療費ハ 0.22%ニシテ五年平均ヨリ高キコト 0.11%、小屋掛費ハ 24.44%ニシテ五年平均ヨリ高キコト 8.54%、就業費ハ 30.86%ニシテ五年平均ヨリ低キコト 17.08%、雑費ハ 1.78%ニシテ五年平均ヨリ高キコト 1.45%ナリ、就業費ノ著シク低キハ根本的救助ヲ要スル者甚タ尠カリシニ因ルヘシ。

大正五年度中支出罹災救助金ノ最モ多額ナリシハ京都府ノ 12,512圓ニシテ滋賀縣ノ 11,084圓、岩手縣ノ 10,387圓ハ之ニ次キ、其ノ他東京府ノ 7,298圓、福島縣ノ 5,883圓ハ其ノ多額ナルモノニ屬セリ。

【救済人員】 大正五年中恤救規則ニ基キ 國庫費ヲ以テ救済セル人員ハ 1,543人、地方費ヲ以テ救済セル人員ハ 8,980人、國庫費救済者ニ地方費ヲ以テ補給セシ者ハ 492人ニシテ總計 11,015人ナリ、明治三十八年以來救済人員漸次減少シ、同四十二年以來著シク減少ヲ見シカ、大正二年ニ至リ稍々多ク、次イテ再ヒ減少ノ傾向ヲ見ルニ至レリ。明治四十二年以前ハ單ニ國庫費救済者ノミニシテ公知ノ地方費救済者ナカリシカ、同年以降地方費救済者アリテ年々其ノ數ヲ増加スルモノ、如シ、(地方費救済ノ統計ハ大正二年以後存ス)從テ年々國庫費救済者ノ數ヲ減スル傾向アリシカ、大正四年ヨリ地方費救済者モ減少シ國庫費救済者モ亦減少シタリ。本年中被救済者ノ死亡數及廢停數ヲ總員ニ比例スルニ、國庫費救済者ハ死亡 14.71%、廢停 4.02%、地方費救済者ハ死亡 13.31%、廢停 24.81%、國庫費及地方費救済者ハ死亡 10.37%、廢停 3.46%ナリ、廢停ハ地方費救済者最モ高ク死亡モ其ノ割合低カラストス。

大正五年中ノ救済者ヲ地方別ニ見ルニ、最モ多キハ岡山縣ノ 856人ニシテ、滋賀縣ノ 656人、石川縣ノ 614人、新潟縣ノ 606人之ニ次キ、其ノ他東京府ノ 549人、大阪府ノ 534人、北海道ノ 513人、廣島縣ノ 512人等ハ其ノ多キモノニ屬セリ。

大正五年中ノ救済人員ヲ種別ニシテ其ノ總數ニ對スル分節比例ヲ算出スルニ、國庫費救済者ニ於テハ癩疾 32.40%、老衰 21.91%、疾病 35.58%、幼弱 10.11%、國庫費及地方費救済者ニ於テハ癩疾 23.78%、老衰 23.37%、疾病 20.53%、幼弱 32.32%、地方費救済者ニ於テハ癩疾 9.81%、老衰 36.63%、疾病 33.95%、幼弱 17.94%、其ノ他 1.67%ナリ。

大正五年中ニ支出シタル救助金ハ國庫費 22,915圓、地方費 112,976圓計 135,891圓ニシテ、地方費ノ中 15,718圓ハ國庫費救済ノ者ニ補給シタルモノトス、此ノ金額ト前記ノ人員トヲ以テ一人平均ノ金額ヲ算出スルニ、總數ニ於テハ 12圓 34錢ニ當リ 地方費ノミ

ハ 10圓 87錢ニ當レリ、國庫費ハ地方費補給ノ分ニ對スル費額不明ナルカ故ニ明瞭ナラサルカ、假リニ國庫費ノミヲ以テ救済セル人員ニ國庫費ノ總額ヲ割リ 當ツレハ一人平均 14圓 85錢ト爲リ國庫費救済人員ト國庫費及地方費救済人員トヲ合セタル者ニ、國庫費額ト地方費ノ國庫費救済者ニ對スル補給額トヲ合セタルモノヲ割リ當ツレハ、一人平均 18圓 98錢ト爲レリ、斯ノ如ク國庫費救済者ノ費額多キハ、之ヲ地方費救済者ニ比シテ以前其ノ期間長キモノ多キ故ナルヘシ、本年中救済費支出額ヲ地方別ニ見ルニ、國庫費ニ於テ前年ト同シク北海道ノ 5,651圓最モ多ク、神奈川縣ノ 1,890圓、東京府ノ 1,865圓ニ次キ、其ノ他青森縣ノ 1,756圓、廣島縣ノ 1,310圓、岡山縣ノ 1,256圓、石川縣ノ 1,049圓等多キモノニ屬ス。又地方費ニ於テモ前年ト同シク、東京府ノ 27,920圓、大阪府ノ 19,218圓最モ多シトナシ、其ノ他岡山縣ノ 7,033圓、新潟縣ノ 4,205圓、兵庫縣ノ 4,084圓、石川縣ノ 3,327圓、廣島縣ノ 3,159圓等多キモノニ屬セリ。

【養兒】 大正五年末現在ノ養育棄兒ハ 1,733人ニシテ、前年末現員ヨリ少キコト 79人ナリ、之ヲ養育費ノ出所ニヨリテ分テハ國庫費 274人、國庫費養育者ニ地方費ヲ以テ補給スル者 1,002人、地方費養育者 210人、私費 247人ナリ、之ヲ總數ニ對スル分節比例トナセハ國庫費ノミハ 15.81%、國庫費及地方費ハ 57.82%、地方費ノミハ 12.12%、私費ハ 14.25%ニ當ル、而シテ其ノ養育費中國庫費ハ 11,073圓、地方費ハ 55,763圓ニシテ 地方費ノ中 45,965圓ハ國庫費養育ノ者ニ補給シタル額ナリ、私費ノ養育費ハ明瞭ナラサルカ故ニ之ヲ除キ、國庫費及地方費養育ノ總數ニ就テ一人一箇年ノ平均養育費ヲ算出スレハ 44圓 98錢ニ當リ、地方費ノミノ養育費ハ平均 46圓 60錢ニ當レリ。

大正五年末現在ノ養育棄兒ヲ地方別ニ見レハ、東京府ノ 889人最モ多ク、長崎縣ノ 126人、大阪府ノ 117人之ニ次キ、佐賀縣ノ 96人、福岡縣ノ 81人、神奈川縣ノ 59人、岡山縣ノ 45人、兵庫縣ノ 40人等其ノ多キモノニ屬ス。又養育費ノ中國庫費ノ支出額最モ多キハ東京府ノ 6,276圓最モ多ク、大阪府ノ 1,044圓ニ次キ、神奈川縣ノ 628圓、佐賀縣ノ 625圓、福岡縣ノ 356圓、北海道、兵庫縣ノ 311圓、岡山縣ノ 299圓等其ノ多キモノニ屬シ、又地方費ノ支出額ハ東京府ノ 44,881圓最モ多ク大阪府ノ 5,019圓ニ次キ、其ノ他千圓以上ヲ支出シタルハ神奈川縣ノ 1,636圓、福岡縣ノ 1,376圓ナリ。

【行旅病人及行旅死亡人】 大正五年末現在ノ行旅病人ハ男 1,406人、女 688人計 2,094人ニシテ、前年末ヨリ少キコト 130人ナリ、大正五年中ニ新ニ救護ヲ受ケタル行旅病人ハ 6,038人ニシテ、之ニ前年末現員ヲ合スレハ救護總員ハ 8,862人ト爲リ漸次減

少ノ傾向アリ、此中 2,659人ハ死亡シ 4,109人ハ扶養義務者ニ引渡シタリ、此死亡者ヲ救護總員ニ比スレハ其ノ 30.00%ニ當リ大正二年ニ於テハ其ノ比 34.02%、大正四年ニ於テハ其ノ比 27.40%ニ當ル。右ノ行旅病人ニ關シ道府縣費ヨリ辨償シタル金額ハ 233,876圓ニシテ前年ニ比シ 9,520圓ヲ減ジ救護總員一人ノ平均金額ヲ算出スルニ 26圓 39錢トナル、此ノ辨償金ヲ最モ多ク支出シタルハ東京府ノ 134,467圓ニシテ、之ニ次クハ北海道ノ 22,361圓、大阪府ノ 22,101圓ナリ、其ノ他廣島縣ノ 6,342圓、神奈川縣ノ 5,984圓、福岡縣ノ 4,420圓等多キモノニ屬セリ。

大正五年中ノ行旅死亡人(行旅病人ノ死亡者ヲ含マス)ハ 3,726人ニシテ前年ヨリ少キコト 37人ナリ、之ヲ男女ニ分テハ男 2,956人、女 770人ニシテ男ハ 79.33%、女ハ 20.67%ニ當リ、之ヲ變死

XXI. 災

害

【水災】 大正四年中水災ニ罹リタル市町村數 2,963箇所アリ、之ヲ前年ニ比スレハ 857箇所ヲ減セリ。之ヲ地方別ニ見、最多町村ニ涉リタルモノヲ擧ケレハ、福岡縣ノ 17箇所、岡山縣ノ 164箇所、栃木縣ノ 156箇所、香川縣ノ 136箇所、兵庫縣ノ 134箇所、三重縣ノ 121箇所等ニシテ、大阪府、奈良縣、沖繩縣ニハ本年中擧クヘキ水災ナカリキ。此ノ水災カ招ケル諸損耗ハ見積リ價額 757萬圓ニシテ復舊費ノ見積リハ 552萬圓ナリ、之ヲ前年ニ比スルニ諸損耗ハ 2,118萬圓、復舊費ハ 1,524萬圓ヲ減シ、殆ト三分一乃至四分一ニ過キス。然レハ本年ノ水災ハ概シテ輕ク、諸損耗見積リ額ノ最大ナルハ徳島縣ノ 127萬圓ニ止リ、北海道ノ 111萬圓ニ次キ、其ノ他鹿兒島縣ノ 89萬圓、福岡縣ノ 76萬圓、埼玉縣ノ 61萬圓、宮崎縣ノ 39萬圓、兵庫縣ノ 35萬圓等ヲ稍多シト爲ス。復舊費見積リモ亦從テ少ナク、栃木縣ノ 106萬圓最高ク、福岡縣 36萬圓、鳥取縣 34萬圓ニ次キ、其ノ他新潟縣ノ 29萬圓、香川縣ノ 28萬圓、岡山縣ノ 23萬圓、鹿兒島縣ノ 22萬圓、愛媛縣ノ 21萬圓等ヲ稍多シト爲ス。要スルニ此ノ事實ノミヲ以テ推セハ本年ハ明治四十一、二年來始メテ見タル水災輕微ノ年ニシテ、是舉竟本年中降雨少ナカリシニ依ルカ將タ他ニ原因アルカ攷フベシ。

【潮災】 大正四年中潮災ニ罹リタル市町村數ハ 136箇所ニシテ前年ニ比シ 141箇所ヲ減シ殆ト中バナルノミ。地方別ニ於テ潮災多カリシハ廣島縣ノ 74箇所ヲ最トシ、其ノ他ハ熊本縣ノ 11箇所、香川、愛媛二縣ノ共ニ 6箇所ヲ稍多シト爲ス。潮災ニ因ル諸損耗見積リ額ハ 39萬圓、復舊費見積リ額ハ 30萬圓ニシテ、前年ノ巨額ナリシニハ比スヘカラサレトモ、而モ之ヲ既往四五年前ニ對比スレハ必スシモ少シト謂フ能ハス。此諸損耗ノ見積リ額ヲ地方別ニ見レハ、廣島縣ノ 24萬圓最モ多ク、熊本縣ノ 17萬圓ニ次

病死ニ分テハ病死 1,316人、變死 2,410人ニシテ病死ハ 35.32%、變死ハ 64.68%ニ當ル。病死ヲ男女ニ分テハ、男ハ 85.26%、女ハ 14.74%ニ當リ、變死ハ男 76.10%、女 23.90%ニ當ル。又男女ヲ變死、病死ニ分テハ、男ハ病死 37.96%、變死 62.04%、女ハ病死 25.19%、變死 74.81%ニ當レリ、女ノ死態ノ變死ノ男ノ大レニ比シテ割合多キハ注目ニ値スヘシ。行旅死亡人中相續人ヨリ取扱費用ノ辨償ヲ得サリシ場合ニ遺留品ヲ賣却シ仍不足ナルカ爲 道府縣費ヨリ辨償シタル金額ハ 17,828圓ニシテ、前年ヨリ多キコト 1,742圓ナリ、此ノ辨償金ヲ最モ多ク支出シタルハ神奈川縣ノ 2,859圓ニシテ、東京府ノ 2,257圓、大阪府ノ 2,004圓ニ次キ、其ノ他栃木縣ノ 940圓、北海道ノ 724圓、愛知縣ノ 631圓、靜岡縣ノ 591圓等多キモノニ屬セリ。

キ、其ノ他香川縣ノ 4萬圓ヲ稍多シト爲スノミ、他ハ論スルニ足ラス。復舊費見積リ額ハ熊本縣、廣島縣略ハ同額ニシテ 9萬圓、大分縣 3萬圓ヲ高シト爲スノミ。

【暴風雨被害】 大正四年中ノ暴風雨被害アリタル市町村數ハ 1,472箇所ニシテ前年ニ比シ 475箇所ヲ増シ、明治四十五年、大正元年以來ノ大被害ナリ。諸損耗見積リ額ハ頗ル巨額ニ上リ、前年ニ比シ 797萬圓ヲ増シ其ノ差大ナリ。仍テ思フニ水災ノ甚タ輕カリシ所以ノモノハ、其ノ一部ハ此暴風雨被害トシテ算セラレタルニアラサルナキカト、然ルニ復舊費見積リ額ハ 104萬圓ニシテ、前年ヨリ多キコト 43萬圓ニ過キサルヲ見レハ必スシモ此ノ想像ヲ當レリト言フ能ハサルカ如シ。而シテ此ノ諸損耗見積リ額ヲ地方別ニ見ルニ岡山縣ノ 509萬圓最高ク、鳥取縣ノ 265萬圓ニ次キ、其ノ他兵庫縣ノ 97萬圓、徳島縣ノ 89萬圓、埼玉縣ノ 59萬圓、愛媛縣ノ 56萬圓、鳥根縣ノ 48萬圓等ヲ高シト爲シ、又復舊費見積リ額ハ愛媛縣ノ 13萬圓最高ク、徳島縣ノ 11萬圓ニ次キ、其ノ他岡山縣ノ 9萬圓、北海道ノ 8萬圓、富山縣ノ 6萬圓等ヲ多シト爲ス。

【火災】 大正五年中ノ火災度數ハ 11,238回ニシテ、此ノ中 1,074回(9.61%)ハ放火度數ナリ。火災度數ヲ前年ニ比スレハ 237回ヲ減シ、十年前ナル明治三十九年ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 104.80ニ當レリ。放火度數ハ前年ニ比シ 169回ヲ減シ、是亦明治三十九年ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 125.17ニ當ル、是明治三十九、四十、四十一年ハ何故カ放火度數ノ著シク少ナカリシカ爲ナリ。大正五年中ニ火災ノ爲生シタル損害ノ見積リ額ハ 1,747萬圓ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 120萬圓ヲ増シタリ。火災ノ度數ハ地方別ニ見レハ北海道ノ 1,540回最モ多ク、東京府ノ

678回、新潟縣ノ617回、兵庫縣ノ599回、茨城縣ノ543回、廣島縣ノ524回、長野縣ノ503回等ヲ多シト爲ス。又損害見積リ高ノ百萬圓以上ナルヲ擧ケレハ、兵庫縣ノ189萬圓最高ク、長野縣ノ185萬圓之ニ次キ、其ノ他北海道ノ165萬圓、東京府ノ164萬圓、大阪府ノ118萬圓等ナリ。火災ノ度數ヲ月別ト爲セハ、地方ノ異ニスルニ依リテ必スシモ同一ナラサルヘキモ、大體ニ何レノ月ニ於テ最火災多キカヲ警告スル料ト爲スヲ得、即明治四十年以降大正五年ニ至ル十年間ノ事實ニ基キ一年平均一日ノ火災度數千ニ付各月平均一日ノ火災度數ヲ算出スレハ、其ノ最高キハ二月ノ1,488ニシテ一月ノ1,471之ニ次キ、其ノ他三月ノ1,386、四月ノ1,377、十

XXII. 衛

【醫師、齒科醫師、藥劑師、産婆、病院、藥種商及製藥者】 大正五年末ノ醫師ハ45,292人ニシテ前年ニ比シ1,445人ヲ増シ、之ヲ前年ノ人口ニ比スルニ一萬ニ付8人20ニ當レリ。嘗テ醫師ノ員數ニ多シカラサル重複アリ、明治三十四年ニ内務省ハ特ニ醫師及藥劑師ノ現在調査ヲ行ヒ、一時ニ23%餘ノ醫師ノ虚數ヲ除キタルコトアリシカ、當時人口一萬比例ハ7人26ナリキ。然ルニ今ヤ其ノ比例ノ増加上記ノ如ク0人94ヲ高メ、又明治三十四年ヲ百ト爲シタル指數ハ137.34ニ當レリ。斯ノ如キハ醫育機關ノ増設ニ依リ新免許者多キカ爲カ、將タ再ヒ舊時ノ轍ヲ踏テ重複ヲ來シタルカ爲ナラサルカ、何レニモセヨ注目スヘキ現象ナリ。但シ茲ニ掲クル醫師ノ員數ハ内務省カ醫師免許證ヲ下附シタル者ノ數ニシテ、必スシモ内地ニ在住シテ醫業ニ従事スル者ノ數ニアラス、外國在留モ植民地在留者モ包含シ、又陸海軍ノ醫務若クハ其他ノ公務ニ身ヲ委ネ、一般社會ノ醫療ト没交渉ナル者ヲモ包含スルナリ。次ニ掲クル齒科醫師及藥劑師モ亦然リ。

大正五年末現在ノ齒科醫師ハ3,412人ニシテ前年ニ比シ539人ヲ増シ、明治三十四年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ657.63ニ當リ約六倍半ナルヲ見、増加ノ頗ル著シキヲ知ラル、併ナカラ之ヲ人口ニ比スルニ其ノ一萬ニ付僅ニ0人63ニ當リ、尙甚タ少キヲ思ハシム。

藥劑師ノ大正五年末現員ハ6,453人ニシテ、之ヲ前年ニ比スルニ413人ヲ増シ、明治三十四年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ256.58ニ當リ、約二倍半ノ増加ヲ爲セリ。斯ノ如ク増加著シト雖、藥劑師ハ其ノ員數甚タ多カラサルモノナルカ故ニ増加セル本年ニ於テ人口一萬ニ對シ僅ニ1人17ナルノミ。

産婆ハ大正五年末ノ現員32,841人ニシテ、前年ニ比シ984人ヲ増シ、人口一萬ニ對シ5人95ニ當ル。此ノ員數ヲ以テ見レハ本邦ノ助産機關ハ稍整ヘルカ如クナレトモ、3萬有餘ノ産婆中ニハ所謂

二月ノ1,343、五月ノ1,294、六月ノ1,049ト次第シ、平均以下ニシテ火災最少キハ九月ノ723、十月ノ763之ニ次キ、七月ノ790、八月ノ877、十一月ノ967ト次第シテ高シ。而シテ此ノ高低ヲ大正五年ノ事實ニ比スルニ、高キ月ニ於テハ一月寧ロ二月ヨリ高ク、低キ月ニ於テハ七月最低ク九月之ニ次ケルヲ異ナリトス。又大正五年ノ放火度數ハ高キ月ヨリ列擧スレハ、四月最高ク一月之ニ次キ、二月第三位ニ居リ、三月、五月之ニ次キ、六月、十二月、十一月ト次第シ、八月ト十月トハ同位ニ居リ、七月之ニ次キ九月最低シ、然レハ放火度數ハ必スシモ火災度數ニ正比セサルモノ、如シ。

生

從來産婆、限地産婆等モ少ナカラサルヘク、從テ實際ニ於テハ尙幾多ノ新知識アル産婆ノ輩出ヲ要スルナラン。

病院ハ大正五年末ニ1,100院アリ、之ヲ前年ニ比シ43院ヲ増セリ。但シ茲ニ謂フ病院トハ陸海軍ノ病院、傳染病院隔離病舎、娼妓病院等特殊ノ目的ヲ有セル病院ヲ包含セス。一般社會ノ治療機關トシテノ働キアルモノ、ミノ謂ヒナリ。之ヲ官公、私立ニ分テハ官立ハ7院ニシテ前年ト増減ナク、公立ハ77院ニシテ是亦増減ナク、私立ハ1,016院ニシテ43院ヲ増セリ。此病院總數ヲ人口ニ比スルニ、百萬人ニ付20院ニ當ル。

藥種商ハ大正五年末現在23,654人ニシテ前年ヨリ増スコト18人製藥者ハ大正五年末現在1,810人ニシテ前年ニ比シ21人ヲ減シタリ。

【賣藥】 大正五年末現在ノ免許方數ハ90,690方ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ2,534方ヲ増シ、十年前ナル明治三十九年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ162.60ニ當リ其ノ増加ノ著シキヲ見ル。又大正五年中ノ賣藥印紙總額ハ2,727,797圓ニシテ、前年ニ比シ360,738圓ヲ増シ、十年前ナル明治三十九年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ187.53ニ當ル。若シ夫印紙稅ヨリ賣藥ノ定價ヲ推定シ、之ヲ人口ニ比スレハ一人ニ付49錢餘ニ當レリ。

【傳染病】 大正六年中ノ法定傳染病ヲ見ルニ、虎列刺ハ前年大流行ノ餘波ヲ受ケテ患者894人、死者541人ヲ出セリ。赤痢ハ前年ヨリ少ク患者14,942人、死者3,160人ヲ出シ、即前年ヨリ少キコト患者ニ於テ7,510人、死者ニ於テ1,394人ナリ。腸チフスノモ亦前年ヨリ少キコト患者6,719人、死者1,142人ニシテ本年中ノ總患者35,199人、總死者7,254人ナリ。[バラチフス]ハ患者5,731人、死者715人ニシテ是亦前年ヨリ少キコト患者1,050人、死者22人ナリ。痘瘡ハ本年少シク流行シ患者5,121人、死者1,158人ヲ出シ、前年ノ患者264人、死者48人トハ比較スヘカラサルマテ

ニ多シ。發疹[チフス]ハ大正三年ノ流行以後漸次其ノ數ヲ少クシ、本年ハ患者219人、死者28人ヲ出セルノミ。猩紅熱ハ患者1,957人、死者65人ニシテ前年ニ比シ患者201人、死者15人ヲ増シ[チフス]ハ患者17,487人、死者4,375人ヲ出シ是亦前年ニ比シ患者1,238人、死者415人ヲ増セリ。[ペスト]ハ患者25人、死者23人ニシテ前年ヨリ遙ニ少ク患者死者共ニ三分一ニ足ラス。

大正六年中ノ傳染病發生數ヲ地方別ニ見ルニ、虎列刺ハ富山縣ニ最多ク殆ト全國總數ノ半ハ占メ、其ノ他山口、福岡、長崎、石川、島根、佐賀ノ諸縣ニ發生セリ。赤痢ハ兵庫縣、大阪府ニ最多ク東京府之ニ次キ、其ノ他岡山、愛知、香川、熊本、廣島、長野ノ諸縣ニ稍多ク、腸[チフス]ハ東京府最多ク、大阪府之ニ次キ、其ノ他兵庫、福岡、福島、愛知、秋田ノ諸縣及北海道ニ多シ。[バラチフス]ハ北海道及東京府最多ク、大阪、京都ノ二府之ニ次キ、其ノ他新潟、静岡、兵庫、福岡ノ諸縣ニ多ク、痘瘡ハ大阪府最多ク、兵庫縣之ニ次キ、熊本、廣島、岡山、福岡ノ諸縣ニ多ク、發疹[チフス]ハ青森縣最多ク、秋田縣之ニ次テ多シ。猩紅熱ハ東京府、京都府ニ多ク、神奈川縣、大阪府次テ多シ。[チフス]ハ北海道及東京、大阪二府ニ最多ク、其ノ他福島、長野、新潟、群馬ノ諸縣ニ多ク、[ペスト]ハ愛知、三重ノ二縣ニアリタルノミ。

【種痘】 大正五年中ニ施行セル第一期第一回種痘ノ總員ハ1,506,629人ニシテ中97.72%ハ公種痘、2.28%ハ私種痘ナリ。此ノ種痘人員中88,637人ノ檢査未了ヲ除キ善感比例ヲ算出スレハ91.32%ニ當リ、之ヲ公種痘ノミヲ以テ算スレハ94.29%ニ當リ、私種痘ノミヲ以テ算スレハ95.69%ニ當レリ。此ノ第一回種痘ノ不善感者及前年ノ不善感者等ニシテ本年第二回種痘ヲ行ヒタル者105,525人アリ、此ノ中96.83%ハ公種痘3.17%ハ私種痘ナリ。又此ノ第

XXIII. 教

育

【學齡兒童】 大正五年度末ニ於ケル全國學齡兒童中既ニ就學ノ始期ニ達シタル者ハ男4,087,498、女3,813,770、合計7,901,268ニシテ之ヲ總人口ニ對比セハ男14.7%、女13.9%其ノ平均14.9%ニ當ル、學齡兒童ノ就學歩合ハ從前甚タ不振ナリシカ、十數年來大ニ面目ヲ革メテ近年甚タ優長トナリ男ハ99.01%、女ハ98.18%其ノ平均98.61%ノ割合ニ上リ之ヲ前年ニ比スレハ男0.17%、女0.21、平均0.14%ヲ増加セリ。

學齡兒童ノ就學歩合ヲ各地方ニ就テ見ルニ一ニ縣稍低歩ノモノアルノ外他ハ孰レモ皆優長ナリ若シ強テ其ノ長否ヲ撰別スレハ、宮城、岡山、山形、奈良、三重、佐賀、山口、廣島、福島、茨城、石川、岐阜、大分、香川、新潟、鳥取、静岡、埼玉、福井、島根、福岡、兵庫ノ二十ニ地方ハ99.01-99.78%ニシテ就學歩合高キモノニ屬シ之ヲ前年

ニ區種痘者中檢査未了者4,664人ヲ除キ善感比例ヲ算出スレハ66.68%ニ當リ、公種痘ノミハ66.67%ニ當リ、私種痘ノミハ66.83%ニ當レリ。

大正五年中ノ第二期第一回種痘施行總員ハ1,200,774人ニシテ中99.38%ハ公種痘、0.62%ハ私種痘ナリ。此ノ種痘人員中21,349人ノ檢査未了人員ヲ除キ善感比例ヲ算スルニ61.43%ニ當リ、公種痘ノミハ61.53%、私種痘ノミハ46.21%ニ當ル。又此ノ第一回種痘ノ不善感者及前年ノ不善感者等ニシテ第二回種痘ヲ行ヒタル者331,679人アリ、此ノ中97.49%ハ公種痘2.51%ハ私種痘ナリ。又此ノ中檢査未了者5,588人ヲ除キ善感比例ヲ算スルニ20.11%ニ當リ、公種痘ノミハ20.32%、私種痘ノミハ11.96%ニ當レリ。

【水道】 本邦ニ於ケル上水道ハ明治二十年ニ横濱水道ノ成レルヲ最先トシ、爾來年ヲ退テ増進シ、輒近殊ニ著シキ歩武ヲ以テ増加シ、大正五年末ノ現在ハ50箇所ニ其ノ竣成ヲ見タリ。就中最大ナル東京水道ハ一日ノ平均給水量4,316萬瓦倫ヲ算シ、大阪水道ハ2,484萬瓦倫、横濱水道ハ961萬瓦倫、京都水道ハ9.8萬瓦倫、神戸水道ハ808萬瓦倫ヲ一日ノ平均給水量トス。斯ノ如キモ尙以テ満足スヘキニアラス、試ニ大正五年末ノ給水戸數(自宅引用及共同栓用合計)ヲ大正二年末調ノ其ノ市ノ總戸數ニ比スルニ、上記ノ大水道ト雖更ニ大ニ擴張スヘキ要アルヲ見ル、即東京市水道ハ東京市總戸數ノ約60%ニ給水スルノミ、大阪水道ハ大阪市ノ約65%、京都水道ハ京都市ノ約35%、横濱水道ハ横濱市ノ約60%、神戸水道ハ神戸市ノ約50%ニ給水スルノミ他ハ推シテ知ルヘシ。然レハ大都市ヲ包有スル地方ニ於テ、腸[チフス]赤痢等ノ發生少ナカラサルモノ亦決シテ偶然ナラサルナリ。

ニ比スレハ五地方ヲ増加セリ、之ニ反シテ沖繩、徳島、大阪、愛知、東京、秋田、栃木、高知ノ八地方ハ91.21-98.00%ニシテ就學歩合ノ低キモノニ屬シ之ヲ前年ニ比スレハ一地方ヲ減少セリ、而シテ上記列記外ノ十七地方ハ98.01-99.00%ニシテ中位ニ在リ、之ヲ前年ニ比スレハ四地方ヲ減少セリ。

【學齡兒童中ノ盲及聾啞者】 大正五年度末ニ於ケル全國學齡兒童中盲者ハ3,240、聾啞者ハ6,039ニシテ其ノ割合ハ學齡兒童一萬人中盲者3.50、聾啞者6.53ナリ、上記ノ盲及聾啞者學校ニ於テ修業スル者盲956、聾啞者732アリテ兩者共逐年著シク増加セリ。

【小學校數】 大正五年度末ニ於ケル全國小學校數ハ25,613校ニシテ一市町村平均二校ニ當ル、其ノ種類別ヲ見ルニ尋常ノミ

11,933校、尋常高等併置ノモノ 13,355校、高等ノミ 322校ニシテ之ヲ既往ニ於ケル事實ト比較スレハ尋常ノミ及高等ノミノ小學校ハ逐次減少シ、之ニ反シテ尋常高等併置ノモノハ増加セリ、而シテ其ノ増加及減少ノ割合ハ兩者殆ント相同シキカ故ニ、結局小學校總數ニ於テハ近時増減ノ差著シカラス。

【小學校學級數】 大正五年度内三月一日現在ニ於テ全國小學校學級數ハ 150,242ニシテ市町村平均約十二學級ニ當ル、之ヲ既往ニ比スレハ逐年變々トシテ増加シ、十年以前ノ 113,669ニ對シテ 33,573ヲ増加シ、又現行小學校令施行ノ明治三十四年度ノ數 93,560ニ對シテ 56,682ヲ増加セリ、即チ其ノ増加指數ハ十年前ノ 100ニ對シテ 132.6、明治三十四年度ノ數 100ニ對シテ 160.6ナリ。

上記ノ如ク小學校數ハ近時其ノ増減著シカラスト雖、學級數ハ逐年著シク増加スルカ故ニ、一學校ニ對スル學級數ハ漸次増加セリ、即明治三十四年度ニ於テハ一學校平均 3.48學級ナリシカ十年以前ハ 4.19トナリ而シテ最近ニ於テハ 5.87トナリシヲ以テ之ヲ當初ノ數ニ比スレハ 2.44學級ノ増加ナリ、一學校ニ付學級數ヲ各地方ニ就テ見ルニ多少ノ程度一様ナラスシテ最多ハ 10.41、最少ハ 3.35ナリ、今其ノ地方ヲ舉ケンニ學級數多キモノニ屬スル地方ハ東京(10.41)、大阪(10.32)、佐賀(9.07)、兵庫(8.52)、愛知(8.38)、香川(8.28)、福岡(8.25)、神奈川(8.18)、沖繩(8.04)等ニシテ、之ニ反シテ岩手(3.35)、北海道(3.71)、青森(3.73)、高知(3.94)、鳥根(4.10)、鳥取(4.23)、奈良(4.47)、福島(4.49)、福井(4.62)、和歌山(4.65)、宮城(4.75)、岐阜(4.88)、新潟(4.98)等ハ學級數少キモノニ屬シ、爾餘ノ地方ハ 5—8學級ノ範圍内ニシテ中位ニ在リ。

【小學校教員】 大正五年度末ニ於ケル全國小學校教員ハ 166,034ニシテ、内尋常小學校ノ教育ニ従事スル者 144,901、高等小學校ノ教育ニ従事スル者 21,133ナリ、教員ヲ資格別ニ見ルニ本科正教員 120,870(73%)、専科正教員 7,610(4%)、准教員 14,707(9%)、代用教員 22,877(14%)ナリ、本科及専科ノ各正教員ハ逐年増加シ之ニ反シテ准教員ハ逐年減少シ代用教員ハ増減著明ナラス、要スルニ小學校教員ノ資格ハ漸次向上ノ趨勢ヲ呈セリ、次ニ小學校教員ノ男女別ヲ見ルニ男 118,799(72%)、女 47,235(28%)ナリ、既往ニ比フレバ男女孰レモ増加スト雖殊ニ女子増加ノ歩調急速ナリ。

一學校ニ付本科正教員數ノ割合ヲ比較スルニ東京(9.14)、大阪(9.01)ハ特ニ多ク之ニ亞テ福岡(7.82)、佐賀(7.16)、香川(7.04)等多キモノニ屬ス、之ニ反シテ北海道(2.38)、岩手(2.46)ハ特ニ少ク、之ニ亞テハ青森(3.01)、福島(3.08)、高知(3.14)、鳥取(3.53)、鳥根(3.63)、岐阜(3.65)、宮城(3.65)、奈良(3.71)、秋田(3.80)、福井(3.95)、茨城(3.95)等ナリ、而シテ爾餘ノ各地方ハ 4.01—7.00ノ範圍内ニシテ中位ニ在リ。

【小學校兒童】 小學校兒童ノ數ハ東京(342,606)、北海道(201,024)、兵庫(300,548)、愛知(281,439)、福岡(273,979)、新潟(275,868)、大阪(271,088)、廣島(235,767)、静岡(229,086)、長野(214,257)、鹿児島(211,145)ハ何レモ二十萬以上ニシテ兒童數多キモノニ屬シ之ニ反シテ鳥取(59,920)、沖繩(72,506)、宮崎(88,765)、奈良(89,277)、山梨(90,776)、高知(91,636)、福井(92,410)、鳥根(93,503)、徳島(99,835)、滋賀(99,961)ハ孰レモ十萬以下ニシテ兒童數少キモノニ屬シ爾餘ノ各地方ハ孰レモ皆十萬臺ナリ。

全國平均ニ於テ學校一ニ付兒童數ハ逐年増加シ最近ニ於テハ 288.6ナリ、各地方ニ依リ差等アリ、就中東京(559.8)、大阪(554.5)、沖繩(461.8)、福岡(441.0)、神奈川(440.9)、兵庫(439.4)、佐賀(433.7)、愛知(421.1)等ハ特ニ多ク岩手(173.7)、高知(182.2)、鳥根(187.7)等ハ特ニ少シ。

【盲啞學校】 盲啞者ニ對スル教育施設ハ逐年急激ニ増加セリ、即明治三十五年度ト大正五年度トノ比較ニ於テ學校ハ 19ヨリ 73ニ、教員ハ 101ヨリ 472ニ、生徒ハ盲生 509ヨリ 2,173、啞生 554ヨリ 1,313ニ、卒業生ハ盲啞合計 93ヨリ 469ニ孰レモ増加セリ、就中技藝科生ノ増加著明ニシテ明治三十五年度ノ 159ヨリ最近ハ 1,024ニ、同卒業生ハ 22ヨリ 193ニ増加セリ、各府縣ニ就テ見レハ往々其ノ施設ナキモノアリト雖多クハ一校ヲ有シ其ノ多キモノニ至リテハ五校ヲ有スルモノアリ、從テ其ノ生徒數モ各地方一様ナラスシテ東京(576)ヲ最多トシ、次テ大阪(245)、京都(230)、愛知(220)等ハ多キモノニ屬シ其ノ他ハ 100人内外ヨリ數十人ノモノ多シ。

【師範學校】 師範教育ノ施設ハ明治三十一年現行師範學校令施行以來逐年増加シ來リタルニ、近年ニ至リテ其ノ増加底止シ又ハ反テ減少セルモノアリ、即大正五年度ニ於ケル學校 92、教員 1,491、生徒總數 26,307、本科卒業生 7,349ヲ各前年ニ比較スルニ校數ニ於テ増減ナキ外教員生徒及卒業生ハ孰レモ多少減少セリ、各地方ニ就テ之ヲ見ルニ多クハ一若ハ二校ヲ有シ往々三校ヲ有スル地方アリ、生徒ハ東京(1,324)最多ニシテ福岡(1,082)之ニ亞テ、其ノ他兵庫(965)、大阪(897)、熊本(841)、鹿児島(833)、愛知(811)等多キモノニ屬シ其ノ少キモノト雖鳥取(197)ノ特ニ少キヲ除ケハ他ハ孰レモ 300ヲ下ルコトナク、概ネ 300—600ノ範圍内ニ在リ。

【高等師範】 高等師範學校ハ東京、廣島ニ各一校、女子高等師範學校ハ東京、奈良ニ各一校合計四校アリ、教員ハ逐次増加シ生徒ハ數年前迄逐年増加シ來リタルモ近時ニ至テ増減著ク最近大正五年度ハ前年度ニ比シテ減少セリ、卒業生ハ高等師範學校ニ於テ少シク増加セシモ女子高等師範ニ於テハ減少シ兩者ヲ合

ルトキハ是亦前年ニ比シテ減少セリ。

【教員檢定】 教員檢定合格者ハ大正五年度ニ於テ小學校教員 11,168、中等教員 784ニシテ之ヲ既往ニ比較スレハ、小學校教員ハ近時逐年減少シ中等教員ハ一弛一弛常ナキカ如シト雖是亦漸減ノ趨勢ヲ呈セリ。

【中學校】 中學校ノ施設ハ諸種ノ教育施設中最モ著シク發達シツ、アルモノニシテ、全國ニ於テ現行中學校令施行ノ年ナル明治三十二年ト大正五年度トヲ比較スルニ、學校ハ 191ヨリ 325ニ、教員ハ 3,102ヨリ 6,702ニ、生徒ハ 69,179ヨリ 147,467ニ、本科卒業生ハ 4,206ヨリ 21,019ニ孰レモ増加セリ、一學校平均ノ生徒ハ漸次増加シ明治三十二年ニ於テ本科生徒ハ 362ナリシカ大正五年度ニハ 451トナレリ、次ニ教員ト生徒トノ割合ハ數年前迄ハ常ニ教員一ニ付生徒 20ノ割合ヲ維持セシカ最近ニ至リテ少シク増歩シテ 22トナレリ。

各地方ニ就テ見ルニ何レモ皆中學校ノ施設ナキ府縣ナク、學校ハ東京ノ 36特ニ多數ニシテ之ニ亞テ新潟、大阪ノ各 12、兵庫、岡山、廣島ノ各 11、愛知、福岡ノ各 10等ハ少キモノニ屬シ滋賀、沖繩ノ各 2、青森、山梨、鳥根、宮崎ノ各 3等ハ多キモノニ屬シ爾餘ノ地方ハ 4—9校ヲ有ス、生徒ハ東京ノ 18,804最多ニシテ嶺南一頭角ヲ現シテ大阪ノ 6,589、福岡ノ 6,289、愛知ノ 5,058、兵庫ノ 5,032等ハ多キモノニ屬シ、沖繩ノ 820、滋賀ノ 1,002、山梨ノ 1,306、宮崎ノ 1,327、岩手ノ 1,327、青森ノ 1,337、高知ノ 1,370、鳥取ノ 1,480、鳥根ノ 1,503、秋田ノ 1,540、徳島ノ 1,801、岐阜ノ 1,832、三重ノ 1,867等少ク爾餘ノ地方ハ 2,000—5,000ノ範圍内ニ在リ、學校一ニ付本科生徒ハ 500人以上ノモノ十地方、400—500人ノモノ二十六地方、300—400人ノモノ十一地方ナリ、教員一ニ付生徒ノ割合ハ各地方間ニ大差アルコトナクシテ概ネ二十人内外ノ割合ナリ。

【高等女學校】 高等女學校モ亦其ノ發達著シキモノニシテ全國ニ於テ現行高等女學校令施行ノ年ナル明治三十二年ト大正五年度トヲ比較スルニ學校ハ 37ヨリ 229ニ、教員ハ 450ヨリ 3,654ニ生徒ハ 8,857ヨリ 80,767ニ、本科卒業生ハ 904ヨリ 15,831ニ孰レモ増加セリ、又明治四十五年大正元年度ヨリハ實科高等女學校ヲ施設スル所トナリ是亦急速ニ増加シ學校ハ 90ヨリ 149ニ、教員ハ 607ヨリ 1,104ニ、生徒ハ 10,257ヨリ 21,198ニ、本科卒業生ハ 1,832ヨリ 5,009ニ孰レモ増加セリ。

高等女學校モ亦其ノ施設ナキ府縣ナク學校ノ最多キハ東京ノ 29ニシテ次テ京都ノ 13、大阪ノ 12、愛知、福岡ノ各 11、岡山ノ 10等多キモノニ屬シ、其少キモノハ秋田、福井、山梨、徳島、沖繩ノ各 1、青森、茨城、富山、石川、滋賀、鳥取、香川、高知、大分、鹿児島ノ

各 2等ニシテ爾餘ノ地方ハ 3—9校ヲ有ス、生徒ハ東京ノ 10,218特ニ多ク之ニ次テ大阪ノ 5,191、京都ノ 3,883、福岡ノ 3,791、岡山ノ 3,562、愛知ノ 3,246等多キモノニ屬シ、之ニ反シテ沖繩ノ 310、山梨ノ 519、福井ノ 530、青森、徳島ノ各 561等ハ少シ、學校一ニ付生徒ハ 500以上ノモノ六地方、400—500ノモノ十一地方、300—400ノモノ十八地方、200—300ノモノ十二地方ナリ、教員一ニ付生徒ハ例外トシテ 42ノモノ一地方、15—20ノモノ數地方アリト雖モ概ネ 20—30ノ範圍内ニ在リ。

實科高等女學校ハ北海道、岐阜、山梨、鳥根、沖繩ニ施設ナキ外、他ノ各地方ハ何レモ皆之ヲ有セリ、就中大分ハ 10、廣島ハ 8、鹿児島ハ 7、新潟、静岡、兵庫、香川ノ各 6ヲ有シテ多キモノニ屬ス、其ノ少キハ青森、山形、愛知、京都、鳥取、宮崎ノ各 1ナリ、生徒ハ 1,000以上ノモノ三地方、500—1,000ノモノ十二地方ニシテ他ノ二十七地方ハ 500以内ナリ、就中山形ノ 65、宮崎 107、埼玉 122等ハ特ニ少シ、學校一ニ付生徒及教員一ニ付生徒ノ割合ハ各地方間ニ稍甚シキ差違アリ、是レ未ダ實數ノ少キニ因ルモノトス、而シテ其ノ全國平均ニ於テハ一學校平均生徒 131、一教員ニ付平均生徒 13ニシテ之ヲ高等女學校ニ比スレハ何レモ若干ノ低歩ヲ示セリ。

【專門學校】(實業專門學校ヲ除ク) 大正五年度末ニ於ケル專門學校ハ全國ニテ 67校アリ、内醫學藥學ニ關スルモノ 16、法學(商科ヲ含ム)ニ關スルモノ 10、文學ニ關スルモノ 15、宗教ニ關スルモノ、21美術 2、音樂、體育及植民各 1ニシテ前年ニ比シ宗教 1校ヲ増加セリ、生徒ハ 34,330ニシテ内本科生徒ハ 18,431ナリ、生徒ヲ男女別ニ見ルニ男 32,850、女 1,510ナリ、各學科中醫學、文學、宗教、音樂ノ生徒ハ男女共ニアリ教育、家政ハ女子ノミニシテ其ノ他ノ各科ハ男子ノミナリ、各科ニ就テ生徒ノ多少ヲ見レハ法學(10,374)首位ヲ占メ之ニ亞テ醫學(5,427)、經濟學(4,769)、商科(4,432)、文學(2,561)、宗教(2,100)、理工科(972)、齒科(970)、美術(704)、藥學(684)ニシテ其ノ他ノ科ニアリテハ、何レモ 100—300内外其ノ最少キモノハ體育ノ 68ナリ、本科卒業生ハ醫學最多クシテ 1,002ヲ出シ、之ニ亞テ法學 458、經濟學 429、商科 423、文學 388、宗教 320等ナリ。

【高等學校】 大正五年度末ニ於ケル高等學校ハ全國ニテ 8校アリ、從前ニ比シ僅ニ一二校ノ増加ニ過キスト雖生徒ハ約五割卒業生ハ約七八割ヲ増加セリ、但シ近時ニ至テ其ノ内容少シク減退ノ傾向ヲ現出セリ、即生徒ハ明治四十四年度ノ 6,665ヲ頂點トシ爾後逐年減少シ卒業生モ亦大正三年度ノ 1,800ヲ最多トシ爾後逐年減少シツ、アリ。

【帝國大學】 大正五年度末ニ於ケル帝國大學ハ全國ニテ 4

大學 16分科アリ内東京帝國大學ハ法、醫、工、文、理、農ノ六分科、京都帝國大學ハ法、醫、工、文、理ノ五分科、東北帝國大學ハ醫、理、農ノ三分科(醫、理二科ハ仙臺、農科ハ札幌)九州帝國大學ハ醫、工二分科アリ、尙各大學ニ大学院ヲ置ケリ。

大正五年度ニ於テ東京帝國大學ハ講座 198、教員 411、京都帝國大學ハ講座 124、教員 184、東北帝國大學ハ講座 56、教員 195、九州帝國大學ハ講座 54、教員 94ニシテ之ヲ前年度ニ比スレハ九州帝國大學ヲ除キタル他ノ三大學ハ講座ハ何レモ増加セシモ教員ハ何レモ減少シ、而シテ九州帝國大學ハ講座數ニ増減ナク教員ハ増加セリ。

四帝國大學ヲ通シ各分科學生生徒數ヲ順次ニ擧ケレハ法科 3,395(39.1%)、農科 1,584(18.2%)、醫科 1,469(16.9%)、工科 1,332(15.3%)、文科 550(6.3%)、理科 359(4.2%)ナリ、學生及生徒トモ逐年増加シ最近ニ於テ學生ハ 7,861(内女1、生徒ハ 1,844ニシテ學生ハ十年前ノ 100ニ對シ 125ニ、二十年前ノ 100ニ對シ 398ニ増加シ、生徒ハ十年前ノ 100ニ對シ 169ニ、二十年前ノ 100ニ對シ 656ニ増加セリ。學生卒業者ハ最近ニ於テ法科 1,062、工科 367、醫科 325、農科 252、文科 13)、理科 77ニシテ外ニ生徒ノ卒業者各分科ヲ通シテ 718アリ。

【實業補習學校】 實業補習學校ハ工業、農業、水産、商業、商船等ニシテ其ノ學校數ハ商船補習學校ヲ除クノ外各種其長足ノ進歩ヲナセリ、就中農業補習學校ハ其ノ進歩特ニ著シ、生徒モ亦大體學校數ノ増加ト同様ノ歩調ヲ以テ進ミ最近ニ於ケル各科學徒總數ハ農業補習 369,886、商業補習 15,499、工業補習 11,044、水産補習 5,592、商船補習 23ナリ、商船補習ヲ除キタル各科ノ生徒ハ孰レモ男及女共ニアリテ其ノ割合ハ工業補習男 79%、女 21%、農業補習男 90%、女 10%、商業補習男 95%、女 5%、水産補習男 96%、女 4%ナリ、實業補習學校修了者ハ生徒ノ増加ニ伴ヒ逐年増加シ最近ニ於テハ農業補習ハ 96,968、商業補習ハ 11,151、工業補習ハ 8,030、水産補習ハ 1,607商船補習ハ 6ヲ出セリ。

【實業學校】 茲ニ實業學校トハ工業、甲種農業、乙種農業、甲種商業、乙種商業、甲種水産、乙種水産、甲種商船ノ各學校ヲ謂フ上ノ内水産學校ハ本年度ヨリ甲種及乙種トナリシヲ以テ既往トノ比較ヲナスコト能ハスト雖前年度迄ノ事實ニ依テ之ヲ見ルニ近時ニ至リ減退ノ趨勢ナリ、其ノ他ノ各科實業學校ハ孰レモ皆逐年發達セリ、現行實業學校令施行ノ年ハ明治三十二年ナリト雖其ノ後主務省ニ於テ統計樣式變更ノ爲當時ノ計數ト最近ノ計數トヲ適切ニ比較スルコト能ハサルヲ以テ今最近十年間ノ事實ニ就テ之ヲ見ルニ、其ノ校數工業ハ 32ヨリ 36ニ、甲種農業ハ 71ヨリ 81ニ、乙種農業ハ 95ヨリ 192ニ、甲種商業ハ 54ヨリ 72ニ、乙種商業ハ

17ヨリ 40ニ、甲種商船ハ 9ヨリ 10ニ孰レモ増加セリ、各科學徒モ亦逐年増加セリ、即其ノ増加率最モ高キハ乙種農業ノ三倍餘、乙種商業ノ二倍餘ナリ、其ノ他甲種商業ハ約七割、工業ハ約五割、甲種農業ハ約三割、甲種商船ハ約二割ノ増加ニシテ大正五年度末ニ於テハ甲種商業ハ 28,333、乙種農業ハ 23,318、甲種農業ハ 14,995、工業ハ 7,523、乙種商業ハ 6,864、甲種商船ハ 2,077、甲種水産ハ 628、乙種水産ハ 218ノ生徒ヲ有ス、本科生徒ノ男女別ヲ見ルニ乙種農業、甲種商業、乙種商業、乙種水産ハ男女生アリテ工業、甲種農業、甲種水産、甲種商船ハ男生ノミナリ、本科卒業者ハ生徒ノ増加ニ伴ヒ逐年増加シ、大正五年度ニ於テ乙種農業ハ 5,981、甲種商業ハ 3,927、甲種農業ハ 3,719、乙種商業ハ 1,616、工業ハ 1,432、甲種商船ハ 228、甲種水産ハ 151、乙種水産ハ 13ヲ出セリ。

【徒弟學校】 徒弟學校ハ逐年其ノ進歩著シキモノアリ、徒弟學校規程施行ノ年ナル明治三十七年度ニ比スレハ學校ハ 40ヨリ 129ニ、教員ハ 231ヨリ 784ニ、生徒ハ 2,885ヨリ 15,725ニ増加シ、本科卒業者ハ最近ニ於テ 3,555ヲ出セリ、徒弟學校ノ生徒ハ從前ト雖男生ニ比シ女生多カリシカ近時ニ至ルニ及ヒ其ノ程度一層甚シクシテ最近ニ於ケル割合ハ男 25%、女 75%ナリ。

【實業專門學校】 實業專門學校ハ大正五年度末ニ於テ 23校アリテ内工業ニ關スルモノ 9、農業ニ關スルモノ 7、商業ニ關スルモノ 7ナリ、之ヲ十年前ニ比スレハ工業 3、農業 5、商業 1ヲ増加セリ、生徒ハ商業最モ多クシテ 3,366、次テ工業 2,974、農業 1,730ナリ但生徒増加ノ歩調ハ農業最モ急速ナリ、本科卒業者ハ大正五年度ニ於テハ工業 966、商業 789、農業 393ヲ出セリ。

【各學校入學志願者及入學者】 中學校、高等女學校、專門學校、高等學校、帝國大學及實業專門學校ニ於ケル入學志願者ヲ見ルニ法學ニ關スル專門學校及文學ニ關スル專門學校ハ一昨一弛増減明カナラサルモ其ノ他ノ各校ハ逐年増加セリ、入學者モ亦逐年増加スト雖入學志願者ニ比シ遙ニ低シ、今入學志願者ニ對スル入學率ノ最モ少キモノヨリ順次ニ列舉セハ工業專門學校 18.74%、高等學校 20.82%、醫學專門學校 24.22%、商業專門學校 27.80%、農業專門學校 28.89%、文學專門學校 44.43%、中學校 48.48%、高等女學校 57.76%等ニシテ法學專門學校 79.25%、實科高等女學校 85.18%、宗教專門學校 85.58%、帝國大學 86.81%ハ入學率高キモノニ屬セリ。

【海外官費留學生】 大正五年度末ニ於テハ文部省ヨリ 95、大正六年度末ニ於テハ外務省ヨリ 11人ヲ海外留學生トシテ派遣セリ前年ニ比シ増減ナク、五年前ニ比シ 41人ヲ減少セリ、文部省海外留學生中最モ多キハ米國ノ 52人首位ヲ占メ之ニ亞クハ英米佛瑞

ノ 9人、米瑞ノ 8人、英米獨ノ 7人、英米ノ 4人ニシテ其ノ他ノ諸國ハ一人又ハ二人ナリ、外務省ヨリハ支那ニ 4人、和蘭、西班牙、葡萄牙ニ各 2人、暹羅ニ 1人ナリ。

【公學費】 府縣、郡、市、町、村ニシテ教育費ノ爲ニ要セシ費用ハ大正五年度ニ於テ 85,626千圓ニシテ、其ノ内課ハ府縣公學費 17,773千圓 21%、郡公學費 2,352千圓(3%)、市公學費 14,123千圓(16%)、町村公學費 51,378千圓(60%)ナリ、十年前ニ比シ府縣ハ 55%、郡ハ 129%、市ハ 58%、町村ハ 48%ヲ孰レモ増加セリ、最近公學費ノ平均額ヲ算出セハ府縣公學費ハ一府縣平均 378,157圓、郡公學費ハ一郡平均 3,703圓、市公學費ハ一市平均 190,855圓、町村公學費ハ一町村平均 4,205圓ニ當レリ。

府縣、郡、市、町村公學費中俸給ニ要スル費用ハ府縣ニ在リテハ 40%、郡ニ在リテハ 37%、市ニ在リテハ 46%、町村ニ在リテハ 61%ヲ占メ而シテ俸給額増加ノ歩調ハ俸給以外ノ費用ノ増加ヨリ急速ナリ。

公學費ヲ主ナル學校別ニ見ルニ府縣公學費ハ其ノ總額 17,773千圓中、中學校ニ 5,018千圓、師範學校ニ 3,776千圓、實業學校ニ 2,924千圓、高等女學校ニ 1,457千圓、專門學校ニ 820千圓、合計 13,995千圓、79%ヲ費シ殘額 3,778千圓 21%ハ小學校、圖書館及其ノ他ノ爲ニ費セリ、郡公學費ハ其ノ總額 2,352千圓中實業學校ニ 1,031千圓、高等女學校ニ 653千圓、合計 1,684千圓 72%ヲ費シ殘額 668千圓、18%ハ中學校、圖書館及其ノ他ノ爲ニ費セリ、市公學費ハ其ノ總額 14,123千圓中中學校ニ 11,952千圓、實業學校ニ 1,156千圓、合計 13,108千圓 93%ヲ費シ殘額 1,015千圓 7%ハ幼稚園、盲啞學校、高等女學校、專門學校、圖書館及其ノ他ノ爲ニ費セリ、町村公學費ハ其ノ總額 51,378千圓中中學校ニ 38,652千圓、實業學校ニ 1,181千圓、合計 39,833千圓 97%ヲ費シ殘額 1,545千圓 3%ハ幼稚園、盲啞學校、中學校、高等女學校、圖書館及其ノ他ノ爲ニ費セリ。

【公學收入】 府縣、郡、市、町村ノ公學收入ハ大正五年度ニ於テ 14,877千圓ニシテ其ノ内課ハ府縣公學收入 5,945千圓、郡公學收入 748千圓、市公學收入 2,854千圓、町村公學收入 5,331千圓ニシテ何レモ前記公學費ヲ償フニ足ラサルコト遙ニ遠シ、即其ノ不足總額ハ 70,749千圓ニシテ 88%ニ當リ其ノ大部分ハ地方費ノ負擔スル所ナリ。

府縣公學收入ノ主ナルモノハ府縣ニ在リテ授業料トシテ、3,859

千圓、總收入額ノ 66%ヲ收入シ、郡ニ在リテハ授業料トシテ 291千圓、教育資金及普通教育獎勵費補助及國庫補助トシテ 301千圓、合計 592千圓、總收入額ノ 79%ヲ收入シ、市ニ在リテハ授業料及保育料トシテ 2,240千圓、總收入額ノ 79%ヲ收入シ、町村ニ在リテハ授業料及保育料トシテ 2,003千圓、寄附金及雜收入トシテ 1,943千圓合計 3,946千圓、總收入額ノ 86%ヲ收入セリ。

【公學資産】 府縣、郡、市、町村公學資産ハ大正五年度末ニ於テ 322,877千圓ニシテ其ノ内課ハ府縣 66,579千圓、郡 4,945千圓、市 66,330千圓、町村 187,023千圓ナリ、之ヲ平均額トセハ府縣ハ一府縣平均 1,416千圓、郡ハ一郡平均 8千圓、市ハ一市平均 896千圓、町村ハ一町村平均 1.4千圓ニ當レリ。

【出版圖書】 大正五年ニ於ケル出版圖書ノ數ハ 49,902部ニシテ内著作 49,842部、翻譯 60部ナリ、之ヲ前年ニ比スレハ總數ニ於テ 721部ヲ増加シ、十年前ニ比スレハ 42%ヲ増加セリ。

出版圖書ノ種類別ヲ見ルニ政事 7,785(16%)、産業 6,704(13%)ハ特ニ多ク、之ニ亞クハ宗教 3,051(6%)、文學 2,880(6%)、教育 2,560(5%)等ナリ、更ニ之ニ亞クハ法律(醫事、天文、地理、交通、小説、書畫、技藝ニシテ何レモ 1,000—2,000部ノ範圍内ニ居リ統計、理科、音樂、語學ハ 500—1,000部ノ範圍内ナリ。

【圖書館】 大正五年度末ニ於ケル全國圖書館數ハ官公立 518、私立 574、合計 1,092ニシテ前年ニ比シ 192ヲ増加シ十年前ノ七倍トナレリ、所藏圖書冊數ハ官公立 2,296,521冊、私立 2,028,062冊 合計 4,324,583冊ニシテ其ノ一館平均官公立ハ 4,453冊、私立ハ 3,533冊ナリ、所藏圖書ヲ和漢及洋ノ種類ニ分チ見ルニ、官公立ニ在リテハ和漢 94%、洋 6%ニシテ私立ニ在リテハ和漢 96%、洋 4%ナリ、閱覽人員ハ官公立 6,075,619、私立 2,491,076人ニシテ之ヲ一館一日平均數トシテ算出スレハ官公立ハ 30人、私立ハ 12人ニ當レリ。

閱覽人員ニ付地方別ノ比較ヲナセハ一年間ノ延閱覽人員ノ最モ多キハ東京ノ 2,074,652ニシテ之ト比肩スヘキ地方ハ他ニ一モ之アルコトナシ、之ヨリ遙ニ下リテ山口ノ 670,240、石川ノ 491,317、新潟ノ 462,031、宮城ノ 437,754等ハ稍著明ナルモノナリ、他ノ地方ニ在リテハ二十萬人臺ノモノ山形、愛知、大阪、佐賀、熊本、十萬人臺ノモノ秋田、茨城、福井、長野、三重、京都、兵庫、奈良、鳥根、廣島、大分、長崎、宮崎、鹿兒島ニシテ爾他ノ各地方ハ何レモ十萬人以下ナリ。

XXIV. 社 寺 教 會

【神社及神職】 大正六年末現在ノ神宮及官國幣社合計 177社、前年ヨリ増スコト 2社、府縣社、郷社、村社、合計 49,333社、前

年ヨリ減スルコト 71社、境外無格社 68,218社、前年ヨリ減スルコト 1,120社、總計 117,728社、前年ヨリ減スルコト 1,189社ナリ。

新ノ如ク神社ノ減少ハ郷社村社以下殊ニ境外無格社ノ 合祀セラレタルモノ多キニ因ル。

大正五年末ノ神職職員ハ 14,692人ニシテ、之ヲ大正五年ノ所屬神社ニ分配シテ比例ヲ算出スルニ、國幣社以上ハ一社平均 4人 15ノ神職アリ、府縣社ハ 1人 53、郷社ハ 0人 99、村社ハ 0人 19ノ一社平均神職アル 割合ト爲ル、即郷社ハ一社一人村社ハ五社一人ノ神職アリ、若シ夫境外無格社ニ至リテハ、之ヲ無所屬神職ト比スヘキモノニモアラサルカ如シ。神職職員ヲ前年ニ比スルニ 73人ヲ増シ、十年前ナル明治三十九年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ 97.06ニ當レリ。此ノ減少ハ主トシテ無所屬神職ノ減少ニ歸スルモノ、如シ。

【寺院及住職】 大正五年末ノ寺院總數ハ 71,643箇寺ニシテ前年ニ比シ 10箇寺ヲ減ス。外ニ境外佛堂 36,193箇所アリ、是亦 54箇所ヲ減シタリ。此ノ寺院數ヲ宗派別ト爲シ分節比例ヲ算出シ、其ノ高キモノヨリ擧ケレハ、眞宗 27.42%最高ク、曹洞宗ノ 19.85%之ニ次キ、眞言宗 17.20%淨土宗 11.66%第三位ヲ爲シ、臨濟宗 8.48%日蓮宗 7.00%天台宗 6.36%ヲ第四位トシ、黃檗宗 0.77%時宗 0.69%融通念佛宗 0.50%ヲ第五位ト爲シ、法相宗0.06%、華嚴宗0.04%ヲ第六位トス。而シテ大正五年末ノ各宗寺院數ヲ前年ニ比スルニ、其ノ増加シタルハ眞宗ノ 9箇寺ノミニシテ、淨土宗、黃檗宗、日蓮宗、融通念佛宗、時宗、法相宗、華嚴宗ニ増減ナク、眞言宗、天台宗ハ各 7箇寺、臨濟宗ハ 4箇所、曹洞宗ハ 1箇寺ヲ減シタリ。

大正五年末現在ノ住職職員ハ 51,541人ニシテ、之ヲ前年ニ比スルニ 43人ヲ減シタリ、之ヲ各宗ニ就テ見ルニ、其ノ増加シタルハ曹洞宗ノ 141人、日蓮宗 42人、淨土宗ノ 20人、天台宗ノ 12人黃檗宗ノ 4人法相宗ノ 1人ニシテ、減シタルハ臨濟宗ノ 143人眞宗ノ 88人、眞言宗ノ 21人融通念佛宗ノ 6人時宗ノ 5人トシ、華嚴宗ニハ増減ナカリキ。又此ノ住職ノ員數ト寺院數トヲ對照スルニ、各宗共ニ住職ノ充實セルハ無ク、皆寺院ノ數ハ住職ノ員數ヨリ多シ、試ミ一住職ニ對スル寺院數ノ比例ヲ算出シ其ノ高キモノヨリ列擧スレハ、法相宗ノ 2.53最高ク、華嚴宗ノ 1.88、眞言宗ノ 1.78之ニ次キ、融通念佛宗ノ 1.69、天台宗ノ 1.68黃檗宗ノ 1.54又次キ、時宗ノ 1.46、臨濟宗ノ 1.41、眞宗ノ 1.33淨土宗ノ 1.30、

XXV. 警

【警察官署及警察官】 大正五年末現在ノ警察署ハ 705署ニシテ別ニ警察分署 436署アリ、又巡查及巡查部長派出所(警部補派出所ヲ含ム)ハ 2,733所ニシテ、巡查駐在所及巡查立番所ハ 14,228所ナリ。以上ノ中水上警察官署ハ警察署及同分署 17署、巡查及巡查

曹洞宗ノ 1.25、日蓮宗ノ 1.23等次第セリ。

【教會堂】 大正五年末現在ノ神佛以外ノ 宗教用會堂及講義所ハ 1,434箇所アリ、之ヲ宗派別ト爲シ分節比例ヲ算出シ、其ノ高キモノヨリ列擧スレハ、日本基督教會 17.71%最高ク、日本聖公會ノ 14.92%之ニ次キ、日本メソヂスト教會ノ 13.81%天主教ノ 13.53%第三位ニ居リ、組合基督教會ノ 9.27%ハリスト正教ノ 9.14%第四位ヲ爲シ、浸禮教會ノ 4.74%救世軍ノ 3.00%第五位ヲ保チ、福音教會ノ 1.53%美普教會ノ 1.39%之ニ次キ、福音路帖ノ 0.84%最低ク、其ノ他ノ列記外ノ合計ハ 10.12%ナリ。又此ノ年末現在數ヲ前年ニ比スルニ總數ニ於テ 23箇所ヲ増シ、之ヲ宗派別ニ見レハ、増シタルモノ日本基督教會、9箇所多ク、日本メソヂスト教會ノ 6箇所、天主教、浸禮教會、福音路帖、救世軍ハ各 2箇所ヲ増シ、減シタルモノハ、ハリスト正教、組合基督教會、日本聖公會各 2箇所ヲ減シ、美普教會、福音教會ハ 1箇所ヲ減シタリ、而シテ列記外ノ教會ハ 8箇所ヲ増セリ。

【宗教宣布者】 大正五年末現在神道十三派ノ中大成教ヲ除ク各派ニ各 1人ノ管長アリ、大成教ニハ管長事務取扱者 2人ヲ置ケリ、神道各派ヲ合シテ教師 73,252人アリ、之ヲ前年ニ比スレハ 1,505人ヲ減セリ、此教師ヲ男女ニ別テハ男 91.71%、女 8.29%トス。生徒ハ 228人アルノミ。

佛教ニ於テハ大正五年末ニ管長現員 56人アリ、之ヲ宗派別ト爲セハ臨濟宗 14人、眞言宗 12人、眞宗 10人日蓮宗 9人、天台宗 3人淨土宗 2人其ノ他六宗各 1人トス。各宗ヲ通シテ教師 69,919人アリ、之ヲ前年ニ比スレハ 3,312人ヲ増セリ、此ノ教師ノ中各寺院ノ住職ヲ兼スル者必ス若干アルヘキモ今其ノ數ヲ詳ニセズ。教師ヲ男女ニ分テハ男 97.95%、女 2.05ニ當ル。佛教各派ニハ教師ノ外ニ非教師 48,498人アリ、是ハ布教ニ從事セサル僧侶ノ謂ヒニシテ、此ノ非教師中ニモ各宗寺院ノ住職タル者若干アルヘキモ今其ノ數ヲ詳ニセズ。此ノ非教師ヲ男女ニ分テハ男 92.38%、女 7.62%ニ當ル。佛教ノ生徒ハ各宗ヲ通シテ 8,818人アリ、之ヲ教師ノ員數ニ比スルニ其ノ 12.61%ニ當レリ。

神佛以外ノ宗教宣布者ハ大正五年末ニ於テ 2,439人アリ、之ヲ前年ニ比スレハ 58人ヲ増セリ。又之ヲ内外ニ別テハ本邦人 66.71%外國人 33.29%ニ當ル。

察

部長派出所 136所ナリ。而シテ之ヲ前年ニ比スルニ、警察署 1署ヲ増シ、警察分署ハ 3署ヲ減シ、巡查及巡查部長派出所ハ 91所ヲ増シ、巡查駐在所及巡查立番所ハ 76所ヲ増加セリ、又水上警察署ハ 1署ヲ減シ巡查及巡查部長派出所ハ 10所ヲ減シタリ、惟フニ警

察署ハ大正元年末最多ク、爾來漸次減少セシカ大正五年末 1署ヲ増シ、警察分署ハ明治三十四年末最多クシテ爾來漸次減少シ、巡查及巡查部長派出所ハ履消長アリテ最近ニ増加シ、巡查駐在所及巡查立番所ハ一昨年マテ著シク増加シ來リシカ、昨年即大正四年ハ同三年ニ比シ 32所ヲ減少シ、本年ハ上記ノ如ク増加セリ。此ノ官署ノ數ヲ大正五年ノ行政区劃數ニ對比スルニ 警察署及警察分署ヲ合セテ一郡市ニ付平均 1.70署餘ニ當リ、巡查及巡查部長派出所ハ一市平均 36.93所ニ當リ、巡查駐在所ハ一町村平均 1.16所ニ當レリ。

大正五年末現在ノ警察官中警部、警部補、巡查ノ員數ヲ擧ケレハ、警部 1,446人警部補 1,247人巡查 40,377人ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ警部ハ 19人減シ、警部補ハ 21人巡查ハ 522人ヲ増シタリ。此ノ巡查ノ員數ヲ年末ノ人口ニ比スルニ、巡查一人ニ對スル人口ハ 1,368人ニシテ、前年ノ同一比例 1,366人ニ比シ 2人ヲ増シタリ。此ノ巡查ニ對スル人口ノ比例ヲ地方別ニ見ルニ、東京府ノ人口 532人ニ對シ一巡查ノ割合最多キモノニシテ、大阪府ハ人口 872人ニ付一巡查アリ、神奈川縣ハ人口 852人ニ付、京都府ハ人口 1,028人ニ付各々一巡查アリ、尙少シク其ノ多キモノヲ順次排列スレハ、兵庫縣ハ人口 1,088人ニ付、長崎縣ハ人口 1,276人ニ付、北海道ハ人口 1,344人ニ付、愛知縣ハ人口 1,359人ニ付各一人ノ巡查アル比例ナリ。而シテ是等ハ全國ノ平均以上ニ巡查ノアル地ニシテ、即巡查配置ノ密ナル地方ナリ。之ニ反シテ巡查配置ノ稀疎ナル地方ヲ擧ケレハ沖繩縣ハ人口 2,231人ニ付一巡查アリ、鹿兒島縣ハ人口 2,020人ニ付、愛媛縣ハ人口 1,953人ニ付、茨城縣ハ人口 1,942人ニ付、熊本縣ハ人口 1,912人ニ付一巡查アル割合ナリ。

【檢擧及犯則者取扱】 大正五年中ニ檢擧シタル犯罪人並ニ取扱ヒタル諸犯則人員ノ總數ハ 822,311人ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ實ニ 67,228人ヲ増シタリ。此ノ中刑法犯者ハ 316,720人ニシテ、陸海軍刑法犯者ハ 387人、警察犯處罰令違犯者ハ 178,929人、諸條例諸規則違犯者ハ 59,702人、廳府縣ヨリ發シタル命令違犯者ハ 266,573人ナリ。今是等ノ各種分節比例ト爲セハ、刑法犯者ハ總數ノ 38.51%ニ當リ、前年ニ比シ實數 24,850人ヲ増シ、陸海軍刑法犯者ハ總數ノ 0.05%ニ當リ、前年ニ比シ 1人ヲ減シ、警察犯處罰令違犯者ハ 21.76%ニ當リ、前年ニ比シ 11,437人ヲ増シ、諸條例諸規則違犯者ハ 7.26%ニ當リ 前年ニ比シ、12,325人ヲ増シ、廳府縣ヨリ發シタル命令違犯者ハ 32.42%ニ當リ、前年ニ比シ 43,267人ヲ増シタリ。而シテ刑法犯中最多キヲ占ムルモノハ賭博及富籤ニ關スル罪ニシテ刑法犯總數ノ 25.78%ニ當リ、前年ニ比シ 13,020人ヲ増シ、次ハ竊盜ニシテ 25.59%ニ當リ、前年ニ比シ 是亦 7,912人ヲ増シ、之ニ次テ多キ詐欺及恐喝罪ハ 15.71%ニ當リ、前

年ヨリ 905人ヲ増シ、次ハ傷害罪ニシテ 6.01%ニ當リ前年ヨリ 1,000人多シ。

【竊盜】 大正五年中ニ取扱ヒタル竊盜ノ總件數ハ 300,932件ニシテ、之ヲ類別スレハ強盜 0.43%、竊盜 76.15%、拘摸0.98%、拐帶誑騙 22.44%ニ當ル。此ノ竊盜件數ヲ人口ニ比スルニ其ノ千ニ付 5.45%ニ當リ、此ノ係數ハ前年ニ比シテ 0.17ヲ増シタリ。是明治四十一年以來ノ高率ナリ。強盜件數ハ前年ヨリ甚ク減少シ、之ヲ類別スレハ家 72.51%、船 1.00%、人 26.49%ニ當レリ。竊盜件數ハ前年ヨリ増加スルコト 9,656件ニシテ、之ヲ類別スレハ家ノ屋内 67.68%、屋外 23.16% 船、1.20%、人 7.95%ナリ。而シテ一般ニ前年ヨリ其ノ率高クシテ、家ノ屋内、屋外ト人ノ遭遇セル竊盜ハ殊ニ甚シ。

竊盜ヲ其ノ遭遇シタル月ニ依リテ分チ、一年平均一日ノ竊盜千ニ付各月平均一日ノ竊盜比例ヲ算出シ見ルニ、明治三十二年以降大正五年ニ至ル十八年間ノ平均ニ於テハ三、四月ニ稍多ク六月最少ク、夫ヨリ漸次多キヲ加ヘ、十一月最多トナリ、十二月第二位ニアリ。即八月ヨリ十二月マテノ五箇月ハ平均以上ニシテ、他ノ七箇月ハ平均以下ナリ。然ルニ大正五年ノ竊盜月別ハ大ニ其ノ型ヲ異ニシ、平均以上ナルハ二月、三月、四月、五月、十一月、十二月ノ六箇月ニシテ此ノ中最高ナルハ十二月ナリ。平均以下ハ即一、六、八、九、十月ニシテ此ノ中最低ハ七月ナリ。先キノ十八年平均ニ比シ、大正五年ニ於ケル型ハ、三月ニ比較的高ク、十月ニ比較的低シ。斯ノ如キハ何等カ基ク所ノ社會的因由アリヤ、將タ偶然ノ結果ナリヤ、今其ノ原因ヲ詳ニセズ。次ニ大正五年ノ竊盜ヲ種類ニ依リ月別ニ觀察スルニ、竊盜ハ強盜全體ト同型ニシテ、強盜ハ少シク之ト異ナリ、平均以上ナルハ一月、二月、四月、八月、十月、十一月、十二月ニシテ、此ノ中最高ナルハ八月、次ハ十二月ナリ。最低ハ六月ニシテ次ハ五月ナリ。又拘摸ハ平均以上ノ月ハ一、二、三、四、五、十一月ノ六箇月ニシテ二月最高ク、四月、一月之ニ次キ、最低ハ六月ニシテ八月、七月之ニ次テ低シ、是等ノ現象モ之ヲ仔細ニ觀察スレハ 恐ラク偶然ナラサル特殊ノ社會的關係ニ基クモノナルヘキモ、今ハ唯事實ヲ呈露スルニ止メント欲ス。

【被殺害者】 大正五年中警察上取扱ヒタル被殺害人員ハ 2,344人ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 212人ヲ減シタリ。之ヲ前年マテノ五年平均 2,465ニ比スレハ 121人ノ増加ナリ。又之ヲ人口ニ比スルニ大正五年ハ其ノ百萬比例 42人ニ當レリ。又被殺害者ヲ其ノ殺害スルニ至レル原因ニ依リ分テハ、最多キモノハ爭論上又ハ一時ノ怒ニ因ルモノニシテ總數ノ 9.56%ヲ占メ、痴情又ハ嫉妬ニ因ルモノ之ニ次キ 7.89%、貧困ニ因ルモノ 3.07%、怨恨ニ因ルモノ 2.69%、利慾上ノ爲ニ因レモノ 2.69%等其ノ多キモノニ屬ス。

【災害死者】 大正五年中警察上取扱ヒタル災害其ノ他ノ事故ニテ死セシ人員ハ 16,156人ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 438人ヲ減シ、之ヲ前年マテノ五年平均ニ比スレハ 550人ヲ減シタリ。又之ヲ人口ニ比スルニ 大正五年ハ其ノ百萬ニ付 292人ニ當ル。此ノ死者中最多キハ過失ニ因リ汽車、電車等ニ觸レタル者ニシテ總數ノ 53.47%ヲ占メ、途中ニテノ發病之ニ次キ 8.54%、難船ノ 5.07%、鐵業ノ 3.66%等其ノ多キモノニ屬ス。

【自殺】 大正五年中警察上取扱ヒタル自殺者ハ 11,797人ニシテ、之ヲ男女ニ分テハ男 7,239人女 4,558人ナリ。之ヲ前年ニ比スルニ男ハ 700人女ハ 67人ヲ増セリ。又前年マテノ五年平均ナル男 7,110人女 4,225人ニ比スレハ、男 129人、女 333人ヲ増セリ。又之ヲ各性人口百萬ニ比スルニ男ハ 260人、女ハ 166人ニ當ル。試ニ此ノ比例數ヲ十年前ナル 明治三十九年ノ同一比例男 221人女 145人ニ比スレハ、男女共ニ増加シ、三十九年ノ百ニ對シ男ハ 117.4ニ當リ、女ハ同ク 114.3ニ當レリ。自殺者ヲ其ノ手段ニ依リテ分テ、各性ノ總數ニ對スル手段別ノ分節比例ヲ算スルニ、男女共ニ最多キハ縊死及入水ニシテ、之ニ次キテハ轢死ナリ。併シナカラ各手段ノ比例數ハ男女ノ間頗ル不同アリ、即縊死ハ男 56.38%ニシテ過半ヲ占ムレトモ、女ハ 38.31%ニシテ尙未タ半數ニ達セス。入水ハ男 19.56%ニシテ縊死ノ半ハニタニ達セサレトモ、女ハ 43.59%ニシテ寧ろ縊死ヨリ多ク。轢死ハ男 14.17%、女 10.27%、双物ヲ用ヒタルハ男 4.33%、女 3.11%、毒ヲ仰ケルハ男ハ 3.73%ナレトモ、女ハ双物ヲ用ヒタルヨリモ多ク 4.47%ナリ。統ニテノ自殺ハ最少ク男 1.83%、女 0.24%ナリ。自殺ノ手段ニ於テモ自ラ男女ノ別ノ截然タルモノアルヲ見ルヘシ。

明治三十二年以降大正五年ニ至ル十八年間ノ自殺者ヲ月別ト爲シ、一年平均一日ノ自殺者ニ付各月平均一日ノ自殺比例ヲ算出スレハ、自殺ハ夏季ニ多ク、冬季ニ少ク、七月ヲ頂前トセル急峻ナル山ヲ形成スルナリ。即四月乃至九月ノ六箇月ハ平均以上ニシテ、最高ノ七月ハ 1,273ニ當リ、最低ノ十二月ハ 761ニ當ル。唯茲ニ奇異ナル現象ハ、均シク高位ニハ在レトモ六月ハ五月七月ノ間ニ挿マレテ一段低ク、截痕狀ヲ呈スルコトニシテ、彼ノ雙蹄山テフ筑波山ノ形貌ニ似タリ。何故ニ斯カル截痕アルカ、所謂梅雨期ナル此ノ六月多雨ノ際ハ、自殺者ヲ少クスル何等カノ原因ノ働アルカ、兎モ角モ注意スヘキ現象ナリ。而シテ大正五年ノ自殺者ヲ月別ニ觀察スレハ、最高點カ七月ニアラスシテ五月、少シク夫ヨリモ高キト、一月ト九月ト比較的高キコトニシテ、六月ノ截痕アルモ、十二月ノ最低ナルモ、全ク十八年間ノ觀察ト異ナル所ナシ。

大正五年ノ各性自殺者ヲ年齢ニ依リテ別テ、各分節比例ヲ算出スレハ、十六歳未満者ハ男 1.88%女 1.67%ニシテ最少ク、十六歳

以上二十歳未満者ハ男 4.87%、女 10.55%ニシテ女ハ此ノ年齢ニ於テ既ニ稍多ク、二十歳以上三十歳未満者ハ男 23.53%女 26.39%ニシテ此ノ年齢ニ於テモ女ノ比例高ク、三十歳以上四十歳未満者ハ男 14.75%女 14.49%ニシテ此ノ年齢ヨリ女ノ自殺者減シテ男ノ比例高ク、四十歳以上五十歳未満者モ男高ク 13.32%ニシテ女ハ 1.11%、五十歳以上者ハ男 42.15%女 35.79%ニシテ男愈高ク、此ノ外年齢不詳者アリ、男ハ總數ノ 2.91%ニ當リ、女ハ同シク 1.25%ニ當ル。

大正五年ノ各性自殺者ヲ其ノ自殺ノ因由ニ依リテ分テ各分節比例ヲ算出スレハ、男女共ニ最多キモノハ精神錯亂ニシテ男 26.41%女 29.13%ヲ占メタリ、次ハ病苦ニ因ルモノ男 23.03%女 24.86%ニシテ女ハ斯カル苦惱ニモ耐エ能ハサルコト男ヨリモ多シ、活計ノ困窮又ハ薄命ヲ嘆キテ自殺セルモノ男ハ 7.34%女ハ 4.56%、男ハ生活ノ維持者タルコト女ヨリモ多キタケニ此ノ原因ニ嬰ハル、コト多シ、痴情又ハ嫉妬ニ因ルモノ男ハ 1.01%女ハ 2.13%女ニ此ノ原因ノ働キ強キハ寧ろ當然ナラン。前非ヲ悔ヒ又ハ慚愧ニ耐エス自殺セル者男 1.67%女 1.07%女ノ廉恥ヲ知ル者尠シト言フニアラサレトモ、所謂男子ラシキ自殺ノ男子ニ多キモ亦當然ナルヘシ。親族ノ不和ニ因ルモノ男 1.83%女 5.62%意志弱キ女ノ特質ハ茲ニモ現ハレタリ。罪ノ發覺ヲ懼レ又ハ刑ノ免レ難キ爲自殺セル者男 2.13%女 0.50%斯カル機會ニ遭遇スルコト男ハ女ヨリ遙ニ多カルヘシト想像セラル。將來ノ事ヲ苦慮セルニ因ル自殺男 2.06%女 2.11%ニシテ女ニ少シク多ク。商業等ノ爲損失又ハ負債償却ニ困ミテ自殺セル者男ハ 2.53%女ハ 0.22%ナリ、是亦家計ノ維持者トシテノ男ニ此ノ苦惱多カルヘキハ多言ヲ要セサル所ナラン。淫逸放蕩ノ末自殺ノ已ムナキニ陥レル者男 1.81%女 0.22%、斯カル原因カ女ニモ存スルハ寧ろ嘆スヘク、而モ男ノ八分一以上ナルハ驚クヘキ世態ナリト謂ハシ。雇主又ハ父兄等ノ懲戒又ハ譴責ニ因ル者男 0.55%女 0.88%、斯カル機會ニ遭遇スルコト男ニ多カルヘキモ尙且女ノ比例高キハ上來謂フ所ノ女ノ特質ノ然ラシムル所ナルヘシ。離縁ヲ悲ミテ自殺セル男 0.32%女 1.16%、男ニモ亦斯カル原因ニ依リテ自殺セル者アルハ注意スヘシ。夫又ハ子等ノ不行狀ヲ嘆キテ自殺セル者男 0.44%女 0.64%、女ハ男ヨリモ其ノ場合多キノミナラス是モ亦所謂女ラシキ自殺トヤ言ハシ。私通姪姪ヲ憂ヒテ自殺セルモノ男 0.01%女 1.32%アリ、老衰ノ身ノ不自由ヲ苦慮シテ自殺セル者男 1.53%女 2.04%、女ハ男ヨリモ高齡者多キハ從テ此ノ原因ノ働キ多キニ至ルナルヘシ。婚姻ヲ忌ミテ自殺者男 0.01%女ハ 0.64%、男ニ取リテハ是取テ重大ノ原因ナラサレトモ、女ニハ決シテ易々タル原因ニアラスト知ラレタリ。身體ノ不具ナルヲ嘆キテ自殺セル者男 0.30%、女 0.50%、形

貌ヲ尊フ女ニハ左モアルヘキナランカ。鬱憂ニ因ル自殺者男 1.24%女 1.60%、此ノ曖昧ナル原因モ亦女ノ多クカ陰鬱ナルタケ女ニ働グコト強キヲ當然視セラル、ナリ。親又ハ夫妻ノ病氣ヲ苦ニシテ自殺セル者男 0.17%女 0.42%、是亦女ニ多ク、親又ハ夫妻若クハ子等ノ死去ヲ歎キテ自殺セル者男 0.39%女 0.93%アリテ女ニ強ク、此ノ兩原因ノ死去ニ強クシテ病氣ニ弱キハ自ラ然ルヘク、而シテ共ニ女ニ強ク男ニ弱キモ其ノ女ラシク男ラシキ所ナルヘク見ラル、ナリ。以上列記以外ノ原因ニ依リテ自殺セル者男 15.89%女 17.69%アリテ、原因不詳ノ自殺者ハ男 9.21%女 4.83%アリ。

【警察上賞與及賞詞】 大正五年中ニ警察上ノ功ニ依リ金圓ヲ賞與セル人員 36,427人アリ、之ヲ前年ニ比シ 3,344人ヲ増シ、賞詞ヲ交付セル人員 4,481人アリ、是亦前年ニ比シ 225人ヲ増セリ。是等受賞者ヲ警察事務ニ従事スル者ト職務ノ爲ニアラサル者トニ分テハ、警察事務ニ従事スル者ハ賞與者 87.76%賞詞者 73.

XXVI. 裁判登記

【裁判所及司法職員】 大正五年末現在ノ裁判所數ハ 243箇所ニシテ之ヲ區別スレハ大審院 1、控訴院 7、地方裁判所 51、區裁判所 184トス。之ヲ前年ニ比スレハ根室地方裁判所廢止シ、旭川釧路ノ二地方裁判所設置セラレタルニ依リ、即地方裁判所 1箇所ヲ増シタリ。

大正五年末現在判事ハ 853人ニシテ前年ヨリ 35人ヲ増シ、檢事ハ 400人ニシテ同ク 21人ヲ増シ、司法官試補ハ 216人ニシテ同ク 1人ヲ増シ、書記長 8人増減ナク、書記 3,577人同ク 5人ヲ減シ、執達吏 88 同ク 11人ヲ増シ、辯護士 2,795人同ク 139人ヲ増シ、公證人 277人同ク 8人ヲ減シ、破産管財人 511人同ク 18人ヲ増シタリ。此ノ職員ヲ裁判所別ニ見レハ、大審院ノ判事 26人、檢事 6人、書記長 1人、書記 11人、控訴院ハ平均一院ニ付判事 10.6人、檢事 4.1人、書記長 1人、書記 9.7人ニ當リ、地方裁判所ハ平均一箇所ニ付判事 7.6人、檢事 2.9人、司法官試補 3.6人、書記 11.6人ニ當リ、區裁判所ハ平均一箇所ニ付判事 2人、檢事 1.2人、司法官試補 0.2人、書記 15.8人ニ當ル。又辯護士ハ一地方裁判所ニ付平均 54.8人アリ、公證人ハ同ク 5.4人、破産管財人ハ同ク 10.0人アリ、執達吏ハ一區裁判所ニ付平均 3.2人アリ。

甲. 民事裁判

【區裁判所】 大正五年中ニ於テ區裁判所ノ扱ヒタル民事事件數ハ總テ 912,302件ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 43,020件ヲ減シ、即前年ノ總件數ノ 4.5%ヲ減シタリ。又本年中ノ新受件數ハ 837,235件ニシテ、前年ノ新受件數ノ 5.3%ナル 48,810件ヲ減セリ。又終

69%アリ、職務ノ爲ニアラサル者ハ賞與者 12.24%賞詞者 26.31%アリ、而シテ一人平均賞與金額ハ警察事務ニ従事スル者 1圓 08錢餘、職務ノ爲ニアラサル者 1圓 52錢餘ニ當ル。賞與者及賞詞者ヲ合セテ其ノ受賞ノ事由別ニ分節比例ヲ算スレハ、警察事務ニ従事スル者ノ約 97.34%マテ 犯罰人ノ搜查檢舉又逮捕ニ由ルモノニシテ、職務ノ爲ニアラサル者ノ約 77.79%マテハ人命救助ニ由ルモノナリ。

【退還料、遺族扶助料等】 大正五年末現在ノ退還料受領者中 巡査 15,113人、警部補 792人、此ノ金額一人平均巡査 59圓 57錢弱、警部補 82圓 14錢弱、同遺族扶助料受領者巡査 3,362人警部補 65人、此ノ金額一人平均巡査ハ 23圓餘、警部補 33圓 80錢餘ナリ。又大正五年中ニ退職一時金療治料、給助料及弔祭料ヲ受ケタル者巡査ハ 4,150人警部補ハ 73人アリ。其ノ金額平均一人巡査ハ 26圓 73錢餘警部補ハ 85圓 41錢ニ當ル。

局件數ハ 867,372件ニシテ前年ニ比シ 42,441件少ク、前年ノ終局件數ノ 4.7%ヲ減セリ。此ノ終局件數ヲ區裁判所ニ屬スル判事ノ總員ニ比スルニ一人ニ付平均 2.357件ニ當リ、之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ 136件ヲ減セリ。新受件數ノ種類ニ就テ前年ト比較スルニ、和解事件ハ 694件ニシテ前年ヨリ少キコト 21件、督促事件ハ 395,029件ニシテ前年ヨリ 47,642件少ナク、第一審訴訟事件ハ 210,098件ニシテ是亦 12,560件少ナク、戶籍ニ關スル抗告ハ 54件ニシテ 1件少ナク、強制執行ハ 27,411件ニシテ 2,401件少ク、家賃分散ハ 482件ニシテ 46件多ク、非訟事件ハ 233,449件ニシテ 13.762件多ク、再審ハ 18件ニシテ 7件多シ。又此ノ新受件數ヲ種類別ニ分節比例ト爲セハ、和解事件 0.08%、督促事件 45.55%、第一審訴訟事件 24.23%、戶籍ニ關スル抗告 0.01%、強制執行 3.16%、家賃分散 0.03%、非訟事件 23.92%、再審 0.00%ニ當レリ。

【地方裁判所】 大正五年中ニ於テ地方裁判所ノ取扱ヒタル民事事件數ノ總テ 38,850件ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 2,268件多ク、即前年ノ件數ノ 5.8%ヲ増セリ、又本年中ノ新受件數ハ 27,085件ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 1,604件多ク、前年ノ件數ノ 6.3%ヲ増セリ、又本年ノ終局件數ハ 25,029件ニシテ、前年ヨリ 1,209件多ク、前年ノ件數ノ 4.9%ヲ増セリ。此ノ終局件數ヲ地方裁判所ニ屬スル判事ノ總員ニ比スルニ一人ニ付平均 67.6件ニ當リ、之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ 2.6件ヲ減セリ。又本年ノ新受件數ヲ事件ノ種類ニ依リテ分テ之ヲ前年ニ比スルニ、第一審訴訟事件ハ 16,747件ニシテ前年ヨリ 1,011件多ク、控訴事件ハ 7,302件ニシテ

同ク 633件多ク、抗告事件ハ 1,244件ニシテ同ク 253件少ク、破産事件ハ 163件ニシテ 47件少ク、非訟事件ハ 1,613件ニシテ同ク 358件多ク、再審ハ 11件ニシテ同ク 1件少シ、又此ノ新受件數ヲ種類ニ依リテ分チ之ヲ分節比例ト爲セハ、第一審訴訟事件 61.83%、控訴事件 26.96%、抗告事件 4.59%、破産事件 0.62%、非訟事件 5.96%、再審 0.04%ニ當ル。

【控訴院】 大正五年中ニ於テ控訴院ノ取扱ヒタル民事事件數ハ總テ 4,010件ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 133件ヲ少クシ、前年ノ件數ノ 3.85%ヲ減セリ、又本年中ノ新受件數ハ 2,163件ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 6件ヲ少クシ、前年ノ件數ノ 0.28%ヲ減セリ、又本年ノ終局件數ハ 2,159件ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 142件ヲ少クシ、之前年ノ件數ノ 6.17%ヲ減セリ。此ノ終局件數ヲ控訴院ニ屬スル判事ノ員數ニ比スルニ一人ニ付平均 92.2件ニ當リ前年ノ同一比例ニ比シ 1.9件ヲ減ス。又此ノ新受件數ヲ種類ニ依リテ分チ分節比例ヲ算出スレハ、控訴事件 89.88%、抗告事件 9.62%、特別訴訟 0.14%、再審 0.37%ニ當レリ。

【大審院】 大正五年中ニ於テ大審院ノ取扱ヒタル民事事件數ハ總テ 2,039件ニシテ、之ヲ前年ニ比スルニ 361件ヲ少クシ、即前年ノ件數ノ 15%ヲ減セリ、又本年中ノ新受件數ハ 1,597件ニシテ、前年ニ比シ 198件少ク、即前年ノ件數ノ 11%ヲ減シ、又終局件數ハ 1,536件ニシテ、前年ニ比シ 37件多ク、即前年ノ件數ノ 2.9%ヲ増セリ。此ノ終局件數ヲ大審院ニ屬スル判事ノ員數ニ比スルニ一人ニ付平均 50.2件ニ當リ、之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ 1.4件ヲ増セリ。又總件數ヲ事件ノ種類ニ依リテ分チ之ヲ前年ニ比スルニ、上告審ノ中通常訴訟ハ 1,494件ニシテ前年ヨリ 160件少ク、同證書訴訟及爲替訴訟ハ 7件ニシテ増減ナク、同特別訴訟ハ 6件ニシテ 2件ヲ減シ、同人事訴訟ハ 31件ニシテ増減ナク、上告審ノ全部ハ 1,538件ニシテ162件ヲ増シ、抗告審ハ 501件ニシテ 199ヲ減シタリ。又此ノ總件數ヲ種類別ト爲シ分節比例ヲ算スルニ、上告審 75.48%、抗告審 24.57%ニ當レリ。

次ニ民事裁判ヲ種類ニ依リ分チテ觀察セン。

【和解事件】 大正五年ノ和解事件ハ舊受 29件、新受 694件計 723件ニシテ、上記ノ如ク之ヲ前年ニ比シテモ少ク、更ニ既往ニ比スレハ著シク減少セルヲ見ル。即遠キ明治二十三年ニハ 39萬件ノ多キモノアリシカ、爾來年々大減少ヲ爲シ明治二十八年ニハ 12,004件ト爲リ、三十三年ニハ 4,000件ニ下リ、三十八年ニハ 1,000件ニマテ下リヌ。斯クノ如キ大減少ハ、要スルニ裁判所ヲ煩ハヌマテモナク 辯護士ニ依リテ和解ノ取結ハル、モノ多キヲ増スニ由ルモノナラン。本年中ノ和解事件ノ佳良ノ結果ヲ得タルハ 308件ニシテ總件數ノ 42.60%ニ當リ、前年ノ同一比例ヨリ低キコト

1.98%ナリ、別ニ取下又ハ却下 98件アリ、遂ニ不調ニ陥リタルハ 291件ニシテ總件數ノ 40.25%ニ當レリ。明治四十五年ヨリ大正五年ニ至ル五年間ノ和解事件ノ終局件數ヲ種類別ト爲シ、總數ニ對スル分節比例ヲ算出スルニ、人事 5.62%、土地建物船舶 31.21%、金錢證券 46.83%、米穀物品及雜事 16.34%ニ當ル。然ルニ大正五年ノモノ同一分節比例ヲ見レハ、人事 4.91%、土地建物船舶 31.79%、金錢證券 45.41%、米穀物品及雜事 14.88%ニ當リ、即人事ハ減少シ、金錢證券ハ増加セリ。是等ノ變化ヲ既往ノ各年ニ就テ見ルニ、人事ハ明治二十三年ニ 1.31%ノ少量ナリシカ、二十八年ニハ 8.93%ニ増シ、三十三年ハ 10.72%、三十八年ハ 11.08%ト漸次増加セシモ、四十年以後俄然トシテ減少シ、遂ニ上記ノ如ク下降セリ。土地建物船舶ハ明治二十三年ニハ僅ニ 4.99%ナリシカ。二十八年ニハ 17.21%ノ多量ト爲リ、三十三年ニハ 21.24%、三十八年ニハ 22.25%ニ増加シ、更ニ其ノ増加歩ヲ緩メス、最近ニハ上記ノ如キ高率ニ上リ、僅カナレトモ本年ノ五年平均ヲ超ヘタリ。金錢證券ハ明治二十三年ニハ 81.65%ノ多量ヲ占メタリシカ、二十八年ハ 53.02%、三十三年ハ 44.89%、三十八年ハ 43.36%ト遞減シ、而モ最近ニ至リテ再ヒ上昇シ來リ本年ノ最近五年平均ヲ超絶スルコト著シキモノヲ見ル。米穀物品及雜事ハ明治二十三年ニ 12.02%、二十八年ニ 20.84%、三十三年ニ 23.24%、三十八年ニ 23.31%ノ動搖アリテ上昇セシモ、近ク其ノ下降ヲ爲スニ至レルカ如シ。

以上分量上ノ動搖ト總數ノ増減トニ依リテ察スルニ、和解事件ハ嘗テ輕易ナル事ニモ裁判所ヲ煩ハセシモノカ、辯護士ノ和解等ニ由リテ其ノ數ヲ減シ、今ヤ難解ノ事件ノミ 裁判所ヲ煩ハスコト、ナリタルモノ、如シ。試ニ總件數ニ對スル和解不調ノ比例ヲ見、明治二十三年ハ 27.84%、二十八年ハ 34.95%、三十二年ハ 53.47%、三十八年ハ 54.85%ナルニ徴シ其ノ應ニ然ルヘキヲ想察セラル、ナリ、然ルニ最近ニ至リテ又不調件數ノ比例低下シタルコト上記ノ如シ、此ノ原因ハ那邊ニアルガ今ノ確ニ之ヲ知ル能ハスト雖、惟フニ世態ノ然ラシムル所ニシテ、事實トシテハ金錢證券ノ比例增高シ、人事ノ比例低下セルカ如キ、以テ其ノ原因ヲ考察スルニ足ルモノナキニアラサルナキカ。

【督促事件】 大正五年ニ取扱ヒタル督促事件ハ、舊受ナク、新受ノミ 395,029件ニシテ、此ノ中却下及取下 8件アリ、其ノ他ノ總テハ支拂命令ヲ發シタリ。此ノ支拂命令ニ對シ異議ノ申立ヲ爲シタルモノ 70,299件 (17.80%)アリ、又支拂命令ニ次テ執行命令ヲ發スルニ至リタルモノ 91,008件 (23.04%)アリ、此ノ他ノ過半即 59.16%ハ督促手續ニ依リテ債務ノ辨濟ヲ了シタルモノト見ルヘキカ。督促事件ハ之ヲ既往ニ比スルニ其ノ増加著シキモノアリ、十年前ナル明治三十九年ト比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレ

ハ 164.3ニ當リ、又二十年前ナル二十九年ニ比シ同一指數ヲ求ムレハ 267.3ニ當ル。而シテ之カ効果ヲ見ルニ、明治二十九年ニハ支拂命令ニ對シ異議ヲ申立タルモノ 15.58%、同執行命令ヲ發スルニ至リタルモノ 22.17%、三十九年ニハ異議ノ申立 17.42%、執行命令 22.56%、前年ハ異議ノ申立 17.4%、執行命令 22.95%アリタリ、即知ル大體ニ於テ各年略ホ同一ノ成績ヲ現ハスモノナルコトヲ。次ニ督促事件ノ目的物ナル種類ヲ大正五年ニ終ル五年平均ニ就テ見ルニ、一定ノ金額ニ係ルモノ 98.74%、代替物ニ係ルモノ 1.24%、有價證券ニ係ルモノ 0.02%ニ當リ、之ヲ大正五年ノモノニ就テ見ルニ、一定ノ金額 98.84%、代替物 1.14%、有價證券 0.02%ナリ、更ニ此ノ比例ヲ既往ニ就テ求ムルニ、嘗テハ代替物又ハ有價證券ニ係ル督促事件ノ甚タ少ナカラサリシコトアリタレトモ、漸次其ノ數ヲ減シテ今日ニ至レルモノ、如ク、即是代替物又ハ有價證券カ漸ク督促事件ノ目的物ヲササルニ至レルニモ由レトモ、又上記ノ如キ督促事件ノ著シキ増加カ一定ノ金額ノ辨濟ヲ督促手續ニ依リテ督促スル者ノ増加セルニ由ルニ基クモノナルヤ明カナリ。

【訴訟事件】 大正五年中ノ第一審訴訟事件ノ總件數ハ、區裁判所 246,949件、地方裁判所 24,629件、計 271,578件ニシテ、之ヲ前年ニ比スルニ區裁判所ハ 8,116件ヲ減シ、地方裁判所ハ 1,227件ヲ増セリ、故ニ第一審訴訟ノ總數ハ前年ヨリ少キコト 6,889件ナリ。又本年中新受ノ總數ハ區裁判所 210,098件ニシテ前年ヨリ 12,569件少ク、地方裁判所ハ 16,747件ニシテ前年ヨリ 1,011件多シ、故ニ新受總數ハ總數 226,845件ニシテ前年ヨリ 11,549件ヲ減シタリ。此ノ新受件數ノ多少ヲ既往ニ比スルニ、一張一弛高低不同ナレトモ區裁判所地方裁判所共ニ概シテ増加セリ。即區裁判所ニ於テハ明治二十三年ハ甚タ少ナカリシモ、翌二十四年ヨリ増加シ、二十七年マテ稍多ク、二十八年ニ俄然減少シ、三十年ヨリ再ヒ増加シ三十六年ニ高點ニ達シ、三十七年ヨリ下リテ四十年ニハ二十八年ト略同位ト爲リ、四十一年ヨリ又上リテ大正三年ハ三十六年ノ高位ヨリモ高ク、昨年ハ嘗テ見サル多數ニ上リタルモ、本年ハ少シク下レリ。又地方裁判所ニ於テハ、明治四十年マテハ大體ニ於テ區裁判所ト高低ノ趨勢ヲ共ニシタレトモ、唯其ノ弛張區裁判所ノ如ク明瞭ナラス、又區裁判所ト其ノ高點又ハ低點ノ一二年前後スルモノアルノミナリシカ、四十一年以後ハ大正元年マテ稍増加シ、夫ヨリ減少シテ昨年ニ至リ、本年ハ少シク増加セリ。更ニ明治二十四年以降各年ノ新受件數ヲ人口一萬比例ト爲シテ比較スレハ、明治二十四年ハ區裁判所 39.35、地方裁判所 4.43、二十八年ハ區裁判所 28.45、地方裁判所 3.77、三十三年ハ區裁判所 30.90、地方裁判所 6.37、三十八年ハ區裁判所 30.11、地方裁判所 4.26、四十三年ハ區裁判所 28.94、地方裁判所 3.96、大正三年ハ區裁判所 38.32、

地方裁判所 2.91、大正四年ハ區裁判所 40.86、地方裁判所 2.89、而シテ本年ハ區裁判所 38.04、地方裁判所 3.03ニ當レリ。是等訴訟ノ多少ハ一面ニ於テ時ノ社會的事情ノ反映ナリトモ見ルヘク、嘗テ訴訟ノ繁盛シナリシ時代アリ、日清戰時ニ於テ一頓挫シ、爾來再ヒ上昇シテ盛時アリ、日露戰後再ヒ頓挫シ、今ヤ又上昇シテ其ノ盛ヲ來サントス、是果シテ喜フヘキヤ否ヤ。

第一審訴訟事件ヲ種類シ、大正五年ニ終ル五年平均ニ依リテ、總數ニ對スル分節比例ヲ算出シ見ルニ、區裁判所ニ於テハ通常訴訟 67.57%、證書訴訟及爲替訴訟 1.66%、公示催告事件 0.76%、假差押及假處分 29.08%、裁判所ニ繫屬シタル訴訟外ノ申立 0.94%ニ當リ、地方裁判所ニ於テハ通常訴訟 64.84%、證書訴訟及爲替訴訟 5.52%、假差押及假處分 11.67%、特別訴訟 0.00%、人事訴訟 17.97%ニ當ル。又此ノ分節比例ヲ大正五年ノモノニ就テ算スルニ、區裁判所ニ於テハ通常訴訟 71.59%、證書訴訟及爲替訴訟 1.92%、公示催告 0.65%、假差押及假處分 25.03%、裁判所ニ繫屬シタル訴訟外ノ申立 0.81%ニ當リ、地方裁判所ハ通常訴訟 63.28%、證書訴訟及爲替訴訟 5.51%、假差押及假處分 10.92%、特別訴訟 0.00%、人事訴訟 20.29%ニ當レリ。通常訴訟ハ區裁判所ニ於テモ地方裁判所ニ於テモ明治三十八九年ニ大ニ減少セシカ、區裁判所ハ近時著シク其ノ數ヲ増シ、本年モ亦近キ五年平均ヲ超絶スルコト大ナリ。地方裁判所ハ一張一弛シ近ク其ノ數ヲ減シ、本年ハ近キ五年平均ヨリ低シ。證書訴訟及爲替訴訟モ亦明治三十九年ニ俄然トシテ減少セシカ、最近ニ至リテ區裁判所モ地方裁判所モ共ニ著シク増加セリ。人事訴訟モ一時ハ減少セシカ近年漸ク其ノ數ヲ増加セリ。

大正五年中ノ第一審訴訟事件ノ終局事件數ハ區裁判所 269,572件、地方裁判所 16,194件ナリ。之ヲ總件數ニ比スルニ區裁判所ハ其ノ 84.83%ニ當リ、地方裁判所ハ 63.75%ニ當レリ。之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ區裁判所ハ 0.70%、地方裁判所ハ 0.59%ヲ減セリ。此ノ終局件數ヲ結果ノ種類ニ依リテ分チ分節比例ヲ算出スルニ、區裁判所ハ關席判決 21.52%、拋棄認諾ニ基ク判決 0.33%、其ノ他ノ終局判決 12.61%、取下 23.39%、和解 8.92%、訴訟差戻 0.02%、其ノ他ノ結果 33.21%ニ當リ、地方裁判所ハ關席判決 13.48%、拋棄認諾ニ基ク判決 0.21%、其ノ他ノ終局判決 36.87%、取下 29.17%、和解 3.14%、訴訟差戻 0.04%、其ノ他ノ結果 17.08%ニ當レリ。

大正五年ノ第一審訴訟事件ノ新受件數中金錢又ハ價額ニ見積リ得ヘキモノノ金額ニ依リテ分チ其ノ總數ニ對スル分節比例ヲ算出スレハ、區裁判所ハ十圓マテ 14.17%、十圓以上五十圓マテ 43.86%、五十圓以上百圓マテ 20.21%、百圓以上五百圓マテ 21.40%、五百圓以上千圓マテ 0.23%、千圓以上一萬圓マテ 0.12%、一萬圓以上 0.00%ニ當リ、地方裁判所ハ百圓マテ 0.78%、百圓以上五百圓マ

テ0.82%、五百圓以上千圓マテ45.78%、千圓以上一萬圓マテ47.78%、一萬圓以上4.84%ニ當ル。區裁判所ト地方裁判所トニ於テ金額ニ大差アルハ素ヨリ其ノ所ナリ。而シテ其ノ金額及見積リ價額ノ積算ヲ見ルニ、區裁判所ハ12,394,795圓ニシテ地方裁判所ハ33,382,317圓ナリ、兩者共ニ此ノ金額ハ増額シ來レルモノニシテ、區裁判所ハ十年前ナル明治三十九年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ304.0ニ當リ、地方裁判所ハ同指數196.8ニ當ル、即僅ニ十年間ニシテ區裁判所ハ三倍、地方裁判所ハ將ニ二倍ナラントス、斯ク區裁判所ノ増額カ地方裁判所ニ超過スル所以ノモノハ、明治三十八年以來追次改正セル區裁判所裁判權限ノ擴張ニ歸スヘク、而シテ此ノ増額カ何レノ階級ニ於テ來レルカ、之ヲ金額別件數ノ明治三十九年ニ對スル大正五年ノ指數ヲ算出シ見ルニ、區裁判所ノ十圓マテハ140.4、十圓以上五十圓マテハ171.4、五十圓以上百圓マテハ192.0ニ當リ、百圓以上ハ裁判權限ノ擴張ニ據ルカ故ニ百圓以下ト同一視シ能ハサレトモ、假ニ之ヲ舉クレハ百圓以上五百圓マテハ339.6、五百圓以上千圓マテハ289.1、千圓以上一萬圓マテハ247.8、一萬圓以上66.7ニ當リ、又地方裁判所ニ於テハ五百圓マテハ裁判權ノ變更ニ依リ當然減少スヘキモノナレトモ是亦假ニ全體ノ指數ヲ求ムレハ百圓マテハ52.8、百圓以上五百圓マテハ1.4、五百圓以上千圓マテハ193.0、千圓以上一萬圓マテハ194.6、一萬圓以上ハ201.7ニ當ル。即知ル區裁判所ニ於ケル百圓以上ハ措テ論セス、百圓以下ニ於テモ金額高キモノハ高キモノホト其ノ指數高ク、地方裁判所モ五百圓以下ハ措テ問ハス、五百圓以上ハ金額ノ高キハ高キホト指數ノ增高著シ、是總テ總金額ノ増額シタル原因ノ一ニシテ、此ノ事實ハ即以テ本邦一般社會ノ經濟事情ノ推移ヲ想察スルノ料ト爲スヘシ。

大正五年ノ終局件數ニ依リテ第一審訴訟事件ノ種類ヲ見ルニ。區裁判所ニ於テハ土地1.70%、建物及船舶2.07%、金錢56.69%、米穀0.93%、物品1.33%、證券0.30%、雜事36.98%ニ當リ、地方裁判所ニ於テハ人事25.08%、土地8.15%、建物及船舶1.68%、金錢38.59%、米穀0.12%、物品0.93%、證券0.88%、雜事24.60%ニ當ル。即區裁判所ニ於テモ地方裁判所ニ於テモ金錢ハ係争物トシテ大部分ヲ占メ、之ニ次クモノハ雜事ニシテ、地方裁判所ニ於テハ人事訴訟亦輕カラズ、是等係争物ノ推移ヲ知ランカ爲區裁判所ト地方裁判所トヲ通シ、各種類ノ明治三十九年ノ百ニ對スル大正五年ノ指數ヲ求ムレハ、人事ハ131.4、土地ハ111.1、建物及船舶ハ161.7、金錢ハ188.1、米穀ハ70.2、物品ハ112.4、證券ハ116.5、雜事ハ119.0ニ當リ、而シテ總數ハ149.1ニ當レリ。故ニ各種類中増加ノ平均以上ナルハ金錢ト建物及船舶アルノミ、人事ハ平均ニ近ケレトモ、其ノ他ハ平均ヲ距ツルコト遠ク、米穀ハ大ニ平均ヨ

リ下リテ減少セリ、斯ノ如ク金錢ノ係争益多キヲ加ヘントスル所以ノモノハ、即商取引ノ頻繁ナルニ歸スヘク、以テ現下ノ世態ヲ窺フニ足ルモノアリト爲サシム。

【上訴】 次ニ上訴ニ就テ之ヲ順次ニ觀察スヘシ。大正五年中ニ區裁判所カ取扱ヒタル戶籍ニ關スル抗告事件ヲ舉クレハ、總件數54件アリ、此ノ中却下シタルモノ3件(5.56%)、市町村長ニ相當ノ處分ヲ命シタルモノ6件(11.11%)アリ。之ヲ前年ニ比スルニ總件數35件ヲ減シ、却下ノ比例29.98%ヲ増シ、處分ヲ命シタル比例23.72%ヲ減シタリ。

大正五年中ニ地方裁判所ニ於テ取扱ヒタル控訴總件數ハ10,595件アリ、此ノ中新受件數ハ7,302件ニシテ、之ヲ本年中ニ區裁判所カ第一審訴訟ニ下シタル判決總數72,217件ニ比スレハ、其ノ19.1%ニ當ル、若シ夫十年前ナル明治三十九年ノ同一比例ヲ求ムレハ13.67%ニ當リ、本年ハ夫ヨリ低キコト3.56%ナリ。而シテ地方裁判所カ此ノ控訴ニ下シタル判決ハ棄却3,392件、廢棄1,320件ニシテ、之ヲ總件數ニ比スレハ棄却32.01%、廢棄12.46%ナリ。又控訴院ニ於テ取扱ヒタル控訴總件數ハ3,737件アリ、其ノ新受件數ハ1,944件ニシテ之ヲ本年中ニ地方裁判所カ第一審訴訟ニ下シタル判決總數8,159件ニ比スレハ其ノ23.74%ニ當ル、之ヲ十年前ナル明治三十九年ノ同一比例28.36%ニ比スレハ、本年ハ4.62%ヲ低下セリ、而シテ控訴院カ之ニ下シタル判決ハ棄却873件、廢棄444件ニシテ、之ヲ總件數ニ比スレハ棄却23.36%、廢棄11.88%ナリ。

大正五年中ニ大審院ニ於テ取扱ヒタル上告總件數ハ2,039件アリ、其ノ中新受件數ハ1,597件ニシテ之ヲ地方裁判所及控訴院ノ控訴審ニ下シタル判決總數6,029件ニ比スルニ其ノ26.49%ニ當リ、之ヲ十年前ナル明治三十九年ノ地方裁判所及控訴院ノ控訴審ニ下シタル判決總數ニ對スル控訴院及大審院ノ上告新受件數ノ比例2.244%ニ比スレハ、本年ノ上告比例ハ4.05%高シ。而シテ此ノ上告審ノ結果ハ棄却74.50%、破棄13.86%取下11.64%ナリ。

大正五年中ニ地方裁判所ニ於テ取扱ヒタル抗告總件數ハ1,413件ニシテ中新受件數ハ1,244件ナリ。此ノ新受件數ヲ十年前ナル明治三十九年ニ比スルニ389件ヲ減ス。又控訴院ニ於テ取扱ヒタル抗告總件數ハ252件ニシテ中新受件數ハ208件ナリ。此ノ新受件數ヲ十年前ナル明治三十九年ニ比スルニ520件ヲ減シ、三分ノ一以下ナリ。又大審院ニ於テ取扱ヒタル抗告總件數ハ591件ニシテ十年前ナル明治三十九年ニ比スレハ256件ヲ増シ二倍以上ニ上レリ。斯ノ如ク控訴院ト大審院トノ抗告件數ノ相違ハ制度ノ變更ニ據ルモノ、如シ。

【強制執行】 大正五年中ニ區裁判所ニ於テ取扱ヒタル強制執行ノ總件數ハ39,625件ニシテ中新受件數ハ27,411件ナリ。此ノ

新受件數ヲ十年前ナル明治三十九年ニ比スルニ9,783件ヲ増シタリ。又本年中ニ執行シタル終局件數ハ27,589件ニシテ此ノ債權額ハ20,757,150圓ナリ。即一件ノ平均債權額752圓餘ニ當ル。之ヲ十年前ノ明治三十九年ノ同一平均額794圓ニ比スレハ40圓餘ヲ減セリ。大正五年中ニ執達吏ノ取扱ヒタル有體動産ニ對スル強制執行ノ終局件數ハ192,747件ニシテ、之ヲ明治三十九年ニ比スレハ87,830件ヲ増シタリ。又此ノ債權總額ハ32,894,840圓ニシテ一件ノ平均額171圓ニ當リ、明治三十九年ノ同平均額164圓ニ比スレハ17圓ノ増ナリ。

【家資分散】 大正五年中ニ區裁判所ニ於テ家資分散ノ宣告ヲ爲シタルモノ482件アリ、之ヲ十年前ナル明治三十九年ニ比スルニ5件ヲ減シタルノミニシテ殆ト同數ナリ。此ノ債權總額ハ29,042圓ニシテ、一件平均額476圓餘ニ當リ、之ヲ明治三十九年ノ同平均額664圓ニ比スレハ188圓ヲ少クシタリ。又本年中復權ノ申立ヲ爲シ許可ヲ與ヘラレタル者85件アリ、之ヲ宣告件數ニ比スレハ其ノ17.84%ニ當レリ。

【破産宣告】 大正五年中地方裁判所ニ於ケル破産宣告總件數532件アリ、此ノ中宣告ヲ爲シタルモノ168件ニシテ之ヲ十年前ナル明治三十九年ニ比スルニ83件ヲ増シ即倍セリ。此ノ破産者ヲ種別スレハ個人80.75%、會社19.25%ニ當リ、之ヲ明治三十九年ノ個人83.81%、會社16.19%ニ比シ會社ノ率少シク高マレリ。又其ノ終局件數ヲ種別スレハ終局計算ニ據ルモノ42.86%、協商契約ニ據ルモノ3.73%、其ノ他ノ方法ニ據ルモノ53.41%ニ當ル。

【非訟事件】 大正五年中區裁判所ニ於ケル非訟事件ノ總數ハ238,890件ニシテ、此ノ中新受件數ハ233,449件ナリ、此ノ新受件數ヲ十年前ナル明治三十九年ニ比スルニ60,955件ヲ増セリ、又同年中地方裁判所ニ於ケル非訟事件ノ總數ハ1,668件ニシテ此ノ新受件數ハ1,613件ナリ、此ノ新受件數ヲ十年前ナル明治三十九年ニ比スルニ1,147件ヲ増セリ。本年中區裁判所ニ於ケル非訟事件ノ終局件數ヲ種別スレハ、隱居、廢家、子ノ懲戒、家督相人及親族會ニ關スル事件23.47%、相續ノ承認及拋棄ニ關スル事件1.63%、戶籍及身分登記ニ關スル事件19.31%、其ノ他ノ事件52.59%ニ當ル。

乙、刑事裁判

【區裁判所】 大正五年中ニ區裁判所ニ於テ取扱ヒタル第一審刑事事件ハ106,306件ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ1,107件ヲ減シ、五年前ナル明治四十四年ニ比較スレハ18,232件ヲ増シタリ。又此ノ件數ヲ區裁判所ニ屬スル判檢事ノ總員ニ比スルニ判事一人ニ付平均289.0件檢事一人ニ付同495.7件ニ當リ、之ヲ前年ノ同一比例ニ比スレハ判事ハ4.4件ヲ減シ、檢事ハ2.7件ヲ増シタリ。

【地方裁判所】 大正五年中ニ地方裁判所ニ於テ取扱ヒタル

刑事事件ハ第一審7,811件、控訴審9,878件、抗告審13件ニシテ之ヲ前年ニ比スルニ第一審ハ599件ヲ減シ、控訴審ハ633件ヲ増シ、抗告審ハ2件ヲ減シタリ。又之ヲ五年前ナル明治四十四年ニ比スルニ第一審ハ33,019件ヲ減シ、控訴審ハ3,974件ヲ増シ、抗告審ハ16件ヲ減シタリ、此ノ各審ノ總件數ヲ地方裁判所ニ屬スル判檢事ノ總員ニ比スルニ、判事一人ニ付46.0件檢事一人ニ付119.6件ニ當リ、之ヲ前年ニ比シ判事ハ4.1件、檢事18.7件ヲ減セリ。

【控訴院】 大正五年中ニ控訴院ニ於テ取扱ヒタル刑事事件ノ總數ハ3,330件ニシテ、之ヲ區分スレハ控訴審99.01%ヲ占メ、0.99%ノミ抗告審ナリ、此總件數ヲ前年ニ比スルニ、191件ヲ減シ、五年前ナル明治四十四年ニ比スルニ、7,311件ヲ減シタリ、斯ノ如キ減少ハ地方裁判所及區裁判所ノ裁判權擴張ニ由ルモノニシテ區裁判所ノ第一審件數増加ト共ニ地方裁判所ノ第一審件數ハ減少シ、地方裁判所控訴審件數ノ増加ト共ニ控訴院ノ控訴審件數ハ減少セリ。又控訴院ニ於テハ大正三年以降上告審ノ裁判權ナキニ至リタルニ由リテ其ノ總件數ヲ減ズルコト大ナリ、而シテ大正五年ノ總件數ヲ控訴院ニ屬スル判檢事ノ總員ニ比スルニ、判事一人ニ付平均45件、檢事一人ニ付平均114.8件ニ當リ、之ヲ前年ノ同一比例、判事47.6件、檢事150.4件ニ比スレハ、判事2.6件、檢事15.6件ノ減ニ當レリ。

【大審院】 大正五年中ニ大審院ニ於テ取扱ヒタル刑事事件ノ總數ハ3,470件ニシテ、之ヲ區分スレハ上告審98.56%、抗告審0.37%、再審1.07%ナリ、此ノ總件數ヲ前年ニ比スルニ520件ヲ減シ五年前ナル明治四十四年ニ比スルニ、48件ヲ増シタリ、是控訴院ノ上告審ナキニ至リタル以降大審院ニ於テ増加ヲ見タルニ由ルナリ。大正五年ノ總件數ヲ大審院ニ屬スル判檢事ノ總員ニ比スルニ、判事一人ニ付平均133.5件、檢事一人ニ付平均578.3件ニ當リ、之ヲ前年ノ同一比例、判事153.5件、檢事570.0件ニ比シ、判事20件減ジ檢事8.3件ヲ増シタルニ當ル。

次ニ刑事事件ノ各區分ニ就テ概説セン。

【捜査】 大正五年中ノ犯罪捜査件數ハ267,144件ニシテ、其ノ中起訴39.17%、不起訴60.83%ニシテ、又不起訴ノ分節比例ハ證據不十分25.12%、起訴猶豫46.69%、其ノ他28.19%ナリ、此ノ捜査總件數ヲ前年ニ比スルニ、14,983件ヲ増シ、之ヲ五年前ナル明治四十四年ニ比スレハ、42,545件ヲ増シタリ、又捜査總件數中ノ起訴比例ヲ前年ニ比スルニ、1.81%ヲ減シ、五年前ニ比スレハ、14.61%ヲ減シタリ。

【豫審】 大正五年中ノ豫審終結被告人ノ總數9,829人ニシテ其ノ中免訴7.70%、公判ニ付シタル者92.30%ナリ、此ノ免訴ノ中90.62%ハ證據不十分ニシテ、9.38%ハ其ノ他トス。豫審終結總數

前年ニ比スルニ、8,053人ヲ増シ、又之ヲ五年前ナル明治四十四年ニ比スルニ、9,351人ヲ減シタリ、是近年輕罪ト認ムルモノニ對シ豫審ヲ求メ直ニ起訴スルモノ漸ク多キヲ加ヘ、殊ニ刑事略式手續ノ施行以來豫審ヲ求メサルモノ一層多キニ至リタルニ由ルナリ、又豫審終結總數中公判ニ付スル者ノ比例ヲ前年ニ比スルニ、5.64%ヲ増シ五年前ニ比シテハ 2.82%ヲ増シタリ。

【公判】 大正五年中ノ 刑事第一審總件數ハ 114,177件ニシテ、前年ニ比シ 1,706件ヲ減シ、五年前ナル明治四十四年ニ比シ 13,793件ヲ減シタリ、又新受件數ハ 105,450件ニシテ、前年ニ比シ 1,103件ヲ減シ、五年前ニ比シテハ 14,008件ヲ減シタリ、此ノ新受件數ヲ區別スレハ、刑法犯 57.04%ニシテ特別法犯 42.96%ニ當ル、又本年中ノ終局件數ハ 106,687件ニシテ、總件數ノ 93.44%ニ當ル、又本年中ノ被告人總數ハ男 148,952人、女 13,735人計 162,687人ニシテ、之カ男女ノ比例ハ男 91.56%、女 8.44%ニ當ル、此ノ男中 65.95%ハ刑法犯ニシテ 34.05%ハ特別法犯ニ屬シ、又女中 61.85%ハ刑法犯ニシテ 38.15%ハ特別法犯ナリ、本年終局シタル人員中 98.03%ハ有罪ニシテ、他ノ 1.97%ハ無罪、免訴若クハ管轄違、其ノ他ナリ、此ノ有罪比例ヲ前年ニ比スルニ、本年ハ 4.03%高ク、之ヲ犯罪ノ種類ニ依リテ算出スレハ、刑法犯ハ 98.00%ニシテ、特別法犯ハ 98.08%ニ當レリ。

【刑事略式事件】 大正五年中ニ受理シタル刑事略式事件被告人員 80,729人アリ、之ヲ分テハ刑法犯 45.44%ニシテ特別法犯 54.56%ナリ、此ノ略式手續ハ大正二年七月以降施行セラレタルモノニシテ、之ニ由リ複雑ナル手續ヲ省略シ、事ヲ敏活ナラシメタルハ頗ル時宜ニ適セリ、而シテ此ノ手續法ノ施行以後第一審刑事事件ノ減少ヲ見タルコト亦注意スヘキ所ナリトス、上記被告人ニ對シ罰金ヲ命シタル者 56,596件(總被告人ノ 71.26%)科料ヲ命シタル者 17,414件(同上 21.59%)アリ、此ノ命令ニ對シ正式裁判ノ申立ヲ爲シタル者 1,466人アリ、之ヲ分テハ刑法犯 51.98%ニシテ特別法犯 48.02%トス、而シテ此ノ正式裁判ノ終局件數ハ 1,466件ニシテ、中再ヒ罰金又ハ科料ニ處セラレタル者ハ 95.50%ナリ、又被告事件中手續法第三條ニ依リ略式命令ヲ爲スヲ得ス又ハ之ヲ爲スヲ相當トセスト爲シタルモノ 809件アリ、又第六條ニ依リ異議ノ申立ヲ爲シタルモノ 3,167件アリタリ、而シテ之ニ依リ爲シタル刑事第一審事件ハ 2,689件ニシテ其ノ被告人員ハ 4,189人ナリ、之ヲ種別スレハ、刑法犯 88.19%ニシテ特別法犯 61.81%ニ當ル、此ノ第一審ニ於テ有罪ノ決定ヲ與ヘラレタルモノハ終局人員ノ 90.26%ニ當レリ。

【違警罪即決事件】 大正五年中違警罪即決被告人員ハ 463,830人ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 46,447人ヲ増セリ、之ヲ種別ス

レハ、刑法犯 0.03%、特別法犯 65.20%、警察犯 34.77%ニ當ル、此ノ即決ニ依リ拘留ヲ命シタル者 12.37%、科料ヲ命シタル者 85.91%免除 1.72%ナリ、此ノ即決ニ服セス正式裁判ノ申立ヲナシタル者 1,130人アリ、其ノ裁判終局人員ニ對スル處罰人員ハ 68.32%トス。

【上訴】 大正五年中ノ 刑事控訴總件數ハ 13,175件ニシテ前年ニ比シ 450件ヲ増シ、五年前ナル明治四十四年ニ比シ 2,203件ヲ減シタリ、又新受件數ハ 12,096件ニシテ、前年ニ比シ 703件ヲ増シ五年前ニ比シ 1,669件ヲ減シタリ、此ノ新受件數ヲ控訴申立人ニ依リテ分テハ、檢事 4.46%、被告人 94.93%、其ノ他ノ關係人 0.61%ニ當ル、又本年中控訴終局件數ハ 11,933件ニシテ、總件數ノ 90.57%ニ當リ、此ノ終局件數中判決ヲ與ヘタルモノ 75.23%アリ、更ニ之ヲ分テハ原判決取消 37.88%、控訴棄却 62.12%ト爲ル。

大正五年中ノ 刑事上告件數ハ 3,420件ニシテ、之ヲ前年ニ比シ 494件ヲ減シ、五年前ナル明治四十四年ニ比シ 994件ヲ減シタリ、又新受件數ハ 3,692件ニシテ、之ヲ前年ニ比シ 320件ヲ減シ、五年前ニ比シ 832件ヲ減シタリ、此ノ新受件數ヲ上告申立人ニ依リ分テハ檢事 0.78%、被告人 97.83%、其ノ他ノ關係人 1.39%ニ當ル、又本年中上告終局件數ハ 3,022件ニシテ、總件數ノ 88.36%ニ當リ、此ノ終局件數中判決ヲ與ヘタルモノ 82.76%アリ、更ニ之ヲ分テハ原判決破毀 7.69%、上告棄却 92.40%ニ當ル。

次ニ犯罪ノ各種ニ就テ概説セン。

【刑法犯】 大正五年中ノ 刑法犯第一審有罪被告件數ハ 104,592件ニシテ、之ヲ罪名別ニ別テ分節比例ヲ算出スレハ、賭博及富籤ニ關スル罪最モ多ク 49.18%、竊盜罪ニ次キ 19.69%、詐欺及恐喝罪 7.84%、傷害罪 5.56%、横領罪 4.31%等其ノ多キモノニ屬ス、又此ノ第一審有罪被告件數ヲ各控訴院管内別ト爲シ分節比例ヲ算出スレハ、東京 29.63%、大阪 21.96%、名古屋 9.39%、廣島 1.39%、長崎 11.47%、宮城 7.56%、函館 8.60%ニ當ル。

大正五年中ノ 刑法犯被告人ノ總數 105,204人ニシテ、之ヲ男女ニ分テハ男 96,702人、女 8,502人ナリ、此ノ被告人ヲ罪名別ト爲シ其ノ最モ多キモノヨリ列擧スレハ、男ニ於テハ賭博及富籤ニ關スル罪最モ多ク、竊盜罪ニ次キ、其ノ他多キモノハ詐欺及恐喝罪、傷害罪、横領罪、放火罪、文書偽造罪、贓物ニ關スル罪、過失傷害罪、住居侵入罪、殺人罪、強盜罪等ノ順位ニ在リ、又女ニ於テハ最モ多キハ賭博及富籤ニ關スル罪ニシテ、放火罪ニ次キ、其ノ他多キモノハ竊盜罪、墮胎罪、詐欺及恐喝罪、過失傷害罪、横領罪、嬰兒殺罪、猥褻淫罪、贓物ニ關スル罪、放火罪、文書偽造罪等ノ順位ニ在リ、而シテ是等ノ被告人中男ノ總數ハ 第一審ニ於テ其ノ 89.14%ハ有罪 1.68%ハ無罪及免訴確定シ、控訴審ニ於テ 5.97%ハ有罪、0.71%ハ無罪及免訴確定シ、上告審ニ於テ 2.49%ハ有罪、0.01%ハ無罪及免

新確定セリ、又女ハ第一審ニ於テ 92.63%ハ有罪、1.54%ハ無罪及免訴確定シ、控訴審ニ於テ 4.08%ハ有罪、0.75%ハ無罪及免訴確定シ、上告審ニ於テ 0.99%ハ有罪、0.01%ハ無罪及免訴確定セリ、故ニ結局男ハ第一審ニ於テ 90.82%、控訴審ニ於テ 6.68%、上告審ニ於テ 2.50%確定シ、女ハ第一審ニ於テ 94.17%、控訴審ニ於テ 4.83%、上告審ニ於テ 1.00%確定セリ、而シテ男ハ總被告人ノ 97.60%ハ有罪、2.40%ハ無罪及免訴確定シ、女ハ 97.69%ハ有罪、2.31%ハ無罪及免訴確定セリ。

刑法犯有罪確定被告人ヲ各性人口一萬ニ比スルニ、男ハ 33.91人ハ 3.03、總數ハ 18.59ニ當ル、之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ、男ハ 2.21、女ハ 0.07、總數ハ 1.11低シ、此ノ人口一萬比例ニ依リテ主ナル罪名ヲ見ルニ、賭博及富籤ニ關スル罪ハ男ハ 16.74、女ハ 1.52、竊盜罪ハ男ハ 6.91、女ハ 0.37、詐欺及恐喝罪ハ男ハ 2.71、女ハ 0.0、傷害罪ハ男ハ 2.02、女ハ 0.04、横領罪ハ男ハ 1.53、女ハ 0.07、放火罪ハ男ハ 0.62、女ハ 0.41ニ當リ、尙女ニ比較的高キニテ擧ケレ墮胎罪ノ 0.15、過失傷害罪ノ 0.07、嬰兒殺罪ノ 0.06等ナリ。

次ニ刑法犯ノ有罪確定被告人ヲ刑名別ニ見ルニ、有期懲役最モ多ク總數ノ 46.56%ヲ占メ、罰金之ニ次キ 42.89%ニシテ科料又次キ 10.32%ナリ、死刑ハ 60人アリ前年ヨリ 29人ヲ増シ、無期懲役ハ 100人アリ前年ヨリ 26人ヲ増セリ、此ノ受刑被告人ヲ人口一萬ニ比スルニ、有期懲役ハ 8.66ニシテ前年ノ同一比例ヨリ 0.20低ク罰金ハ 7.97ニシテ前年ノ同上ヨリ 1.18高シ。

次ニ刑法犯ノ有罪確定被告人ニ就テ主ナル 罪名ト刑名トヲ結合シ見ルニ、賭博及富籤ニ關スル罪ハ有期懲役 13.55%、罰金 69.17%科料 17.28%ニシテ、竊盜罪ハ全部有期懲役ナリ、詐欺及恐喝罪ハ 0.22%ノ罰金ニシテ他ハ有期懲役ナリ、傷害罪ハ有期懲役 39.09%、罰金 43.65%、拘留 0.03%、科料 17.23%ニシテ、墮胎罪ハ全部有期懲役ナリ、横領罪ハ有期懲役 78.09%、罰金 7.05%、科料 14.86%ニシテ、強盜罪ハ死刑 5.08%、無期懲役 4.36%、有期懲役 90.56%等ナリ。

刑法犯第一審有罪被告人ニ就テ累犯加重、減輕及免除ヲ見ルニ初犯者及再犯加重ヲ爲サ、ル者ハ有罪被告人ノ 52.37%ニ當リ、之ヲ前年ニ比スレハ 2.21%ヲ減シ、再犯加重者ハ同 15.73%ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 1.25%ヲ増シ、減輕者ハ同 1.41%ニシテ前年ニ比シ 0.24%ヲ減シ、免除者ハ 0.00%ニシテ前年ニ比シ 0.02%ヲ減シタリ、而シテ累犯加重ニ係ル者ノ犯數ヲ見ルニ、其ノ總數ニ對シ再犯ハ 59.63%、三犯ハ 29.87%、四犯及四犯以上ハ 10.50%ニ當リ、又減輕者ヲ分テハ法律上ノ減輕ハ 35.88%ニシテ酌量減輕ハ 64.12%ナリ。

又刑法犯有罪被告人ニ對シ刑ノ執行猶豫ヲ言渡シタル者 6,435

人アリ、之ヲ有罪被告人ノ總數ニ比スルニ 6.27%ニ當ル、此ノ比例ヲ前年ニ比スレハ 0.70%ヲ増セリ、此ノ執行猶豫ノ期間ニ依リテ分テハ、一年以上二年マテ 0.71%、二年以上三年マテ 15.12%三年以上四年マテ 67.30%、四年以上五年マテ 16.86%ニ當ル、而シテ本年中執行猶豫ヲ取消シタル者 399人アリ、之ヲ前年ニ比スレハ 2人ヲ増セリ。

【特別法犯】 大正五年中ノ 特別法犯有罪確定被告人ノ總數 55,275人ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 5,966人ヲ減シタリ、試ニ罪名別ニ之ヲ比較スレハ、租稅及專賣ニ關スルモノ 6,768人、之ヲ前年ニ比シ 287人ヲ増シ、通信、運輸、電氣ニ關スルモノ 1,458人、之ヲ前年ニ比シ 62人ヲ減シ、商事、産業ニ關スルモノ 10,733人、之ヲ前年ニ比シ 536人ヲ増シ、衛生ニ關スルモノ 8,657人、之ヲ前年ニ比シ 582人ヲ増シ、警察、出版、著作、新聞紙ニ關スルモノ 8,372人、之ヲ前年ニ比シ 2,149人ヲ増シ、軍事ニ關スルモノ 8,737人、之ヲ前年ニ比シ 111人ヲ減シ、議員選舉及其ノ他ニ關スルモノ 10,550人、之ヲ前年ニ比シ 9,347人ヲ減シタリ、而シテ此ノ特別法犯有罪確定被告人ヲ男女ニ分テハ、男 90.65%ニシテ、女 9.35%ニ當リ、此ノ男女ノ各總數ニ對スル罪名別ノ分節比例ヲ算出スルニ、男ニ於テハ商事、産業ニ關スルモノ最モ多ク 20.70%ヲ占メ、議員選舉其他ニ關スルモノ之ニ次キ 20.53%、軍事ニ關スルモノ更ニ次キ 17.35%ヲ多シト爲シ、女ニ於テハ租稅、專賣ニ關スルモノ最モ多ク 33.82%、衛生ニ關スルモノ之ニ次キ 33.31%、警察、出版、著作、新聞紙ニ關スルモノ 17.21%等ヲ多シト爲ス。又此ノ特別法犯有罪確定被告人ヲ人口一萬ニ比スルニ、男ハ 18.00、女ハ 1.88、總數ハ 10.01ニ當リ、此ノ總數ニ於ケル比例ヲ罪名別ト爲セバ、租稅、專賣ニ關スルモノ 1.23、通信、運輸、電氣ニ關スルモノ 0.26、商事、産業ニ關スルモノ 1.94、衛生ニ關スルモノ 1.57、警察、出版、著作、新聞紙ニ關スルモノ 1.52、軍事ニ關スルモノ 1.58、議員選舉其ノ他ニ關スルモノ 1.91ニ當レリ。

特別法犯有罪確定被告人ヲ刑名別ニ分テハ、罰金最モ多ク 77.32%ヲ占メ前年ヨリ低キコト 3.94%ナリ、科料之ニ次キ 20.66%ニシテ前年ヨリ 3.62%高ク、有期懲役 2.24%ニシテ、前年ヨリ 0.03%低ク、有期禁錮 0.87%ニシテ前年ヨリ 0.10%高ク、拘留 0.9%ニシテ前年ヨリ 0.24%高シ。

特別法犯有罪確定被告人ニ刑ノ執行猶豫ヲ言渡シタル者 620人アリ、之ヲ有罪被告人ノ總數ニ比スルニ 1.12%ニ當ル、之ヲ期間ニ依リテ分テハ一年以上二年マテ 4.84%、二年以上三年マテ 26.13%、三年以上四年マテ 59.19%、四年以上五年マテ 9.84%ナリ、本年中刑ノ執行猶豫ヲ取消サレタル者 6人アリ。

次ニ刑法犯ノ有罪確定被告人ニ就テ犯罪ノ諸關係ヲ見ント欲ス。

【犯罪地】 大正五年ノ刑法犯有罪確定被告人ヲ其ノ犯罪地ニ依リテ分テ、其ノ地方ノ人口萬ニ對スル比例ヲ算出スレハ、其ノ最モ高キヲ北海道ノ 43.43ト爲シ、之ニ次クハ近畿ノ 26.48ニシテ關東ノ 22.96、中國ノ 16.48、四國ノ 16.46、東海ノ 16.41ヲ其ノ多キモノト爲シ、東山ノ 14.48、九州ノ 13.58、東北ノ 13.12、北陸ノ 11.12、沖繩ノ 6.97ト次第シテ低シ、又之ヲ各性人口ニ比例シ見ルニ男ハ略ホ總數ト順位ヲ同フシ、最高ノ北海道ハ 71.83ニシテ最低ノ沖繩ハ 13.14ニ當レリ、女ハ大ニ趣キヲ異ニシ北海道 11.75近畿 4.58、四國 3.90、中國 3.07、東北 2.08、關東 2.39、東山 2.11、九州 2.06、東海 1.97、北陸 1.66、沖繩 1.13ノ順位ヲ取レリ、之ヲ男ノ上記最高最低及其ノ中間ナル近畿 47.17、關東 43.12、東海 30.69、中國 29.59、四國 28.85、東山 26.94、九州 25.16、東北 23.45、北陸 20.76ニ對比スレハ地方ト男女ノ犯罪トノ關係歴々トシテ見ルヘキモノアリ。次ニ主ナル罪名ニ就テ地方別ノ關係ヲ知ランカ爲メ總數ニ對スル罪名別ノ分節比例ヲ算出シ、其ノ分節比例ヲ比較スレハ賭博及富籤ニ關スル罪ハ近畿最モ多ク、北海道ニ次キ、北陸、東海トハ伯仲ノ間ニアリテ他ハ略ホ同順位ニアリ、唯沖繩ハ著シク少シ竊盜罪ハ沖繩頗ル多ク、關東、九州中國ニ次キ、他ハ殆ト同位ニアリテ少キハ四國ト北海道ナリ、上叙犯罪ノ各地トモ其較差甚シカラサルハ其ノ犯罪ノ普遍ノ性質ノ然ラシムル所ニ由ルヘシ、強盜罪ノ最モ多キハ關東ナリ、之ニ次クハ東山、北海道ニシテ中國、北陸、四國ハ適ニ低シ、詐欺及恐喝罪ハ中國、沖繩最モ多ク、四國、九州ニ次キ、近畿最モ低クシテ北海道ハ其ノ上ニ在リ、殺人罪(嬰兒殺ヲ含ム)ハ九州最モ多ク、沖繩、東山ニ次キ、中國、四國ト次第シ北海道最モ少シ、傷害罪ハ沖繩最モ多ク、九州ニ次キ、北陸、近畿、東海ト次第ニ低ク關東最モ少シ、墮胎罪ハ東山頗ル多ク四國ニ次キ、東海又次キ、關東、東北ト次第シテ低ク、北海道最モ少シ、猥褻、姦淫、重婚罪ハ九州最モ多ク、之ニ次クハ關東、沖繩ニシテ北海道、近畿、中國ト次第シテ低ク他ハ殆ト同位ナリ、文書偽造罪ハ沖繩、四國頗ル多ク、東北、北陸ニ次キ、中國、東山又多ク、近畿最モ少シ、是等多少ノ順位ハ其ノ地方ノ事情ノ然ラシムルモノアルニ由ルヘキコト勿論ナレトモ、中ニハ都會ニ多カルヘク考ヘラル、犯罪ニシテ却テ都會人口ヲ含ムコト少キ地方ニ多キカ如キモノアリト雖モ、概シテ言ヘバ温暖ナル地方ニハ舊刑法ノ所謂身體ニ對スル罪最モ多ク、寒冷ナル地方ニハ風俗ニ關スル罪最モ多シ。

【犯罪原因】 刑事統計ニ掲記セル犯罪ノ原因ハ之ヲ三十五項ニ分類セリ、此ノ分類カ果シテ正鵠ヲ得タルモノナリヤ否ヤ、今之ヲ攷究スルニ違キヲ以テ總數ニ對スル各項ノ分節比例ヲ算出シ其ノ高キモノ數項ヲ抄記センカ、男ニ於テハ利慾最モ多ク 45.64

%ヲ占メ、竊盜、賭博、詐欺及恐喝等ニ此ノ原因ノ働キ最モ強シ、射倖之ニ次キ 13.57%ナリ、此ノ原因ハ殆ト總テ賭博ニ働ケリ、習癖ハ第三ニ居リ 12.91%ナリ、此ノ原因ハ竊盜、詐欺及恐喝ニ多ク働ク、第四ハ出來心ニシテ 9.13%アリ、此ノ原因モ亦賭博、竊盜、詐欺、横領等ニ働ケリ、第五ハ憤怒ニシテ 5.49%アリ、此ノ原因ハ傷害罪ニ最モ強ク働キ殺人罪ヲ胚胎スルニ至ル、第六ハ遊蕩ニシテ 3.22%ナリ、是亦竊盜、詐欺、横領ノ原因トシテ有力ナル働キヲ爲シ、貧困ハ第七ニ居リ 2.33%ナリ、是亦竊盜、詐欺、横領ニ働クコト強シ。次ニ女ニ於テモ利慾最モ大ニシテ 37.87%ヲ占メ其ノ働キハ男ト同様ニ竊盜、賭博、詐欺及恐喝ニ強ク、更ニ臙物及墮胎ノ原因トシテモ有力ナリ、次ハ射倖ナルコト男ト等シク 15.40%アリテ賭博ノ原因タルコト亦同様ナリ、第三ハ出來心ニシテ 15.38%アリ墮胎罪ヲ促スコト最モ強ク、賭博、竊盜ノ原因トシテモ有力ナリ、第四ハ習癖ニシテ 9.27%アリ、最モ強ク竊盜ノ原因トシテ、次ニ賭博ノ原因トシテ働ク、此ノ第三第四トカ男ト顛倒シテ現ハル、ハ亦女ノ思慮ノ淺薄ニ因スルモノ多キニ居ルヲ知ルベシ、第五貧困ハ 6.36%ニシテ竊盜ノ原因トシテ強ク、又嬰兒殺、墮胎、詐欺及恐喝ヲ促スモノ、如ク、第六ハ疎虞ニシテ 1.87%アリ、失火及過失傷害ノ原因ト爲リ、第七ハ憤怒 1.71%ニシテ傷害ノ原因ト爲スコト男ニ同シ、第八ハ虛榮ニシテ 0.99%アリ、主トシテ竊盜ノ原因ト爲リ第九ハ痴情ニシテ 0.92%アリ、猥褻、姦淫及嬰兒殺ノ原因ト爲リ働クカ如シ。

【年齢】 男ノ總數ニ對スル年齢別百分比(年齢不詳ヲ除ク)ヲ算出スレハ、二十歳未満者ハ 6.73%、二十歳以上三十歳者ハ 31.56%、三十歳以上四十歳者ハ 32.01%、四十歳以上五十歳者ハ 18.91%、五十歳以上六十歳者ハ 7.77%、六十歳以上者ハ 3.02%ニ當リ。又女ニ於テ二十歳未満者ハ 6.54%、二十歳以上三十歳者ハ 22.24%、三十歳以上四十歳者ハ 27.57%、四十歳以上五十歳者ハ 22.17%、五十歳以上六十歳者ハ 13.46%、六十歳以上者ハ 8.02%ニ當レリ、犯罪者ニ於ケル男女ト年齢トハ斯ノ如クニ大差アリ、二十歳未満者ニ於テハ男女共比例略ホ同様ナレトモ三十歳以上四十歳者ニ於テ男ハ著シク高ク此ノ年齢階級ヲ以テ最高ト爲シ女モ亦此ノ年齢階級ヲ以テ最高ト爲セドモ、之ヲ男ニ比スレハ低ク男ハ女ヲ超過スルコト大ナリ、四十歳以上五十歳者ハ男ニ於テハ大ニ低下シ其ノ盛時ノ半ハナラントスルニ女ハ尙依然トシテ高ク、五十歳以上六十歳者ハ男女共ニ下リ男ハ二十歳未満者ヨリ僅ニ高キノミナレトモ女ハ男ノ殆ト倍ニ近ク其ノ低下急ナラス、六十歳以上者ハ男ハ最低位ニ達シ盛時ノ約十分ノ一ニ過ギサレトモ、女ハ二十歳未満者ヨリ稍々高ク男ノ前階級ヨリ少シク高シ、是ニ由テ之ヲ觀レハ男ノ犯罪年齢ハ比較的短ク、二十歳以上四十歳迄ヲ盛時トシ、五十

歳迄ヲ亞盛時トスルニ、女ハ比較的長キ犯罪年齢ヲ有シ、男ノ亞盛時を即チ二十歳以上五十歳迄ヲ盛時ト爲シ、進テ六十歳迄ヲ亞盛時ト認ムヘキカ如シ、更ニ此觀察ヲ進メテ年齢ト罪名トノ結合ニ及ホスコトハ重要ノ探究ナレトモ、今ハ之ヲ他日ニ譲ルコト、セリ。

【配偶關係】 男ノ配偶關係明カナル者ノ總數ニ對スル配偶關係別ノ百分比ヲ算出スレハ、未婚者 40.85%、有配偶者 59.15%、離婚獨身者 2.81%、鰥夫 2.77%ニ當リ。女ハ同未婚者 25.19%、有配偶者 58.46%、離婚獨身者 5.01%、寡婦 11.35%ニ當レリ、明治四十一年ニ東京市カ行ヒタル市勢調査ノ結果表ニ由リ、男女共ニ十五歳未満者ヲ除キ上記ト同一ノ比例ヲ算出スレハ、未婚者ハ男 42.57%、女 24.9%、有配偶者ハ男 59.87%、女 56.89%、離婚獨身者ハ男 1.89%、女 3.36%、鰥夫 4.66%、寡婦 14.79%ナリ、今是ト彼トヲ比較スルニ細密ニハ幾多ノ異點ニ其ノ型ヲ一ニス、然レハ配偶ノ有無ハ甚シク犯罪ト關係ナキモノ、如シ。

【教育】 男ノ教育ノ關係明瞭ナル者ノ總數ニ對スル其ノ教育程度ノ百分比ヲ算出スルニ、高等教育ヲ受ケタル者 0.16%中等教育ヲ受ケタル者 1.31%、普通教育ヲ受ケタル者 33.31%文字ノ讀ミ書キヲ爲シ得ル者 48.53%、全ク教育ヲ受ケサル者 11.69%ニ當リ、女ノ同上ハ高等教育ヲ受ケタル者無ク、中等教育ヲ受ケタル者 0.16%、普通教育ヲ受ケタル者 15.32%、文字ノ讀ミ書キヲ爲シ得ル者 33.73%、全ク教育ヲ受ケサル者 50.79%ニ當ル、此ノ事實カ果シテ教育ト犯罪トノ關係ヲ解析シ得ヘシトモ思ハレサレトモ記シテ以テ他日ノ攷究ニ備フ。

【信教】 是亦其ノ特徴ヲ捕捉シ能ハサル事項ニシテ、男ニ於テモ女ニ於テモ無信教者ノミ甚タ多ク、其ノ屬スル宗教ヲ示シタル者モ殆ト全數ニ近キ大部分ハ佛教ニシテ神道モ耶蘇教モ唯僅ニ存スルノミ、然レハ單ニ之ノミヲ以テシテハ何等ノ結論ニモ到達シ得サルカ如シ。

【資産】 82%餘ハ資産ナキ者、約 8%ハ赤貧者、約 7%ハ稍資産アル者、3%弱ハ資産アル者ナリ、然レハ一般ニ資産ナキ者大部分ヲ占メタレトモ、之ヲ罪名別ニ見ルニ、賭博罪、詐欺及恐喝罪、文書偽造罪、傷害罪、墮胎罪等ニ於テハ必シモ然ラサルモノアリ、故ニ茲ニ謂フ資産ノ有無ノ區分ニ付テモ仔細ニ觀察スレハ多少ノ發見スル所ナキヲ保セス。

【生計】 是モ亦資産ノ有無ニ似テ劃然タル決定ヲ與フルニ難キモノトス、然レハ男女ヲ合セタル總數ニ於テ華美ノ生活ヲ爲ス者 0.23%ニシテ普通ノ生活ヲ爲ス者 23.49%、質素ノ生活ヲ爲ス者 26.25%ニシテ貧困ノ生活ヲ爲ス者 50.12%ナリト言フニ止メン。

【月別】 月別ヲ輯約シ三月乃至五月ヲ春トシ、六月乃至八月ヲ夏トシ、九月乃至十一月ヲ秋トシ、十二月乃至二月ヲ冬トシテ、全年ノ一日平均ノ千ニ對スル各季一日平均ノ比例ヲ算スレハ春季ハ 995.7ニシテ平均ニ近ク、夏季ハ 798.9、秋季ハ 871.1ニシ

テ共ニ平均ヨリ低ク、冬季ハ 1341.8ニシテ獨リ巔然トシテ高シ是ハ主トシテ十二月テフ竊盜最モ多キ月ト、一月二月テフ賭博最モ多キ月ヲ包含スルニ由ルモノナリ、其他春季ハ失火、猥褻、姦淫、墮胎ノ罪多ク、夏季ハ殺人、傷害、住居侵入ノ罪多ク、冬季ハ賭博竊盜ノ外放火、詐欺及恐喝ノ罪多シ。

【職業】 職業ト犯罪トノ關係ハ最モ重要ナル觀察點ノ一ナルヘシ、然レトモ今日ニ於テハ正シキ職業別人口ヲ有セサルカ故ニ的確ニ之ヲ比較シ能ハサルヲ遺憾トス、而シテ技ニ揚クル犯罪者ノ犯時ノ職業モ亦果シテ有業者ナルヤ否ヤ、或ハ其ノ職業者ニ扶養セラル、無業家族ナルヤ否ヤ、若クハ職業上ノ地位ハ何ナリヤ、明瞭ナラサルカ故ニ是亦完全ナル材料ニアラス、然レハ茲ニハ二三職業者ノ總數ニ對スル主ナル罪名ノ分節比例ヲ算出シテ比較對照スルニ止メントス、即チ農業者ノ總數ニ對スル賭博及富籤ニ關スル罪ハ 54.10%ニシテ、漁業者ハ是ヨリモ強ク 61.14%、礦業者ハ 52.70%ヲ現ハシ、土木建築業者ハ 45.28%ニシテ、商業者ハ漁業者ニ近キ 59.17%ヲ出シ、自由業者ハ頗ル少ク 19.06%ナリ。又竊盜罪ハ土木建築業者甚タ高ク 24.63%ヲ現シ、礦業者ハ 13.43%、漁業者ハ 13.06%ニシテ略ホ同位ニ在リ、農業者ハ 10.05%、自由業者ハ 9.45%ニシテ、商業者ハ 9.02%ナリ、竊盜罪ノ如キ所謂普遍的犯罪ハ斯カル不完全ナル觀察ニモ甚シキ較差ナシ。詐欺及恐喝罪ハ自由業者甚タ高ク 17.43%ヲ現シ、商業者ニ次キ 8.16%土木建築業者 6.42%、農業者 6.15%、漁業者 3.94%ト次第セルハ意義アルモノ、如ク、礦業者最モ少ク 3.37%ナルハ其ノ生活上ノ地位並ニ智識程度ニ鑑ミレハ自ラ首肯セラル、所ナリ。横領罪モ詐欺及恐喝罪ニ略ホ同クシテ少シク異ナレリ、即チ自由業者 21.65%、商業者 5.56%、漁業者 4.73%、農業者 3.54%、礦業者 2.43%土木建築業者 2.30%ナリ。傷害罪ハ礦業者最モ高ク 18.33%ニシテ土木建築業者 11.49%、漁業者 9.12%ヲ現シ、農業者ハ 6.38%、商業者ハ 4.36%、自由業者ハ 3.76%ナルカ如キ、是亦其ノ犯罪ノ性質ト職業トニ鑑ミ決シテ無意味ナラサルカ如シ。

【受刑度數】 刑法犯有罪確定被告人ニ就テ、各性ノ總數ニ對スル受刑度數ノ分節比例ヲ算出スルニ、一度ハ男 66.62%、女 83.45%、二度ハ男 13.39%、女 9.45%、三度以上五度ハ男 15.31%、女 5.78%、六度以上十度ハ男 3.70%、女 1.08%、十一度以上ハ男 0.93%、女 0.25%ニ當レリ、男ハ二度以上ノ者多ク、女ハ一度ノ者多シ、而シテ之ヲ前年ニ比スルニ男一度ノ者ノ比例少シク高シ尙ホ二三ノ罪名ニ就テ一度ノ者ノ比例ヲ見ルニ、賭博及富籤ニ關スル罪ハ男 71.28%、女 80.34%ニシテ男ハ總數ヨリモ高ク、女ハ總數ヨリモ低シ。竊盜罪ハ男 46.74%、女 63.91%ニシテ共ニ總數ヨリ適ニ低ク、竊盜カ習癖ヲ爲スモノナルコトヲ明示セリ。詐欺及恐喝罪ハ男 57.00%、女 74.21%ニシテ是亦共ニ總數ヨリ低キモ竊盜ノ如ク甚シカラス。其ノ他男ノ傷害罪カ 76.88%ニシテ總數ヨリ高ク、女ノ姦淫罪カ 98.75%ナルカ如キ、其ノ犯罪ノ偶發的ナ

ルコト多キヲ示シタリ、唯女ノ墮胎罪カ 88.19%ニシテ總數ヨリ高キコト少キハ奇異ノ感ナキニアラサレトモ、是ハ墮胎者タル妊婦ノミノ上ニ係ル犯罪ニアラスシテ 妊婦ノ囑託ヲ受ケ又ハ受ケスシテ墮胎セシメタル者ヲ包含スルカ爲ナルヘシ。

丙、登 記

大正五年中ノ登記ノ總件數ハ 5,533,818件ニシテ之ヲ前年ニ比スルニ 399,769件ヲ増セリ、此ノ總數中ノ 98.52%ハ不動産及船舶ノ登記ニシテ、他ノ 1.48%ノミ永代借地權、華族世襲財産ノ創設法人及其ノ他ノ登記ナリ、不動産ノ登記中 3.31%ハ登録稅ヲ課セサルモノニシテ、96.69%ハ一般ノ不動産登記ナリ、此ノ一般ノ不動産登記ヲ分類スレハ土地 92.07%、建物 7.80%、船舶 0.13%ニ當ル、又本年中ノ登録稅總額ハ 20,882,857圓ニシテ前年ヨリ多キ

XXVII. 監

【監獄及其職員】 大正五年末現在ノ監獄ハ 52箇所ニシテ外ニ分監 55箇所、出張所 31箇所アリ。監獄分監共ニ前年ト同數ニテ増減ナシ、出張所ハ大正二年ニ 5箇所ヲ減シ、大正三年ニ 1箇所ヲ増シ、前年ニ 2箇所ヲ増シ、本年ハ又 1箇所ヲ増シタリ。大正五年末現在警察留置場ハ 1,211箇所ニシテ、之ヲ前年ニ比スルニ 2箇所ヲ減ス。

大正五年末現在ノ監獄職員ハ典獄 52人、典獄補 25人、看守長 382人、技手及通譯 4人、監獄醫 131人、教誨師 120人、教師 33人、看守 6,722人、女監取締 247人、雇傭 1,949人ナリ。以上ノ諸員ヲ前年ニ比シ其ノ増減ヲ見ルニ、典獄、技手及通譯、教師等ハ増減ナク、典獄補ハ 1人ヲ、看守長ハ 3人ヲ、監獄醫ハ 1人ヲ、雇傭ハ 20人ヲ増シ、教誨師ハ 7人ヲ、看守ハ 84人ヲ、女監取締ハ 1人ヲ減セリ。

【在監人員】 大正五年末在監人員ハ合計 52,776人ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 1,730人ヲ減シ、大正二年ニ終ル五年平均ノ 67,117人ニ比スレハ 14,341人ヲ減シタリ。斯ノ如キ大減ハ明治四十二年以降一時在監者ノ増加シタル時期トノ比較ナルカ故ニシテ、之ヲ其ノ以前(三十七年—四十一年)ノ五年平均 53,502人ニ比スレハ本年ハ僅ニ 736人ヲ減シタルノミナリ。此ノ在監人ヲ男女ニ分テハ男 95.99%、女 4.01%ニ當リ、之ヲ大正二年ニ終ル五年平均ノ男 95.82%、女 4.18%ニ比スレハ、少シク男ハ増シ、女ハ減セリ。又之ヲ種類別ト爲セハ受刑者 91.61%、勞役場留置者 1.48%、刑事被告人 6.85%、乳兒 0.06%ナリ。而シテ此ノ各種類ノ男女別ヲ見ルニ受刑者ハ男 96.12%、女 3.88%、勞役場留置者ハ男 92.45%、女 7.55%、刑事被告人ハ男 95.41%、女 4.59%、乳兒ハ男 45.45%、女 54.55%ニ當レリ。

コト 4,693,812圓ナリ。

土地ノ登記ヲ其ノ事由ニ依リ別テハ、家督相續ニ因ル所有權ノ取得 3.65%、賣買ニ因ル所有權ノ取得 31.15%ニシテ、他ノ 65.20%ハ他ノ事由ニ屬シ、就中從來保有セル所有權ノ保存及登記ノ更正變更ニ係ルモノ最モ多シ。又建物ノ登記ヲ其ノ事由ニ依リ別テハ、家督相續ニ因ル所有權ノ取得 2.16%、賣買ニ因ル所有權ノ取得 13.84%ニシテ、他ノ 84.00%ハ他ノ事由ニ屬シ、是亦從來保有セル所有權ノ保存及登記ノ更正變更等其ノ大部分ヲ占ム。

本年中商會社ノ設立登記 4,379件アリ中 4,170件ハ本店設立ニシテ前年ニ比シ 159件ヲ増シタリ、又産業組合ノ設立登記 818件アリ、是モ前年ヨリ 12件ヲ増シ、又漁業組合ノ設立登記 54件アリ、是モ前年ヨリ 19件ヲ増シタリ。

獄

在監人員ナ一年ノ各月末ニ就テ見ルニ、大正五年ニ於テハ六月最高ク、四月之ニ次キ、五月、三月、二月、一月、七月、十一月相次キ、最低キハ八月ナリ。然ルニ刑事被告人ノミヲ見レハ少シク之ト異ナルモノアリ、一月最高ク、二月、三月ハ同數ニシテ之ニ次キ、四月、五月相次キ、六月ハ第六位ニ在リ、九月、十一月、十二月、四月、八月、十月等略等位ニ在リ、七月最低シ。斯ノ如キハ裁判ノ進行ト相追隨スヘナモノニシテ、是ノミヲ以テ何等ノ特徴ヲ見出し得ルモノニアラサルカ如シ。

【入監出獄】 大正五年中ノ入監出獄數ヲ見ルニ、總數ハ前年ヨリ越 54,506人之ニ本年中入監 110,843人ヲ加ヘ、出監 112,569人ヲ差引キ、年末現在員 52,776人ト爲ル。之ヲ男女別ニ見レハ前年ヨリ越男 95.82%、女 4.18%、本年中入監男 92.02%、女 7.98%、本年中出監男 91.93%、女 8.04%ニ當ル。又各種類ニ就テ本年中ノ出入ヲ見ルニ受刑者ハ 48,934人入監シテ、50,265人出監シ、勞役場留置者ハ 12,680人入監シ、12,966人出監シ、刑事被告人ハ 49,039人入監シテ、49,109人出監シ、乳兒ハ 220人携帶入監シ、23人ハ監内ニテ出生シ、229人ハ出監セリ、以上ノ出入人員ヲ各合計シ之カ種類別ノ分節比例ヲ算出スレハ出監者中受刑者 44.65%、勞役場留置者 11.52%、刑事被告人 43.63%、乳兒 0.20%ニ當リ、入監者中受刑者 44.12%、勞役場留置者 11.44%、刑事被告人 44.21%、乳兒ハ監内出生ヲ加ヘテ 0.22%ナリ。以上ノ中受刑者ヲ細觀スレハ、其ノ入監者ノ 89.31%ハ男ニシテ、10.69%ハ女ナリ。此ノ女ノ比例ハ他ノ男女別ノ比例ニ比シテ、決シテ低キモノニアラス、此ノ男女ヲ入監ノ事由ニ依リテ分テハ男ハ 99.90%マテ新受刑者ニシテ女ハ 99.35%新受刑者ナリ。又出監者ハ男ハ滿期者 91.07%、死亡者 1.87%、其ノ他ノ事由ニ依ル者 7.06%、又女ハ滿期

者 91.65%、死亡者 0.33%、其ノ他ノ事由ニ依ル者 5.02%ナリ。

【在監受刑者】 大正五年末現在在監受刑者ヲ其ノ罪名別ニ分テ分節比例ヲ算出スレハ、男ハ 99.05%マテ刑法犯、0.11%ハ陸海軍刑法犯ニシテ、其ノ他ノ 0.84%ノミ特別法犯ニ屬シ、女ハ 96.96%、刑法犯ニシテ、3.04%ハ特別法犯ニ屬セリ。又此ノ刑法犯在監者ヲ各罪名別ト爲シ、總數ニ對スル分節比例ヲ算出スルニ、男ノ最モ多キハ竊盜 54.20%ニシテ、詐欺及恐喝 12.25%之ニ次キ、賭博及富籤 5.67%、強盜 5.46%、横領 4.85%、殺人 4.76%、傷害 3.38%、通貨、有價證券及文書偽造 3.02%、放火 2.53%、等其ノ多キモノニ屬シ、女ハ竊盜 44.36%最モ多ク、放火 13.48%之ニ次キ、殺人 9.96%、嬰兒殺 6.66%、詐欺及恐喝 5.94%、墮胎 4.51%、賭博及富籤 4.40%等其ノ多キモノニ屬セリ。又在監受刑者ヲ刑名別ト爲シ總數ニ對スル分節比例ヲ算出スルニ、男ハ無期懲役 0.97%、有期懲役 98.62%、有期禁錮 0.11%、拘留 0.30%ニ當リ、女ハ無期懲役 1.01%、有期懲役 96.11%、拘留 2.88%ニ當ル。更ニ在監受刑者ヲ刑期別ニ見レハ、男ハ無期 0.99%、有期 99.01%、女ハ無期 1.04%、有期 98.96%ナリ。男ノ有期中最モ多キハ一年以上三年未滿ニシテ 31.90%ヲ占メ、之ニ次クハ五年以上十年未滿ニシテ 20.14%、六ヶ月以上一年未滿 18.34%、三年以上五年未滿 14.40%、六ヶ月未滿 10.24%、十年以上十五年未滿 2.37%、十五年以上 1.62%ノ順位ナレトモ、女ハ之ト異ナリ、一年以上三年未滿ノ 34.94%最モ多シテ、之ニ次クモノハ六ヶ月以上一年未滿ノ 17.75%、第三位ハ六ヶ月未滿ノ 15.87%、三年以上五年未滿 13.19%、五年以上十年未滿 12.20%、十五年以上 2.03%、十年以上十五年未滿 1.98%ノ順位ヲ取レリ。是男女ノ犯罪ニ性質ヲ異ニスルモノアルコト上記ノ如キニ原因スルナリ。

【新受刑者】 在監受刑者ハ刑期長キ在監者ノ蓄積ニ依リテ犯罪狀態ヲ見ルカ上ニ錯誤ヲ來ス虞アリ、於是乎新受刑者ニ就テ之ヲ見ルノ要アリ、即大正五年中ノ新受刑者ヲ罪名別ト爲シ其ノ總數ニ對スル分節比例ヲ算出シテ觀察スルニ、男ニ於テハ刑法犯 89.92%、陸海軍刑法犯 0.18%、森林法違犯 0.92%、徵兵令違犯 0.13%、警察犯處罰令違犯 7.00%、其ノ他ノ特別法犯 1.85%ナルニ、女ハ陸海軍刑法犯、徵兵令違犯絶無ニシテ 刑法犯モ亦少ク、39.39%、森林法違犯 0.08%、警察犯處罰令違犯頗ル多ク 55.30%其ノ他ノ特別法犯モ亦多ク 5.28%ナリ。此ノ刑法犯ノミニ就テ分節比例ヲ算出スレハ、男ニ於テハ竊盜最モ多ク 41.60%ヲ占メ、賭博及富籤 16.70%、詐欺及恐喝 14.66%之ニ次キ横領 7.21%、傷害 4.60%、通貨有價證券文書偽造 3.01%等多キモノニ屬シ、彼ノ在監受刑者ニ於テ多キヲ占メタル強盜ハ 1.40%、殺人ハ嬰兒殺ヲ合セテ 1.60%ナルノミ。又女ニ於テハ竊盜ノ 41.15%最モ多ク、賭博及

富籤 15.64%之ニ次キ、墮胎 9.24%、詐欺及恐喝 7.92%、殺人ハ嬰兒殺ヲ合セ 7.09%、放火 4.81%、横領 3.08%、贓物ニ關スル罪 2.98%、猥褻姦淫及重婚等 2.30%等其ノ多キモノニ屬シ、茲ニ於テモ其ノ順位ノ在監受刑者ト大ニ異ナルモノアルヲ見ルヘシ。又新受刑者ヲ刑名別ト爲シ各總數ニ對スル分節比例ヲ算出スルニ、男ハ無期懲役 0.22%、有期懲役 91.17%、有期禁錮 0.60%、拘留 7.80%、死刑 0.12%ニシテ大體ニハ在監受刑者ニ似タレトモ其ノ拘留ノ頗ル多ク、無期懲役甚タ少キニ於テ大差アリ。又女ハ無期懲役 0.10%、有期懲役 39.31%、拘留 60.55%、死刑 0.04%ニシテ、是亦拘留ノ頗ル多キニ由リテ有期懲役ノ量ヲ少クセリ。是女ニ警察犯處罰令違犯多キニ依ル徵證ナリ。

次ニ新受刑者ヲ刑期別ト爲シ、各總數ニ對スル分節比例ヲ算出スルニ、男ニ於テハ無期 0.24%、有期 99.76%、女ニ於テハ無期 0.24%、有期 99.76%ニシテ、之ヲ在監受刑者ニ比スルニ、男女共無期ノ比例遙ニ低ク、又之ヲ有期ニ就テ見ルニ六箇月未滿ハ男 40.34%、女 54.18%、六箇月以上一年未滿ハ男 26.57%、女 19.34%、一年以上三年未滿ハ男 21.16%、女 18.08%、三年以上五年未滿ハ男 5.27%、女 4.40%、五年以上十年未滿ハ男 5.16%、女 2.93%、十年以上十五年未滿ハ男 0.73%、女 0.49%、十五年以上ハ男 0.56%、女 0.34%ナリ。是ニ由テ見ルニ其ノ刑期ノ短キ者ホト多キハ當然ナリ。而シテ殊ニ女ハ刑期短キ者ホト多キ割合強シ、此ノ關係ハ在監受刑者ニ於テハ全ク見ル能ハサル所ナリ。

次ニ新受刑者(拘留及換刑禁錮ニ當ルモノヲ包含セス)ニ就テ犯罪上ノ諸關係ヲ見ルニ、第一大正五年中ノ新受刑者ヲ各性年齡別トナシ、分節比例ヲ算出スレハ、二十歳未滿ハ男ニ在リテハ 10.80%、女ハ 14.17%、二十歳以上三十歳未滿ハ男 33.64%、女 23.40%、三十歳以上四十歳未滿ハ男 28.68%、女 23.06%、四十歳以上五十歳未滿ハ男 17.11%、女 20.37%、五十歳以上六十歳未滿ハ男 7.37%、女 12.94%、六十歳以上ハ男 2.40%、女 6.06%ナリ。男ノ最高ハ二十歳以上三十歳未滿ニ在リテ稍急峻ノ山ヲ構成シ、女ハ三十歳以上四十歳未滿ヲ最高トスレト其ノ穹隆甚タ緩ナリ。要スルニ女ノ受刑者ハ各年齡級ノ分配男ヨリ甚タ平等的ナリ。此ノ比例數ヲ十年前ナル明治三十九年ノ同一比例數ニ比スルニ、二十歳未滿ハ男女共ニ減少シ、二十歳以上三十歳未滿ハ男女共同シク減少シタレト女ノ減少著シク、三十歳以上四十歳未滿及四十歳以上五十歳未滿ハ男女共増加シ、五十歳以上六十歳未滿ハ男ニ於テハ少シク減少シタレト、女ニ於テハ反對ニ著シク増加シ、六十歳以上ハ男女共増加セリ。然ルニ之ヲ前年ニ比スレハ各年齡級ニ於テハ多少ノ増減ハアレト其ノ差甚タシカラス殆ト同一ナリ。斯ノ如ク女ノ動搖著シキハ女ノ絕對數ノ適ニ男ヨリ少キニ原因ス

ルモノナルヘク、而シテ男女共二十歳以上五十歳未満ノ年齢ニ多キハ果シテ何ニ原因スルカ、今ハ之ヲ追究セザルヘシ。又大正五年ノ事實ニ依リ各年齢者ヲ罪名ニ分チ觀ルニ、殆ト各性各年齢ヲ通シテ最多キモノハ竊盜ニシテ、之ニ次ク罪名ハ各性各年齢ニ依リテ同一ナラス、即二十歳未満ノ男竊盜 73.76%、詐欺及恐喝 8.24%、横領 5.38%ニ當リ、同女ハ竊盜 70.69%、殺人(嬰兒殺ヲ含ム以下同シ)、9.66%、放火及失火 6.21%、詐欺及恐喝 8.91%、横領 7.05%ニ當リ、二十歳以上三十歳未満ノ男ハ竊盜 52.93%、詐欺及恐喝 13.24%、横領 7.80%、賭博及富籤 6.57%、傷害 5.71%ニ當リ、同女ハ竊盜 50.52%、殺人 12.11%、墮胎 10.02%、詐欺及恐喝 7.72%、放火及失火 4.59%ニ當リ、三十歳以上四十歳未満ノ男ハ竊盜 35.61%、賭博及富籤 21.50%、詐欺及恐喝 15.44%、横領 7.05%、傷害 5.28%、通貨有價證券文書偽造 3.24%ニ當リ、同女ハ竊盜 38.56%、賭博及富籤 18.22%、詐欺及恐喝 8.91%、墮胎 6.14%、殺人 5.72%、猥褻、姦淫及重婚 5.08%ニ當リ、四十歳以上五十歳未満ノ男ハ竊盜 29.22%、賭博及富籤 28.68%、詐欺及恐喝 15.13%、横領 7.19%、通貨有價證券、文書偽造 3.80%、贓物ニ關ス 3.10%、傷害 3.04%ニ當リ、同女ハ竊盜 29.02%、賭博及富籤 26.86%、詐欺及恐喝 8.87%、胎墮 6.95%、横領並ニ放火及失火ハ共ニ 4.32%、通貨有價證券文書偽造 4.07%ニ當リ、五十歳以上六十歳未満ノ男ハ賭博及富籤 30.31%ニテ最多ク、竊盜 26.17%ニ次キ、詐欺及恐喝 14.84%、横領 6.35%、通貨有價證券、文書偽造 3.95%、贓物ニ關ス 3.75%、傷害 2.40%ニ當リ、同女ハ竊盜 28.68%、賭博及富籤、27.92%、詐欺及恐喝 8.68%、墮胎 8.30%、放火及失火 7.17%、贓物ニ關ス 4.90%ニ當リ、六十歳以上ノ男ハ賭博及富籤 29.76%、竊盜 29.24%、詐欺及恐喝 11.97%、横領 4.89%、通貨有價證券文書偽造 3.75%、贓物ニ關ス 3.33%ニ當リ、同女ハ墮胎最多ク 37.90%、賭博及富籤 21.77%、竊盜ハ第三位ニシテ 12.90%、詐欺及恐喝 7.26%、贓物ニ關ス 4.82%、放火及失火、並ニ横領ハ 4.03%ニ當レリ。以上ハ主ナル罪名ヲ擧ケタルニ過キサレトモ、以テ年齢ト犯罪關係ヲ窺フノ料ト爲スニ足ルモノアラシ。

次ニ飲酒ノ嗜好ト犯罪關係ヲ見ルニ、大正五年ノ新受刑者中男ハ 59.29%酒ヲ嗜ミ、40.71%ハ之ヲ嗜マズ。女ハ 11.26%飲酒ヲ嗜ミ、88.74%ハ之ヲ嗜マズ。之ヲ既往ニ比スルニ、男ハ飲酒ヲ嗜好スル者本年ハ著シク増加シ、女ニ於テハ前年度ニ比スレハ少シク増シタレトモ大體ハ減少セリ。飲酒ノ嗜好アル男ノ最多キ犯罪ハ竊盜 40.26%ニシテ、賭博及富籤ニ次キ 15.94%、詐欺及恐喝 15.03%、横領 7.67%、傷害 5.76%、通貨有價證券文書偽造 2.96%ニ當リ飲酒ノ嗜好ナキ男ハ竊盜 48.47%、賭博及富籤 16.94%、

詐欺及恐喝 11.85%、横領 6.13%、通貨有價證券文書偽造 2.91%、傷害 2.43%ニ當ル。之ニ由テ觀レハ飲酒嗜好ナキ男ノ竊盜著シク増加シ、同傷害ハ減少シタレト、他ハ飲酒ノ嗜好ノ有無ニ依リ大差ナシ。又女ニ於テハ飲酒ノ嗜好アル者ハ竊盜 33.26%、賭博及富籤 10.43%、墮胎 10.43%、詐欺及恐喝 8.70%ニ當リ、其嗜好ナキ者ハ竊盜 41.45%、賭博及富籤 15.01%、墮胎 9.05%、詐欺及恐喝 7.84%、殺人 7.62%、放火及失火 4.86%、贓物ニ關ス 3.09%ニ當リ、自カラ兩者ノ間ニ差異アルカ如シ。

次ニ資産ノ有無ト犯罪トノ關係ヲ見ルニ、大正五年ノ事實ハ男ニ於テハ資産アル者 1.04%、稍資産アル者 5.85%、資産ナキ者 57.88%、赤貧ナル者 35.23%ニ當リ、女ニ於テハ資産アル者 0.34%、稍資産アル者 4.02%、資産ナキモノ 53.55%、赤貧ナル者 42.09%ニ當レリ。之ヲ十年前ナル明治三十九年ノ同一比例ニ比スルニ、資産アル者ハ男ニ於テハ殆ト變リナク、女ハ少シク減シ、稍資産アル者ハ男女共少シク減シ、資産ナキ者ハ殆ト増減ナク、赤貧ナル者ハ男女共増セリ。資産アル者ト稍資産アル者トヲ合セテ、其ノ罪名別ヲ見ルニ、男ハ竊盜 24.89%、詐欺及恐喝 20.00%、賭博及富籤 14.64%、横領 8.41%、通貨有價證券文書偽造 7.43%、傷害 5.04%ニ當リ、女ハ竊盜 28.29%、墮胎 20.22%、殺人 15.73%、賭博及富籤 10.11%ニ當リ、又資産ナキ者ト赤貧ナル者トヲ合セ見ルニ男ハ竊盜 44.94%、賭博及富籤 16.47%、詐欺及恐喝 13.29%、横領 6.95%、傷害 4.45%、通貨有價證券文書偽造 2.60%ニ當リ、同女ハ竊盜 41.65%、賭博及富籤 15.47%、墮胎 8.66%、詐欺及恐喝 8.09%、殺人 6.61%、放火及失火 4.81%ニ當ル。資産ノ有無ノ選定ニ如何ノ標準ヲ取リシヤ、其ノ申告ニ果シテ幾何ノ價值アリヤ明瞭ナラサレト、斯クシテ主ナル罪名ニ就テ觀察シタルノミニテモ其ノ指示ハ必スシモ棄ツヘキモノニアラサルカ如シ。

大正五年中ノ新受刑者ヲ其ノ出生時ノ身分ニ依リテ分テハ男ハ嫡出子 96.70%、庶子 0.35%、私生子 2.59%、身分不詳 0.36%ニ當リ、女ハ嫡出子 96.04%、庶子 0.39%、私生子 2.84%、身分不詳 0.73%ニ當レリ。近キ身分別出生ノ比例ニ較スレハ嫡出子ノ犯罪頗ル多キノ觀アリ。

大正五年中ノ新受刑者ニ就テ其ノ養育ヲ受ケタル家庭ノ關係ヲ見ルニ、實父母ノ下ニ養育セラレタル男ハ總數ノ 91.07%、女ハ 90.62%ニ當リ、此ノ係數ヲ累年ニ見ルニ男ニ於テハ減少シ、女ハ前年迄ハ増加ノ概アリシモ、本年ハ何ニ因スルヤ詳ナラサレト著シク減少セリ。養父母ニ養育セラレタル者ハ男ハ 1.19%、女ハ 0.73%ニシテ、男女共ニ減少シ、其ノ他實繼父母ニ養育セラレタル者ハ男女共ニ増加ノ傾向アリ、祖父母ニ養育セラレタル者ハ本年

ノ甚ク増加セリ。併シナカラ此ノ斷片的ノ事實ヲ以テ直ニ犯罪者ノ家庭ヲ斷スヘキニアラス。

大正五年中ノ新受刑者ニ就テ教育ノ關係ヲ見ルニ 男ハ高等教育アル者 0.19%、中等教育アル者 3.62%、普通教育アル者 55.35%、普通教育ヲ受ケサル者 30.67%、無筆者 10.77%ニ當リ、女ハ中等教育アル者 0.24%、普通教育アル者 23.41%、普通教育ヲ受ケサル者 38.22%、無筆者 38.13%ニ當ル。總人口ノ教育程度ヲ知ラサルカ故ニ何レノ教育程度ノ者カ新受刑者ト爲ルコト多キヤヲ明ニセスト雖、上記ノ分節比例ヲ累年ニ見ルニ男ニ於テハ高等教育アル者ハ前年ニ比シテハ減少セシモ尙増加ノ傾向ヲ示シ、中等教育アル者、普通教育アル者ハ共ニ増加シ、普通教育ヲ受ケサル者、無筆者ハ減少セリ。又女ニ於テモ中等教育アル者、普通教育アル者、普通教育ヲ受ケサル者ハ皆増加シ、無筆者ノミ減少セリ。僅々十年間ニ足ラサル期間ニ於テ斯クハカリ國民ノ教育程度ニ變化アリシトモ覺エス、然レハ教育アル者ノ犯罪カスク急速ニ增多スヘシトモ思ハレス、要スルニ是ハ調査上何等カノ變更アリタルニ由ルナラン。

【累犯】 大正五年中ノ新受刑者中ニハ男 16,456人、女 472人ノ累犯者アリ。之ヲ新受刑者ノ各性總數ニ比例スルニ男ハ 41.00%、女ハ 23.06%ノ累犯者アリタルコト、爲ル。此ノ累犯者ヲ年齢十八歳未満ト以上トニ分テハ男ハ十八歳未満 2.25%、十八歳以上 97.75%ニ當リ、女ハ十八歳未満 5.72%、十八歳以上 94.28%ニ當リ、女ノ少年累犯者少シク高シ。又此ノ少年累犯者ヲ犯數ニ分テ見ルニ、男ハ再犯 85.95%、三犯以上 14.05%ニシテ、女ハ再犯 77.78%、三犯以上 22.22%ニ當リ、女ノ再犯ハ増加セリ。又十八歳以上ノ累犯者ヲ犯數ニ依リ分テ見ルニ、男ハ再犯 61.32%、三犯以上五犯マテ 34.89%、六犯以上 3.79%ニシテ女ハ再犯 65.84%、三犯以上五犯以下 29.66%、六犯以上 4.50%ナリ。是等ノ事實ニ徴スレハ、概シテ女ハ男ヨリモ犯數多キ者寧ロ多キカ如シ、累犯者ヲ罪名別ニ分テ主ナル罪名分節比例ヲ算出スルニ、十八歳未満ノ男ニ於テハ竊盜大部分ヲ占メ 90.54%、横領 3.73%、詐欺及恐喝 2.97%ニ當リ、同女ニ於テハ殆ト全部竊盜ニシテ 93.30%ナリ。又十八歳以上ノ男ニ於テハ竊盜 53.87%賭博及富籤 18.56%、詐欺及恐喝 12.87%、横領 4.74%、傷害 2.04%ニ當リ、同女ハ竊盜 57.98%、賭博及富籤 24.49%、詐欺及恐喝 8.76%、墮胎 3.59%、横領 2.47%ニ當ル。

【作業】 大正五年中在監人ノ一日平均作業人員ハ男 33,357人、女ハ 976人、計 34,333人ニシテ、之ヲ種類ニ依リテ分テハ男ハ官司業従事者 9.45%、受負業従事者 76.91%、委託業従事者 13.61%ニ當リ、女ハ官司業従事者 4.30%、受負業従事者 66.81%、委

託業従事者 28.89%ニ當ル。而シテ官司業ノ男カ從事スル主ナル作業ハ耕耘 26.57%、抄紙工 18.19%、薬工 14.14%、木工 10.57%、伐木工 4.81%、印刷工 4.27%等、同女ハ裁縫工 42.86%、抄紙工 33.33%等、受負業ハ男カ從事スル主ナル作業ハ機械工 34.50%、麻工 20.24%、薬工 7.22%、網工 4.78%、草履工 4.49%、莞蓮工 2.98%ニ當リ、同女ハ機械工 35.58%、麻工 17.02%、莫大小工 9.36%、草履工 7.21%、紐工 5.98%等、委託業ノ男カ從事スル主ナル作業ハ裁縫工 20.44%、機械工 13.65%、莫大小工 12.75%、木工 9.16%、麻工 6.88%、經師工 4.56%、網工 3.33%、薬工 3.11%ニ當リ、同女ハ裁縫工 40.43%、機械工 20.57%、莫大小工 15.96%、麻工 13.12%等ナリ。

【疾患】 大正五年中ノ在監人ノ罹病者ハ男 65,724人、女 2,217人、計 67,941人ナリ。此ノ中男 4,077人、女 188人、計 4,265人ハ入監時ノ罹病者ナルカ故ニ、入監後ノ罹病者ハ男 6,147人、女 2,029人、計 63,676人トス。此ノ入監時ノ罹病者ヲ本年ノ入監人員ニ比スルニ男ハ 39.97%、女ハ 21.26%ノ罹病者アリタルコトヲ知ラル。而シテ此ノ入監時ノ罹病者ヲ除キタル入監後ノ罹病者數ヲ年末ノ在監人員ニ比スルニ、男ハ 1,216.9%、女ハ 958.4%ト爲ル、其ノ罹病數ノ多キ定ニ驚クヘキモノアリト謂フヘシ。是等罹病ノ外前年ヨリ繰越シタル患者アリ、之ヲ合算スルトキハ男 69,418人、女 2,330人、計 71,748人ト爲ル、此ノ總患者中本年中ニ治愈シタル者男 61,513人、女 1,987人、計 63,500人アリ、此ノ治愈比例ハ男 88.61%、女 85.28%ニ當ル、又本年中ノ死亡者ハ男 809人、女 18人、計 827人アリ、之カ死亡比例ハ男 1.17%、女 0.77%ニ當ル。女ハ罹病比例モ低ク、其ノ罹病者ノ死亡比例モ亦低シ。若シ新受刑者ノミニ就テ見レハ女ハ寧ロ男ヨリモ年齢高キ者ノ比例大ナリ、然レハ女ノ罹病比例低ク死亡比例亦低キ所以ノモノハ、男ニ比シテハ刑期ノ短キ者多キニモ由ルベク、又女ハ斯カル場合ニ於テ男ヨリモ之ニ耐フルノ特性アルニモ由ルナラン。

大正五年中入監者ノ各性千ニ付入監時ノ罹病ノ主ナル疾病ヲ擧ケレハ、男ニ於テハ結核性疾患 2.07%、癩 0.42%、梅毒 3.65%、淋毒 2.92%、軟性下疳 1.08%アリ、是等ノ慢性傳染病カ彼等ノ社會ニ如何ニ蔓延シアルカヲ見ルベク、殊ニ癩カ結核性疾患ノ五分一以上ニ達スル多數アリシコトハ驚クヘキ事實ナラスヤ。普通病ニ於テ最多キハ皮膚病ナリ、皮膚炎及皮下結締織炎ヲ合セテ 14.10%ニ當ル。消化器疾患モ少ナカラサルニアラサレトモ其ノ總テヲ合シテ 4.54%ナルノミ。呼吸器病ハ更ニ少ク 1.85%ニ當リ。眼病ハ總數 2.33%ニシテ、其ノ中 1.06%ハ「トラホーム」ナリ。但此ノ入監時ノ罹病ハ健康診斷ノ結果發見シタルモノニシテ、彼等自身ハ身ノ罹病者タルコトヲ感セザルモノアリタルナルヘク、況ンキ罹病

ナ自覺スルモノモ罪ヲ犯スホトノ活動力ヲ有シタル者ナルコトヲ知ラサルヘカラス。女ニ於テハ結核性疾患ハ1.13%、癩ハ0.11%、梅毒ハ2.49%、淋毒0.11%、軟性下疳0.11%ナリ、概シテ男ヨリモ少ク、就中花柳病ノ少キヲ覺フ、但シ淋毒ト下疳トノ著シク少キハ眞ニ少キカ將タ診斷上發見スルニ至ラサルモノナルカ疑ハシ。皮膚病ハ女ニモ多クケレトモ而モ男ノ如ク甚シカラス6.67%ニ當リ、消化器ハ2.03%、呼吸器病ハ1.47%、眼病ハ2.15%ナリ、皆男ヨリ少シク低シ。

大正五年中發生セル罹病者(入監時ノ罹病者ヲ除ク)ノ主ナル疾病ヲ年末現在人員ニ比スルニ、男ニ於テハ結核性疾患10.07%、癩0.10%、梅毒13.88%、淋毒12.34%、軟性下疳3.22%ナリ、是等ノ疾患ノ多クハ入監時ニ發見セサリシモノカ若クハ潜伏シアリテ入監後發シタルモノナラン。ロイマチス性疾患31.33%、脚氣8.27%ノ如キハ監内生活ノ誘起シタルモノニアラサルナキカ、神經衰弱16.13%ノ如キモ亦然リ。夜盲症ハ6.38%ハ決シテ少キ數ニアラス、[トヲホーム]ノ3.28%ハ必スシモ多キニアラサレトモ注意シテ見ルヘキ數ナラン。其ノ他ノ眼病ノ60.92%ハ樞房ノ構造ニモ作業ノ種類ニモ影響セルモノナルヘク、鼻及咽喉疾患ノ102.19%モ氣管支炎ノ46.68%モ肋膜炎ノ5.96%モ亦然リ。胃疾患ノ191.59%腸加答兒ノ133.74%、痔疾ノ29.25%等ハ以テ彼等ノ生活ヲ想見スヘク、皮膚及運動器病ノ207.23%ナル外傷ノ123.22%ナルハ彼等ノ勞働ノ決シテ輕易ナラサルヲ察スルニ餘リアリ。又女ニ於テハ、結核性疾患4.72%、癩0.47%、梅毒18.42%、淋毒1.89%軟性下疳0.94%等、梅毒ハ男ヲ超過シテ多ク、其ノ他ハ皆男ヨリモ少シ。ロイマチス性疾患ハ40.62%、脚氣ハ11.34%ニシテ男ヲ超過ス、殊ニ脚氣ハ一般社會ニ於テハ女ニ少ク男ノ約三分一ナルヲ常トセリ、然ルニ監内生活ノ影響ニ依リテ男以上ニ發病シタルハ注意スヘキ現象ナリ。神經衰弱ハ8.10%ニシテ男ニ半ハシテ少キモ[ヒステリ

XXVIII. 陸

【壯丁】 大正六年ニ於ケル徵兵検査人員中測尺不能者ヲ除キタル全國ノ壯丁數ハ488,360人ニシテ人口ニ付8.72人ニ當ル、之ヲ前年ニ比スルニ15,033人、0.15%ヲ増加セリ、更ニ之ヲ十五年前ナル明治三十五年ニ比スルニ57,267人ノ増加ニシテ一年平均3,818人ノ割ヲ以テ増加セルコトヲ示セリ、然レ共ニ之ヲ各年ニ就キ見ルニ逐年必スシモ増加シ居ルニ非ラス、即チ明治三十六年ニ於テハ前年ヨリ八萬以上ノ激減ヲ示セリ、但シ此ノ激減ハ徵兵令ノ改正ニ依リ三十六年ハ恰モ過度ノ年ニ相等シ同年ニ限リ前年又ハ後年ニ比シ約二個月間ノ出生者ノ検査ヲ缺如セシカ故ナリ、次ニ三十八、九年相次テ減シ更ニ四十三、四年ニ至リ再ヒ遞次相減少シ、

一ノ36.84%アルアリ。夜盲症ハ男ニ比シテ頗ル少ク0.94%ノミ。[トヲホーム]ハ男ト殆ント同數ノ3.31%アリ。其ノ他ノ眼病ハ男ヨリモ高ク84.55%ナルハ樞房ノ構造等ノ影響カ纖弱ナル女ニ災スルコト男ニ過クルモノアルカ爲ナラン。鼻及咽喉疾患ノ56.68%氣管支炎ノ35.90%ハ男ヨリモ低クケレトモ、肋膜炎ノ7.69%ハ男ヲ超過セリ。胃疾患ハ178.08%、腸加答兒ハ87.39%、痔疾ノ15.59%ハ共ニ男ヨリモ低シ、本邦ノ一般社會ニ於テハ女ハ男ヨリモ、消化器疾患ニ罹リ易キヲ常トス、然ルニ在監者ニ於テハ寧ろ女ニ少キ所以ノモノ果シテ何ニ因スルカ、女ノ刑期カ概シテ男ヨリ短キカ爲カ、若クハ一般社會ノ女ノ消化器病多キハ其ノ自由ノ生活カ却テ之ヲ醸成スルモノナキニアラサルカ尙攻フヘキナリ。皮膚及運動器病ハ115.26%、外傷ハ46.76%ニシテ男ヨリ遙ニ少キハ素ヨリ其ノ所ナラン。女ノ固有ノ疾患ナル婦人生殖器病ハ37.79%アリ、又監内ニ於テハ分娩數ノ甚タ多カラサルニモ拘ラス分娩及產尊ノ疾患8.97%アリタリ。

大正五年中ノ在監人死亡者ハ男89人、女18人、計87人ナリ。此ノ死亡者中最多キハ結核性疾患ニシテ男ハ267人、女ハ6人アリ之ヲ其ノ總患者ニ比スルニ男ハ23.27%、女ハ22.22%ニ當ル。之ニ次クモノハ腦脊髓疾患ニシテ男ハ106人、女ハ3人アリ、其ノ總患者ニ對スル比例ハ男ハ8.72%、女ハ13.04%ニ當ル。胃疾患ノ死亡男ノミ60人アリ、其ノ總患者比例0.58%トス。肺炎ノ死亡男54人、女1人、其ノ總患者比例男ハ36.49%ニ當ル。心臓ノ器質的疾患死亡男48人、此ノ總患者比例13.83%、腎炎死亡男39人、女1人、此ノ總患者比例男ハ13.68%ニ當ル。女ノ死亡者ハ甚タ少數ナルカ故ニ之ヲ以テ何等ノ決定ヲモ與フル能ハサレトモ、男ノ死亡比例ハ監獄ニ於ケル是等ノ疾患ノ大勢ヲ知ルノ料トシテ見ルヘキモノナキニアラス。

軍

大正二年亦少シク減少シタルノ事實アリ、其他ハ漸次増加シテ最近ノ數ニ及ヘリ。

今大正六年ノ人員ヲ各府縣ニ就キテ見ルニ、人口多キ府縣ハ常ニ壯丁多キニ非ラス、又人口少キ府縣必スシモ壯丁少キニ非ラサルナリ、即チ壯丁人員ノ多キ地方ヲ順次ニ列擧スレハ、東京18,922人、兵庫18,570人、新潟17,342人、福岡16,689人、愛知16,542人等ノ順位ニシテ、人口ノ順位ハ東京、大阪、兵庫、愛知、北海道等ノ順序ニシテ人口ノ多少ト相一致セサルヲ知ルナリ、右ハ素ヨリ人口ノ男女及年齢ノ權衡、徵兵猶豫、寄留等ノ關係ヲ研究スレハ自ラ解決シ得ラルヘト雖、單ニ問題トシテ茲ニ掲ク。

大正六年ノ壯丁人員ヲ身長別ニ依リテ見ルニ、五尺六寸以上12,144人(2.49%)、五尺五寸以上24,564人(5.03%)、五尺四寸以上52,311人(10.66%)、五尺三寸以上83,613人(17.12%)、五尺二寸以上103,496人(21.19%)、五尺一寸以上93,771人(19.20%)、五尺以上64,622人(13.23%)、四尺九寸以上32,798人(6.72%)、四尺八寸以上13,841人(2.83%)、四尺八寸未満7,478人(1.53%)ナリ、由之觀是五尺二寸以上三寸未満ノ者最モ多ク全員ノ1/5強ヲ占ム、之ヲ前年ニ比スルニ五尺二寸以上三寸ハ殆ント同數ナル外五尺三寸以上ノ身長高キ方面ノ各級ハ何レモ其増加シタルニ反シ五尺二寸未満ノ身長低キ方面ノ各級ハ何レモ減少セリ、故ニ大正六年ノ壯丁ハ前年ヨリ身長延加シタリト見ルコトヲ得、此ノ傾向ハ獨リ前年ト本年トノ關係ニ於テノミ然ルニ非ラス、既往十五年來ノ實績ニ於テ多少ノ例外ハアルモ漸次身長延加セルヲ見ル、今暫ク中間ノ年ヲ看過シ十五年前ナル明治三十五年ノ各級ヲ百トシタル大正六年ノ指數ヲ求ムレハ、五尺六寸以上195.5、五尺五寸以上167.7、五尺四寸以上150.2、五尺三寸以上132.4、五尺二寸以上117.6、五尺一寸以上106.8、五尺以上95.4、四尺九寸以上82.3、四尺八寸以上78.0、四尺八寸未満66.3、總數114.0ニ當レリ、即チ身長延加ノ趨勢ヲ知ルニ足ル。

今大正六年壯丁検査ノ各身長級百分比ノ數ニ依リ、地方ノ狀況ヲ略觀スルニ、全國平均ニ比シ身長高キ者ノ多キ地方ハ北海道近畿區、中國區、東山區等ニシテ身長低キ者ノ多キ地方ハ沖繩縣、九州區、關東區、北陸區等ナリ、尙ホ之ヲ府縣ニ就キテ見ルトキハ同區地方ニ於テモ著シキ差アルモノアリ、即チ近畿各府縣ハ一般ニ高尺ナルモ、全國第一ノ高尺地トシテハ大正六年ニ於テモ亦東山區ノ滋賀縣ヲ第一位トス、次テ鳥取縣、北海道、大阪府等亦高尺地ニ屬ス、低尺地方トシテハ沖繩縣ヲ第一トシ埼玉、群馬、新潟、栃木ノ諸縣之ニ亞ク。

次ニ壯丁ノ普通教育程度ヲ見ルニ、右ニ關シテハ未タ大正六年ノ材料ナシ、因テ大正五年ノ數ヲ以テ示サントス、即チ同年壯丁ノ教育検査執行人員ハ476,498人ニシテ、之ヲ教育ノ程度ニ依リテ分テハ大學卒業及同等者1,814人、高等學校並專門學校卒業及同等者4,490人、中學校卒業及同等者23,062人、高等小學校卒業及同等者161,473人、尋常小學校卒業及同等者226,208人、稍讀方算術ヲ爲シ得ル者49,377人、讀方算術ヲ知ラサル者10,074人ナリ。之ヲ前年ニ比スルニ總人員ノ増加ハ0.15%ニシテ、平均以上増加シタルハ高等學校並專門學校卒業及同等者ノ25.6%ト、稍讀方算術ヲ爲シ得ル者ノ9.6%ノミニシテ他ハ悉ク減少セリ。以上ノ事實ニ依リテ見レハ高等教育ヲ受クル者ノ著シク増加セルト及無學者ノ減少セルハ誠ニ悅フヘキ現象ナルモ、中學教育程度以下ノ減少セルハ

悲ムヘキニ似タリ、然リト雖コハ大正五年一年間ノ事實ノミ、十五年前ナル明治三十五年以來ノ數ヲ見ルニ教育ノ普及ト共ニ壯丁検査ノ際ニ於テモ漸次高キ程度ノ教育ヲ受ケタル者ノ數増加ノ傾向ヲ現出シ、同時ニ讀方、算術ヲ知ラサル無學者ノ數年々減少セルヲ示ス、今無學者ヲ明治三十五年ト對照スルニ同年ニ於テハ71,871人ニシテ壯丁人員ノ16.8%ヲ占メ居リシカ大正五年ニ至リテハ10,074人ニ減シテ總員ニ對シテ僅ニ2.1%ヲ占ムルニ過キス、以テ如何ニ文盲者ノ減少セルカヲ知ルヘシ。

【學生生徒】 陸軍ニ於ケル學生生徒ヲ教育スル機關ノ種類ハ、各師團及陸地測量修技所ヲ合シテ十七種ト爲ス、是等ノ諸機關ニ於ケル教員ノ大正五年末現在數ハ各師團ヲ除キ969人ニシテ、明治四十三年ヲ割シ俄ニ300餘人ヲ増加シタル以後ハ大ナル異動ナク今日ニ及ヘリ。大正五年末ニ於ケル内譯ハ勅奏任542人、判任及雇345人、囑託69人、外國人13人ナリ、之ヲ前年ニ比スレハ勅奏任ハ6人ヲ増加シ、判任及雇ハ3人、囑託ハ7人ヲ減シ、外國人ハ1人増加セリ。大正五年末學生生徒ノ總數ハ4,665人ニシテ前年ニ比シ320人ヲ減シタリ、如斯減少セルハ各師團及騎兵實施學校員數ノ著シク減少シタルニ因ル、而シテ現在人員中官費生3,305人、半官費生122人、自費生1,238人ニシテ半官費及自費ハ中央、地方ノ幼年學校ニ之アルノミ、他ハ悉ク官費ナリ。本年中學生生徒ノ異動ヲ見ルニ、入學4,465人、卒業3,957人、各師團在勤士官候補生ノ士官學校又ハ經理學校ヘ派遣609人、退學117人、死亡12人ナリ、右ノ中死亡ハ前年ト同一ナリ、死亡者ノ最モ多キハ士官學校ノ4人ニシテ各師團ノ3人之ニ次ケ、退學者ハ前年ヨリ7人多ク之ヲ學校別ニ見レハ士官學校28人、各師團25人、幼年學校24人等最モ多シ、死亡、退學者ノ士官學校及各師團ニ多キハ其ノ總員多數ナルカ故ナルヘク特ニ他ノ學校ヨリ此等ノ原因トナルヘキモノ多クアルニ非ラサルヘシ。

【憲兵隊】 大正六年末ニ於ケル憲兵隊ノ部屬ハ、司令部ノ外、朝鮮駐劄、臺灣、關東州ヲ含ミタル21憲兵隊及支那駐屯憲兵並青島守備軍憲兵隊トス、而シテ其人員ハ將官3人、上長官40人、士官228人、准士官72人、下士1,222人、兵卒3,787人、備人1,310人、計6,662人ニシテ前年ニ比シ84人ヲ増加セリ、右現在人員ノ最モ多キハ朝鮮駐劄憲兵隊ノ2,511人ニシテ總員ノ約六割五分ヲ占ム、而シテ同隊ニハ此ノ外尙上長官1人、士官13人、兵卒4,638人ノ朝鮮人アリ、右總員ノ外ニ青島守備軍憲兵隊ニ通譯9人司令部ニ判任文官5人アリ。

大正六年中憲兵ノ取扱ニ係ル犯罪人員ハ陸軍々人1,037人、海軍軍人211人、陸軍々屬88人、海軍々屬15人、朝鮮人陸軍々屬19人ノ外、軍人軍屬以外ノ犯罪人ノ取扱數71,594人アリ、今其内譯

見ルニ内地人男 4,455人、女 289人、朝鮮人男 63,900人、女 2,615人、外國人男 643人、女 2人ナリトス、以上ヲ前年ニ比較スルニ軍人ハ陸軍 87人ヲ、海軍 18人ヲ増加セリ、又軍屬ハ内地人陸軍 61人ヲ、海軍 10人ヲ増加シ、朝鮮人陸軍ハ 4人ヲ増加セリ、而シテ軍人軍屬以外ノ者ハ内地人男ハ 487人ヲ減シ女ハ 195人ヲ増加シ、朝鮮人ハ男 3,680人ヲ女ハ 450人増加セリ。茲ニ特記スヘキハ内地人男ノ犯罪ハ著シク減少セルニ反シ朝鮮人ノ犯罪ハ異常ノ増加ヲ示セルコト之レナリ、而シテ朝鮮人ノ犯罪ニ關スル數ハ更ニ本書朝鮮ノ部ニ於テ之ヲ見ルヘシ。

【衛戍監獄】 大正六年末ニ於ケル内地ヨリ朝鮮、臺灣、關東州、滿洲ニ亘リ帝國陸軍 22衛戍監獄ニ於ケル未決、既決ノ殘留在監人ハ 462人ニシテ、同年中一日平均在監人員ハ 452.77人ナリ、之ヲ前年ニ比スレハ殘留人ハ 104人、平均人員ハ 36.15人ヲ増加セリ。大正六年ニ於ケル未決ノ入監者ハ 1,618人、出監者ハ 1,197人ニシテ前年ニ比シ共ニ著シク増加セリ、又既決ニ在リテハ入監者 1,919人、出監者 1,864人ニシテ是亦前年ニ比シ増加セリ、死亡者ハ未決ニハ皆無ニシテ既決ニ 2人アルヲ見ル。

【衛戍病院】 大正六年末陸軍衛戍病院ノ數ハ、本院 81、分院 37ニシテ前年ニ比シ本院 1ヲ増加セリ。家屋ノ坪數平家ハ 100、931坪、二階ハ 7,469坪ニシテ前年ニ比シ、平家ハ 1,354坪ヲ増加シ二階ハ 65坪ヲ減シタリ。而シテ之カ職員ハ治療看護ノ方面ニ於テハ軍醫正 45人、軍醫 213人、計 258人ト、外ニ看護長 822人アリ、調劑方面ニ於テハ藥劑正 9人、藥劑官 98人、計 107人アリ、經理ノ方面ニ於テハ主計 32人、計手 123人、計 155人アリ、其他磨工長 46人、雇傭 575人、合計 1,963人ヨリ成ル、右ノ内ニハ元ヨリ卒ヲ除外スルモノトス、而シテ前年ニ比スレハ總員 10人ヲ増加シタルカ 其内譯ニ於テハ雇傭ノ 4人、藥劑官、磨工長各一人ヲ減シタルノ外、他ハ凡テ増加セリ、但シ藥劑正ハ増減ナカリキ、今此ノ總員ヲ既往ニ比較スルニ、明治四十二年ニ千餘人ノ激減アリシ後ハ大ナル増減ナシ而シテ此ノ激減ノ原因ハ四十一年以前千餘人アリタル看護人ヲ同年以降廢止シタルニ由ル。

【疾患】 大正五年中ノ新患者ハ 205,310人ニシテ、之ニ前年ヨリノ繰越患者ヲ合スレハ 207,859人ナリ。此ノ患者ノ治療日數ハ前年ト同一ニシテ一患者平均十日ニ當ル。此ノ治療日數ニ基キ一日平均ノ患者數ヲ算出スレハ 5,777人ト爲リ、之ヲ前年ニ比スルニ 69人ヲ増シタリ。又此ノ患者ニ依リテ兵員毎百ニ對スル一日ノ患者比例ヲ算スルニ 2.65人ニ當リ、前年ヨリ高キコト 0.01人ナリ。此ノ患者比例ハ嘗テ 6人以上ノ高率ヲ現シタルコトアリシカ、漸次低下シテ大正三年ニ 2.59ノ最低アリ、爾來又少シク上レリ。上記ノ患者中不幸ニシテ死亡ノ轉歸ヲ取リタル者 337人アリ、之ヲ

患者數ニ比スルニ 0.16%ニ當ル、此ノ死亡比例ハ前年ヨリ低キコト 0.02ニシテ、嘗テ見サル低率ナリ。若シ夫レ明治三十三、四年ニ於テハ普通ニ 0.35内外ヲ現シ、日露戰後ノ三十九年ニハ 0.92ノ高率ナサヘ見タリシカ、爾來急速ニ低下シ今日ニ至レルハ喜フヘシ。又罹病ノ故ヲ以テ除役ノ已ムナキニ至レル者 3,119人アリ、前年ヨリ多キコト 249人ニシテ、之ヲ總患者ニ比スルニ 1.51%ニ當ル。

以上ノ事實ヲ部隊別ニ見ルニ、内地諸部隊及諸學校ニ於テハ、兵員毎百一日ノ患者比例ハ 2.63人ニシテ其ノ死亡比例ハ 0.15%ニ當リ、概シテ總數ニ於ケルヨリモ低ク、總患者ニ對スル除役比例ハ 1.57%ニシテ、總數ニ於ケルヨリモ 0.06%高シ。臺灣守備隊ハ兵員毎百一日ノ患者比例ハ 3.97ニシテ總數ヨリ高キコト 1.32、其ノ死亡比例ハ 0.12%ニシテ是ハ總數ヨリ低キコト 0.04%嘗テ見サル低率ナリ。朝鮮駐屯部隊ハ兵員毎百一日ノ患者比例 2.62ニシテ率口總數ヨリ低キコト 0.03ニ當リ、其ノ死亡比例ハ 0.25%ニシテ總數ヨリ高キコト 0.9%ナリ、是ノヨリ以テ推セハ臺灣ト殆ト反對ノ原因アルカノ概アリ、然レトモ除役比例ノ 0.98%ナルヲ見テハ又必スシモ然ラサルモノアルカ如シ。關東州駐屯部隊ハ兵員毎百一日ノ患者比例 2.29ニシテ甚タ低ク、死亡比例ハ 0.29%、除役比例ハ 1.36%ニシテ、死亡ノ高キコト朝鮮ヨリ高ク、醫役ノ多キコト内地ノ部隊ニ次ク。支那駐屯部隊ハ兵員毎百一日ノ患者比例 2.41ニシテ、朝鮮ト關東州トノ中間ニ在リ、死亡比例ハ 0.56%ニシテ是亦朝鮮ヨリ高ク關東州ヨリ低シ、然ルニ除役比例ハ 2.75%ノ高キモノアリ、其ノ何ノ故タルヲ審ニセス。青島守備隊ハ兵員毎百一日ノ患者比例ハ 2.55ニシテ總數ヨリ少シク低ク、除役比例ハ 1.51%ニシテ總數ト合致セリ、而シテ死亡比例ノミハ 0.41%ノ高キモノアリテ他ニ匹儔ヲ見ス、是果シテ何ノ故リ。

内地ノ部隊ノ各師團ニ就テ之ヲ見ルニ、兵員毎百一日ノ患者比例ノ最高キハ近衛師團(東京)ニシテ 3.35ナリ、之ニ次クハ第十八師團(佐賀、福岡、長崎)ノ 3.11及第八師團(青森、秋田、岩手)ノ 3.03ナリ、第十一師團(香川、徳島、高知)ハ 2.99第十師團(兵庫、京都、鳥取)ハ 2.97、第七師團(北海道)ハ 2.83%シテ之ヲ第二位ノ高率ト爲スヘキ、第六師團(熊本、鹿兒島、宮崎)ノ 2.59、第五師團(廣島、山口、愛媛)ノ 2.28第七師團(愛知、静岡)ノ 2.18ハ第五位、第十六師團(京都、奈良、滋賀、福井)ノ 1.94、第十七師團(岡山、廣島、島根)ノ 1.70ハ最低ノ第六位ナリ。然ルニ死亡比例ヲ以テ之ヲ見レハ第四師團 0.28%、第七師團 0.25%第十五師團 0.22%ヲ以テ第一位ト爲スヘキ、第五師團ノ 0.20%、第二師團ノ 0.19%ハ第二位ニ居リ、第八師團ノ 0.12%第九師團ノ 0.10%ハ即第五位、第六師團及第十八師團ノ共 0.08%第十一師團ノ 0.06%ハ第六位ニ置クヘキ、患者比例ト大ニ趣キヲ異ニセリ。又除役比例ニ於テハ、第五師團

ノ 2.55%、第七師團ノ 2.48%ヲ第一位ト爲シ、第十五師團ノ 2.25%第一師團ノ 2.21%近衛師團ノ 2.11%ヲ第二位トシ、第十二師團ノ 1.27%第六師團ノ 1.26%第十師團ノ 1.25%第十六師團ノ 1.13%第二師團ノ 1.22%第十四師團ノ 1.20%ヲ第五位ト爲シ、第十八師團ノ 1.12%第三師團ノ 1.10%第八師團ノ 1.08%ヲ第六位ト爲スヘシ。以上ノ事實ニ依リテ彼此ノ關係ヲ見ルニ、患者比例ト死亡比例トハ稍強キ反相聯ノ關係ヲ有シ、患者比例ノ高キ所ハ死亡比例低ク、死亡比例高キ所ハ患者比例低キヲ見ル、唯第七師團ノ患者比例モ死亡比例モ共ニ高ク、第六師團ノ患者比例モ死亡比例モ共ニ低キヲ異例トス。又患者比例ト除役比例トハ是亦反相聯ノ關係ヲ有シ、大體ニ患者比例高キ所ニ除役比例低キヲ示セリ、但シ第七師團近衛師團第一師團ハ患者比例モ除役比例モ高ク、第六師團第十六師團ハ患者比例モ除役比例モ共ニ低キヲ異例トス、斯ク異例ノ多キタケ、死亡比例トノ比較ニ於ケルカ如ク反相聯ノ關係ハ強カラズ。又死亡比例ト除役比例トヲ比較スルニ、甚タ緩カナレトモ兩者ハ相聯ノ關係ヲ有セリ、唯異例少ナカラス即第二、第十二、第十四、第十六師團ハ死亡比例稍高キニモ拘ハラズ除役比例甚タ低ク、近衛師團第一師團ハ除役比例高キニモ拘ラス死亡比例ハ第四位ニ在リトス。

又兵種別ニ就テ兵員毎百一日ノ患者比例ヲ見ルニ、士官候補生 6.33憲法隊兵 6.67最高トシ、之ニ次クモノハ下士候補生ノ 4.49中央幼年學校生徒ノ 4.45ナリ。是等特殊者ヲ別トスレハ、鐵道隊ノ 3.97電信隊ノ 3.41重砲兵ノ 3.06騎兵ノ 3.02ノ順位ニシテ、之ニ次クハ野砲兵ノ 2.89工兵ノ 2.86山砲兵ノ 2.72輜重兵ノ 2.70、最低キハ歩兵ノ 2.31ト航空隊ノ 1.66ナリ。

又各病別ニ主ナル疾病ヲ見ルニ、結核性疾患ハ總テ 1,195人ア

XXIX. 海

軍

【軍艦】 大正六年末現在帝國海軍ニ於ケル軍艦ハ、總數 133隻、排水量 706,399噸、馬力 1,746,011馬力ナリ、前年ニ比シテ總數 1隻、排水量 17,700噸、馬力 70,500馬力ヲ増加セリ、即チ同年中筑波、音羽、山彦除籍セラレ、戰艦、日向及江風、柳、橫等ノ大形驅逐艦新ニ艦籍ニ加ハリタリ。帝國軍艦ハ明治三十八九年ニ於テ俄ニ膨脹シ同四十年最高ニ達シ、同四十一年隻數噸數共ニ減少シ、爾來隻數ノ増加甚タ多カラズ、漸ク大正元年ニ至リテ回復シタルモ同二年三年再ヒ減少シ、大正四年驅逐艦ノ新造ニヨリテ俄ニ隻數ヲ増シ終ニ今日ノ數ヲ示スニ至レリ。噸數ハ明治四十一、二兩年相次テ少シク減少シタル外常ニ若干ノ増加ヲ執リツ、アリ、以上隻數、噸數並ニ馬力ノ略年變遷ノ狀ニヨリ艦ノ性質ヲ略察知スルヲ得ヘシ。大正六年末水雷艇ハ 24隻、3,119噸、66,200

リ、中 1,161人ハ本年中ノ新患者ナリ。之カ兵員毎百一日ノ患者比例ハ 0.04ニ當リ、此ノ總患者中 40人ハ死亡シ、931人ハ除役セラレタリ。瘧毒患者ハ 1,443人、梅毒患者ハ 2,262人、軟性下疳患者ハ 1,100人アリ、是等花柳病患者ノ兵員毎百一日ノ患者比例ハ 0.18ニ當レリ。ロイマチス性疾患ハ 1,970人ノ患者アリ、其ノ兵員毎百一日ノ患者比例ハ 0.05トス。脚氣ハ患者 1,030人、上記ノ患者比例ハ 0.03ニ當レリ。精神病 64人其ノ大部分ナル 52人ハ除役ト爲ル。神經衰弱ハ 605人ノ患者アリ、其ノ兵員毎百一日ノ患者ハ 0.02トス。急性氣管支炎患者 17,757人、肺炎 1,058人、胸膜炎 3,310人是等ノ兵員毎百一日ノ患者比例ハ急性氣管支炎 0.17、肺炎 0.04、胸膜炎 0.22ニ當ル。胃ノ疾患及下痢腸炎ハ 33,077人アリ、兵員毎百一日ノ患者比例ハ 0.19ニ當リ、蟲様垂炎及腹膜炎ハ患者ハ 557人ニシテ甚タ多カラサレトモ其ノ死亡比例ハ 3.41%ニ當ル。腎臟炎ハ患者數更ニ少ク 154人ナレトモ死亡比例ハ 5.19%ノ高キモノアリ。皮膚炎及皮下結締織炎患者 26,864人ノ多キモノアリ、兵員毎百一日ノ患者比例 0.29トス。骨、關節及其ノ他ノ運動器ノ疾患ハ流石ニ多ク患者 7,903人アリ、之カ爲除役ト爲リタル者 52人アリ。自殺及自傷 86人アリ中遂ニ死ニ至リタル者 12人トス。外傷ハ 38,958人ノ多數アリ、兵員毎百一日ノ比例 0.47ニ當レリ。

新患者ヲ其ノ發病ノ月ニ分チ見ルニ、總數トシテハ七月八月最多ク、之ニ次クハ二月一月トス。即炎暑ノ候ニ最多ク嚴寒ノ節ニ次クナリ。又最少キハ十一月ニシテ之ニ次クハ四月ナリ。仍テ思フニ一般ノ死亡統計ニ於テ六月ニ死亡最少キハ此ノ陸軍ノ事實ニ依リテ知ラル、四月ニ發病少キノ影響ヲラサルカ、將ク是ハ兵員ノミニ限レル事實ノミニシテ一般ニハ適用スヘカラサルモノナルカ、尙攷フヘシ。

馬力、全然前年ト同一ナリ、水雷艇ハ明治三十七年ノ 85隻、7,535噸ヲ最大ノ極限トシ、爾來隻數、噸數共ニ漸減シ殊ニ大正二年減少甚シク以テ今日ニ至レリ。

【海軍々人】 大正六年末帝國海軍々人ノ總數ハ 96,541人ニシテ、内現役 64,887人、豫備 19,531人、後備 12,115人ナリ。前年ニ比シ現役 1,662人ヲ増加シ豫備 847人、後備 1,173人ヲ減少シ結局總數 358人ヲ減少セリ。之ヲ明治三十四年以來ノ數ニ就キテ見ルニ、大體豫備後備ノ逐年遞加スルノミナラス、現役モ亦大正二年ニ一度減少シタル外、常ニ増加セリ、然ルニ大正六年末ニ於テ豫備後備ノ減少ハ稀ニ見ルノ現象ナリ。大正六年ノ現役軍人ヲ階級別ニ見レハ、將官 114(内甲板 84、機關 11)、上長官 1,493(内甲板 815、機關 298)、士官 3,683(内甲板 1,498、機關 515)候補生

152、内甲板 91、機關 40)、准士官 1,324(内甲板 677、機關 493)、下士 12,416(内甲板 6,732、機關 4,010)、卒 45,583(内甲板、435、機關 16,559)、ナリ。右ノ内大正六年末海軍本省以下官衙勤務ノ海軍々人ハ、6,914人ニシテ將官 82、上長官 794、士官 841、候補生 21、准士官 235、下士 1,495、卒 3,446人ナリ、此ノ外海軍官衙事務ニ従事スルモノ勅奏任以下軍屬 2,808人アリ。

【海軍徴兵及募兵】 大正六年ニ於テ帝國海軍ニ徴募シタル兵卒ハ、其ノ徴兵ニ係ルモノ 2,870、募兵ニ係ルモノ 4,265、合計 7,135人ナリ、前年ニ比シ徴兵 2,511、募兵 1,325、合計 3,836ヲ激減セリ。徴募兵ヲ兵種別ニ見レハ、徴兵ハ水兵 1,421、機關兵 1,130、其ノ他 319ニシテ、募兵ハ水兵 2,128、機關兵 1,678、其ノ他 459ナリ、徴募員ノ累年總數ヲ見ルニ、明治三十八年及同四十年ノ特ニ多數ナルト、大正二年ノ著シク少數ナルトノ外逐年増加ノ傾向ヲ示ス、サレハ本年ノ激減モ亦一例外ト認ムヘキカ。徴兵ト募兵トノ割合モ亦稀有ノ例外ヲ除キ年々殆ント同數ニシテ募兵僅ニ多カリシニ、本年ハ其差著大ナリ、是又一ノ變調ト認ムヘキカ如シ。尙大正六年末徴募ノ兵員ヲ鎮守府別ニ示キハ、横須賀 2,019、吳 2,402、佐世保 1,506、舞鶴 1,208ナリ。

海軍ニ於ケル其ノ所要兵員ハ海軍志願兵條例ニヨリ募集シタルモノト、徴兵ニヨリテ徴集シタルモノトノ二種アリ、而モ募兵却テ徴兵ヨリ多キハ前掲ノ如クナルカ 右大正六年ニ於ケル募兵ノ募集府縣別ヲ見ルニ、山口縣ノ 306ヲ最多トシ、廣島縣ノ 272、岡山縣ノ 166ニ次ク又沖繩縣ノ 5人ノ特ニ最少ナルヲ除キ徳島縣ノ 34、山梨、神奈川ノ各 38等少數ノ部ニ屬ス。

【海軍各學校】 大正五年末海軍各學校ハ七校ニシテ其ノ教員數ハ勅奏任併テ 311、判任及雇 67、囑託 79、合計 457、外ニ外國人 6人アリ、前年ニ比シ 47人ヲ増加セリ。大正五年末學生々徒ノ總數ハ、機關砲術水雷各學校ニ於ケル下士卒練習生ヲ包含シ 2,618人ニシテ、前年ニ比シ 132人ノ増加ナリ、右學生々徒ノ總數中將來各科ノ候補生タル生徒ハ兵學校ノ 353人、機關學校ノ 137人、經理學校ノ 65人ニシテ、他ハ悉ク既ニ士官又ハ下士卒中タル學生及練習生ナリ、同年中ノ異動ハ入學 3,524人、卒業 3,937人、退學 53人ニシテ死亡ハ一人モナシ。

【海軍監獄】 大正六年末横須賀、吳、佐世保、舞鶴、旅順ノ五海軍監獄ニ於ケル未決 殘留人員ハ 19人ニシテ前年ニ比シ 4人ノ増加ナリ。同年中ノ入監ハ 410人、出監ハ 406人ニシテ共ニ前年ヨリ多數ナリ、又同年末既決在監人ハ 198人ニシテ前年ヨリ多キコト 26人ナリ、而シテ右ハ明治三十五年以來ノ高數ナリトス、此ノ數字ハ即チ前年ヨリノ越人員 172人ニ同年中ノ入監 343人ト出監 317人トノ差ニヨルモノナリ、右年末人員 198人中 197人ハ有

期懲役ニテ他ノ 1人ハ有期禁錮ナリ。

【疾患】 大正五年中ノ新患者ハ 44,293人ニシテ之ニ前年ヨリノ繰越患者ヲ合スレハ總數 46,148人ナリ。此ノ患者ノ治療日數ハ一患者平均二十三日弱ニ當リ、前年ニ比シ約四日ヲ増セリ。此ノ治療日數ニ基キ平均一日ノ患者數ヲ算出スレハ 2,831人ニ當リ、之ヲ前年ニ比スルニ 133人ヲ増セリ。又此ノ患者數ニ依リテ兵員毎百ニ對スル一日ノ患者比例ヲ算スルニ 5.30ニ當リ、前年ト正ニ同數ナリ。此ノ患者比例ハ明治三十六年ニ 6.10ノ率アリシカ、漸次下降シテ四十四年ニハ 5.01ト爲リ、爾來又上昇シテ今日ニ至レリ。上記大正五年ノ患者中死亡ノ轉歸ヲ取リタル者 206人アリ、之ヲ總患者ニ比スルニ 0.45%ノ死亡比例ヲ見ル、之ヲ前年ニ比スルニ 0.03%ヲ減ス。又罹病ノ故ヲ以テ除役セラレタル者 813人アリ、之ヲ總患者ニ比スルニ 1.76%ノ除役比例ナリ、此ノ除役比例ハ前年ヨリ低キコト 0.18%ナリ。上記ノ比例數ヲ陸軍兵員ノ夫ト對比スルニ、海軍ハ總テニ於テ陸軍ヨリ高ク、患者比例ハ陸軍 2.65ニ正シク倍シ、死亡比例ハ 0.29%高ク倍以上ナルコトヲ示シ、除役比例ハ左程ノ大差ナキモ尙 0.25%海軍高シ。何カ故ニ斯クハ相違スルカ、今其ノ理由ヲ詳ニセス。

海軍兵員中特ニ艦船乗組員ヲ別テ之ヲ見ルニ、其ノ兵員毎百一日ノ患者比例ハ 3.75ニシテ之ヲ全數ニ比シ 1.55低ク、死亡比例ハ 0.28%ニシテ全數ノ比例ヨリ 0.17%低シ、而シテ艦船乗組員ニハ一人ノ除役タニ無カリキ。此ノ艦船乗組員スラ之ヲ陸軍兵員ニ比スレハ患者比例 1.10死亡比例 0.12%高キモ、全數ニ於ケルヨリモ適ニ率ヲ低メタリ。艦船乗組員ハ海軍兵員ノ約 67%ヲ占ム、斯カル大多數ハ左マテニ不健康ナラサルニ、少數ノ陸上勤務員ノ加ハルニ依リテ上記ノ如キ高率ヲ現ストスレハ、其ノ陸上勤務員ノ不健康ナル程度ノ著シキモノアルヲ想ハサルヘカラス、何カ故ニ海軍ノ陸上勤務者ニ爾ク不健康ナル者多キカ、今其ノ原因ヲ探クルニ由ナシト雖、茲ニハ各鎮守府別ノ患者比例、死亡比例、除役比例ヲ列舉シテ後ノ參考ニ資セント欲ス。即横須賀ハ兵員毎百一日ノ患者比例 8.53ニシテ死亡比例ハ 1.03%、除役比例ハ 6.60%ニ當リ、吳ハ患者比例 9.59%ニシテ死亡比例ハ 0.88%除役比例ハ 5.11%ニ當リ、佐世保ハ患者比例 10.72%ニシテ死亡比例ハ 0.56%、除役比例ハ 6.13%ニ當リ、舞鶴ハ患者比例 12.48%ニシテ死亡比例ハ 0.44%除役比例ハ 3.94%ニ當レリ。

各病別ニ主ナル疾病ヲ見ルニ、結核性疾患ハ總テ 407人アリ、中 416人ハ本年ノ新患者ナリ。之カ兵員毎百一日ノ患者比例ハ 0.15ニ當リ、此ノ總患者中ノ 39人ハ死亡シ、335人ハ除役セラレタリ。花柳病患者ハ總テ 9,083人アリ、其ノ兵員毎百一日ノ比例ハ 1.63ニ當ル。精神病 27人ノ患者アリ中 21人ハ除役ト爲ル。神經衰弱ハ

313人ノ患者アリテ、兵員毎百一日ノ患者 0.05ナリ。氣管支炎(急慢共)患者 2,439人、肺炎 113人、胸膜炎 1,039人、是等ノ兵員毎百一日ノ患者比例ハ氣管支炎 0.24、肺炎 0.02、胸膜炎 0.32ニ當ル。男ノ疾患及下痢腸炎患者ハ 4,449人ニシテ其ノ兵員毎百一日ノ患者比例ハ 0.19ニ當リ、蟲様垂炎及盲腸周圍炎患者ハ 299人ナレトモ其ノ死亡比例ハ 3.34%ノ高キモノアリ。腎臓炎ハ患者 65人アリテ一人ノ死亡者ヲ出サス。皮下結締炎患者ハ 1,684人アリテ兵員毎百一日ノ比例 0.18ニ當リ、骨關節其他ノ運動器ノ疾患ハ 575人

XXX. 財

政

甲、國家財政

【一般會計歳入歳出】 大正七年度豫算額ニ依レハ、歳入ハ經常部 6億 4,208.3萬圓、臨時部 1億 8,062.2萬圓、合計 8億 2,330.5萬圓ニシテ、歳出ハ經常部 4億 8,008.3萬圓、臨時部 3億 4,322.2萬圓、合計 8億 2,330.5萬圓ナリ。之ヲ前年度實行豫算ニ比スレハ、歳入經常部 8,565萬圓、臨時部 2,457萬圓、合計 11,022萬圓、歳出經常部 4,352.2萬圓、臨時部 6,659.8萬圓、合計 11,022萬圓ヲ各増加セリ、而シテ本年度ノ數ハ豫算ナルヲ以テ、歳入歳出ニ過不足ナキモ、經常部ノミヲ以テスレハ、16,260萬圓ノ歳入超過ヲ示ス、人口一人ニ對スル比例ハ歳入歳出共ニ、14圓 48錢ニ當ル。

尙帝國臣民ノ負擔スル行政費ハ右ノ外府縣郡市町村ニ亙リ、各階級ノ公共團體ノ費用アリ、其内大正七年度ノ額ニ未タ調査ヲ經サルモノアルヲ以テ、算出ニ就テ最近大正四年度ノ數ヲ見ルニ、同年度道府縣郡ノ歳出ハ合シテ 1億 1,226.2萬圓、市區町村ノ分ハ 1億 9,937.2萬圓ナリ、同年ノ人口一人ニ付道府縣郡費 2圓 6錢、市區町村費 3圓 66錢ナリ、右ノ内ニハ素ヨリ上級團體タル道府縣ニ於テ一度支出ト爲リ、更ニ郡又ハ町村ニ於テ再ヒ支出トシテ重複計上セラレル額ヲ含ムヲ以テ、之ヲ合計スルハ極メテ疎策ノ譏ヲ免レシト雖、假リニ大正四年度國費負擔額ト合計スルトキハ、同年度帝國人民ハ直接間接ニ一人ニ付約 16圓 43錢ヲ負擔スト言ヒ得ヘシ、而シテ水利土功組合等ノ費用ヲ其組合区域内ノ住民ニ於テ、負擔スルハ右計算外ナリ。

今國家歳入歳出ノ大數ヲ内閣ヲ施行後即チ明治十九年以降累年ニ見ルニ、年々多少ノ異動アリ、之ヲ政治上經濟上並ニ、法制上ノ變遷ト結合シ仔細ニ觀察シ行クトキハ、頗ル興味アルヘク、又極メテ明確ニ解釋シ得ラルヘシト雖、茲ニ其ノ繁ヲ省キ單ニ歳出ノ總額ヲ略觀スルニ、大略三段ノ進展ヲ經來レルコト明ラカニ觀取セラル、即チ明治十九年度ヨリ同二十八年ニ至ル、十年間ハ歳出總額常ニ七八千萬圓臺ハ人口一人ニ付二圓前後當ニ過キサリシニ

ノ患者アリ、爲ニ除役ト爲リタル者 8人アリ。自殺及自傷 31人中 22人ニ死ニ陥リタル者 22人アリ。外傷 7,235人アリテ其ノ兵員毎百一日ノ比例 0.71ニ當レリ。

新患者ヲ其ノ發生ノ月ニ分チ見ルニ、最多キハ九月ニシテ七月六月八月之ニ次キ、二月又次ケリ。即海軍兵員ノ疾患ハ炎暑ノ候ニ發スル者多ク、嚴寒ノ節ニ發スルハ甚タ多カラス。而シテ最少キハ十一月十二月ニシテ、四月ハ陸軍ニ於ケルカ如ク發病少キ時ニアラスシテ殆ト一月ト同數ナリ。

明治二十九年度ニ於テ過度ノ狀ヲ經テ、同三十年度ヨリ三十七年度ニ至ル、八年間ハ一躍 2億圓ヲ超過シ、人口一人ニ對スル比例ハ、5圓乃至 6圓ノ間ニ進ヨリ、尋テ明治三十八年度中ヨリ條ニシテ、從來ノ二倍ニ躍進シ、4億ヨリ 5億ニ進ミ、時トシテハ 6億ヲ突破セル數ヲ示セルコトサヘアリ、從テ其人口ニ對スル比例ハ、約 9圓ヨリ 12圓ノ邊ニシテ、往々 12圓ヲ超過セルアリ、而シテ本年度豫算ニ於テハ 14圓ヲ超過セリ。

國家一般會計ノ歳入ハ特ニ臨時特別ノ狀況ニ依リ、臨時部歳入ニ多額ヲ要スル場合ノ外ハ、經常歳入其主要部ヲ占ム、大正七年度豫算モ亦、歳入總額 8億 2,000萬圓中 6億 4,268萬餘圓ハ經常部ニ屬ス、而シテ經常歳入ノ年々ノ増減ハ經濟上法制上ノ重大ナル更革ナキ限り多クノ變動ヲ見ス累年漸増ス、就中日露戰後ノ膨脹特ニ著明ナリ、而シテ右ノ例外トシテ明治四十二年度及大正三年度ニ於テ前年度ヨリ減少ノ數ヲ示ス、前者ハ官業及官有財産收入ノ減少ニ基キ、後者ハ租稅收入ノ減少ニ因ル。大正七年度豫算ニ於ケル經常歳入ヲ細別ニ見ルニ、租稅 3億 6,836.8萬圓(57.7%)、印紙稅收入 3,777萬圓(5.9%)、官業及官有財産收入 1億 5,971.5萬圓(31.1%)、雜收入 365.6萬圓(0.6%)、預金特別會計ヨリ繰入 2,249.9萬圓(3.5%)、臺灣總督府特別會計ヨリ繰入 95.1萬圓(0.4%)、朝鮮總督府特別會計ヨリ繰入 767.5萬圓(1.2%)、ニシテ即チ半額以上ノ租稅收入タリ、官業及官有財産收入之ニ次ク、印紙收入以下ハ甚タ多カラス、而シテ茲ニ歳入決算ノ上ニ於テ累年ノ傾向ノ觀過スヘカラサルハ、租稅收入ノ實額尙年々増加ヲ示シ、經常收入中ノ首要部ヲ占ムルモ、其程度ハ漸次低下シ、反之官業及官有財産ノ收入ハ實額ニ於テモ比例ニ於テモ共ニ年々増進シツ、アルコト是レナリ。

尙租稅並官業及官有財産收入ニ就キ最近大正七年度ノ數ヲ細別シ、百萬圓單位ヲ以テ舉クレハ、租稅ハ地租 73.2、所得稅 66.4、營業稅 26.2、酒稅 94.6、醬油稅 5.2、砂糖消費稅 26.5、織物消費稅 17.9、賣藥營業稅 2、銷業稅 3.9、取引所稅 7.4、兌換銀行券

發行税 0.8、噸税 0.5、關稅 35.2、通行税 5.2、相續税 3.6、石油消費税 0.9ナリ、右ノ内大正四年度決算ニ比シ減額ヲ見タルハ、地租、賣藥營業税、兌換銀行券發行税、噸税、石油消費税ニシテ石油消費税ノ減額 63.4萬圓ニ上ル外、他ハ著シキモノニアラス、本年度所得税ノ激増セシハ、主トシテ所得ノ自然増加ト税法改正ニ依リ税額ノ増加ヲ計上シタルニ基ツク、官業及官有財産收入ノ主要ナルモノニ、郵便電信及電話收入ト專賣局益金トアリ大正七年度決算ニ於テ前者ハ 8,774萬圓、後者ハ 7,199萬圓ヲ示ス、之ニ次キ多額ナルハ、製鐵所益金ノ 2,070萬圓、森林收入ノ 1,273萬圓ナリトス。

次ニ一般會計ノ歳入臨時部ノ大正七年度總額ハ 1億 8,062萬圓ニシテ内前年度繰入金 6,363萬圓ヲ最多トシ、雜收入 3,159萬圓、公債募集金 2,743萬圓、借入金 2,200萬圓、戰時利得税 1,805萬圓ノ順位ナリ。

大正七年度豫算歳出ノ經常臨時ノ總額ヲ所管別ニ見之ヲ百萬圓單位ヲ以テ掲クレハ、最高ハ大藏省 323.3(38.9%)ニシテ之ニ次テ海軍省 150.2(18.2%)陸軍省 115.8(14.1%)、逓信省 105.3(12.8%)、内務省 45.0(5.5%)、農商務省 36.0(4.4%)、文部省 24.2(3.0%)、司法省 15.0(1.8%)、外務省 6.6(0.8%)、皇室費 4.5(0.5%)ナリ、即チ最も多額ノ經費ヲ要スル大藏省ハ全額ノ四割弱ヲ占ム、今少シク其内容ヲ檢スレハ、大藏省所管經常歳出 1億 9,319萬圓中 1億 3,964萬圓ハ國債整理基金繰入ニシテ即チ帝國國債ノ元利支拂額ニ當リ、又同省臨時部 1億 2,718萬圓中、1,288萬圓ハ臨時軍事費特別會計繰入ニ、8,400萬圓ハ臨時事件豫備費ニ、合計 9,688萬圓ハ結局戦費ニ屬スルモノナリ、次ニ陸海軍費ハ大藏省ニ次ク、多額ノ費用ニシテ合シテ 32.3%ヲ占ム、而シテ最近ノ趨勢ハ陸軍ヨリモ寧ロ海軍ノ費用多額ヲ要スルニ至リタリ、以上軍事費ト大藏省ノ費用トヲ除キタル額即チ歳出總額ノ約二割八分強ノ内ニ付テ逓信省費著シク多シ、同省費中ニテハ經常部ノ年金及恩給 3,829萬圓、逓信事業費 2,673萬圓等、臨時部ノ電話交換擴張費 1,000萬圓、航路擴張費 657萬圓、造船獎勵費 463萬圓等ノ補助費其主要ナルモノナリ、次ニ内務省ノ費用ハ經常部ヨリモ寧ロ臨時部ヲ最トス、其主ナルモノハ、治水事業費 1,335萬圓ヲ初メ北海道拓殖費、河川改良費、港灣及改良費等ナリ、内務省ニ次キ多額ナルハ、農商務省ナリ、殊ニ逐年ノ増加ノ趨勢ノ大ナルハ各省中首位ニ位シ、是レ又臨時部却テ經常部ノ三倍ニ達ス、其主ナルモノハ製鐵所擴張費 1,882萬圓、國有林野經營費 330萬圓、産業獎勵費 249萬圓ナリ、司法省及文部省ハ近年費用總額稍伯仲ノ間ニ在リシト雖、累年ノ趨勢ハ文部省寧ロ膨脹ノナリ、殊ニ本年度豫算ニ前年ノ倍額強ノ増大ヲ示ス、各省中最モ歳出額少ナキハ外務省ナリ。

【特別會計歳入歳出】 特別會計ノ數ハ大正七年度ニ於テ外務省所管 1大藏省所管 18、陸軍省所管 4、海軍省所管 2、文部省所管 6、農商務省所管 2、逓信省所管 1、合計 34トス、特別會計ノ數ハ前年ニ比シ、増減ナシト雖、廢止シタルモノニ、朝鮮鐵道用品資金ノ 1、分離獨立シタルモノニ、北海道帝國大學ノ 1アリ、又外務省所管關東都督府並、内務省所管ノ全部、即チ朝鮮總督府、朝鮮森林資本勘定、朝鮮森林收益勘定、朝鮮醫院及濟生院、臺灣總督府、臺灣官設鐵道用品資金、樺太廳ハ本年度ヨリ大藏省ニ屬スルコトナレリ。

特別會計ノ歳入歳出ハ其資金又ハ勘定ノ如キ單ニ帳簿上ノ金額收支ニ止マルモノアリ、又極メテ廣汎複雜ナル事業事務ヲ伴フモノ、例ヘハ、朝鮮臺灣ノ兩總督府ノ如キアリ、又一般會計ト年々收支密接ノ關係ニアルモノアリ、或ハ永ク獨立ノ狀態ニ在ルモノアリ、又歳入出ノ額ノ多額ヲ以テスレハ、大正七年度豫算ニ於テ國債整理基金 6億 8,563萬圓、帝國鐵道收益勘定 2億 1,650萬圓、帝國鐵道資本勘定 1億 7,202萬圓、專賣局 1億 3,891萬圓等ノ如キ巨大ナルモノアリ。

【所得稅】 大正六年度所得稅額ハ第一種 5,910萬圓、第二種 67萬圓、第三種 3,545萬圓、合計 9,523萬圓ニシテ前年度ニ比シ總額ニ於テ 4,373萬圓ノ激増ヲ見タルカ、内 3,244萬圓ハ第一種ノ増加ニ 1,125萬圓ハ第三種ノ増加ニ係ル、大正六年度ノ第一種法人所得稅額ハ大正三年度ノ四倍強、前年ノ二倍強トナレリ、今大正六年ノ第三種所得稅額ヲ所得金額階級別ニ見ルニ、千圓以下ノ所得者ノ納ムル稅額、最も多額ニシテ、總額ノ五分ノ一ニ當ル、次テ二千圓以下、五千圓以下、三千圓以下ノ所得級ノ順ニ於テ稅額多シ。納稅人員ニ就キテ見ルニ、第三種所得稅納稅人員總數ハ大正四五年ト引續キ漸減ヲ示シタルニ大正六年度ニ於テ急ニ増加シ前年ニ比シ 66,627人ヲ増ス、而シテ各種所得級共増加セシモ、主トシテ大所得級ニ著シキ増加ヲ示ス。

大正六年第三種所得稅納稅人員ヲ府縣ニ就キテ見ルニ、其ノ最も人員多キハ、東京、大阪、愛知、兵庫、福岡ニシテ次テ北海道、新潟、長野、京都、靜岡、千葉、廣島、熊本、等ノ順位ナリ、然ルニ之ヲ納稅額ニ就キテ見レハ、東京ノ著シク多額ナルヲ最高トシ、次テ大阪、兵庫ニシテ神奈川ハ兵庫トハ遙ニ逶迤アルモ、其ノ次位ニアリ而モ人員多數ノ諸縣ヲ超越ス、次テ愛知、三重、北海道ニシテ新潟其次ニ在リ、此クノ如ク人員ノ順位ト稅額ノ順位ト一致セサルモノアルハ地方ニ依リ、多額ノ所得者ノアルト否トノ差異ニ起因ス。

【營業稅】 大正六年度ニ於ケル國稅營業稅額ハ 2,653萬餘圓ニシテ其納稅人員ハ 419,049人ナリ、之ヲ前年ニ比スルニ、

358.9萬圓、人員 33,308人ヲ増加セリ、稅額ニ就キテ累年狀況ヲ見ルニ、明治三十六年度ヨリ同四十一年ニ至ル期間ニ、急速ノ膨脹ヲ現ハシタリシカ、大正二年ニ及ンテハ、甚ダシキ増加ナキモ、亦若干ノ増進ヲ示シ、次第ニ増加ノ傾向ニ在リシニ、大正四年俄然トシテ減額セリ、惟フニ是レ税法改正ノ結果ニ基ク。

大正六年度ノ數ヲ營業種類ニ就キテ見ルニ、最も人員多キハ、物品販賣業ノ 27,010人ニシテ、總人員ノ約 2/3ニ當ル其納稅額ニ於テモ之レト同様ニ、最も多額ニシテ 836萬圓ニ達シ、總稅額ノ約 1/3ヲ占ム、次テ多キハ、人員ニ於テモ稅額ニ於テモ製造業ニシテ、50,263人、566萬圓ナリ、銀行業ハ稅額ニ於テ製造業ニ次ク多額ナルモ、人員ハ其十分ノ一ニモ達セス、金錢貸付業ハ稅額ハ銀行業ノ約半額ニシテ其次位ナルモ、人員ハ遙ニ多ク製造業ニ次テ多數ナリ、之ニ次テ稅額多キハ問屋業ナリ、其他ノ營業ハ一種類ニシテ納稅額百萬圓ニ達スルモノナシ。尙各種營業ノ稅額ヲ前年ト對照スルニ、總テ皆前年ヨリ増加セリ。次ニ大正六年度營業稅額ヲ地方別ニ見ルニ、東京府 679萬圓ノ特出セルヲ別トシ、大阪 377萬圓、兵庫 164萬圓、愛知 119萬圓、神奈川 100萬圓ハ相次テ多額ニシテ皆百萬圓以上タリ、次テ京都 91萬圓、福岡 86萬圓、北海道 97萬圓、靜岡 56萬圓、長野 50萬圓等多額ノ府縣タリ、若シ夫レ人員ノ多少ヨリスレハ京都ノ神奈川ヨリ、愛知ノ兵庫ヨリ、納稅人員多數ナルカ如ク、順位大ニ異ルモノアリ、是レ主トシテ各營業種類ノ配置如何ニ關係ス、例ヘハ保險銀行業ノ如キ營業比較的多キ地方ノ納稅人員少キニ拘ラス、其納稅額多シ。

【稅關收入】 大正六年度稅關收入ハ關稅 4,519萬圓、噸稅 61萬圓、雜收入 30萬圓、合計 4,610萬圓ニシテ前年ニ比シ 935萬圓ヲ増加セリ。關稅收入ハ大正二年度ヲ最高トシ、戰爭初年ノ大正三年ニ激減シ、大正四年ニ更ニ、激減ノ度ヲ増シタルモ、爾後大正五年六年ト引續キ稍ヤ漸増ヲ示ス、其細別ヲ見ルニ、關稅噸稅共ニ皆同一ノ傾向アリ、大正六年度ノ合計ヲ稅關別ニ見ルトキハ、橫濱 1,766萬圓、神戸 1,630萬圓、大阪 471萬圓、門司 468萬圓、臺灣總督府 154萬圓、長崎 110萬圓、函館 8.5萬圓ノ順位ナリ。

【國債】 大正六年度末現在國債額ハ內國債 13億 5,995萬圓外國債 13億 3,878萬圓、合計 26億 9,874萬圓ニシテ借入金年度末現在 1億 7,385萬圓ハ此ノ以外トス、同年中ニ起債シ、償還セシモノヲ差引スレハ、結局前年ニ比シ、內國債 2億 6,246萬圓ヲ増シ、外國債 3,142萬圓ヲ減シ合計 2億 3,103萬餘圓ヲ増加セリ。帝國國債ヲ明治四十五年度以降最近六箇年ニ見ルニ、內國債ハ大正三年度マテ引續キ減少シタルニ、大正四年以後漸次増加ニ向ヒ、大正六年俄ニ激増ヲ示ス、然ルニ外國債ハ之レト趣ヲ異ニシ大正二

年度ニ前年ヨリ増シタルモ、大正三年度以降ハ遞減ヲ示ス。

大正五年度國債元利仕拂高ハ元金ノ 116.8萬圓、利金 5,064萬圓、合計 5,180萬圓ナリ、而シテ各種類毎ニ逐年ニ見ルニ、一高一低其間概觀ヲ得ルニ難シ、惟フニ、國債元利仕拂高ハ償還決定額、未償還元金ヲ限度トシテ債權者ノ請求ヲ待テ元利ヲ仕拂ヒタル額ナレハ、逐年仕拂高ハ主トシテ償還高ノ多少ニ依ル外亦往々ニシテ請求者ノ多少ニ依リ高低アリテ頗ル不規則ナルモノナリ、國債元利仕拂高表中金錄公債乃至舊鐵道會社債ノ九種類ハ既ニ償還済ニシテ償還決定後尙仕拂數年ニ及フハ右事情ニ依ルナラン。

【特別資金及官業資本】 大正五年末特別資金ハ 11種、合計 1億 1,705萬圓ニシテ、前年ヨリ一種ヲ増シ、内三種ハ 6,870萬圓ヲ減少セリ。大正五年末官業資本ハ十箇所合計 12億 4,691萬圓、内固定資本 11億 7,128萬圓、運轉資本 7,562萬圓ニシテ、前年ニ比シ合計 6,360萬圓ヲ増加セリ。

【國庫預金、保管金及供託金】 大正五年度末國庫預金ハ普通預金 4,194萬圓、中央金庫預リ郵便貯金 3億 3,310萬圓ニシテ前年ニ比シ前者ハ 1,155萬圓ヲ減シ、後者ハ 8,613萬圓ノ激増ヲ示セリ、又保管金及供託金ノ同年末現在額ハ 780萬圓ニシテ、是レ亦前年ニ比シ増加セリ。

【貸付金】 大正六年度末貸付金ハ 1,274萬圓ニシテ前年度末現在ニ比スレハ、追加高多額ナリシ爲メニ、150萬圓ヲ増加セリ。本貸金中最多ヲ占ムルモノハ水害凶作救濟資金貸付金ナリ。

乙、地方財政

【道府縣】 北海道及府縣自治體ノ大正四年歳入決算ハ合計 1億 1,642萬圓ニシテ、前年ニ比シ 534萬圓ヲ減少ス、道府縣收入中租稅收入ハ 6,782萬餘圓ニシテ總收入ノ約 58%ヲ占メ、稅外收入ハ 42%ニ當ル、又稅收入ヲ細別スレハ、國稅附加稅 3,372萬圓府縣稅 3,255萬圓、市町村分賦額 155萬圓ナリ、更ニ稅ヲ細觀スルニ、地租制及反別割 2,954萬圓、戶數制及家屋稅 1,575萬圓、雜種稅及北海道水產稅 1,225萬圓等多額ナリ、其他ノ稅ハ甚ダ多カラズ。

府縣收入ヲ單ニ主ナル收入ニ就キ各道府縣別ニ觀察シ、其著シキモノヲ掲クレハ、大正四年度地租制及反別割收入ノ最も多キ地方ハ新潟タリ、次テ岡山、埼玉ノ順位ニシテ何レモ皆、百萬圓以上アリ、愛知、靜岡、茨城、福岡、三重ハ此ニ次ク多額ノ部ニ屬スルモノナリ、次ニ戶數制、家屋稅ハ東京ノ 143萬圓ノ特ニ多額ナルヲ初メトシテ、大阪、新潟、靜岡等 50萬圓以上ヲ示ス。次ニ大正四年ニ於テ道府縣債收入ノ特ニ多キハ鹿兒島縣ノ 250萬圓、愛知縣ノ 191萬圓ニシテ其他ノ府縣ニ至リテハ其額大ナラス。國庫補助金、同補助金及同下渡金ノ名目ノ下ニ道府縣ニ交付セラルル金額ノ合計ヲ見ルニ、其ノ特ニ高額ヲ示スハ栃木ノ 169萬圓、東京

ノ 117萬圓、富山ノ 94萬圓等ニシテ 其最少額ハ高知ノ 33萬圓ナリ。

道府縣歳出ノ大正四年度總額ハ 1億 161萬圓ニシテ 前年ニ比スレハ、64萬圓ノ減少トナリ稍ヤ緊縮ヲ示ス、歳出中臨時、經常ノ區別ヲ撤シ費目中同種類ノモノヲ一纏メニ綜合シタル粗大ノ種類ニ就テ見ルニ、同年度支出中、土木費及補助費ノ 3,122萬圓ヲ最多トシ、之ニ次テ警察費及建築修繕費 1,718萬圓、教育費及同補助費 1,498萬圓、勸業費及同補助費 975萬圓、道府縣債 816萬圓ノ順位ニシテ、其他ハ 400萬圓以下ナリ。

歳出ノ道府縣別モ亦歳入ニ於ケルカ如ク、大正四年度ノ主ナルモノニ就キ、著シキ二三ノ府縣ヲ掲記スレハ、先ツ土木費ニ於テハ栃木 590萬圓ヲ最高トシ、富山 272萬圓、新潟 200萬圓、愛知 108萬圓ハ之ニ次ク多額ナリ、其他ハ百萬圓ニ達スルモノナシ。次ニ警察費及建築修繕費ハ 東京 269萬圓、大阪 142萬圓著シク多額ナリ、次テ多キハ兵庫、愛知、北海道、京都、神奈川、福岡ノ諸縣ナリ。教育費ハ土木費又ハ警察費ノ如ク特ニ多額ノ支出ヲナスモノナク、又非常ニ小額ノ支出モナシ、勸業費及同補助費ノ最多ハ愛知 35萬圓ニシテ次テ新潟、岡山、茨城、京都、静岡、福岡ノ順位ニナルモ府縣間ニ大差ナシ。

【郡】 大正四年度、郡自治團體ノ全國收入總額ハ 1,193萬圓ニシテ之ヲ前年ニ對照スルニ、24萬圓ヲ増加ス、又收入ノ種類ニ依リ別チ見ルニ、町村分賦額 754萬圓ニシテ總收入ノ 63%ヲ占ム、之ニ次テ繰越金 135萬圓、府縣補助金 95萬圓多額ニシテ此ノ外ノ收入ハ極メテ少シ。

大正四年度郡收入ヲ郡制ノ施行アル府縣ニ就テ略觀スルニ、最も郡收入ノ多キハ福岡 133萬圓ニシテ、福島 57萬圓、愛知 50萬圓ニシテ、其他ハ郡收入ノ一府縣總額 50萬圓以下ニシテ其最少ナルハ埼玉 5.5萬圓ナリ、又郡收入ヲ主ナル種類ニ就テ見ルニ、府縣中町村分賦額ノ最も多キハ、福岡 79.9萬圓ニシテ、次テ福島 36萬圓、新潟 30萬圓、兵庫 33萬圓、鳥根 26萬圓、愛知 25萬圓多額ナリ、府縣補助金ノ多キモノヲ列擧スレハ福岡 13萬圓、愛知 8.6萬圓、富山 5.9萬圓、鳥根 5.6萬圓アリ、尙郡收入ハ財産ニ基ツクモノ甚タ少ク、財産收入ニ財產賣却代ヲ加フルモ、全國總額 282,460圓ニ過キス、而シテ其ノ財産收入ニ就テ見ルニ、熊本 9.4萬圓最も多ク、其他ハ特ニ多額ナルモノナク、新潟、福岡ノ各 1.2萬圓ヲ除ケハ、皆一萬圓以下ナリ。

次ニ郡支出ハ大正四年度決算額 1,064萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ 30.4萬圓ヲ増加シタリ、道府縣歳出ニ就テ述ヘタルカ如ク、郡費目ヲ粗大ノ種目ニ綜合シ見ルニ、其支出種目ノ多額ナルハ、土木費同補助費 313萬圓、教育費同補助費 214萬圓、勸業費同補助費 260

萬圓ニシテ總額ノ約 8割ヲ占ム、此ノ三種目ニ對照スレハ、右以外ノ種目ハ甚タ少額ナリ。

右支出ヲ府縣ニ就テ見ルニ、支出合計ノ多少順位ハ收入ニ於ケルト略同位ナルカ故ニ茲ニハ只主ナル種目ニ就テ概觀スルニ、先ツ土木費ヲ最も多ク支出スルハ福岡 58.5萬圓ニシテ福島 26.8萬圓、富山 22.3萬圓、三重 21.5萬圓等相次テ多シ、同年度ノ土木費ノ支出ナキハ埼玉、大阪ノ一府一縣ニ過ス、次ニ勸業費ノ支出ノ多キハ鳥根 12.7萬圓、石川 12.5萬圓、兵庫 12.2萬圓、茨城 10.9萬圓、福島 10.1萬圓ニシテ、其他ハ 10萬圓以下ナリ、又教育費ノ支出ノ 10.萬圓以上ハ福岡 22.萬圓、新潟 12萬圓、静岡 10萬圓ニシテ其少額ナルハ青森 4,256圓ノ最少ヲ初メトシ鳥取 7,692圓、東京 9,934圓等ナリ。

【市及區】 大正四年度末現在全國ノ市及北海道、沖繩ノ區ハ 71ニシテ是等市區ノ同年度收入總額ハ 9,815萬餘圓アリ、前年ニ比シ 61萬圓ヲ増加シタリ、此總額ヲ細別シ見ルニ、稅收入 2,130.2萬圓、財産收入 346.9萬圓、使用料及手数料 2,856.6萬圓、公債金 1,403.9萬圓等ニシテ稅收入ハ全收入ノ 21.7%ニ過キス、之ニ依レハ市及區ノ現状ハ主トシテ稅外財源就中使料及手数料ニ依リ、只其ノ不足額ヲ稅收入ニ求ム。

大正四年度ニ於ケル全國市區ノ支出總額ハ 7,663萬圓ニシテ、之ヲ前年ニ對比スルニ、634.4萬圓ヲ減少ス、此ノ減少ハ前年以來ノ趨勢ニシテ、近來ハ緊縮ヲ示ス。今市區歳出ノ内譯ヲ檢スルニ、上級自治團體トハ大ニ差アルヲ見ル、即チ支出ノ最大部分ヲ占ムルハ公債費 1,632萬圓、電氣瓦斯事業費 1,458萬圓ナリ、但シ後者ノ經費ハ第二ノ多額ナルモ、其ノ事業ヲ經營スル都市ハ全國僅ニ八個ノ市ニ過キサルト其經費ヲ要スル點トヲ考慮スレハ、尙發展ノ餘地アルヘキヲ思ハシム、然ルニ逐年減退ヲ示スハ考究ニ價ス。教育費 1,159萬圓、衛生費 1,150萬圓ノ多額ハ都會人口ノ關係上自ラ然ル所ニシテ是亦上級自治團體ト異ナル點ヲナス。

【町村】 大正四年度ニ於ケル全國町村歳入總額ハ 1億 3,295.6萬圓ニシテ前年ニ比シ 226萬圓ノ減少タリ、町村ニ於ケル此ノ減少ハ本年初メテ生セシ現象ニシテ主トシテ公債金ノ激減ニ基因ス。町村收入ノ内譯ヲ見ルニ稅收入最も多ク、其額 8,628.4萬圓ニ達シ、總收入ノ約 64%ヲ占ム、他ハ財産收入 558萬圓、上級團體補助金 515萬圓、使用料及手数料 379萬圓、公債金 199萬圓等ナリ、之ヲ前年ニ對比スルニ、増加セシモノハ、所得税、營業稅、雜種稅、反別割、財産ヨリ生スル收入、使用料及手数料、國府縣稅水利組合費徵收交付金ナリ。

大正四年度ニ於ケル全國町村ノ歳出總額ハ 1億 2,273萬圓ニシテ前年ニ比シ、211.6萬圓ヲ減ス、今其ノ支出額ノ種類ニ就テ見ルニ、

著シク多額ナル教育費 4,786萬圓ヲ第一トシ、次テ役場費 2,881萬圓、土木費 1,164萬圓、財産造成費管理費及積立金 1,131萬圓、諸稅及負擔 831萬圓、衛生費 489萬圓、公債費 350萬圓、警備費 137萬圓ノ順位ナリ。而シテ本年度町村歳出ノ減少ヲ來シタル主因ハ土木費ノ減少ニナリ。

【市町村基本財産】 現行市制町村制ノ規定ハ市町村自治體ノ經濟ハ先ツ其ノ財産ヨリ生スル收入ヲ以テ支辨スヘキコトヲ定メ、而シテ市町村ノ收益財産ハ總テ基本財産トシテ造成管理スヘキコトヲ命ス、右基本財産ノ大正三年度末現在ハ市及區有 3,726萬圓町村有 1億 2,488.3萬圓、即チ平均一市區 524,797圓、一町村 10,180圓ニ當ル、今日既ニ稅ノ徵集ヲ爲ササル所謂模範町村アリト雖此ノ平均ヲ以テシテハ、前途尙遼遠ナリト云フヘシ、而シテ大正三年度ノ數ハ前年ノ調査期タル四年前ニ比シ町村ハ大ニ之ヲ増シ市區ハ著シク減少セリ、市區ノ減少ハ何等カ法規ノ變更又ハ財産評價上ノ差ニ出ツルニアラサルカ茲ニ疑ヲ存ス、財産ノ種類ハ土地最も多シ、町村ニ於テハ約半額ヲ占メ市區ニ於テハ半額以上ナリ、之ニ次キテ多額ナルハ現金ナリ。

【普通水利組合】 普通水利組合ノ大正四年度全國總收入ハ 657萬圓ニシテ郡經濟ニ比シ半額以上ニ當ル、前年ニ比スレハ、59.4萬圓ヲ減少シ近年頻リニ減退ヲ示ス、收入ノ内容ハ組合費トシテ徵收スル反別割、地租割、主要ナルモノニシテ約半額ヲ占ム、次テ公債金 122萬圓、前年度繰越金 92.6萬圓頗ル多額ヲ示ス、右ノ外ハ其タ少額ナリ。

次ニ同年度支出總額ハ 509萬餘圓ニシテ其内容ヲ見ルニ、事業費 281.7萬圓主ナルモノニシテ總支出ノ 56%ヲ占ム。次テ公債費 122.4萬圓ハ妙カラサルノ額ナリ、而モ總支出並事業ノ前年ニ比シ減少シタルニ拘ラス獨リ 20萬圓ノ増加ヲ示ス。

【水害豫防組合】 水害豫防組合ノ大正四年度收入總額ハ 140萬圓ニシテ前年ニ比シ、27.1萬圓ヲ減少セリ、本組合收入ノ内容ハ組合費トシテ徵收スルモノノ外ハ國庫補助金、府縣補助金、公債費多額ヲ示ス、同年度中支出總額ハ 114萬圓ニシテ是レ又前年ヨリ減少ヲ示ス、其内容ハ事業費最も多額タルハ言フ俟タス、總支出ノ 51%ヲ占ム、公債費第二位ノ多額ナル亦水利組合ト同シ。

【地方債】 大正五年度末ニ於ケル地方公共團體ノ公債ハ總額 3億 4,419萬餘圓ニシテ内 729.3萬圓ノ不要許可債ヲ除キタルモノ、3億 3,689.2萬圓ヲ種類別ニ擧ケレハ、北海道地方債 61.4萬圓、府縣債 5,923.2萬圓、郡債 191.5萬圓、市區債 2億 6,786.2萬圓、町村債 663.1萬圓、水利組合債 612.1萬圓、市町村組合債 46.7萬圓ナリ、之ヲ前年ニ對比スレハ、總額 999.9萬圓ノ増加ニシテ此ノ増加ノ種類別ニ見ルニ、市區債 1,137萬餘圓、府縣債 23.7萬圓ハ増加

ヲ示シ之ニ反シ北海道債、郡債、町村債、水利組合債、市町村組合債ハ減少ヲ呈ス。地方債中最大ナルモノハ市區債ナリ、之ニ次テハ府縣債ナリ、他ハ頗ル劣レリ。

大正四年度地方債ヲ使用ノ目的別ニ見ルトキハ、勸業費 1億 5,652萬圓ヲ最高トシ、次テ土木費 9,185萬圓、衛生費 5,205萬圓、舊債償還 2,616萬圓、教育費 877萬圓ノ順位ナリ、而シテ之ヲ公共團體ノ種類ニ就テ見ルニ、少シク趣ヲ異ニスルモノアリ 即チ勸業費ハ市區債、郡債、水利組合債ニ於テ第一位ヲ占ムル外、其他ノ公共團體ニ於テモ多クハ第二位スル多額ヲ示ス、土木費ハ府縣債ニ於テ第一位ヲ、衛生費ハ市區債ニ於テ第一位ヲ、教育費ハ町村債ニ於テ第一位ヲ占ム各特ニ然ルヘキヲ思ハシム。

同年度地方債ヲ地方別ニ見ルニ、最も多額ヲ示スモノハ、東京府 1億 1,339萬圓ニシテ次テ大阪 7,485萬圓、京都 2,087萬圓、愛知 1,564萬圓、兵庫 1,493萬圓、神奈川 1,420萬圓皆多額ノ部ニ屬ス、更ニ之ヲ使用目的別ニ就テ見ルニ、東京、大阪、京都、何レモ、勸業費、土木費最も多額ヲ示ス、愛知、兵庫、神奈川ハ之レト趣ヲ異ニシ、衛生費、土木費多額ヲ占ム。

【罹災救助基金】 大正五年度末北海道及府縣ニ有スル罹災救助基金ノ總額ハ 5,417萬圓ニシテ前年ニ比シ約 214萬圓ヲ増加シタリ、同年度中支出ハ 31.4萬圓ノ少額ニ止マリシニ、收入ハ 245.7萬圓アリタレハ、結局右ノ増加ヲ見ル、府縣中ニ罹災救助基金ヲ最も多ク有スルハ愛知 305萬圓ニシテ、次テ三重 270萬圓、岐阜 232.9萬圓、兵庫 197.7萬圓、新潟 195.萬圓、廣島 186.7萬圓等ナリ。

【租稅滯納處分】 租稅滯納處分ハ國稅及府縣稅ノ二者ニ係リ必スシモ地方財政ノミニ屬セサルモ便宜合シテ茲ニ概觀ス。

大正五年度ニ於テ國稅ノ滯納ヲ處分決行徵收シタルモノ 3,963人、其稅額 671,808圓ニシテ稅金缺損人員 4,678人 其稅額 170,096圓ナリ、前年ニ比スレハ前者ニ於テ人員ヲ減シ金額ヲ増シ、後者ニ於テモ亦人員ヲ減シ、金額ヲ増シタリ、又既往明治四十一年以來ヲ見ルニ、漸次滯納處分者數ヲ減シツツアリ、此ノ減退ノ傾向ハ假令金額ニ於テ多少ノ増減アルニセヨ、收稅成績ノ良好ニ向ヘルヲ證スルモノナリ。

國稅滯納處分ヲ稅目ニ就テ見ルニ 處分決行徵收シタルモノ最も多數ナルハ、地租 2,378人ニシテ次テ營業稅 686人、所得稅 286人、酒稅 218人、釀業稅 200人等多數ナリ、又稅金缺損シタルモノハ所得稅 749人、營業稅 650人、醬油稅 362人、地租 281人、釀業稅 266人、酒稅 229人等多數ナリ。

府縣稅ノ 大正五年度中其處分決行徵收シタルモノノ人員 203,385人、其金額 235,976圓、稅金缺損人員 211,632人其金額 193,477圓

ナリ、之ヲ前年ニ比スルニ、人員金額共ニ皆減少セリ。

大正五年度國稅滯納處分ヲ決行徵收シタルモノノ人員ヲ府縣別ニ見ルニ、其ノ最モ少キハ奈良 5人、埼玉 8人、滋賀 11人、鳥根 12人等ニシテ最モ多キハ長野 195人、北海道 291人、大阪 247人、鹿兒島 244人、東京 220人、大分 201人ナリ。

XXXI. 爵位勳章及褒章

【爵位】 大正六年末有爵者ノ數ハ 936人ニシテ中公爵 17人、侯爵 38人、伯爵 100人、子爵 381人、男爵 400人ナリ、前年ニ比シテ 1、男 2、合計 3人ヲ増加シ公、侯、伯三爵ハ同數ナリ。右ノ數ヲ明治三十四年ノ 778人以來累年ヲ見ルニ、大正元年ニ於テ前年ヨリ 6人ヲ減シタル外常ニ増加セリ、殊ニ明治四十年ニ於テ約百名ノ増加ヲ見タルハ三十七八年戰役ノ論功行賞ノ結果ナリ、各爵中増加ノ最モ高キハ男爵ナリ、即明治三十四年ニ對スル有爵者ノ總增加 158人中 119人ハ男爵ナリ。大正六年末有爵者ヲ位階別ニ見ルトキハ、從四位最モ多ク其數 158人ナリ。次テ多キハ正五位ノ 158人、正四位ノ 141人、正三位ノ 118人、從三位ノ 108人ナリ、其他百人ニ達スルモノナシ、尙有爵者ノ無位ナル者 67人アリ、右ノ内公爵四人アルハ比較的多シトス、右ノ外朝鮮貴族侯 6、伯 3、子 22、男 35、合計 66人アリ、其位階ハ從三位以下從五位ニシテ無位者四人アリ。

大正六年末有位者ノ總數ハ 86,324人ナリ、前年ニ比シ 4,415人ヲ増セリ。本年末各位階別ヲ見ルニ、正八位 24,764人最モ多ク上位ニ進ムニ從ヒ遞減シ從一位三人ヲ最少トシ 正一位ノ者ヲ見ス、最下級從八位ハ 1,765人ニシテ從四位、正五位ノ中間ニアリ、前記總數中女子ノ有位者 234人アリ、又右ノ内華族ノ有位者ハ男 1,327人、女 30人ナリ。別ニ朝鮮人ノ有位者 825人アリ。

【勳章】 大正六年末勳章ノ佩用個數ハ 1,178,593個、佩用人員ハ 1,032,422人ナリ、前年ニ比シ個數 90,430、人員 84,719ヲ増加セリ、今其佩用人員（二個以上ノ勳章佩用者ノ場合ハ其ノ最高級ノ勳章階級ヲ取リテ計算セリ）ニ就キ勳章等級別ヲ見ルニ、大勳位佩用人員ハ菊花頸飾章 3人、菊花大綬章 14人、計十七人ナリ、勳一等佩用人員ハ桐花大綬章 15人、旭日章 135人、瑞寶章 76人、寶冠章 17人、計 243人ナリ、次ニ勳二等佩用人員ハ旭日章 275人、瑞寶章 255人、寶冠章 8人、計 538人ナリ、勳三等佩用人員ハ旭日章 1,314人、瑞寶章 1,506人、寶冠章 4人、計 2,824人ナリ、勳四等佩用人員ハ旭日、瑞寶、寶冠三種ヲ合シテ 7,874人、勳五等ハ 11,019人、勳六等ハ 24,616人、勳七等ハ 146,290人ヲ算ス、金鷄勳章ハ功七級ノミノ佩用者 126人アリ、功六級以上ノ有勳者ハ皆上級勳章併用者ナルヲ以テ別ニ現ハス、最後ニ勳八等佩用人員

之レト同様ニ府縣稅ニ就テ見ルニ、其ノ少キハ千葉 21人、徳島 33人、福井 38人、香川 48人、和歌山 54人等ニシテ其ノ多キハ北海道 32,661人、鹿兒島 20,910人、福岡 15,341人、秋田 14,820人、長野 11,016人等ナリトス。

員ハ 838,875人ナリ、是等ノ佩用人員ヲ單ニ種類別ニ掲クレハ旭日章ハ勳一等以下合計 664,616人、瑞寶章ハ 365,606人、寶冠章ハ 2,042人、金鷄勳章ハ 126人ナリ、右ノ内旭日佩用者ト瑞寶佩用者トナ比較スルトキハ兩者ノ間各等級ニヨリ少カラサル差異ヲ認ム、即兩勳章總數ニ於テ前記ノ如ク恰モ 2ト 1トノ比ニ近キ大差ヲ有シ乍ラ、各等級ニ於テハ多ト少ト全ク地位ヲ轉倒スルモノアリ、先ツ勳八等ハ旭日佩用者 533,170人、瑞寶佩用者 307,029人ニシテ兩者ノ間隔總數ト殆ント相等シキ比例ニアリ、然ルニ勳七等ハ旭日佩用者 11,100人、瑞寶佩用者 34,967人ニシテ旭日ノ多キ割合 3ト 1ト比トナル、反之勳五等ニ至リテハ兩者多少ノ關係全然轉倒シ旭日佩用者却テ瑞寶佩用者ヨリ少ク 4,593人ト 6,333人トナル、是ヨリ上級ハ凡テ此現象ヲ持續シ、最後ニ勳一等ニ至リテ再ヒ旭日佩用者ノ數却テ超過シ 135人ト 76人トノ割合ヲ示ス、次ニ佩用個數ヲ勳章ノ種類ニ分ツトキハ、桐花大綬章以上 47個ヲ除キ旭日章 656,459、瑞寶章 418,151、寶冠章 2,042、金鷄勳章 71,933ナリ、右ノ内旭日瑞寶ノ二種ニ付テ見ルニ旭日章甚タ多シ、而シテ之ヲ等級別ニ見レハ五等以上ハ却テ瑞寶章多シ。

大正六年中各勳章新受領者ハ 5,781人ナリ、大正五年度新受領者ノ 102,852人ニ比スレハ甚タ少キ感アルモ平年ト權衡ヲ失ハス、前年新授ハ大正三四年戰役行賞ノ結果ニシテ寧ろ異常ナリ。

旭日勳章ノ年金受者ハ大正六年末ニ於テ尙 5,521人アリ、其ノ年額金 295,442圓ナリ。金鷄勳章ノ年金受領者大正六年末現在 63,406人アリ、其ノ金額 8,480,300圓ナリ、前年ニ比シ 551人、86,700圓ヲ減少セリ。大正六年中外國人ニ帝國ノ勳章ヲ贈與シタル數ハ 283ニシテ、前年ニ比シ 148ヲ増加ス、勳三等ヲ最多トス、之ヲ國別ニ見ルニ英國 33、露國 22最モ多シ。

【褒賞】 勳章ヲ除クノ外褒賞以下ヲ下賜スルハ今日ノ制度ニ於テ中央政府即チ賞勳局ヨリスルト、地方廳ニ於テスルトノニアリ、大正六年中賞勳局ヨリセル表彰受領人員ハ總計 2,023人ニシテ前年ニ比シ 384人ノ増加ナリ、内褒賞ヲ受ケタル者ノ德行ニヨル者 17人、公益ニ盡セルニ依ル者 19人ニシテ其他ノ 2,006人ハ悉ク公益ニ盡セルニヨリ賞杯ヲ受領シタルモノナリ。

地方廳ノ表彰ニヨルモノハ大正五年中 924,797人アリ、右ノ内

人ハ金拾圓未満ノ寄附者ニ對スル表彰ナリ、之ヲ除クノ外 624人ハ人命救助ニ對シ、61人ハ德行ノ嘉スヘキモノニ對シ、72,417人ハ公

XXXII. 議員選舉

【貴族院多額納稅者議員】 貴族院多額納稅者議員ハ明治二十三年以來毎七年ノ選舉ニシテ 其ノ最近ハ明治四十四年第四回目ノ選舉ニ係ル、同年選舉ノ際ニ於ケル互選權ヲ有スル者ハ 673人ナリ、内華族 10人アリ、華族ノ互選權者ハ每期増加ヲ示ス。次ニ三府四十二縣各十五名ノ直接國稅總納額ハ四十四年選舉ノ際 3,476,819圓ニシテ前期ニ比シ 100萬圓以上ノ増加ナリ、從テ一人平均納稅額 5,166圓モ二倍以上ノ増加ナリ、是レ主トシテ稅法稅率ノ變更ニ基クモ一人ノ最高納稅額ノ増加殊ニ劇シキ事情等ヨリ見ルトキハ所謂大富豪ノ益大ヲ爲スノ狀ヲ察スルニ足ランカ。

各府縣中納稅額最モ多キハ大阪、新潟、兵庫、東京、神奈川等ニシテ、最モ少キハ福井、鹿兒島、大分、群馬、栃木等ナリ、而シテ大阪ト福井トノ兩極端ノ差ハ十五名ノ總納額ニテ 286,812圓、一人平均納稅額ニテ 19,121圓ナリ。

【衆議院議員】 現行衆議院議員選舉法ニ依リ行ハレタル總選舉ハ明治三十五年以來七回ニシテ、大正六年四月ニ行ハレタルモノヲ以テ最近トス、其當時ノ數ヲ示セハ議員 381人、有權者 1,422,118人、内棄權者 114,951人ナリ。又投票數ノ内有効 1,300,854無効 6,320ナリ、議員數ハ從來七回ノ總選舉中、明治三十七年ノ選舉ノ際ヨリ北海道ニ 3人ヲ増シ、四十五年ノ選舉ノ際ヨリ沖繩縣ニ 2人ヲ増シタル以來變動ナシ、一府縣平均 8.1人ニ當ル。有權者ノ數ハ前回ニ比シ 12萬餘ヲ減少セリ、是レ恐クハ所得稅法中第三種所得ノ稅率變更ノ結果ナラン、以上ノ數ヲ比例ニ就キテ見ルニ、人口千ニ對スル有權者ハ 257人ニシテ、明治四十一年ノ選舉以來次第ニ低率ヲ示ス、又議員一人ニ對スル人口ハ 144,978人ニシテ年々人口ノ増加スルト共ニ一議員ノ代表スル人員ノ増加スルハ當然ナリ、又有權者ハ議員一人ニ對シ 3,733人ナリ、前年ニ比シ又四十一年以來減少ノ傾向ニ在ルハ前述ノ如シ、選舉權者百中投票數ト棄權數トハ 91.9ト 8.1ト比ヲ示ス、前回即チ大正四年ノ選舉ニ比シテハ稍棄權ノ率ヲ増シタルモ 其ノ他ノ何レノ選舉ヨリモ少シ最モ棄權率ノ多カリシハ四十一年ノ選舉ナリ。

各府縣別ニ就キテ見ルニ 其ノ議員ハ市部郡部ヲ合シ東京府ノ最大 16名ヨリ沖繩縣ノ最小 2名ニ至ル、議員一人ニ對スル人口ハ北海道ノ 315,550人ヲ最高トシ、沖繩縣ノ 276,560人之ニ次ク、但シ右ノ何レモ特別ノ事情ニアルモノトモセハ 其ノ他ノ府縣中ノ多キハ東京ノ 180,650人、大阪ノ 178,833人、京都ノ 162,562人、鹿兒島ノ 160,889人、愛知ノ 159,723人、宮崎ノ 155,695人等ニシテ、少

益ニ盡セシニ對スル褒賜ナリトス。

キハ香川ノ 109,828人、島根ノ 109,800人、滋賀ノ 113,266人、富山ノ 115,171人等ナリ、又有權者ノ數ハ必スシモ人口ト並行セズ即チ議員一人ニ對スル有權者ノ多キ府縣ヲ舉クレハ滋賀 6,067人、愛知 5,168人、福島 4,855人、岡山 4,782人、三重 4,780人等ニシテ少キハ香川 2,054人、鹿兒島 2,238人、山梨 2,360人、長崎 2,378人、北海道 2,451人、青森 2,527人、高知 2,622人等ナリ、右ハ市部及郡部ノ選舉區ヲ分別セサルノ數ナルヲ以テ不徹底ノ譏アルヘク、又人口ハ所謂乙種推計人口ヲ用キタルモノニシテ 絕對ニ信ヲ措キ難キノ點アルモ、大體各府縣ノ差異特徴ヲ見ルニ足ラン、殊ニ以上摘載シタル府縣中ニテモ北海道ト沖繩トハ之ヲ除外スルモ滋賀縣ト鹿兒島縣トハ全然反對ノ極端ヲ示スカ如シ、即チ一ハ議員數ニ對シ人口少クシテ有權者非常ニ多ク、一ハ人口甚タ多クシテ有權者稀少ナリ。

大正六年四月ノ選舉ニ於テ棄權率ハ最モ多キ府縣ハ北海道 15.3%トシ、次テ鹿兒島 14.6%、大阪 13.3%、岡山、13.1%、東京 12.4%、熊本 11.7%、廣島 11.4%、沖繩 10.7%、岩手 10.4%等ニシテ、其ノ少キハ鳥取 4.1%、静岡 4.4%、群馬 4.6%、岐阜 5.0%等ナリ、府縣ニ依リ此ノ如キノ差ヲ生スル所以ハ競争激烈ノ程度ニヨルカ、投票所ニ對スル距離ノ便宜ニヨルカ 其ノ何ノ故タルヲ知ラスト雖、鹿兒島、北海道、東京、大阪、沖繩、熊本、岩手、廣島等ハ前回ノ選舉ニ於テモ多ク、皆 10%以上ノ棄權アリタル地方ニシテ群馬、鳥取、静岡ハ前回ニ於テモ棄權者少キ地方ナリ。

大正六年選舉ノ際ニ於ケル議員ノ年齢別ハ三十五歳未満 9人、四十歳未満 32人、四十五歳未満 59人、五十歳未満 88人、五十五歳未満 139人、六十歳未満 52人、六十歳以上 42人ナリ、即チ五十歳以上五十五歳未満最モ多數ナリ、前回ニ比シ六十歳未満ノ階級 8人ヲ減シタルノ事實ハアルモ、大體ニ於テ年少者減シテ年長者増スノ傾向認メラル、即チ從來毎回ノ選舉ニ於テ其ノ最多數ハ必ス四十五歳以上五十歳未満ノ階級ニ在リシニ、今回ノ選舉ニ於テ始メテ五十歳以上五十五歳未満ノ階級最多數タルニ至リタルモ亦一徵候ナリ。

大正六年ノ選舉ニ於ケル議員ノ職業ハ 73人ノ無職業者ヲ別トシ農業 79人、辯護士 56人、會社員 53人、新聞雜誌記者 28人、商業 19人、醫師藥劑師 15人等ニシテ他ハ皆十人以下ナリ。農業ノ多數ナルハ初期以來繼續セル事實ナルモ 其ノ數ハ漸次減少ノ徵アリ辯護士ノ數ハ殆ント一定ス、會社員ノ數ハ明治四十五年ノ選舉以

來激増セリ、新聞雜誌記者モ亦増加ノ著シキモノナリ、但シ前回ニ對シテハ3名ヲ減シタリ、商業ハ今回ノ選舉ニ於テ最モ減少ノ大ナルモノナリ、反之醫師及藥劑師ハ今回俄然トシテ前年ノ2名ヨリ15名ニ膨脹セリ。

【府縣會議員】 府縣會議員選舉ノ現行法ノ下ニ全國殆ント同時ニ行ハレタルハ大正四年ノ事實アルノミ、但シ佐賀、島根ノ二縣ハ同年ニ於テ行ハサリシカハ各近キ年ノモノヲ以テ補ヒ其ノ總數ヲ掲ケレハ北海道、沖繩ヲ除キ議員1,701人中市部241人、郡部1,460人ナリ、有権者總數ハ2,384,078人ニシテ、其最モ多キ府縣ハ愛知111,618人ニシテ、兵庫93,944人、新潟85,682人、長野83,836人、廣島83,636人等之ニ次ク。少キハ鳥取19,325人、山梨24,176人、香川25,135人、青森27,953人、奈良28,138人等ナリ、有権者中有効投票數1,896,210人、無効投票數27,858人、棄權46,007人ナリ。

【郡會議員】 郡會議員ノ選舉モ亦現行法規ノ下ニ行ハレタルモノ大正四年ノ數アルノミ、其ノ議員ノ全國四十五府縣ノ總數ハ12,789人ニシテ其ノ有権者數ハ2,567,488人ナリ、右有権者中投票シタルモノ有効票1,448,268、無効票31,857、投票セザリシ者745,442人ナリ。

【市町村會議員】 市町村會ニ關スル數ハ上記各會ト異リ實

XXXIII. 官吏公吏及恩給

【官吏】 大正六年末現在國庫ヨリ俸給ヲ受クル帝國文官ノ數ハ、勅任774、奏任8,799、判任72,567、計82,141、其ノ俸給年額勅任3,129,829圓、奏任13,063,158圓、判任30,683,260圓、計46,276,246圓ナリ、之ニ更ニ雇傭人員146,057、其ノ俸給31,110,254圓ヲ加フルトキハ、國庫ヨリ俸給ヲ受タル文官並雇傭ノ合計ハ人員228,198人、俸給年額77,376,500圓ナリトス、右ノ内ニハ臨時雇傭及門衛等並休職官吏ハ之ヲ含マス、又陸海軍武官及地方費支辨ノ官吏ハ此ノ以外ナリ。上記國庫官吏ノ數ハ之ヲ前年ニ比スルニ勅任ヨリ雇傭ニ至ルマテ各階級悉ク人員俸給共ニ増加ヲ示ス、而シテ一人平均年俸ヲ算出シ見ルニ勅任4041.7圓、奏任1,484.7圓、判任414.5圓、雇傭213.0圓ニシテ前年ニ比シ勅任18.2圓、雇傭4.0圓ヲ増加シ、奏任30.0圓ヲ減シ、判任ハ全然前年ト同一ナリ、右ハ文官總體ノ最近ニ於ケル現狀ナルカ、其ノ年々ノ變遷ハ本書統計表ニ於テ觀知セラルヘク、又前年鑑ニ略述シ置キタリ。

大正六年末文官人員ヲ各省廳別ニ見ルニ、勅任官ハ文部省334最モ多ク、司法省90、朝鮮總督府81之ニ次キテ著シク多數ナリ、奏任官ハ前年迄ハ府縣最モ多數ナリシカ本年ハ司法省1,718最多ニシテ、府縣1,685、文部省1,223、朝鮮總督府934等順次相次テ

際行ハレタル選舉ノ際ノ數ニアラス、各年末ノ數ヲ掲ク、右ニ依レハ大正六年末全國市會ハ、會數71、議員2,446人、有権者294,077人ナリ、前年ニ比シ會數3、及議員114人ヲ増シタルニ拘ラス有権者3,879人減少セリ、大正四年ノ其ノ前年ヨリ減シタルハ營業稅率改正ノ結果タルヲ想像シ得ヘキモ其後尙減少ノ傾向ハ其ノ原因詳ナラス。

町會ハ大正六年末會數1,284、議員數21,744、有権者43,811何レモ前年ニ比シ増加セリ。

村會ハ大正六年末會數10,323、議員134,196人、有権者3,697,512人ナリ。前年ニ比シ會數8ヲ減シ議員4,207人、有権者12,272人ヲ増セリ、村會數ノ減少ハ勿論村ノ合併又ハ町ニ變改ノ爲メナリ、右ノ外町村組合會大正六年末ニ會數69、議員959人、有権者20,850人アリ。町村總會々數1、有権者7人アレトモ共ニ年々減少ノ傾向ヲ示ス。

北海道ノ區制及一二級町村制ニ依ルモノ並沖繩縣及東京、長崎、鹿兒島等ノ島嶼町村制ニ依ル區及町村ハ前記以外ナリ、其數區會6、議員171人、有権者8,991人、又町會ハ會數28、議員524人、有権者10,604人、村會數263、議員3,157人、有権者150,597人ナリ、而シテ北海道ニ町村組合會1、議員10人、有権者22人アリ。

多數ナリ、判任官ハ府縣ニ於テハ地方費支辨ノモノ、8,237人アリ之ヲ除外シテ各廳ヲ比較スレハ、逓信省11,928各省中ノ第一ナリ、次テ大藏省10,046、内閣7,250、朝鮮總督府6,587等多シ、雇傭ハ逓信省47,579、内閣25,736、臺灣總督府17,429、司法省12,950、朝鮮總督府12,249等多數ナリ、斯クテ文官總人員(雇傭ヲ含ム)ノ多キモノ順位ニ逓信、内閣、臺灣、朝鮮、司法等ノ各省府ナルモ、俸給ノ多少ハ右ト同シカラス、其最モ多キハ内閣ニシテ、次ハ逓信、朝鮮、臺灣、司法等ナリ、内閣ノ俸給多キハ必シモ高官ノ人員多シトイフニアラス、寧ろ其多數ノ雇傭員鐵道從業者カ他官廳ノ者ニ比シ比較的高給ヲ給セラルニ主トシテ因由ス、朝鮮、臺灣ノ人員ニ於テハ逓信省ト格段ノ差アルニ拘ラス、俸給ニ於テ殆ント相似タルハ其殖民地タル關係上平均俸給高キニ依ル、尙前年ニ於テハ右殖民地ノ俸給總額ハ寧ろ逓信省ノ上ニ在リシニ本年其次位ニ下リシハ兩殖民地ノ雇傭ノ計算方法前年ト異リ從來雇傭中ニ算入シタリシ或ル種ノモノヲ本年ヨリ除クニ至リシ結果ナリトス。

文官ノ各廳各部局ノ分配ニ關シテハ此ニ其記述ヲ省略スルモ、今在外公館ノ官吏ヲ見ルニ、大正六年末大使館公使館人員10

事館人員395ナリ、前年ニ比シ前者ハ3、後者ハ25ヲ増セリ、而シテ領事館人員中159人ハ警部及巡查ナリ。在外公館人員モ逐年増加ノ趨勢ニ在リテ、只累年ノ數字ノ上ニ二回ノ變態ヲ認メ得ルカ如シ、一ハ大正二三年ノ減少ニシテ、他ハ明治三十七、八年ノ著増ナリ、前者ハ行政整理ニ基ク減員ニシテ後者ハ戰時ノ際ノ臨時増員ノ結果ナルカ如シ。

大正六年末現役在職武官ノ數ハ陸軍ハ准士官以上人員16,783、其年俸15,151,768圓、海軍ハ候補生及下士ヲ含ミ人員18,335、其年俸9,447,936圓ナリ、前年ニ比シ陸軍ハ440人、214,005圓、海軍ハ526人、411,621圓ヲ増加シ、且ツ大正二年ノ行政整理ノ年ヲ除クノ外年々増加ノ數ヲ示ス。大正六年現在者中、將官ハ陸軍181、海軍98、上長官及士官ハ陸軍14,587、海軍4,437、准士官ハ陸軍2,015、海軍1,330ナリ、又海軍ノ下士12,416、候補生152ナルモ陸軍ハ是等ノ數ヲ缺カス。

大正六年末文武官吏ノ休職、待命、停職ノ數ハ、高等官607、判任官378、計985ナリ、前年ニ比シ著シク減少セリ、累年ノ數ヲ見ルニ明治三十四、五、六年頃最モ多キモ同三十七八年後ノ數ニ於テハ明治四十二年及大正二年等所謂増俸及整理ノ際ニ於テ著シク多數ヲ呈ス。尙大正六年末ノ休職者ヲ細見スレハ、文官520、武官63、内陸軍303、海軍300ナリ、而シテ武官ハ高等官多ク文官ハ判任官多ク事實前年ト同シ、又文官中ニテハ内閣、司法省、府縣等特ニ多ク、司法省ノ殆ント全部ハ高等官ニシテ内閣及府縣ノ判任官多數ナル等亦前年ト同シ。

【恩給及扶助料】 大正六年末現在政府ヨリ恩給又ハ扶助料ヲ受クル總人員ハ264,209、其年額26,017,625圓ナリ、前年ニ比シ3,787人、905,544圓ヲ増加セリ、今大正六年ノ數ヲ恩給ト扶助料トニ分掲スレハ、恩給157,729人、19,970,656圓、扶助料106,480人、6,046,969圓ニシテ、上記本年ノ増加ハ主トシテ恩給ノ増加ニ基因シ、扶助料ハ金額僅ニ3萬餘圓ヲ増シ而モ人員ニ於テハ却テ減少ヲ示ス、右減少ハ主トシテ陸軍軍人ノ扶助料受領者ノ減少ニ由ル恐ク死亡其他ノ原因ニ依リ權利ノ消滅ナルヘシ。而シテ右恩給金額ノ内容ハ文官5,060,103圓、陸軍11,249,696圓、海軍3,660,857圓ニシテ文官ハ恰モ武官ノ1/3ニ當リ、又扶助料ハ文官675,503圓、陸軍4,866,651圓、海軍504,815圓ニシテ文官扶助料ハ武官ノ約1/3ニ相當ス。尙恩給ハ明治三十九年ニ扶助料ハ明治三十八年ニ特異ノ激増ヲナシ、共ニ最近ニ於テ明治三十四年ノ數ニ7倍シタルノ事實並文武官ノ各種ノ累年ノ趨勢ニ就キテハ前年鑑ニ略述シタルハ茲ニ之ヲ略ス。

尙大正六年末現在恩給及扶助料ヲ受クル者ヲ勅奏判ノ階級別ニ見ルニ、勅任ハ文官717人、664,638圓、陸軍348人、483,694圓、

海軍220人、323,729圓ニシテ此階級ニ於テハ文官多シ、奏任ハ文官5,727人、1,801,591圓、陸軍19,709人、5,713,328圓、海軍3,105人、1,188,690圓、又判任ハ文官24,387人、2,900,094圓、陸軍40,260人、3,331,913圓、海軍16,277人、1,646,703圓、外ニ巡查、看守6,520人、342,933圓アリ、而シテ右勅奏判ノ外卒、陸軍130,450人、6,585,832圓、海軍16,395人、1,006,550圓アリ。

恩給及扶助料受領者ノ現狀ハ上記ノ如クナルカ、大正六年中、新ニ之ヲ受領シタル人員及金額ハ、勅任132人、162,575圓、奏任1,958人、688,967圓、判任5,573人、587,683圓、卒3,658人、188,634圓、計11,331人、1,627,859圓ナリ、之ヲ文、陸、海ノ三種ノ別ニ依リテ見レハ、同年ハ帝國トシテ世界ノ大戰争ニ參加中トハイニ事實平時ト等シキカ故ニ勅任判任共ニ文官最モ多ク僅ニ奏任ニ於テ陸軍ノ數額擴大ナルノミ。右ハ同年中新ニ受領ノ數ナルカ其權利消滅者ニ關スル統計材料ナシ。

恩給及扶助料ノ外、軍人恩給法、官吏遺族扶助法其他ノ法令ニ依リ一時賜金ヲ受領シタル者、大正六年中、人員1,615人、金額153,218圓アリ、内勅任3人、4,320圓、奏任179人、50,533圓、判任1,310人、84,392圓、卒123人、13,433圓アリ、而シテ右ノ大部分ハ陸海軍ノ軍人トス。

【宮内官吏】 大正六年末宮内官吏ノ現在員ハ雇傭ヲ含マサル總數2,930人、其年俸1,691,976圓、前年ニ比シ110人73,500圓ヲ増加セリ、現在員ノ内譯ハ勅任99人、199,100圓、奏任344人、481,590圓、判任2,487人、1,010,986圓ナリ、而シテ其一人平均ヲ算出スルトキハ、勅任2,611圓、奏任1,401圓、判任407圓ナリ、之ヲ國費ノ官吏ト對照スルニ勅任ノ平均俸約1/2ナルハ宮内勅任官ハ殆ント名譽職ニ等シキ者ヲ含メハナルヘク、奏任ハ約84圓少シ是又李王職、式部職、侍從職其他地位高クシテ而モ俸給比較の少キモノ多キノ結果ナルヘシ、而シテ判任ハ國庫ノ官吏414圓ナルニ對シ宮内官吏407圓ニシテ其差僅ニ7圓ナリ、而モ國庫ノ判任官平均中ニハ地方費支辨ノ郡官吏及巡查等比較的薄給ノ者ヲ含マサルニ反シ宮内判任官中ニハ主殿寮ノ警守諸陵寮ノ陵墓守部等極メテ下級ノ者ヲ含ミタル平均ニシテ尙且僅ニ7圓ノ少差ニ過キサルヲ見レハ間接ニ國庫判任官ノ俸給ノ厚カラサル證左ト爲ス。

【公吏】 大正六年末ニ於ケル府縣以下地方自治體ニ於ケル公吏員ノ數ハ、府縣名譽職參事會員及吏員9,053人、郡名譽職參事會員及吏員3,973人、市參事會員及市町村吏員286,737人、合計府縣都市町村ノ地方自治行政ニ從事スル總人員ハ299,763人ナリ。

府縣名譽職參事會員ノ數ハ法令ニ定ムル所ナルヲ以テ前年ト異ルナク各府縣7名若ハ10名ナリ、府縣有給吏員ノ數ハ大正六年末現在8,717人ニシテ前年ニ比シ403人ヲ増加セリ、其ノ員數ノ多少

ハ府縣ニ依リ大差アリ、大キハ、岡山 703、栃木 618、愛媛 441、秋田 420等ニシテ少キハ佐賀 34、熊本 42、京都 49等ナリ、而シテ其俸給ハ最多栃木 170,701圓、愛知 130,382圓、石川 133,724圓等ヨリ、最少佐賀 9,744圓、熊本 11,918圓等ニ至ル。

大正六年末現在郡名譽職參事會員ノ數ハ 2,672人ニシテ前年ヨリ更ニ 9人ヲ減ス、名譽職常設委員 34、前年ニ比シ 1ヲ減ス、之ヲ置ク府縣ハ全國中僅ニ 8府縣ニ過キス。郡有給吏員ハ 1,267人ニシテ前年ニ比シ 8人ヲ減セリ、是亦府縣ニ依リ其數ニ大差アリ、最モ多キハ福岡縣ノ 132人ニシテ山梨縣ハ全然之レ無シ、但シ北海道及沖繩縣ハ法制上之ヲ存セス。

大正六年末全國市區町村吏員ノ總數 286,576人中市（區ヲ含ム）吏員ハ市長以下總テヲ合シ 14,147人ナリ、前年ニ比シ 622人ヲ増加セリ、其ノ吏員ノ内譯ヲ舉ケレハ、市長 76、助役 81、參事會員 425、收入役 80、副收入役 10、常設委員 1,147、名譽職區長及代理 1,147、有給區長及代理 25、書記 4,906、雇傭其他 6,242ナリ、斯ク掲ケ來ツテ前年ト對照スレハ 有給區長及代理ノ前年ト同數ナル外トシテ増加セサルハナシ、サレハ總吏員ノ増加ハ主トシテ

新設ノ市ノ加ハリタルニ伴フモノ、如シ。而シテ是等ノ吏員中有給吏員ノ俸給年額ハ 4,069,686圓ニシテ前年ヨリ 295,468圓ヲ増加セリ、今此ノ俸給ヲ有給吏員 11,420人ニ割リ當ツルトキハ一人平均年俸 356圓強ニシテ前年ニ比シ 11圓ノ増加ナリ。

大正六年末現在全國町村吏員ノ總數ハ 272,429人ナリ、本年中町村ノ市ト爲リタルモノ少カラサル 結果町村數ヲ減シタルニ拘ラス吏員ノ數ハ前年ニ比シ却テ 5,517人ヲ増加セリ、此ノ現象ハ獨リ本年ニ於テ然ルノミナラス累年共通ノ趨勢ナリ、右大正六年末ノ町村吏員ヲ細別シテ掲出スレハ、名譽職町村長 9,703、有給町村長 1,727、名譽職助役 8,415、有給助役 3,226、收入役 11,176、副收入役 31、常設委員 54,767、區長及代理 142,028、書記 36,915、雇傭其他 4,441ナリ、而シテ前年ニ對シ著シク増加シタルハ常設委員、區長及代理並書記ナリ、尙町村長ハ有給職及名譽職ヲ減シ、助役ハ名譽職ヲ減シテ有給ヲ増加セリ、上記ノ内有給吏員ノ合計ハ 57,516人ニシテ俸給年額 9,246,884圓ナルヲ以テ其ノ一人平均年俸 161圓弱ニ當リ前年ニ比シ約 3圓ヲ増セリ。



統計表目錄

I. 土 地

1 經緯度	頁 2
2 周圍及面積（全國）	3
3 道府縣別面積	3
4 郡市町村數及役所役場數（全國、地方別） 自明治三十五年未至大正六年末	4
5 民有地反別（全國） 自明治二十一年未至大正七年首	5
6 民有有租地地目別反別及地價（全國、地方別） 自明治二十一年未至大正七年首	6
7 民有免租地及民有年期地地種別反別（全國、地方別） 自明治二十六年未至大正七年首	8

II. 氣 象

8 氣象總覽（測候所別） 大正六年	10
9 中央氣象臺外十四測候所累年及最近一年ノ月別氣象	14

III. 人 口

甲、人口ノ靜態

10 帝國人口總數及男女別 自明治五年未至大正五年末	20
11 本籍人口年齡別 其ノ一（全國） 自明治三十一年未至大正二年末	22
12 本籍人口年齡別 其ノ二（全國） 自明治三十一年未至大正二年末	23
13 本籍人口男女年齡各歲別（全國） 大正二年末	24
14 本籍人口男女有配偶者無配偶者（全國） 自明治十九年未至大正二年末	25
15 本籍人口男女有配偶者無配偶者年齡五歲階級別（全國） 大正二年末	25
16 本籍人口、現住戶數及現住人口（地方別） 大正二年末	26
17 現住人口（地方別） 自大正四年未至大正七年末	27
18 現住人口階級別市町村數及其ノ人口（全國） 自明治二十一年未至大正二年末	29
19 市區現住人口及現住戶數 自明治三十一年未至大正二年末	30
20 人口壹萬人以上ノ町ノ現住人口及現住戶數 大正二年末	31
21 人口壹萬人以上ノ村ノ現住人口及現住戶數 大正二年末	33

乙、人口ノ動態

22 婚姻、離婚、生産、死産、死亡（全國） 自明治五年未至大正五年	34
23 婚姻、離婚、生産、死産、死亡（地方別） 大正五年、大正四年	35
24 種類別婚姻（全國、地方別） 自明治三十八年未至大正五年	37
25 婚姻者各自ノ年齡別（全國） 自明治三十八年未至大正五年	39
26 種類別離婚（全國、地方別） 自明治三十八年未至大正五年	40
27 夫婦關係繼續期間別離婚（全國） 自明治三十八年未至大正五年	42
28 生産、死産男女及身分別（全國） 自明治三十八年未至大正五年	42
29 生産男女及身分別（地方別） 大正五年、大正四年	43
30 死亡者男女別（地方別） 大正五年、大正四年	45
31 死亡者男女月別（全國） 自明治四十五年大正元年未至大正五年	46
32 死亡者男女年齡五歲階級別（全國） 自明治四十五年大正元年未至大正五年	46
33 死亡者男女年齡各歲別（全國） 大正五年、大正四年	47
34 乳兒（滿一歲以下）男女別死亡（地方別） 自明治四十四年未至大正五年	48
35 死亡原因別（全國） 自明治四十五年大正元年未至大正五年	50
36 死亡者男女及職業別（全國） 自明治四十五年大正元年未至大正五年	52
37 死亡者死因月別（全國） 大正五年、大正四年	53
38 死亡者死因年齡別（全國） 大正五年、大正四年	55

39	死亡者男女及死因別 (地方別) 大正五年、大正四年	57
40	現住人口五萬以上ノ市區及町別婚姻、離婚、生產、死産、死亡 大正五年、大正四年	65
41	生命表 (全國) (自明治四十一年至大正二年)	66
42	朝鮮臺灣樺太及國境外ニ於ケル道府縣在籍人ノ婚姻、離婚、生產、死亡 自明治三十八年至大正五年	68
43	渡航地及目的別外國旅券下附人員 (總數、渡航地別) 自明治四十三年至大正六年	69
丙、在外本邦人及在留外國人		
44	外國在留本邦人男女別 大正六年六月末	70
45	外國在留本邦人男女及職業別 大正六年六月末	72
46	本邦在留外國人戶口 (全國、地方別) 自明治三十六年末至大正六年末	78
47	本邦在留外國人國籍別 大正六年末	78
48	本邦在留外國人職業別 (全國、地方別) 自明治四十一年末至大正六年末	79
49	本邦在留各國大使館公使館及領事館人員 自明治四十年末至大正六年末	79

IV. 農 業

50	主要農産物作付反別 (全國) 自明治十一年至大正六年	80
51	主要農産物作付反別 (地方別) 米、麥、粟、蕎麥 大正六年他 大正五年	82
52	主要農産物收穫高 (全國) 自明治十年至大正六年	84
53	主要農産物收穫高 (地方別) 米、麥 大正六年他 大正五年	86
54	主要農産物作付反別一反步ニ付收穫高 (全國、地方別) 米、麥 大正六年他 大正五年	88
55	養蠶戶數、掃立枚數、産繭高及其價額 (全國) 自明治三十二年至大正六年	90
56	養蠶戶數、掃立枚數、産繭高及其價額 (地方別) 大正六年	90
57	主要果實收穫高 (全國、地方別) 自明治四十一年至大正五年	92

V. 家畜及家禽

58	牛、馬、山羊、綿羊、豚總數及牝牡別並鷺鷥總數 (全國、地方別) 自明治十一年至大正五年	94
59	牛ノ種類及牝牡、種牡牛ノ種類、乳牛 (全國) 自明治十一年末至大正五年末	96
60	馬ノ種類及牝牡、種牡馬ノ種類 (全國) 自明治十一年末至大正五年末	97
61	牛ノ種類及種牡牛ノ種類、乳牛 (地方別) 大正五年末	96
62	馬ノ種類及種牡馬ノ種類 (地方別) 大正五年末	97
63	牛ノ出産、斃死及屠殺頭數 (全國) 自明治三十二年至大正五年	98
64	馬ノ出産、斃死及屠殺頭數 (全國) 自明治三十二年至大正五年	99
65	搾乳場、乳牛(二歳以上)搾乳高 (全國、地方別) 自明治三十八年至大正五年	98
66	屠場、屠殺頭數及價額 (全國) 自明治二十七年至大正五年	100
67	屠場、屠殺頭數及價額 (地方別) 大正五年	100
68	家畜市場ニ於ケル家畜ノ交易 (其ノ一、其ノ二) (全國) 自明治三十八年至大正五年	101
69	家畜傳染病ニ係ル牛馬豚犬發病頭數 (全國) 自明治二十四年至大正五年	102

VI. 山林及狩獵

70	森林及原野面積 (全國、地方別) 自明治三十二年度末至大正四年末	103
71	保安林所有者及種類別 (全國、種類別、地方別) 自明治三十二年度末至大正五年末	104
72	森林植栽反別及伐採價額 (全國、地方別) 自明治三十二年度至大正五年度	106
73	森林被害面積及價額 (全國) 自明治三十二年度至大正五年度	107
74	狩獵免狀下付數 (全國、地方別) 自明治三十二年度至大正五年度	107

VII. 漁業及製鹽

75	漁船數 (地方別) 大正五年末	109
76	水産物ノ品目及數量、價額 (全國) 自明治三十八年至大正五年	110
77	水産物品目別價額 (全方別) 大正五年	112

78	水産製造物品目及數量、價額 (全國) 自明治三十八年至大正五年	116
79	水産製造品目別價額 (地方別) 大正五年	118
80	水産養殖場數、面積及收穫物價額 (全國) 自明治三十二年至大正五年	121
81	製鹽 (全國、專賣支局別) 自明治三十九年度至大正五年度	121

VIII. 鑛 業

82	鑛種別鑛區及坪數 (全國、鑛種別) 自明治三十二年末至大正五年末	123
83	鑛種別産生鑛區數 (全國) 大正五年末	123
84	鑛種別砂鑛區及坪數 (全國、鑛種別) 自明治四十三年末至大正五年末	124
85	鑛夫現在人員及其勞役延人員 (全國) 自明治三十二年至大正五年	124
86	鑛物産額及價額 (全國) 自明治三十七年至大正五年	125
87	鑛物産額 (地方別) 大正五年	125
88	鑛山變災死傷人員 (總數、鑛山別、原因別) 自明治三十二年至大正五年	128

IX. 工業及賃金

89	諸官廳直轄工場 (總數) 自明治三十八年度末至大正六年度末	129
90	工場數、使用人員、賃金就業日時及其比例 (全國) 自明治三十三年至大正五年	130
91	工場數、使用職工種類別 (全國) 自明治四十五年大正元年至大正五年	132
92	工場數及使用人員 (地方別) 大正五年	135
93	各種工業戶數 (全國) 自明治三十五年至大正五年	136
94	各種工業平均一日從業者 (全國) 自明治三十五年至大正五年	137
95	各種工業生産高 (全國) 自明治三十五年至大正五年	139
96	各種工業戶數 (地方別) 大正五年	141
97	各種工業生産高 (地方別) 大正五年	144
98	製絲戶數及蠶絲生産高 (全國、地方別) 自明治三十三年至大正五年	148
99	綿絲紡績事業 (全國) 自明治三十三年至大正五年	148
100	綿絲紡績事業 (地方別) 大正五年	150
101	織物生産高 (全國、地方別) 自明治三十三年至大正五年	150
102	織物生産高種類細別 (全國) 大正五年	152
103	西洋紙製造工場 (全國、地方別) 自明治四十年至大正五年	152
104	肥料營業者及販賣價額 (全國) 自明治三十九年至大正五年	153
105	發明特許、實用新案登錄、意匠登錄、商標登錄出願數及特許登錄數 (總數) 自明治四十年至大正五年	153
106	發明特許及實用新案登錄種類別 (總數) 大正五年	153
107	諸儲平均賃金 自明治四十五年大正元年至大正五年	155
108	諸儲賃金 大正五年	156
109	各種賃金指數 自明治三十三年至大正五年	158

X. 外國貿易

110	輸出輸入物品總價額 自明治元年至大正六年	159
111	内外國産別及特別輸出輸入物品價額 自明治三十一年至大正六年	161
112	輸出輸入物品價額國別 自大正四年至大正六年	162
113	輸出輸入物品價額物品種類大別 自明治四十一年至大正六年	163
114	輸出額百萬圓以上ノ品目別 自大正二年至大正六年	164
115	輸入額百萬圓以上ノ品目別 自大正二年至大正六年	166
116	輸出品目別數量及價額 大正六年	167
117	輸入品目別數量及價額 大正六年	171
118	内國産輸出品國別 自大正四年至同六年	177
119	外國産輸入品國別 自大正四年至同六年	196

120	內國產輸出及外國產輸入物品價額月別	自明治四十一年至大正六年	203
121	輸出輸入物品價額港別	自大正四年至大正六年	203
122	船籍別外國往來船舶積載輸出輸入物品價額	自大正四年至大正六年	204
123	輸出輸入金銀貨及金銀地金總價額	自明治五年至大正六年	205
124	輸出輸入金銀貨及金銀地金國別	自大正二年至大正六年	205

XI. 內國商業及會社

125	商業會議所 (全國、商業會議所別)	自明治二十四年至大正五年	207
126	取引所 (全國、取引所別)	自明治三十一年至大正五年	208
127	米穀取引所賣買高月別 (全國)	自明治二十七年至大正五年	210
128	米穀取引所各月公定相場 (全國、取引所別)	自明治二十七年至大正五年	210
129	物價其一 (東京市、大阪市)	自明治三十三年至大正五年	214
130	物價其二 (樞要ナル都市別)	大正五年	216
131	資本金高別會社數及其ノ拂込資本金 (全國)	自明治三十八年末至大正五年末	218
132	營業部類大別會社數、其ノ拂込資本金及積立金 (全國)	自明治三十八年末至大正五年末	220
133	營業種類細別會社數、其ノ拂込資本金及積立金	大正五年末	222
134	地方別資本金高別會社數及其ノ拂込資本金	大正五年末	224
135	地方別營業種類大別會社數其ノ拂込資本金及積立金	大正五年末	226

XII. 產業組合及同業組合

136	各種產業組合 (全國、地方別)	自明治三十三年末至大正五年末	228
137	重要物產同業組合及同聯合會 (全國、地方別)	自大正元年末至同五年末	230

XIII. 電氣事業及瓦斯事業

138	電氣事業數 (全國)	自明治三十六年末至大正五年末	232
139	電氣事業ノ原動力別發電力 (全國)	自明治三十六年末至大正五年末	232
140	事業數及其ノ發電力並原動力別發電力 (地方別)	大正五年	234
141	原動力、電壓及發電力別發電所數 (全國)	自明治四十年末至大正四年末	235
142	電線路互長及電線延長 (全國)	自明治三十六年末至大正五年末	235
143	營利電氣事業營業決算期末事業數、資本金及電燈、電動機取附箇數 (全國)	自明治三十六年至大正五年	235
144	電氣供給府縣別	大正五年末	236
145	電氣供給事業者別	大正五年	236
146	電氣事業故障災害件數 (全國)	大正五年	240
147	瓦斯事業 (全國)	自明治十三年度至同四十三年	240
148	瓦斯供給府縣別	自明治十四年度末至大正六年三月末	240
149	瓦斯供給事業者別	大正六年末	242

XIV. 交通

150	道路延長 (全國、地方別)	自明治三十五年末至大正四年末	244
151	橋梁數及其ノ構造種類別 (全國)	自明治三十五年末至大正四年末	244
152	鐵道開業線路及未開業線路 (全國)	自明治五年末至大正五年末	245
153	鐵道停車場、線路、車輛數及走行哩 (總數)	自明治三十一年度末至大正五年末	246
154	全國鐵道軌道延長、平均營業哩、列車走行哩、乘客數及貨物噸數 (經營者別)	大正五年末	246
155	國有鐵道職員 (總數部局別)	明治四十一年度末至大正五年末	250
156	私設鐵道及輕便鐵道職員 (總數)	自明治四十一年度末至大正五年末	251
157	國有鐵道聯絡船舶運輸	大正五年末	251
158	鐵道資本金及營業收入支出	自明治三十五年度至大正五年末	251
159	鐵道事故件數及死傷人員	自明治三十四年度至大正五年末	252

160	電氣鐵道線路及車輛、乘客數 (總數及經營者別)	自明治二十八年至大正五年	252
161	馬車鐵道線路及車輛、馬匹、乘客數 (總數、地方別)	自明治十六年至大正五年	254
162	人車鐵道及汽動車鐵道線路車輛、乘客數 (總數、地方別)	自明治四十年至大正五年	254
163	諸車 (全國、地方別)	自明治三十一年度末至大正六年末	255
164	河川		256
165	港灣數 (地方別)	大正六年十月一日	257
166	官、公、私設航路標識 (全國)	自明治六年末至大正五年末	258
167	入港船舶數及噸數	大正五年	259
168	噸數階級別汽船、帆船(噸數船)船數及其噸數 (全國)	自明治三十二年末至大正五年末	260
169	石數階級別帆船(石數船)船數及其積石數 (全國)	自明治三十二年末至大正五年末	262
170	登簿汽船及登簿帆船、船質、船齡 (全國)	自明治三十四年末至大正五年末	264
171	登簿船異動 (全國)	自明治三十二年至大正五年	264
172	帆船 (石數船)	大正五年末	265
173	小船 (全國、地方別)	自明治三十二年度末至大正六年末	266
174	造船所數、船架數及製造船舶 (全國、地方別)	自明治三十二年至大正五年	267
175	造船獎勵證書下付船舶及獎勵金 (總數、造船所別)	自明治二十九年度至大正五年末	268
176	海技免狀受有者 (總數)	自明治三十二年末至大正五年末	268
177	遭難船月別及種類別	自明治三十二年至大正五年	269
178	遭難船遭難地別 (總數、地方別)	自明治三十二年至大正五年	270
179	遭難船死傷人員及遭難種類別	自明治三十二年至大正五年	271
180	遭難船被救助及救助人員 (全國、地方別)	自明治三十二年至大正五年	271
181	地方海員審判所取扱件數及人員 (總數、審判所別)	自明治三十一年至大正五年	272
182	地方海員審判所裁決件數及人員 (總數、事件種類別)	自明治三十一年至大正五年	272
183	高等海員審判所取扱件數人員及審判別 (總數)	自明治三十一年至大正五年	273
184	高等海員審判所裁決件數人員事件種類別	自明治三十二年至大正五年	273
185	命令航路ニ屬スル汽船會社資本金、船數及運輸	自明治三十二年度至大正五年末	274
186	土木費費途別 (全國)	自明治三十二年度至大正二年度	274
187	土木費中道路橋梁河川費ノ通常費及災害費別 (全國)	自明治三十四年度至大正二年度	276
188	土木費負擔者別其一 (全國)	自明治三十二年度至大正二年度	276
189	土木費負擔者別其二 (全國)	自明治三十二年度至大正二年度	276

XV. 通信及郵便爲替貯金事業

190	郵便及電信、電話局所、郵便函並職員 (總數)	自明治三十五年度末至大正五年末	278
191	通常郵便線路 (總數)	自明治三十五年度末至大正五年末	278
192	郵便及電信電話局所 (地方別)	大正五年末	279
193	內外國通常郵便物 (總數、地方別)	自明治三十五年度至大正五年末	279
194	外國通常郵便物 (總數、五大洲別、國別)	自明治三十五年度至大正五年末	280
195	內外國小包郵便物 (總數、地方別)	自明治三十五年度至大正五年末	282
196	電信線路 (總數)	自明治三十五年度末至大正五年末	282
197	內外國發著電報 (總數、地方別)	自明治三十五年度至大正五年末	283
198	外國有料發著電報國別 (總數、五大洲別、國別)	自明治三十五年度至大正五年末	284
199	電話線路 (全國)	自明治三十五年度末至大正五年末	284
200	電話加入人員及加入區域內外通話度數 (全國、地方別)	自明治三十七年度至大正五年末	285
201	內國郵便爲替振出口數、金額及拂渡口數、金額 (總數、地方別)	自明治三十五年度至大正五年末	285
202	外國郵便爲替 (總數、國別)	自明治三十五年度至大正五年末	288
203	郵便貯金、預度數、拂出度數、預人員及預金額 (總數)	自明治三十五年度至大正五年末	289
204	郵便貯金、預度數、拂渡度數、預人員、預金高 (地方別)	大正五年	290
205	保管證券受人及拂渡度數、人員、預面金高 (總數)	自明治三十五年度至大正五年末	291

206	保管證券受入及拂渡人員、額面金高 (地方大別) 大正五年度	291
207	郵便振替貯金受拂高 (總數、地方大別) 自明治三十八年度至大正五年度	292
208	年金恩給拂渡高給與金口及數金額 (總數) 自明治四十五年大正元年度至大正五年度	293
209	年金恩給拂渡高口數及金額 (總數) 自明治四十三年度至大正五年度	293
210	郵便電信電話收入 (決算) 自明治四十四年度至大正四年度	294

XVI. 貨幣及度量衡

211	造幣局受領金銀銅地金 自創業至大正六年度	295
212	貨幣鑄造及發行高 自創業至大正六年度	295
213	貨幣鑄造及發行高種類別 自創業至大正六年度	296
214	小額紙幣發行高 大正六年度	297
215	度量衡器檢定箇數及合格數 自明治三十八年度至大正五年度	297
216	度量衡器需用高 (全國、地方別) 自明治三十八年度至大正五年度	298
217	度量衡器第一種取締成績 (全國、地方別) 自明治三十八年度至大正五年度	299

XVII. 銀行及金融

218	銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 (全國、銀行別) 自明治三十二年至大正五年	300
219	銀行預金、借入金及再割引手形 (全國、銀行別) 自明治三十二年至大正五年	300
220	銀行貸出金、割引手形及荷爲替手形 (全國、銀行別) 自明治三十二年至大正五年	302
221	銀行預ヶ金、有價證券及金銀在高 (全國、銀行別) 自明治三十二年至大正五年	302
222	日本銀行支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 自明治三十二年至大正五年	303
223	日本銀行兌換銀行券發行高準備及交換高 (總數、月別) 自明治三十二年末至大正五年末	304
224	日本銀行預金 自明治三十二年至大正五年	304
225	日本銀行貸出金、貸付金年末殘高抵當別 自明治三十二年至大正五年	306
226	日本銀行割引手形 自明治三十二年至大正五年	306
227	日本銀行預ヶ金、公債證書及金銀在高 自明治三十二年至大正五年	306
228	日本銀行諸手形 自明治三十二年至大正五年	307
229	日本銀行割引手形種類別 自明治三十二年至大正五年	308
230	橫濱正金銀行支店出張所、拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 自明治三十二年至大正五年	308
231	橫濱正金銀行銀行券發行高及準備並月別 自明治四十年末至大正五年末	309
232	橫濱正金銀行預金、借入金及再割引手形 自明治三十二年至大正五年	310
233	橫濱正金銀行貸出金、貸付金年末殘高抵當別 自明治三十二年至大正五年	310
234	橫濱正金銀行割引手形 自明治三十二年至大正五年	312
235	橫濱正金銀行預ヶ金、有價證券及金銀在高 自明治三十二年至大正五年	312
236	橫濱正金銀行諸手形 (總數、地方別) 自明治三十二年至大正五年	312
237	橫濱正金銀行割引手形種類別 自明治三十二年至大正五年	315
238	日本勸業銀行拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 自明治三十二年至大正五年	315
239	日本勸業銀行債券發行高、償還高及年末殘高 自明治三十二年至大正五年	316
240	日本勸業銀行預金 自明治四十三年至大正五年	316
241	日本勸業銀行貸付金及割引手形 自明治三十二年至大正五年	316
242	日本勸業銀行年賦償還貸付金 自大正三年至大正五年	317
243	日本勸業銀行定期償還貸付金 自大正三年至大正五年	317
244	日本勸業銀行預ヶ金、有價證券及金銀在高 自明治三十三年至大正五年	317
245	日本勸業銀行手形及種類別 自明治四十三年至大正五年	318
246	農工銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 (全國) 自明治三十二年至大正五年	318
247	農工銀行本店及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金及交付金 (地方別) 大正五年	318
248	農工銀行債券發行高、償還高及年末殘高 (全國) 自明治三十二年至大正五年	319
249	農工銀行預金及借入金 (全國) 自明治三十二年至大正五年	320

250	農工銀行貸付金及割引手形 (全國) 自明治三十二年至大正五年	321
251	農工銀行年賦償還貸付金 (全國) 自明治三十二年至大正五年	320
252	農工銀行年賦償還貸付金抵當貸信用貸別 (全國) 自明治三十二年至大正五年	322
253	農工銀行定期償還貸付金年限別 (全國) 自明治三十三年至大正五年	322
254	農工銀行定期償還貸付金業體別 (全國) 自明治三十三年至大正五年	322
255	農工銀行定期償還貸付金抵當貸信用貸別 (全國) 自明治三十二年至大正五年	323
256	農工銀行短期貸付金業體別 (全國) 自明治四十三年至大正五年	323
257	農工銀行預ヶ金、有價證券及金銀在高 (全國) 自明治三十二年至大正五年	323
258	農工銀行手形及割引手形種類別 (全國) 自明治四十三年至大正五年	323
259	北海道拓殖銀行支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 自明治三十三年至大正五年	324
260	北海道拓殖銀行債券發行高、償還高及年末殘高 自明治三十八年至大正五年	324
261	北海道拓殖銀行預金及借入金 自明治三十三年至大正五年	325
262	北海道拓殖銀行貸付金、割引手形及荷爲替手形 自明治三十三年至大正五年	325
263	北海道拓殖銀行年賦償還貸付金 自大正三年至大正五年	326
264	北海道拓殖銀行定期償還貸付金 自大正三年至大正五年	326
265	北海道拓殖銀行預ヶ金、有價證券及金銀在高 自明治三十三年至大正五年	326
266	北海道拓殖銀行諸手形 自明治三十五年至大正五年	327
267	臺灣銀行支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 自明治三十二年至大正五年	327
268	臺灣銀行銀行券發行高及準備並月別 自明治三十三年末至大正五年末	328
269	臺灣銀行預金、借入金及信託金 自明治三十二年至大正五年	328
270	臺灣銀行貸出金及貸付金年末殘高抵當別、割引手形及荷爲替手形 自明治三十二年至大正五年	330
271	臺灣銀行預ヶ金、有價證券及金銀在高 自明治三十二年至大正五年	330
272	臺灣銀行諸手形 自明治三十二年至大正五年	331
273	臺灣銀行割引手形種類別 自明治三十二年至大正五年	332
274	朝鮮銀行內地支店及入金、出金、純益金 自明治四十四年至大正五年	332
275	朝鮮銀行內地支店預金 自明治四十四年至大正五年	332
276	朝鮮銀行內地支店貸付金 自明治四十四年至大正五年	333
277	朝鮮銀行內地支店預ヶ金、金銀在高 自明治四十四年至大正五年	333
278	朝鮮銀行內地支店諸手形 自明治四十四年至大正五年	333
279	朝鮮銀行割引手形種類別 自明治四十四年至大正五年	334
280	日本興業銀行支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 自明治三十五年至大正五年	334
281	日本興業銀行債券發行高、償還高及年末殘高 自明治三十五年至大正五年	335
282	日本興業銀行預金、借入金及信託金 自明治三十五年至大正五年	334
283	日本興業銀行貸付金及割引手形 自明治三十五年至大正五年	336
284	日本興業銀行預ヶ金、有價證券及金銀在高 自明治三十五年至大正五年	336
285	日本興業銀行手形 自明治三十八年至大正五年	336
286	日本興業銀行割引手形種類別 自明治三十八年至大正五年	336
287	普通銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 (全國) 自明治三十二年至大正五年	337
288	普通銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 (地方別) 大正五年	337
289	普通銀行營業組織別 (全國) 自明治三十二年至大正五年	339
290	普通銀行預金、借入金及再割引手形 (全國) 自明治三十二年至大正五年	338
291	普通銀行預金、借入金及再割引手形 (地方別) 大正五年	340
292	普通銀行貸出金、貸付金年末殘高抵當別、割引手形及荷爲替手形 (全國) 自明治三十二年至大正五年	340
293	普通銀行貸付金及割引手形荷爲替手形 (地方別) 大正五年	342
294	普通銀行預ヶ金、有價證券及金銀在高 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正五年	343
295	普通銀行諸手形 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正五年	344
296	貯蓄銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 (總數) 自明治三十一年至大正五年	346

297	貯蓄銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 (地方別) 大正五年	346
298	貯蓄銀行預金、借入金及再割引手形 (全國) 自明治三十二年至大正五年	348
299	貯蓄銀行預金、借入金及再割引手形 (地方別) 大正五年	348
300	貯蓄銀行貯蓄預金及預金者職業別並預金利子 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正五年	350
301	貯蓄銀行貸出金、貸付金年末殘高抵當別、割引手形及荷爲替手形 (全國) 自明治三十二年至大正五年	351
302	貯蓄銀行貸付金及割引手形、荷爲替手形 (地方別) 大正五年	352
303	貯蓄銀行預金、有價證券及金銀在高 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正五年	353
304	貯蓄銀行諸手形 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正五年	354
305	貯蓄銀行供託高 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正五年末	356
306	擔保附社債信託事業會社數及資本金、積立金 自明治三十五年未至大正五年末	356
307	擔保附社債信託契約年末現在 自明治三十八年至大正五年	357
308	擔保附社債信託契約高 大正五年	357
309	手形交換所手形交換高 (全國) 自明治三十三年至大正六年	357
310	手形交換所手形交換高 (月別) 大正六年	358
311	銀行預金利子高低 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正六年	360
312	銀行貸付金利子高低 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正六年	361
313	銀行手形割引相場高低 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正六年	362
314	外國爲替相場 (全年平均、月別) 自明治三十一年至大正六年	363

XVIII. 保險

315	保險會社 (內國) 資本金、積立金、收入金、支出金及事業ノ狀況 自明治三十四年度至大正五年度	336
316	在本邦外國保險會社事業供託金、收入、支出及事業ノ狀況 自明治三十七年度至大正五年度	370

XIX. 官廳使用現業員共濟組合

317	組合數、組合人員及收入金、支出金並救濟金給與人員總覽 自明治四十年度末至大正六年度末	372
其一 印刷局現業員共濟組合		
318	職名別男女組合員數 自明治四十二年度末至大正六年度末	373
319	收入金、支出金及救濟金給與人員 自明治四十二年度末至大正六年度末	373
其二 鐵道院現業員救濟組合		
320	種類別組合員數 自明治四十年度末至大正六年度末	373
321	收入金、支出金及救濟金給與人員 自明治四十年度末至大正六年度末	374
其三 專賣局現業員共濟組合		
322	職名別男女組合員數 自明治四十一年度末至大正六年度末	374
323	收入金、支出金及救濟金給與人員 自明治四十一年度末至大正六年度末	375
其四 海軍造船造兵事業現業員共濟組合		
324	職名別男女組合員數 自明治四十五年大正元年度末至大正六年度末	375
325	收入金、支出金及救濟金給與人員 自明治四十五年大正元年度末至大正六年度末	375
其五 爲替貯金局及地方遞信官署現業員共濟組合		
326	職名別男女組合員數 自明治四十二年度末至大正六年度末	376
327	收入金、支出金及救濟金給與人員 自明治四十二年度末至大正六年度末	376

XX. 救育及慈惠

328	罹災救助基金救助費目別 (全國、地方別) 自明治三十五年度至大正五年度	377
329	救濟人員 (全國、地方別) 自明治三十五年度至大正五年度	378
330	救濟人員救濟事由別年末現員 (全國、地方別) 自明治三十五年度至大正五年度	380
331	救助金 (全國、地方別) 自明治三十五年度至大正五年度	381
332	養育棄兒及養育費 (全國、地方別) 自明治三十五年度至大正五年度	382
333	行旅病人及行旅死亡人 (全國、地方別) 自大正三年至大正五年	383

XXI. 災害

334	水災、潮災及暴風雨被害 (全國、地方別) 自明治三十六年至大正四年	384
335	火災度數及罹災戶數 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正五年	386
336	火災月別 (全國) 自明治三十二年至大正五年	387

XXII. 衛生

337	醫師、齒科醫師、藥劑師、產婆、病院、藥種商及製藥者 (全國、地方別) 自明治二十年未至大正五年度末	388
338	九種傳染病患者及死亡者 (全國) 自明治二十年至大正六年	390
339	九種傳染病患者及死亡者 (地方別) 大正六年	390
340	九種傳染病患者季刊 (全國) 自明治二十年至大正六年	392
341	第一期種痘人員 (全國、地方別) 自明治四十三年至大正五年	393
342	第二期種痘人員 (全國、地方別) 自明治四十三年至大正五年	394
343	種痘人員 (總數) 自明治二十年至大正五年	395
344	賣藥方數及稅額 (總數) 自明治三十二年至大正五年	395
345	水道 (全國、地方別) 自明治二十一年至大正五年	396

XXIII. 教育

346	學齡兒童 (全國) 自明治三十四年度至大正五年度	397
347	學齡兒童就學、不就學ノ別 (全國) 自明治三十四年度至大正五年度	398
348	學齡兒童 (地方別) 大正五年度	398
349	學齡兒童(既ニ就學ノ始期ニ達シタル者)就學不就學ノ別 (地方別) 大正五年度	399
350	不就學學齡兒童 (地方別) 大正五年度	400
351	學齡兒童中盲及聾啞者 (全國、地方別) 自明治三十四年度至大正五年度	401
352	小學校及小學校學級 (全國、地方別) 自明治三十四年度至大正五年度	402
353	小學校教員男女及資格別 (全國) 自明治三十四年度至大正五年度	403
354	小學校教員男女及資格別 (地方別) 大正五年度	404
355	小學校兒童 (全國、地方別) 自三十四年度至大正五年度	406
356	幼稚園園數、保姆、幼兒 (全國、地方別) 自明治三十五年度至大正五年度	407
357	盲啞學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國、地方別) 自明治三十五年度至大正五年度	408
358	師範學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國、地方別) 自明治三十一年末至大正五年度	410
359	高等師範學校、女子高等師範學校、臨時教員養成所校數、教員、生徒、卒業生 (全國) 自明治三十一年末至大正五年度	411
360	小學校教員檢定合格者 (全國) 自明治三十三年度至大正五年度	411
361	師範學校、中學校、高等女學校教員檢定合格者 (全國) 自明治三十三年度至大正五年度	412
362	中學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國、地方別) 自明治三十二年未至大正五年度	412
363	高等女學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國、地方別) 自明治三十二年未至大正五年度	413
364	實科高等女學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國、地方別) 自明治四十五年大正元年度至大正五年度	415
365	專門學校校數、教員 (全國) 大正四年度同五年度	416
366	專門學校生徒、卒業生 (全國) 自大正四年度至同五年度	417
367	專門學校生徒、卒業生 (地方別) 大正五年度	416
368	高等學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國學校別) 自明治二十八年未至大正五年度	418
369	帝國大學校數、講座、教員、學生生徒、卒業生 (全國) 自明治二十六年未至大正五年度	418
370	帝國大學學生生徒學科別 (全國) 自明治四十一年度至大正五年度	419
371	實業補習學校校數、教員、生徒、修了者 (全國) 自明治三十二年未至大正五年度	420
372	實業學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國) 自明治三十二年未(同三十二年)至大正五年度	421
373	徒弟學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國) 自明治三十二年未至大正五年度	423
374	實業專門學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國) 自明治三十六年度至大正五年度	423

375	實業補習學校校數、教員、生徒、修了者 (地方別) 大正五年度	421
376	實業學校校數、教員、生徒、卒業生 (地方別) 大正五年度	426
377	徒弟學校校數、教員、生徒、卒業生 (地方別) 大正五年度	430
378	實業專門學校校數、教員、生徒、卒業生 (地方別) 大正五年度	431
379	諸學校本科入學志願者及本科入學者 (全國) 自明治三十八年度至大正五年度	431
380	各種ノ學校校數、教員、生徒 (全國、地方別) 自明治四十一年度至大正五年度	432
381	官、公、私立別校數、教員、生徒 (全國) 自明治四十一年度至大正五年度	434
382	諸學校外國人教員、學生及生徒 (全國) 自明治四十五年度至大正五年度	436
383	宮内省所管學習院、同女學部、教員、學生及生徒、卒業生 自大正二年度末至大正六年度末	439
384	逕信省所管商船學校、教員、學生、卒業生 自大正二年度末至大正六年度末	437
385	海外官費留學生 自明治四十五年度至大正五年度末	437
386	市町村立小學校教員月俸平均 (全國) 自明治三十三年度至大正五年度	438
387	府縣、郡、市、町村公學費 (全國、學校別) 自明治三十三年度至大正五年度	438
388	府縣、郡、市、町村公學收入 (全國、學校別) 自明治三十三年度至大正五年度	440
389	府縣、郡、市、町村公學資產 (全國、學校別) 自明治三十三年度至大正五年度	440
390	府縣、郡、市、町村公學費及公學收入 (地方別) 大正五年度	442
391	府縣、郡、市、町村公學資產 (地方別) 大正五年度	443
392	教育資金 (全國、地方別) 自明治三十三年度至大正五年度	444
393	府町村立小學校教員加俸資金及同加俸 (全國、地方別) 自明治三十三年度至大正五年度	444
394	市町村立小學校公立實業補習學校教員及公立幼稚園保母恩給基金及其收入支出 (全國、地方別) 自明治三十三年度至大正五年度	445
395	出版圖書種類別 (總數、種別) 自明治三十三年至大正五年	445
396	新聞及雜誌 (地方別) 大正五年度末	446
397	圖書館 (全國、地方別) 自明治四十年度至大正五年度	447

XXIV. 社 寺 及 教 會

398	神社及神職 (全國) 神社、自明治三十五年末至大正六年六月末神職、自明治三十五年末至大正五年末	418
399	神社及神職 (地方別) 神社、自大正六年六月末神職、自大正五年末	448
400	寺院及住職 (全國) 自明治三十五年末至大正五年末	419
401	寺院及住職 (地方別) 大正五年末	450
402	神佛道以外ノ宗教用會堂及講義所等 (全國、地方別) 自明治三十五年末至大正五年末	451
403	管長、教師及非教師、生徒 (全國、宗教宗派別) 自明治三十五年末至大正五年末	452
404	神佛道以外ノ宗教宣布者 (全國、教派別) 自明治三十五年末至大正五年末	453

XXV. 警 察

405	警察官署及其職員 (全國、地方別) 自明治三十二年末至大正五年末	454
406	檢舉犯罪入及警察犯處罰令諸犯則人員 (全國、地方別) 自明治四十二年至大正五年	456
407	盜難 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正五年	458
408	盜難月別 (總數、種別) 自明治三十二年至大正五年	459
409	被殺害者 (全國) 自明治四十二年至大正五年	460
410	災害其他ノ事故ニテ死セシ人員 (全國) 自明治四十二年至大正五年	460
411	自殺者手段 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正五年	460
412	自殺者月別 (全國) 自明治三十二年至大正五年	461
413	自殺者年齡及因由 (全國、因由別) 自明治三十二年至大正五年	462
414	自殺者因由 (全國) 自明治三十二年至大正五年	462
415	警察上賞與及賞詞 (總數、種別) 自明治三十二年至大正五年	462
416	巡查、警部補退隱料、遺族扶助料及其他給與 (全國、地方別) 自明治四十一年至大正五年	464

XXVI. 裁 判 及 登 記

417	裁判所職員 (全國、裁判所別) 自明治二十三年末至大正五年	426
民事裁判		
418	區裁判所取扱件數總覽 (全國) 自明治二十三年至大正五年	466
419	和解事件件數及其結果 (全國) 自明治二十三年至大正五年	467
420	和解事件終局件數種類別 (全國) 自明治二十三年至大正五年	468
421	督促事件件數及結果其種類別 (全國) 自明治二十五年至大正五年	469
422	第一審訴訟件數、其種別及結果 (全國、地方裁判所管轄區域別) 自明治二十三年至大正五年	468
423	金額又ハ價額ニ見積リ得ヘキ第一審訴訟件數金額別 (全國) 自明治二十三年至大正五年	472
424	第一審訴訟終局件數種類別 (全國) 自明治二十三年至大正五年	472
425	戶籍ニ關スル抗告件數及結果 (全國) 自明治三十一年至大正五年	473
426	區裁判所取扱強制執行件數、其終局件數及執達更取強制執行件數並ニ終局人員及債權額 (全國) 自明治二十四年至大正五年	473
427	家資分散件數其人員及債權額並ニ復權申立件數 (全國) 自明治二十四年至大正五年	474
428	非訟事件數及其終局件數ノ種別 (全國) 自明治三十一年至大正五年	475
429	地方裁判所取扱件數總覽 (全國) 自明治二十三年至大正五年	474
430	第一審訴訟件數其種別及結果 (全國、地方裁判所別) 自明治二十三年至大正五年	476
431	金額又ハ價額ニ見積リ得ヘキ第一審訴訟件數金額別 (全國) 自明治二十三年至大正五年	477
432	第一審訴訟終局件數種類別 (全國) 自明治二十三年至大正五年	478
433	控訴件數、其種別及結果 (全國、地方裁判所別) 自明治二十三年至大正五年	478
434	抗告件數及其結果 (全國) 自明治二十四年至大正五年	480
435	破産宣告件數、破産種別ノ終局件數及復權申立件數 (全國) 自明治二十七年至大正五年	480
436	控訴院取扱件數總覽 (全國) 自明治二十三年至大正五年	481
437	控訴件數、其種別及結果 (全國、控訴院別) 自明治二十三年至大正五年	482
438	上告件數、其種別及結果 (全國) 自明治二十三年至大正五年	483
439	大審院取扱件數、其種別及結果 自明治二十三年至大正五年	484
440	訟訴及和解事件、督促事件、終局件數其種類別 (全國) 大正五年	485
刑事裁判		
441	刑事事件取扱總件數 (總數) 自明治四十二年至大正五年	484
442	犯罪搜查事件及豫審終結被告人 (全國) 自明治四十二年至大正五年	484
443	第一審總件數及總被告人及其終局未終局區分 (全國、地方裁判所管轄區域別) 自明治四十二年至大正五年	486
444	控訴裁判所控訴受理件數終局、未終局及終局被告人 (全國、裁判所別) 自明治四十二年至大正五年	488
445	上告裁判所上告受理件數、終局未終局及申立人 (全國) 自明治四十二年至大正五年	489
446	第一審刑法犯有罪被告人罪名別 (全國、控訴院管內別) 自明治四十二年至大正五年	490
447	第一審刑法犯有罪被告人刑名別 (全國、控訴院管內別) 自明治四十二年至大正五年	490
448	第一審刑法犯有罪被告人罪名及刑名別 (全國) 大正五年	491
449	第一審刑法犯被告人ノ累犯加重、減輕及免除 (總數、罪名別) 自明治四十二年至大正五年	492
450	第一審特別刑法犯有罪被告人罪名及刑名別 (總數) 自明治四十二年至大正五年	492
451	刑事略式事件 (總數) 大正五年	492
452	刑事略式手續法第三條第六條ノ規定ニ依ル第一審事件 (總數) 大正五年	493
453	違警罪即決事件 (總數、犯罪別) 自明治四十二年至大正五年	493
454	各審ニ於ケル判決確定區分被告人 (總數) 大正五年	493
455	刑法犯有罪確定被告人罪名別及其比例 (總數) 自大正三年至同五年	494
456	刑法犯有罪確定被告人刑名別及其比例 (總數) 自大正三年至同五年	494
457	刑法犯有罪確定被告人終局區分 (總數) 大正五年	495
458	刑法犯有罪確定被告人犯罪地 (地方別) 大正五年	496
459	刑法犯有罪確定被告人犯罪原因、年齡、配偶關係、教育、信教、資産、生計、月別及職業 大正五年	498

刑罰犯有罪確定被告人受刑度數 (總數、罪名別) 自明治四十二年至大正五年	506
刑罰犯被告人 = 對スル刑ノ執行猶豫及其取消 (總數、罪名別) 自明治四十二年至大正五年	508
特別法犯有罪確定被告人罪名別及其比例 (總數) 自大正三年至大正五年	509
特別法犯有罪確定被告人刑名別及其比例 (總數) 自大正三年至同五年	509
特別法犯有罪確定被告人終局區分 (總數) 大正五年	510
特別法犯被告人 = 對スル刑ノ執行猶豫及其取消 (總數、罪名別) 自明治四十二年至大正五年	510
體刑執行及財產刑執行未執行被告人 (全國、檢事局別) 自明治四十二年至大正五年	511
登記	
登記件數及登録稅 (全國、地方裁判所管轄區域別) 自明治三十八年至大正五年	510
土地ノ事由別登記件數 (全國) 自明治三十八年至大正五年	512
建物ノ事由別登記件數 (全國) 自明治三十八年至大正五年	513
家督相續及賣買 = 因ル土地及建物ノ登録稅額 (全國) 自明治三十八年至大正五年	514
商事會社產業組合、漁業組合ノ事由別登記件數 (全國) 自明治三十八年至大正五年	514

XXVII. 監 獄

監獄及職員 (全國、監獄別) 自明治三十二年未至大正五年末	515
在監人員 (全國、監獄別) 自明治三十二年未至大正五年末	516
月末在監人員 (總數、種別) 自明治三十二年未至大正五年末	517
入監出監人員 (總數) 自明治三十二年未至大正五年末	518
受刑者ノ入監出監 (全國、監獄別) 自明治三十二年未至大正五年末	518
罪名別在監受刑者 (全國) 自明治四十一年未至大正五年末	522
罪名別在監受刑者ノ比例 (總數) 自明治四十一年未至大正五年末	522
刑名別在監受刑者 (全國) 自明治三十二年未至大正五年末	524
刑期別懲役在監受刑者及其比例 (總數) 自明治四十一年未至大正五年末	524
罪名別新受刑者 (全國、監獄別) 自明治四十一年未至大正五年末	526
罪名別新受刑者ノ比例 (總數) 自明治四十一年未至大正五年末	530
刑期別新受刑者 (全國、監獄別) 自明治四十二年未至大正五年末	532
刑期別懲役新受刑者 (總數) 自明治四十一年未至大正五年末	532
新受刑者入監時ノ年齡、飲酒嗜好ノ有無、資産ノ關係 (總數、罪名別) 自明治三十二年未至大正五年末	534
新受刑者ノ出生關係、教育ノ有無 (總數) 自明治四十二年未至大正五年末	536
新受刑者ノ養育者 (總數) 自明治四十二年未至大正五年末	536
新受刑者ノ累犯 (總數、罪名別) 自明治四十二年未至大正五年末	536
作業別在監人ノ一日平均作業者及工錢 (總數、作業別) 自明治四十二年未至大正五年末	538
在監人罹病者及其轉歸 (總數、病名別) 自明治四十二年未至大正五年末	540
在監人罹病者 (總數、監獄別) 自明治四十二年未至大正五年末	541

XXVIII. 陸 軍

壯丁身幹尺度實數 (全國、地方別) 自明治三十四年至大正六年	543
壯丁身幹尺度比例 (全國、地方別) 自明治三十四年至大正六年	544
壯丁普通教育程度 (全國) 自明治三十四年至大正五年	546
各學校教員學生生徒 (總數、學校別) 自明治三十四年至大正五年末	547
憲兵隊人員 (總數、部隊別) 自明治三十四年至大正六年末	547
憲兵取扱犯罪人員 (總數、種類別) 自明治三十四年至大正六年	549
衛戍監獄出入人員 (總數) 自明治三十四年至大正六年	548
衛戍病院、坪數及職員 (總數) 自明治三十四年至大正六年三月末	549
患者數、治療日數及其轉歸 (總數、部隊別) 自明治三十三年至大正五年	550
兵種別患者數、治療日數及其轉歸 (內地部隊及諸學校) 大正五年	552
患者數、治療日數及其轉歸 (病名別) 大正五年	552

新患者所管別 (病名別) 大正五年	554
新患者兵種別 (病名別) 大正五年	554
新患者月別 (總數、部隊別、病名別) 自大正二年至大正五年	555

XXIX. 海 軍

軍艦 (總數、艦名別) 自明治三十四年至大正六年末	556
水雷艇 (總數、艇名別) 自明治三十四年至大正六年末	557
海軍軍人 (總數、官職別) 自明治三十四年至大正六年末	558
官衙人員 (總數、官衙別) 大正六年末	558
徵兵及募集 (總數、所管別) 自明治三十四年至大正六年	559
各學校教員、學生生徒 (總數、學校別) 自明治三十四年至大正五年	560
監獄出入人員 (總數) 自明治三十四年至大正六年	561
患者所轄別 (總數、所轄別) 自明治三十五年未至大正五年末	562
患者兵種別 大正五年	562
患者病名別 大正五年	563
新患者及死亡者病名兵種別 大正五年	564
新患者及死亡者病名月別 (總數、病名別) 自明治三十五年未至大正五年末	565

XXX. 財 政

歲入歲出 (特別會計歲入歲出ヲ除ク) 自明治十九年度至大正七年度	566
歲入經常部 (實數、比例) 自明治十九年度至大正七年度	567
歲入臨時部 (實數、比例) 自明治十九年度至大正七年度	568
歲出經常部 (實數、比例) (所管別) 自明治十九年度至大正七年度	569
歲出臨時部 (實數、比例) (所管別) 自明治十九年度至大正七年度	570
歲出總額 (實數、比例) (所管別) 自明治十九年度至大正七年度	571
歲入經常部 (款項別) 自大正三年度至同七年度	572
歲入臨時部 (款項別) 自大正三年度至同七年度	573
歲出經常部 (款項別) 自大正三年度至同七年度	573
歲出臨時部 (款項別) 自大正三年度至同七年度	581
特別會計歲入歲出 (所管別) 自大正三年度至同七年度	586
所得稅納稅人員所得ノ種類並第三種所得金額別 (全國、地方別) 自明治三十六年度至大正六年度	588
所得稅ノ原ツク所得ノ種類並第三種所得金額別 (全國、地方別) 自明治三十六年度至大正六年度	590
所得稅稅額所得ノ種類並第三種所得金額別 (全國、地方別) 自明治三十六年度至大正六年度	592
營業稅納稅人員營業種類別 (總數、地方別) 自明治三十六年度至大正六年度	594
營業稅稅額營業種類別 (總數、地方別) 自明治三十六年度至大正六年度	594
稅課收稅額 (全國、稅關別) 自明治二十三年度至大正六年度	596
國債未償還高種類別 (全國) 自明治四十五年未至大正六年度	598
特別資金及官業資本現在高 (全國) 自明治三十六年度未至大正五年度末	599
特別資金及官業資本種類別 大正五年度末	599
國庫預金、保管金及供託金 自明治三十五年度至大正五年度	600
貸付金 (全國) 自明治二十三年度至大正六年度	600
貸付金種類別 大正六年度	601
國庫支辨 = 依ル道府縣經費 (決算) (全國、地方別) 自明治三十六年度至大正六年度	602
道府縣收入 (決算) (全國、地方別) 自明治三十六年度至大正四年度	604
道府縣支出 (決算) (全國、地方別) 自明治三十六年度至大正四年度	606
郡收入 (決算) (全國、地方別) 自明治三十九年度至大正四年度	608
郡支出 (決算) (全國、地方別) 自明治三十九年度至大正四年度	610
市及區收入 (決算) (全國、市區別) 自明治三十六年度至大正四年度	612

Table with 3 columns: Item No., Description, Page No. Includes items 547-561 such as '市及區支出 (決算) (全國、市區別)' and '町村收入 (決算) (全國、地方別)'.

XXXI. 爵位勳章及褒章

Table with 3 columns: Item No., Description, Page No. Includes items 562-571 such as '有爵人員 (總數、位階)' and '勳章佩用個數及人員 (總數、種類別)'.

XXXII. 議員選舉

Table with 3 columns: Item No., Description, Page No. Includes items 572-578 such as '貴族院議員多額納稅者議員互選者 (全國、地方別)' and '衆議院議員及選舉有權者 (全國、地方別)'.

XXXIII. 官吏公吏及恩給

Table with 3 columns: Item No., Description, Page No. Includes items 579-588 such as '文官勅奏判別人員及年俸 (總數、官廳別)' and '武官人員及年俸 (總數、階級別)'.

Table with 3 columns: Item No., Description, Page No. Includes items 589-592 such as '宮內官勅奏判別人員部局別' and '府縣名譽職參事會員及府縣吏員人員及年俸'.

XXXIV. 朝鮮臺灣樺太及關東州附北海道

Table with 3 columns: Item No., Description, Page No. Includes items 593-634 such as '面積及府郡面町村數 (總數、地方別)' and '臺灣泥藍及藍錠製造戶數及數量價額'.

635	北海道移出物品價額	自大正三年至大正五年	702
636	市場 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	702
637	鐵道停車場、線路、車輛、走行哩數及旅客貨物 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	703
638	航路標識數 (總數)	自大正元年至大正五年末	703
639	登簿及不登簿船舶數其ノ一 (噸數船) (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年末	704
640	登簿及不登簿船舶數其ノ二 (石數船) (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年末	704
641	內外國貿易船入港船數及噸數	大正五年	704
642	郵便局所數郵便線路及郵便物引受 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	705
643	電信線路線條ノ延長及電報通數 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	705
644	電話加入者及通話度數 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	706
645	內外國郵便爲替 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	706
646	醫師、齒科醫、藥劑師、產婆、病院、藥種商、製藥者 (總數)	自大正元年至大正五年末	707
647	九種傳染病患者及死亡者 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	707
648	種痘 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	708
649	小學校 (內地人教育) (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	709
650	中學校及高等女學校 (內地人教育) (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	708
651	本地人普通教育諸學校 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	710
652	特種學校及專門學校	自明治四十五年大正元年至大正五年	711
653	實業諸學校 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	712
654	各種學校、書堂、書房及幼稚園 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	712
655	警察官署及職員 (總數)	自大正元年至大正五年末	713
656	盜難詐欺恐喝及橫領罪被害件數 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	714
657	犯罪即決人員 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	714
658	裁判所數及司法職員 (總數)	自大正元年至大正五年末	716
659	民事爭訟調停及民事訴訟事件 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	716
660	民事雜事件 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	718
661	刑事事件 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	718
662	第一審刑事罪名別判決人員	自明治四十五年大正元年至大正五年	720
663	登記事件件數 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	721
664	監獄數及職員 (總數)	自大正元年至大正五年末	722
665	在監人員 (總數)	自大正元年至大正五年末	722
666	在監人出入 (總數)	自明治四十五年大正元年至大正五年	724
667	罪名別新受刑者	自明治四十五年大正元年至大正五年	726
668	各植民地特別會計	自大正三年至大正七年	728
669	朝鮮總督府特別會計歲入歲出 (款項別)	自大正三年至大正七年	729
670	臺灣總督府特別會計歲入歲出 (款項別)	自大正三年至大正七年	730
671	樺太廳特別會計歲入歲出 (款項別)	自大正三年至大正七年	732
672	關東都督府特別會計歲入歲出 (款項別)	自大正三年至大正七年	732

計數出所目錄

表數

I 土 地

1. 內務省元地理局ヨリ報告ノ材料
2. 伊能忠敬著實測錄大圖、內務省元地理局實測、朝鮮、臺灣各總督府年報、樺太廳報告
3. 伊能忠敬著實測錄大圖、內務省元地理局實測、參謀本部ヨリ報告ノ材料
4. 統計局調査
- 5-7. 大藏省ヨリ報告ノ材料

II 氣 象

- 8-9. 文部省ヨリ報告ノ材料

III 人 口

10. 日本全國人口表、民籍戶口表、日本帝國人口靜態統計
- 11-21. 民籍戶口表、日本帝國人口靜態統計及統計局ニ於テ調製シタル諸材料
22. 日本全國人口表、民籍戶口表、日本帝國人口動態統計
- 23-40.42. 日本帝國人口動態統計、日本帝國死因統計
41. 統計局調査
- 43.44.45.49. 外務省ヨリ報告ノ材料
- 46-48. 內務省ヨリ報告ノ材料

IV 農 業

- 50.52.55. 內務省勸農局府縣物產表、農商務統計表
- 51.53.54.56.57. 農商務統計表及農商務省ヨリ報告ノ材料

V 家畜及家禽

- 58-69. 農商務統計表

VI 山林及狩獵

- 70-74. 農商務統計表

VII 漁業及製鹽

- 75-80. 農商務統計表
81. 大藏省專賣局年報

VIII 鑛 業

- 82-88. 農商務統計表

IX 工業及賃金

89. 各所管廳ヨリ報告ノ材料
- 90-100. 農商務統計表
- 但シ各年表中酒類酒精、酒精含有飲料、醬油=關スル事項ハ大藏省ヨリ報告ノ材料

X 外國貿易

- 110-124. 大日本外國貿易年表及同月表

XI 內國商業及會社

- 125-135. 農商務統計表

XII 產業組合及同業組合

- 136-137. 農商務統計表

XIII 電氣事業及瓦斯事業

- 138-146. 遞信省電氣局電氣事業要覽

表號

- 147-149. 農商務省商工局瓦斯事業概覽

XIV 交 通

- 150.151.165. 內務省土木局統計年報
- 152-162. 鐵道院鐵道統計資料(舊鐵道院年報)
- 163.173. 地方廳ヨリ報告ノ材料
- 166.168-172.174.176-185 遞信省海事統計類纂
164. 內務省土木局年報及北海道廳統計書
167. 大日本帝國港灣統計
175. 遞信省年報及同省海事統計
- 186-189. 內務省ヨリ報告ノ材料

XV 通信及郵便爲替貯金事業

- 190-197.199.200.202.210. 遞信省ヨリ報告ノ材料
198. 遞信省通信統計要覽
- 201.203.204.205-209. 遞信省爲替貯金局統計年報

XVI 貨幣及度量衡

- 211-214. 大藏省年報及同省ヨリ報告ノ材料
- 215-217. 度量衡統計要覽及中央度量衡檢定所ヨリ報告ノ材料

XVII 銀行及金融

- 218-310. 大藏省理財局編纂銀行及擔保附社債信託事業報告大藏省銀行局年報及大藏省ヨリ報告ノ材料
- 311-313. 大藏省ヨリ報告ノ材料
314. 官報ヨリ拔載

XVIII 保 險

- 315-316. 農商務省保險年鑑

XIX 官廳使用現業員共濟組合

317. 印刷局、鐵道院、專賣局、海軍省、遞信省ヨリ報告ノ材料
- 318.319. 印刷局ヨリ報告ノ材料
- 320.321. 鐵道院ヨリ報告ノ材料
- 322.323. 專賣局ヨリ報告ノ材料
- 324.325. 海軍省ヨリ報告ノ材料
- 326.327. 遞信省ヨリ報告ノ材料

XX 教育及慈惠

328. 大藏省ヨリ報告ノ材料
- 329-333 內務省統計報告

XXI 災 害

334. 內務省土木局年報
- 335.336 內務省統計報告

XXII 衛 生

- 337.341-343. 內務省統計報告
- 338-340. 內務省ヨリ報告ノ材料
344. 方數ハ大藏省ヨリ報告ノ材料、稅額ハ衛生局年報
345. 內務省統計報告及衛生局年報

XXIII 教 育

- 346-382.386-394.397. 文部省統計年報
383. 宮內省ヨリ報告ノ材料
384. 遞信省ヨリ報告ノ材料

表號

- 385. 文部省、外務省ヨリ報告ノ材料
- 395.396. 内務省統計報告
- XXIV 社寺及教會
- 398.399. 内務省統計報告
- 400-404. 文部省統計年報
- XXV 警察
- 405-416. 内務省ヨリ報告ノ材料及内務省統計報告
- XXVI 裁判及登記
- 417. 司法省(職員課)ヨリ報告ノ材料
- 418-440. 司法省民事統計年報
- 441-466. 司法省刑事統計年報
- 467-471. 司法省登記統計年報
- XXVII 監獄
- 472-491. 司法省監獄統計年報
- XXVIII 陸軍
- 492-499. 陸軍省ヨリ報告ノ材料
- 500-505. 陸軍省統計年報
- XXIX 海軍
- 506-517. 海軍省ヨリ報告ノ材料及海軍省年報
- XXX 財政
- 518-527.529-540.556-561. 大藏省ヨリ報告ノ材料
- 528. 大藏省ヨリ報告ノ材料及大藏省年報
- 541-555. 内務省統計報告
- XXXI 爵位勳章及褒章
- 562-563. 宮内省ヨリ報告ノ材料
- 564-569. 賞勳局報告ノ材料
- 570-571. 賞勳局ヨリ報告ノ材料及内務省統計報告
- XXXII 議員選舉
- 572-577. 内務省統計報告
- 578. 内務省ヨリ報告ノ材料
- XXXIII 官吏公吏及恩給
- 579-592. 各官廳ヨリ報告ノ材料
- XXXIV 朝鮮臺灣樺太及關東州
附北海道
- 593.596-598.604-606.610-612.614 622.637.641.646-650
- 朝鮮總督府統計年報、臺灣總督府及關東都督府統計書
樺太廳治一斑
- 594.595.635. 北海道廳統計書
- 599. 朝鮮總督府統計年報、臺灣人口動態統計、關東都督府統計書、樺太廳治一斑
- 600.604. 北海道廳ヨリ報告ノ材料
- 602. 北海道廳統計書
- 603. 臺灣總督府及關東都督府統計書
- 607.657. 朝鮮總督府統計年報、臺灣總督府統計書
- 608.609. 朝鮮總督府統計年報
- 613.621. 朝鮮總督府統計年報、臺灣總督府統計書、樺太廳治一斑
- 615-617.623-629. 臺灣總督府統計書
- 618.620.636.638-640.642-645.651-656.658-667. 朝鮮總督

表號

- 府統計年報、臺灣總督府及關東都督府統計書
- 619. 樺太廳治一斑
- 630-634. 朝鮮、臺灣各貿易年表、關東都督府統計書、
- 668-672. 大藏省ヨリ報告ノ材料及官報

統計表

表號	項目	單位	年次	計數	備註
385	文部省、外務省ヨリ報告ノ材料	文部省	1911	...	
395.396	内務省統計報告	内務省	1911	...	
398.399	内務省統計報告	内務省	1911	...	
400-404	文部省統計年報	文部省	1911	...	
405-416	内務省ヨリ報告ノ材料及内務省統計報告	内務省	1911	...	
417	司法省(職員課)ヨリ報告ノ材料	司法省	1911	...	
418-440	司法省民事統計年報	司法省	1911	...	
441-466	司法省刑事統計年報	司法省	1911	...	
467-471	司法省登記統計年報	司法省	1911	...	
472-491	司法省監獄統計年報	司法省	1911	...	
492-499	陸軍省ヨリ報告ノ材料	陸軍省	1911	...	
500-505	陸軍省統計年報	陸軍省	1911	...	
506-517	海軍省ヨリ報告ノ材料及海軍省年報	海軍省	1911	...	
518-527.529-540.556-561	大藏省ヨリ報告ノ材料	大藏省	1911	...	
528	大藏省ヨリ報告ノ材料及大藏省年報	大藏省	1911	...	
541-555	内務省統計報告	内務省	1911	...	
562-563	宮内省ヨリ報告ノ材料	宮内省	1911	...	
564-569	賞勳局報告ノ材料	賞勳局	1911	...	
570-571	賞勳局ヨリ報告ノ材料及内務省統計報告	賞勳局	1911	...	
572-577	内務省統計報告	内務省	1911	...	
578	内務省ヨリ報告ノ材料	内務省	1911	...	
579-592	各官廳ヨリ報告ノ材料	各官廳	1911	...	
593.596-598.604-606.610-612.614 622.637.641.646-650	朝鮮總督府統計年報、臺灣總督府及關東都督府統計書 樺太廳治一斑	朝鮮總督府、臺灣總督府、關東都督府	1911	...	
594.595.635	北海道廳統計書	北海道廳	1911	...	
599	朝鮮總督府統計年報、臺灣人口動態統計、關東都督府統計書、樺太廳治一斑	朝鮮總督府、臺灣總督府、關東都督府	1911	...	
600.604	北海道廳ヨリ報告ノ材料	北海道廳	1911	...	
602	北海道廳統計書	北海道廳	1911	...	
603	臺灣總督府及關東都督府統計書	臺灣總督府、關東都督府	1911	...	
607.657	朝鮮總督府統計年報、臺灣總督府統計書	朝鮮總督府、臺灣總督府	1911	...	
608.609	朝鮮總督府統計年報	朝鮮總督府	1911	...	
613.621	朝鮮總督府統計年報、臺灣總督府統計書、樺太廳治一斑	朝鮮總督府、臺灣總督府	1911	...	
615-617.623-629	臺灣總督府統計書	臺灣總督府	1911	...	
618.620.636.638-640.642-645.651-656.658-667	朝鮮總督	朝鮮總督府	1911	...	